

2022年度
東洋大学審査学位論文

超自然的存在に対する信念が
心のゆとりに与える効果

——妖怪の社会的機能を含む媒介変数の検討——

社会学研究科 社会心理学専攻 博士後期課程
4550190003 高橋 綾子

目次

第1部 理論的検討

1. 研究の背景

- 1.1. 現代社会と心のゆとり 1

2. 妖怪について

- 2.1. 日本における妖怪研究 ——人文学的検討—— 4

- 2.2. 社会心理学的妖怪研究の意義 10

3. 超自然的存在について

- 3.1. 超自然について 13

- 3.2. 超自然的存在に対する研究 14

- 3.3. 日本の宗教観と超自然的存在 15

- 3.4. 出来事の意味づけと超自然的存在 17

4. 心のゆとりについて

- 4.1. 「心のゆとり」とはなにか 21

- 4.2. ゆとり研究の概観 21

- 4.3. 心のゆとりの定義 23

5. 本論文の目的と構成

- 5.1. 本論文の目的 26

- 5.2. 本論文における仮説モデル 26

- 5.3. 本論文の構成 28

第2部 実証的検討

6. 研究1 新型コロナウイルス禍における アマビエに見る妖怪の社会的機能

6.1. 目的	31
6.2. 研究1-1 アマビエ流行についての実態把握	34
6.2.1. 目的	34
6.2.2. 方法	34
6.2.3. 結果	35
6.2.4. 考察	39
6.3. 研究1-2 アマビエへの態度と 伝統的価値観・日常的宗教行為との関連	40
6.3.1. 目的	40
6.3.2. 方法	40
6.3.3. 結果	41
6.3.4. 考察	43
6.4. 考察	44

7. 研究2 伝統的価値観および日常的宗教行為尺度の構成

7.1. 目的	46
7.2. 研究2-1 伝統的価値観尺度および 日常的宗教行為尺度の作成と妥当性の検証	49
7.2.1. 目的	49
7.2.2. 方法	49
7.2.3. 結果	51
7.2.4. 考察	56
7.3. 研究2-2 再テスト信頼性の検証	57
7.3.1. 目的	57
7.3.2. 方法	57

7.3.3. 結果と考察	57
7.4. 考察	58

8. 研究3 伝統的価値観および 日常的宗教行為尺度の構成（改訂版）

8.1. 目的	59
8.2. 研究3-1 伝統的価値観尺度および 日常的宗教行為尺度の再構成と妥当性の検証	61
8.2.1. 目的	61
8.2.2. 方法	61
8.2.3. 結果	62
8.2.4. 考察	68
8.3. 研究3-2 再テスト信頼性の検証	69
8.3.1. 目的	69
8.3.2. 方法	69
8.3.3. 結果と考察	69
8.4. 考察	70

9. 研究4 伝統的価値観が心のゆとりに与える効果 ——受容性の探索的検討——

9.1. 目的	72
9.2. 研究4-1 受容性の探索的検討1	74
9.2.1. 目的	74
9.2.2. 方法	76
9.2.3. 結果	77
9.2.4. 考察	85
9.3. 研究4-2 受容性の探索的検討2	87
9.3.1. 目的	87

9.3.2. 方法	88
9.3.3. 結果	89
9.3.4. 考察	98
9.4. 研究 4-3 受容性の探索的検討 3	99
9.4.1. 目的	99
9.4.2. 方法	102
9.4.3. 結果	103
9.4.4. 考察	113
9.5. 考察	115

10. 研究 5 伝統的価値観が心のゆとりに与える効果

10.1. 目的	119
10.2. 方法	120
10.3. 結果	121
10.4. 考察	126

11. 総合考察

11.1. 本研究の総括	128
11.1.1. 本研究で明らかになったこと	128
11.1.2. 現代における妖怪の社会的機能	129
11.1.3. 素朴な宗教心に基づく伝統的価値観	130
11.1.4. 受容性の下位概念	132
11.1.5. 伝統的価値観と心のゆとりとの関連	135
11.2. 今後の課題	138

引用文献	140
------	-----

本研究の発表先一覧	149
-----------	-----

謝辞

付録



7
伝統的価値観および
日常的宗教行為尺度
の構成

9
受容性の
探索的検討

10
伝統的価値観が
心のゆとりに
与える効果



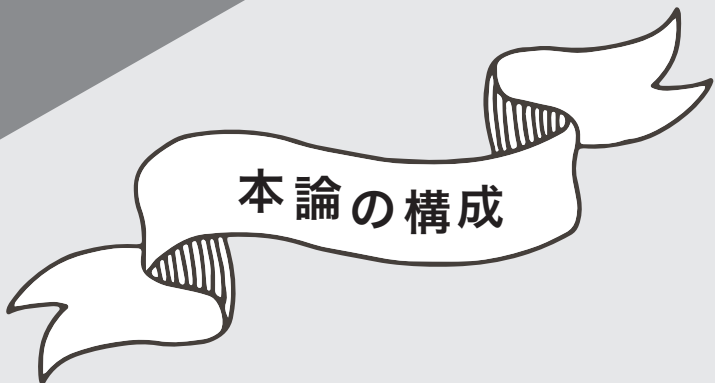
6
アマビエにみる
妖怪の社会的機能

11
総合考察

第2部
実証的検討

第1部
理論的検討

- 1 研究の背景
- 2 妖怪について
- 3 超自然的存在について
- 4 心のゆとりについて
- 5 本論文の目的と構成



本論の構成

Abstract

The purpose of this study is to clarify the effect of belief in supernatural beings on Yutori of the mind. "Yutori" is a Japanese word that expresses leeway, mental leeway and composure are generally recognized as Yutori of the mind. This study attempts to clarify the question of what Yutori of the mind is and how we can obtain it. Recent survey results show that we lack mental leeway and composure. This is although scientific progress has brought us a very convenient, prosperous, and comfortable life. In this paper, the researcher refers to Yutori of the mind as, mental leeway and composure, specifically, focusing on the relationship between the belief in supernatural beings, and the researcher will consider the state of mind of modern Japanese people.

In Japan, many traditional values that have been handed down from the elders around us since ancient times, and many of them include supernatural beings. They seem to be gradually losing their meaning of existence due to the decrease in uncontrollable events accompanying the progress of science. however, the results of recent surveys show that we Japanese still maintain a desire for the supernatural. As the reason for this, the following two psychological backgrounds are presumed. First, when people face unacceptable events, they seek not only the answer to "how" (Process: how things happened), but also the answer to "why" (Reason: why it happened). Next, it is the erstwhile Yokai (Japanese supernatural creatures and phenomena) and supernatural beings are responsible for both "how" and "why".

In other words, because the "how" of science does not give us peace of mind, we may want the "why" and surrender ourselves to supernatural beings. Therefore, in this research, we focus on the "why" that supernatural beings are responsible as one of the factors that affect Yutori of the mind of Japanese people.

Based on the above discussion, the hypotheses in this study are as follows: the traditional values based on Japanese religion mediate acceptability peculiar to Japan and affect Yutori of the mind.

Study 1 investigated that to clarify the relationship between the attitude toward

Amabie (folkloric mermaid-like creature) in the COVID-19 calamity, the traditional values including the everyday activities of religion in Japan, and to explore the social functions of Yokai. Although Yokai had both a religious function and an entertainment function, recent studies have shown that contemporary Yokai have only the latter function. However, the results indicated the possibility that contemporary Yokai have potentially retained the aspect of being an object of reverence and fear as beings with supernatural powers.

Study 2, 3 organized the ways of thinking and feeling about what is recognized as Japanese "traditional values", and constructed a scale to measure them. In addition, we attempted to create a scale for measuring daily religious behavior such as visiting a shrine, drawing O-mikuji (fortune-telling lot), and explored how it relates to traditional values based on the relationship between the two scales. The results of the survey revealed that many people unexpectedly approve of these discourses. We also confirmed that these beliefs are closely related to daily religious behavior. It cannot be said that this scale covers all traditional Japanese values; however, it is of great significance that we were able to construct scales that can be concretely measured for beliefs that are hard to express and be aware of, to appropriately capture Japan's peculiar religiosity.

In Study 4, as a preliminary study to test the hypothesis in this research, we examined the subordinate concept of acceptability, which is thought to mediate the effects of traditional values on Yutori of the mind. As a result of three exploratory examinations, we decided to use "trait gratitude", "adaptive resignation", and "self-existence value" as subordinate concepts of acceptability in this research.

In Study 5, based on the results of Study 1 to 4, we tested the hypothesis in this research.

As a result of structural equation modeling, a certain degree of fit was confirmed from the model coefficients and goodness of fit, and the hypothesis was supported.

The results of a series of investigations in this paper show that belief in supernatural beings, which is included in traditional values based on Japanese religious beliefs,

mediates the psychological ability to accept and adapt to events in a uniquely Japanese way and affects Yutori of the mind. Regarding traditional values and mental composure, this research only found a relationship between "satisfaction/openness" and "leeway for others". By contrast, "urgency/fatigue" was not verified. While it remains a speculation due to the absence of empirical research, it is possible that "urgency/fatigue" is more influenced by external factors, and "satisfaction/openness" and "leeway for others" may be on different levels. In the future, it will be necessary to examine in detail what kind of psychological variables affect each subordinate concept of Yutori of the mind. Furthermore, research should be conducted on the individual relationships between each of the subordinate concepts of traditional values and Yutori of the mind, as well as the mediating effects of psychological abilities other than acceptability.



第1部 理論的検討

Ⅲ. 研究の背景

1.1. 現代社会と心のゆとり

時代は平成から令和へと変わり、21世紀を迎えてから20年あまりが過ぎた。この数年の間だけでも、私たちを取り巻く環境が大きく変わったことは多くの人が実感しているだろう。1973年に開始され、2018年に第10回目が実施された「日本人の意識調査」(NHK放送文化研究所, 2019a)によると、「物質的に豊かな生活を送っている」には回答者の約80%が、「安全で快適に過ごせる地域に住んでいる」には約87%が「そう思う」と答えており、科学的進歩によって物質や環境に恵まれた現代の生活への満足度の高さがうかがえる。新型コロナウイルスによって行動が制限される状況にあっても、さほど不自由なく生活できたことから、私たちは改めてそれらを実感することができただろう。

では、便利で豊かで安全な生活を送る現代日本人は、精神的にも豊かで生きやすいと感じているのだろうか。内閣府が継続的に実施している国民生活に関する世論調査には、心の豊かさやゆとりのある生活と物質的な面で生活を豊かにすること、今後どちらに重きをおきたいかを尋ねた項目がある。1979年に心の豊かさが物質の豊かさを上回って以降、その差は広がり続けており、2019年の調査では心の豊かさは約62%、物質的な豊かさは約30%という結果であった(内閣府, 2019)。また、「不寛容社会」についての世論調査(NHK放送文化研究所, 2016)では、約62%が「今の日本の社会は、心にゆとりを持ちにくい社会だ」、約66%が「今の日本の社会には、いらいらすることが多い」と回答している。国連の発表するWorld Happiness Report(世界幸福度調査)においても日本は例年、先進諸国の中で低い水準を保っており、2022年のランキングでは146カ国中54位という結果であった(Helliwell et al., 2022)。

科学の進歩によって大変便利で豊かな生活を手に入れ、快適に過ごせているはずである私たちは、なぜ心の豊かさやゆとりを求めるのだろうか。

科学の進歩がもたらしたもの

現在、私たちの生活の中心となっている科学は、ものごとがどのように起きたか、という過程「how」の説明を担っている。近代以降、科学の目覚ましい発展により、それまで未知なるものとされていた存在や現象は、天体や天文現象は天文学に、地球の

大気で起こる諸現象は気象学に、生命活動に関するものや病気は医学に、というように、それぞれの自然科学分野に引き取られていくこととなった。たとえば、かつて妖怪『雷獣』のしわざだとされていた現象は、現代においては、帯電した積乱雲などと地上物の間に発生する放電、いわゆる「落雷」によるものであると科学的に説明されている。

日頃私たちはこのように、科学のもたらす「どのような過程でそれが起きたのか」という答えによって、不安のない状態であるように感じている。なぜなら、不安というのは、いつ何がどのように起きるのかについての具体性に乏しい脅威（古畑・岡，2002）、つまり、曖昧さや不確実性が高い脅威が引き起こすものであり、科学は過程を説明することによって未知のもの＝曖昧で不確実なものを取り除く機能を果たしているからである。

妖怪の不在と心のゆとり

日本には古来、身近な年長者から伝えられてきた伝統的な価値観が数多く存在する。文化資源として取捨選択されながらも保持されてきたこのような価値観は、いまだ日本人の精神的基盤として機能していると考えられる。そしてそれらには多くの超自然的なものが含有されている。中でも人が自ら統制できないネガティブな出来事の行為者の多くは妖怪とされていた。人々の不安を喚起する説明のつかない曖昧な出来事を妖怪に帰属し、不安を緩和し、共同体の共通認識として受容していたのである。多くの妖怪に出現したときの対処法が備えられていることから、人々が不安という漠然としたものに妖怪という対象を与え、対処してきたという構図が見て取れる。かつて未知なるものの説明を担っていたのは、このような妖怪をはじめとする超自然的なものであった。しかし現代においては、科学の進歩に伴い、人が自ら統制できない出来事は減少し、次第に存在意義が失われていったように感じられている。なぜなら、正体が明らかでないときは妖怪であるが、正体が明らかになったとき妖怪は妖怪でなくなり、科学的・合理的説明体系によって他の事物・事象におきかえられる（小松，2015）からである。近年の調査では、宗教的な感覚を含む伝統的な価値観や信仰心は以前と比べ、減少していることが報告されている（NHK 放送文化研究所，2019b）。その一方で、「神や仏」や「霊魂（たましい）」に肯定的な回答を示した人は7割を越え（朴・吉野，2015）、「宗教」「信仰」「宗教的な心」という言葉への反応は減少傾向にあるものの、「あの世」「死後の世界」「霊魂」などへの関心は増加しており、死の恐れ、自然の神秘への尊敬、人の力の及ばない何かに対する畏敬の念などが現代社会においてもなくなっ

てはしないことが示されている（林, 2010）。高橋（2011）は、スピリチュアリティが世間に定着しつつあることについて、現代日本人が過去半世紀の高度経済成長を経て、ある程度物質的に余裕が出てきたものの何か精神的に物足りないと感じる虚しさの表れであり、それらが精神的健康維持をもたらす何かだと考えられている可能性がある」と述べている。また、科学的に説明しきれないものに対する関心は、表面の論理では片付かない素朴な感情であり、現代もかなりの人が持っている特性である（朴・吉野, 2015）との指摘もある。新型コロナウイルス禍において疫病退散を願い、妖怪『アマビエ』の絵を描いたり、グッズを買い求めたりしたというアマビエブームに関する一連の事象は、それを顕在化した一例だと言えよう。制御不能な出来事に遭遇したとき、妖怪など超自然的なものに救いやものごとの原因を求める心的過程は、それらが本来の機能を果たしていた頃も現在も、おそらく変わっていない。本論では、そうした妖怪の社会的な機能と、現代日本人が求める心のゆとりとの関連に着目する。従来の研究では概して「心が安定していて穏やかであること」と扱われてきた心のゆとりについて、認知的側面のみならず、精神的な充足や対人関係における他者への配慮などを含む総合的な処理能力という観点で捉え、ゆとりのない状態を引き起こさないためにはどうすればよいか、という主題に取り組む。

過程の説明という部分で科学に取って代わられたはずの妖怪は、なぜいまだに私たちの身近にあるのか。そして、我々が求める心のゆとりとは一体どのようなものなのか。どうしたら手に入れることができるのか。本研究は、これらの問いに対し、超自然的存在に対する信念と心のゆとりとの関連を検証することを通して、現代日本人の心のあり様を解明することを試みるものである。

2. 妖怪について

本章では妖怪とはなにかを探るべく、妖怪が学術的見地からどのように捉えられてきたのかを概観し、研究対象としての妖怪の立ち位置を整理する。その上で社会心理学的妖怪研究の意義と本論における定義を述べる。

2.1. 日本における妖怪研究 ——人文学的検討——

妖怪研究の変遷

まず初めに我が国における妖怪研究の変遷を、現在主流とされている香川（2005）の「2度の転機」説と Foster（2009 廣田訳 2017）の「4つの契機」説という2つの先行研究を取り上げ、振り返っておきたい。

香川(2005)は、江戸時代と1960年代の水木しげるの登場という2度の転機によって、妖怪は完全に娯楽と化した、と述べている。また、Foster（2009 廣田訳 2017）は、妖怪は「National（国民）、Nation（国）の比喩」であり、日本そのものを表す概念であると述べている。そして、江戸時代、明治時代、20世紀初頭、戦後という4つの契機で妖怪文化を整理している。これら2つの説に共通しているのは、江戸時代と戦後、特に1960年代以降という2つの大きな変化である。これらは、日本という国自体が大きく変化を遂げた時期であり、妖怪が時代の変化に大きく影響されていることを如実に表していると言えるだろう。加えて、Foster（2009 廣田訳 2017）が2つ目の契機として挙げている明治時代は、日本の近代化が進み、西洋合理主義志向が強まったことにより、妖怪に対する「非実在」宣言がなされた時代でもあった。井上 円了によって妖怪学が定義されたのもちょうどこの頃である。円了により妖怪という名前は一躍脚光を浴びるが、円了が試みたのは妖怪を合理的に解説し、科学的に解釈しようとするのであった。このまま科学志向に押され、妖怪や妖怪研究が消滅してしまうのかと思いきや、そうではなかったことを以降の研究が示している。柳田 國男、江馬 務らが妖怪の実在性の有無を問わないという立場で研究に取り組み始めたのである。明治時代に「過去のもの」とされ「非実在」とされた妖怪は、その実在性を問わないという形で復活を遂げることとなった。その後、水木しげるの登場によってキャラクターとしての妖怪が私たちに身近なものとなったのは記憶に新しいところだ。「現代の妖怪は水木による再配置である」（Foster, 2009 廣田訳 2017）と表現されるように、いま我々が

妖怪として思い描くもののほとんどは水木によって形を与えられたものである。類まれなる筆致で妖怪を具象化し、それらに関する多くの伝承を後世に受け継いだ功績は計り知れない。

妖怪と心

さて、このような変遷をたどってきた妖怪は、その定義も多岐に渡る。現在に至るまで多くの研究者たちがそれぞれの学術的見地から様々な定義付けや分類を試みしてきた。たとえば、井上 円了は当時の科学では解明し得なかった不思議なもの全般を妖怪と定め、柳田 國男は出現場所で整理することを試み、江馬 務は化ける・化けないの視点での分類を試みている。しかしながら、いまだ普遍的かつ総括的な定義とはなり得ていない。前述のとおり、妖怪の持つ多様性、多義性、地域性、そして時代とともに変化し続ける特性を考え合わせると、詳細な定義付けをするには様々な矛盾が生じ、解釈も大変困難だからである。これが妖怪研究の歴史 = 定義を試行錯誤する歴史 (Foster, 2009 廣田訳 2017) と言われる所以である。

定義付けや分類は多種多様であるのに、多くの妖怪研究者に共通している注目すべき解釈がある。それが、妖怪と「心」の関係である。民俗学における妖怪研究の代表者とも言える柳田 國男は妖怪を”われわれの畏怖というものの最も原始的な形”と表現し (柳田, 2013), 日野 巖は著書「動物妖怪譚」の中で,”妖怪は過去の人々の精神生活の一面を如実に示すもの”と述べている (日野, 2006)。また、現代の妖怪研究の第一人者であり怪異・妖怪伝承データベース監修者の小松 和彦は,”妖怪研究は人間の心の研究であり人間の社会の研究”と位置付けている (小松, 2015)。さらに、妖怪学を確立した井上 円了は、妖怪研究を”人心の秘蔵を開く唯一の鍵”であると述べている (井上, 2011)。

心理学における妖怪研究

では、妖怪と「心」の関係は、それらを専門に扱う心理学において、これまでどのように論じられてきたのだろうか。神や超常現象、心霊現象など超自然的なものに関する研究は数多く行われてきたが、妖怪に特化した心理学的な研究はほとんど行われていない。超自然的なものに対する研究については次節で述べることとし、本項では心理学における妖怪研究について概観したい。

妖怪に特化した実証的研究としては、現在のところ次の2つの探索的な研究が挙げ

られる。まず、高橋・桐生（2018）による妖怪の類型化である。日本における代表的な妖怪（57種類）を、形態別、地域別というような従来の一元的な分類ではなく、異なる次元の変数を組み合わせ、多角的な分類を試みたものである。多変量解析の結果として「恐怖喚起-非人間型」「注意喚起-非人間型」「人間型」という3つのクラスタが示されている。「恐怖喚起-非人間型」には、畏怖や信仰の対象として近付き難い雰囲気を持ち、人間を攻撃する『おに』、『てんぐ』等が、「注意喚起-非人間型」には、人間を驚かせることを好むが攻撃はせず、正体を現すことは少ないという特徴を持つ『こそこそいわ』、『ぬりかべ』等が属している。「人間型」は他のクラスタとは対照的に、積極的に人間と交流し、人間との距離が近いのが特徴であり、『かつば』、『ざしきわらし』等が属している。以上のように各クラスタに属する妖怪の特性や妖怪の社会に対する機能＝社会的機能を大まかに把握することができる。

つぎに、高橋・桐生（2018）の類型化をもとに、以前妖怪が果たしていた機能を現代においては何が代わりに担っているのかを検討した代替物の検討（高橋, 2019）が挙げられる。特定集団の関心の対象であり、その集団内で共有される聖なる象徴となっていることが特徴である「聖なる型」には『AI』、『法律』、『インターネット』などが含まれる。自然科学やAIなど人間の作り出したものでありながら信仰の対象となっているものと、神や仏といった存在自体が信仰の対象であるものが混在しているのが興味深い。人間の恐怖を喚起し、攻撃性を持つ「俗なる有害型」には『自然災害』、『都市伝説』、『犯罪者』などが含まれている。人間を驚かせることはあっても恐怖は与えない「俗なる無害型」に含まれていたのは『キャラクター』、『テーマパーク』のみであった。妖怪の類型化と同様に3クラスタが得られたが代替物の分布には偏りが見られ、中でも対照的であったのが「俗なる有害型」と「俗なる無害型」である。量、質ともに多数の代替物が見られた「俗なる有害型」に対し、「俗なる無害型」は2種類であった。加えて、キャラクター、テーマパークはポジティブな機能のみを持ち合わせているという点で、性質も似通っている。妖怪の両義性を考慮すると、善悪両方の機能を持ち合わせているケースはあれど、ポジティブなだけでは妖怪たりえないと考えられることが述べられている。そして現代においては人間の恐怖を喚起し行動を抑止するような役割を果たすものは多数存在するが、注意を喚起し行動の規範となるものや教訓のような役割を果たすものが少ないことが示されている。

その他に妖怪に焦点を当てたものとして現在確認ができるのは、日本心理学会での

公募シンポジウム「妖怪心理学」である。日本心理学会第79回大会の第一話「混沌」(桐生・水谷・平, 2015) から第83回大会の第四話「妖怪とその周辺」(高橋・桐生, 2019) まで4回開催されているこの企画では、妖怪に対する様々な心理学的アプローチが試みられている。たとえば、平(2015)は、生理心理学の観点から、妖怪を知覚・認知する生理心理学的メカニズムについて金縛り体験を例に説明し、それらを超常現象や妖怪に応用する可能性や、心理学を活用したお化け屋敷の効果について報告している。水谷(2015)は、妖怪が人間界と異界との境界で出現することから、境界を切り口に犯罪との関連について述べている。高橋(2018)は、より実証的な研究を行い、社会心理学的手法を用いた妖怪の分類、現代における妖怪の代替物の検討などについて報告している。シンポジウム内では、妖怪を心理学の立場から研究することの有用性について活発な議論がなされているが、実証的な研究の報告は未だ少ない。

学問としての妖怪

さて、現在に至るまで、妖怪は主に文化人類学、民俗学、文学、史学といった分野で研究されてきた。文部科学省による科学研究費補助金「分科細目表」の分類によると、文化人類学、民俗学、文学、史学は人文学系に属している(文部科学省, 2001)。Table 2-1に「分科細目表」の人文社会系の抜粋を示す。

Table 2-1

人文社会系の研究領域

大分類	中分類	小分類		
人文社会系	人文学	哲学		
		芸術学		
		文学		
		言語学		
		史学		
		人文地理学		
		文化人類学(民俗学)		
		社会科学系		法学
				政治学
				経済学
経営学				
社会学				
心理学				
		教育学		

注) 文部科学省 科学研究費補助金「分科細目表」より抜粋

ただし、Table 2-1 に用いた分科細目表は平成 29 年（2017）度分までの適用であり、平成 30（2018）年度以降は科学研究費助成事業審査区分表という新しい区分での募集となっていることを書き記しておかなければならない。現行の審査区分表も、大区分、中区分、小区分と分かれているが、以前の細目表のように「〇〇系」という名称が使用されていない。例えば、社会心理学は、分科細目表では「人文社会系の社会科学系の心理学」に含まれるが、審査区分表では「大区分 A の中区分 10：心理学およびその関連分野」に属している。分類名だけではどのような体系の学問なのか判断しづらいことから、今回はあえて旧版である細目表を資料として用いることとした。さて、Table 2-1 を見ると、人文社会系が人文学と社会科学に大別されており、妖怪を取り扱ってきた研究領域が主に人文学に属していることがわかる。たとえば、前述の柳田 國男や小松 和彦は民俗学者であり、江馬 務は風俗史学者である。

では、妖怪について人文学が明らかにしようと試みてきたのはどのような領域であったのか。妖怪に対する研究領域の一例を、現在-過去、潜在的-顕在的という 2 軸で整理したのが Figure 2-1 である。

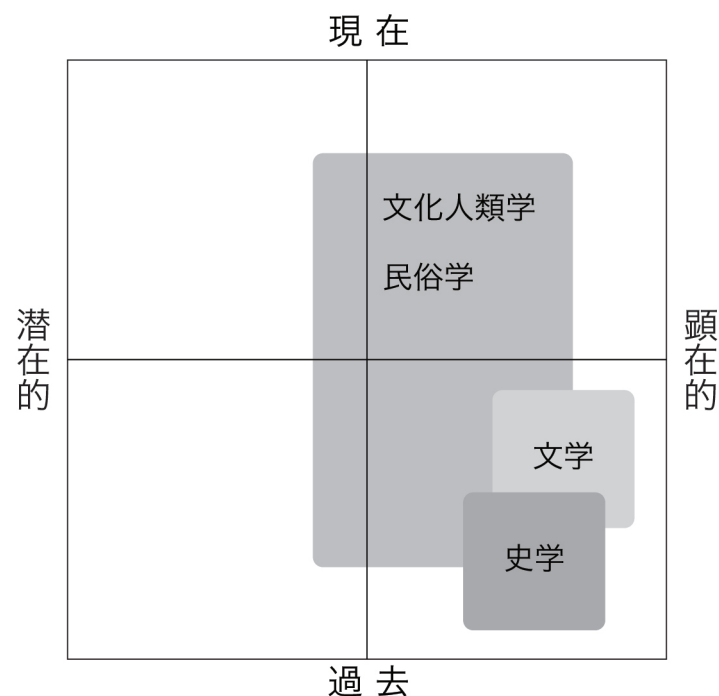


Figure 2-1. 妖怪に対する研究領域の一例。

現在とは、研究対象が現在進行形で研究が行われると同時に存在していること、過去とは研究以前に存在することを表す。また、その研究対象が目に見える状態で存在している場合は顕在的、そうでない場合は潜在的とし、整理した。

妖怪研究における文学の研究対象は媒体物、たとえば、言い伝えなどの口承文学や、小説である。これら媒体物は有形無形に関わらず顕在的であり、研究以前に作られたもの、つまり現在ではなく、過去と考えられるため、右下に布置している。同じく、史学は歴史の事実を知ることが目的の学問であるため、顕在的・過去とし、右下に布置している。文化人類学と民俗学は妖怪研究の根幹を担ってきた学問分野である。この2つは極めて近い隣接分野と考えられており、分科細目表内では文化人類学の下位領域として民俗学が表記されている。この表記は新しい審査区分表においても同様である。広義には、いずれも、人間の生活や文化についての有形無形の資料をもとに、その在り方を研究する分野と捉えられている。研究対象は主に過去の資料であるが、参与観察といった手法が多く用いられることや、過去の資料から現在を読み解くという特徴もあるため、現在・過去両方が研究対象と言えるだろう。最後に、哲学について触れておきたい。妖怪学を立ち上げ、妖怪を学術的研究の対象として広く一般に認知させた井上 円了は哲学者である。しかしながら、円了の示した妖怪は天気、病氣、占いなど当時不思議だと捉えられていたもの全般という広範囲に渡るものであり、哲学だけに収まりきれない概念を伴っている。また、円了以後、妖怪に特化した哲学的研究はほとんど見られない。そのため、哲学は表記していない。ただ、もし哲学をこの図に加えるとするなら、すべての学問の礎であり全方位的な研究が可能であるという特質を鑑み、表全体に布置することになるだろうことを書き加えておく。

以上、Figure 2-1 について述べてきたが、この図からは、現在・潜在的な研究対象についての研究がなされていないことが見てとれる。Table 2-1 によると、心理学は社会科学に属しているが、心理学も大分類では同じ人文社会系である。そして、まさに心理学の担っている領域こそ、主に現在・潜在的なものを研究対象とする分野であると言える。なぜなら心理学の研究対象はいま存在している人間の内面であり、それらはおおむね潜在的なものだからである (Figure 2-2)。ただし、言葉や行動から心理的背景を探るという点では顕在的な要素も研究対象として取り扱うこととなるため、顕在的な部分にも一部布置することとする。

さらに、心理学は現在の人々の心の仕組みから、過去の心の仕組みを推測できる可

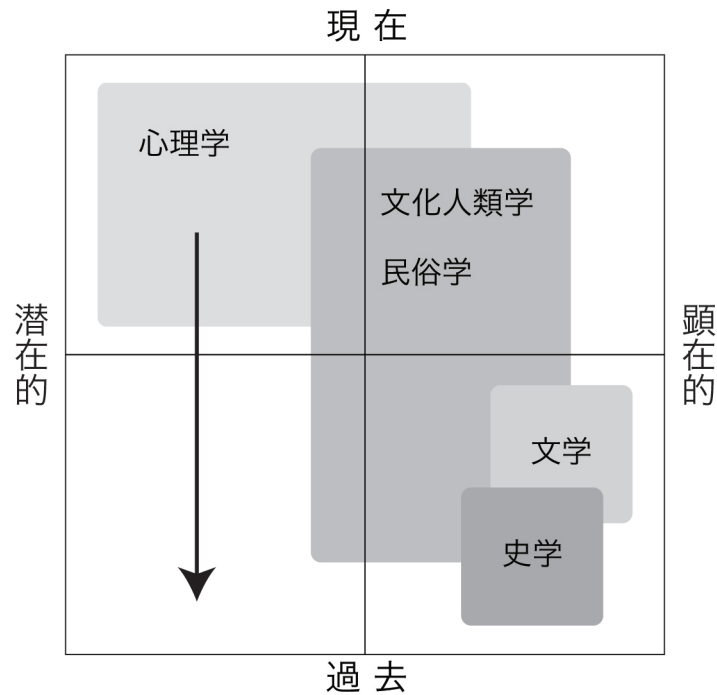


Figure 2-2. 妖怪に対する研究領域の一例 付 心理学。

能性も秘めている。現代から過去を読み解くことができるという点で、これまでの妖怪研究とは逆方向のアプローチが可能となるかもしれない。

2.2. 社会心理学的妖怪研究の意義

前節で述べたように、心理学は従来の人文学的妖怪研究では網羅しきれなかった部分を担うことができる可能性を秘めており、他分野の研究者や妖怪心理学のシンポジウムでも議論されているように、妖怪と心の関連、つまり妖怪に対する態度は心理学としての重要なテーマであると考えられる。

ではここで、心理学の中でも社会心理学の観点で妖怪を捉える意義について改めて考えてみたい。社会心理学事典（日本社会心理学会，2009）には、社会心理学の研究対象はわれわれが生活する社会的な環境に含まれている要因のいずれともかかわっており、対象を狭い範囲にくくることはできないこと、そして社会的現実を適切に捉え、かつ社会還元的な姿勢が求められることが述べられている。加えて、多くの学問との重なるの多い性質を持つことから、社会的現実を適切に捉え、明確な実証性を持つ学

問である、とも記されており、社会心理学の研究対象が多岐にわたり、多様なアプローチが可能であることがよくわかる。たとえば、社会心理学において重要な研究テーマとして長らく議論されてきた原因帰属や、不安や恐怖などの感情喚起は、妖怪の社会的機能や妖怪が生起する心的過程を議論する上で重要な理論的背景となり得るだろう。

先に述べたように、心理学では妖怪に特化した研究はほとんど行われていない。しかし、多くの妖怪研究者が言及しているように、妖怪と心の関連は注目すべき研究テーマである。中でも社会的要因を研究対象とする社会心理学の観点から妖怪を研究することは、従来の人文学的妖怪研究では網羅しきれなかった部分を担うと同時に、妖怪研究者の問いである「妖怪と心の関連」に明確な実証性を持って何らかの知見を提示することができるという点で意義があると言える。

本論における妖怪の定義

最後に、本研究における妖怪の定義について述べておきたい。

妖怪は広義では「人知の及ばない不思議なもの」である。前述のとおり、妖怪の定義は多種多様であるが、本研究は妖怪を定義付けすることが目的ではないため、広義での妖怪を扱うこととし、「未知なる奇怪な現象または異様な物体であり、人間に何らかの感情や行動を生じさせ、かつ、固有名詞を持つもの」と定義する。そして、実在／非実在についても言及しないこととする。合わせて、妖怪が果たす「社会や人間に対する作用」を「社会的機能」と定義する。

自然界の法則を超えたという意味の「超自然」、現在の科学知識では解明できない出来事として定義された「不思議現象」（菊池，1995）など、人知を超えたものは一般的に「超自然的」や「不思議」と形容される。これらの表現についての詳細と先行研究については次章で扱うこととして、本論で扱う妖怪も超自然的なものや不思議現象という範疇に属すると捉えている。しかし妖怪は、幽霊や超常現象などその他の超自然的／不思議なものとは区別され、異なる文脈で語りつがれてきた。では、妖怪の独自性とはいかなるものだろうか。超自然的／不思議なものを「もの」と「こと」という視点で分類してみると、それらが見えてくる（Figure 2-3）。

この図はあくまで一例であり、超自然的／不思議なもののすべてを網羅しているわけではないが、たとえば、UFOは未確認飛行物体なので「もの」、占いはその行為を表すので「こと」、と分けていくと、ほとんどの超自然的／不思議なものが「もの」、「こと」のどちらかに分類できることがわかる。一方で妖怪は、そのどちらにもなり得る。

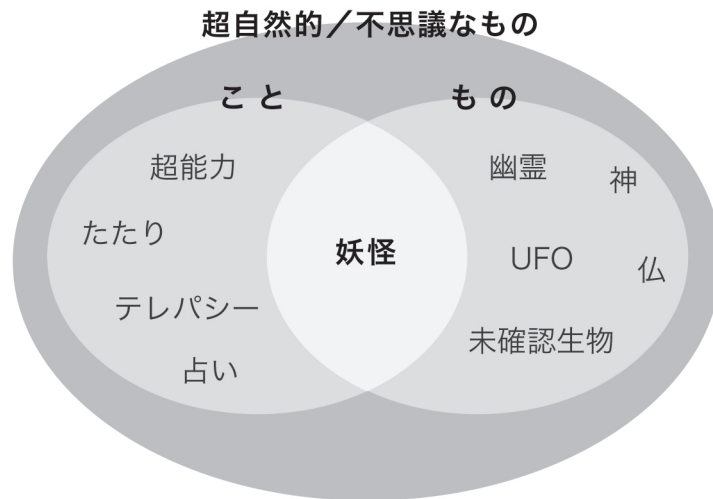


Figure 2-3. 超自然的／不思議なもの 概観図（一例）。

前述のとおり，もとは現象を指し示す概念であった妖怪は時代とともに変化を繰り返して具現化し，現代においては完全にキャラクターと化したと考えられている。時代とともに変化してきたという性質に加え，定義や分類によって捉え方が多岐に渡ることから「もの」と「こと」，どちらかに限定するのは困難である。「もの」と「こと」，つまり現象であり存在であるという複雑さが妖怪とその他の超自然的／不思議なものとを大きく分かつ点である。なお，妖怪と幽霊は類似性が指摘されており，幽霊は人間の妖怪化の特殊な形態である（小松，2013）という説があるように，両者の区別は研究者によって解釈が分かれるところである。たしかに霊が引き起こす現象という意味では幽霊も「こと」という側面を持ち合わせている。しかし，それらは広く心霊現象（たとえば憑依やポルターガイストなど）として扱われ，幽霊はあくまでそれらの現象を引き起こす「もの（＝存在）」として認識されている度合いが高いと考えられる。そのため本論においては，妖怪と幽霊とを区別して論じることとする。

3. 超自然的存在について

本章では、妖怪から少し範囲を広げて、妖怪を包括していると考えられる超自然的存在と宗教観との関連に焦点を当てていきたい。

神や超常現象、心霊現象など超自然的なものに対する心理学的研究は非常に多岐に渡り、すべてを網羅することは難しい。そこでまず、本研究で扱う出来事の意味づけという文脈で用いられる超自然的存在についての研究を概観する。つぎに、我が国における宗教観と超自然的存在についての概要を示し、本研究で取り扱う超自然的存在について概説する。

3.1. 超自然について

先行研究を概観する前に、本論での「超自然」という表現について触れておかなければならない。超自然という表現については、西洋的枠組みの中で生まれた発想であることから、日本における霊的なものや怪異を表すには適切でないという指摘もある。岩本（1990）は宗教学の見地から、霊魂と肉体とを明確に二分する西欧の宗教理論の底流にある人間観の構造は不易なものであり、我々日本人のものとは異なると指摘している。そして、取り分けキリスト教の枠組みの中で規定されるべき発想が宗教理論一般に適用されているものとして「超自然」を挙げ、キリスト教独自の人間観、自然観に裏打ちされたものであるにも関わらず、その点が十分認識されず、様々な宗教現象の分析に用いられていることに言及している。また、山中（2019）は民俗学の見地から、自然界に内包されるもの（超越的な存在と自然環境と人間の関係性）が、キリスト教世界とイスラーム世界と東アジアでは異なり、「自然を超えた存在」という考え方はイスラーム世界や東アジアのそれには当てはまらないと指摘している。

これらに共通しているのは、それぞれの文化圏における「自然」や「自然観」の捉え方の違いである。源（1985）は、人間にとって自然は「恐怖としての自然」であると同時に、「恵みとしての自然」であり、そのような力ある自然と交わり、自然の威力をなだめる道はそれをカミとして祀ることであったと述べている。さらに、日本の自然観は日本の思想・分化、日本人の心性の根本に関わる問題であるとし、西洋の創造主の存在を前提とする精神と自然の二元論の立場に立つ教えやそれを支える世界観とは対照的に、日本の古代世界においては自然は多神教的神々の活躍する世界であり、

場合によっては自然が神であったとしている。すなわち、厳格な二元論に基づく西洋的自然観とは異なり、我が国の自然観は「神・靈魂・自然・人間」がひとつの連続性を持つ（源, 1985）ような、渾然一体としたものとして捉えられてきたと言えよう。しかしながら源（1985）が指摘するように「自然観」の解明はその多面性、複合性によってけっして容易ではない。本研究の目的は自然観とはどのようなものであるかという問いに答えるものではないため、それらの論議は他に譲ることとし、本論においては自然界の法則を超えた、という意味で超自然と表現することとする。

原田（1997）は、科学的根拠がないという場合、単に現在の科学技術の到達点では証明不可能であるといわざるを得ない現象と、広範に受け入れられている科学的常識とは絶対的に矛盾した現象とに大別でき、前者が最終的判断は今後の科学の発展に待つところが大きい現象であることに対し、後者は客観的に実在するかどうかより、個々人の精神世界内、すなわち信念の世界に属する現象としての意味を持つと述べている。そして、それらを受け入れようとする心理的背景について、前者を受け入れることは科学的探究心と比較的結びつきやすいのに対し、後者は必ずしもそれを必要とはしないという点で異なることに言及している。前述の「不思議現象」（菊池, 1995）にも本研究で定義する超自然的なものは含まれるが、不思議現象には前者、後者ともに含まれているのに対し、本研究において扱う超自然は後者のグループに属するものである。そのため、不思議現象とは区別して論じることとする。よって、本研究においては、非科学的なものの中で、現在の科学的常識と背反するものでありながら個人の信念の内にあるものを表す概念として、超自然的という表現を用いることとする。

3.2. 超自然的存在に対する研究

心理学における超自然的なものへの関心は、現在の文化心理学の基礎となったヴェントによる民族心理学の思想に始まり、その後、文化人類学や民俗学等の他分野へと裾野を広げていった。もともと、欧米の研究において超自然的存在と表現される場合、その多くは神を指し示す。なぜなら一神教の文化圏において自然の法則を超えた力を行使する者は、人間を超越した存在＝全知全能の神に他ならないからである。

近年では宗教学から派生した宗教認知科学（CSR：Cognitive Science of Religion）といった新たな研究分野が注目を集めている。宗教認知科学とは、認知科学と心理学的知見を取り入れた試みである。実験心理学の手法を用いることにより、従来の宗教研

究ではなし得なかった実証的な研究が可能となった。その発端ともいえるのが、Boyer (2001) の著作「Religion Explained」(邦題：神はなぜいるのか?) である。これまで科学とは相反するとされてきた宗教的信念を科学的に捉え直し、宗教的信念が生起する理由、道徳や死との関連などを幅広く考察し、その解明を試みている。

超自然的存在と道徳性に着目したものとしては、Gray らによる一連の研究が挙げられる。ヒトがどのように心を知覚するかという研究では、参加者が人間や動物、神など13のキャラクターについての比較、たとえば、5歳の女の子はチンパンジーよりも痛みを感じやすいかどうかを評価する、という調査がおこなわれた。その結果、人は行為主体性 (agency: 物事を行う能力) と経験性 (experience: 感じる能力) という2つの独立した次元で心を知覚していることが明らかにされている。そして、一般的な成人は経験性と行為主体性の両方を保有していること、経験性はあるが行為主体性のない存在 (たとえば、赤ちゃんや犬、子どもなど) は多くみとめられたが、経験性がなく行為主体性があるのは神だけだったことが報告されている (Gray, M., Gray, K., & Wegner, 2007)。それゆえ、神が単なる道徳的行為者ではなく「究極の」道徳的行為者であると主張している。これは、ネガティブな結果を伴う状況において、より頻繁に神に助けを求める傾向があること (Pargament & Hahn, 1986; Gall, 2004) とも整合し、不当な苦痛や身に余る救済に対して誰も責任を負うことができないと、人々は神を見つけるために超自然に目を向ける (Gray & Wegner, 2010) という道徳的場面における神の絶対的な存在感がうかがえる。

ネガティブな出来事に遭遇し、その意味を見出す過程で超自然的存在がその行為者としてにわかに浮き上がってくるという構図からは、超自然的なものの力を借りて、制御可能で公正な世界、つまり心の安寧を取り戻そうとするという心的過程の一端が見て取れる。

3.3. 日本の宗教観と超自然的存在

本節では、超自然的存在について論じるにあたり、それらと密接に関わりをもつと考えられる我が国における宗教観について触れておきたい。

日本人の固有の信仰に焦点を当てた代表的な業績として、金児 (1997) と、西脇 (2004) が挙げられる。金児 (1997) は、向宗教性、加護観念、霊魂観念という3つの宗教的志向性を提唱している。常識的に認識される意味での宗教を表す「向宗教性」に対して、

必ずしも教団に属し、宗教儀式を行うという宗教的態度ではなく、広く習俗的に参りに行くなどの日常的行為の中に入り込んでいる宗教的要素に着目し、「日本人の心の真相に隠れている原始的心性であり、当人も通常それを宗教であるとは意識しない宗教性である」と述べている。そしてそれらを、加護観念 = オカゲ、靈魂観念 = タタリという二面性で表現している。神社に参詣している人におこなった調査で、「宗教とか信仰とかに関係していると思われることは何も行っていない。」との回答が42%も見られたことから、神社への参詣という宗教的行為を宗教の範疇に入らないごく普通の日常生活の延長と捉えていることが報告されている。

西脇（2004）は、人々の持つ自然観に着目し、そこから日本人の隠された宗教性を見出すことを試みた。従来のような神仏観念や宗教への態度を問う意識調査では宗教意識の低さが浮き彫りになるだけであることを踏まえ、それらとは別に人々の持つ自然観を宗教性の一指標として用いたらどうなるかを実証的に検討した。その結果、宗教意識尺度を構成するうちの1因子が宗教的自然観であることが確認され、それが現代日本の宗教文化において重要な宗教性の一指標であると結論づけている。さらに、日本における宗教意識調査について、宗教意識の問い方そのものがあらためて問われるべきであることについて言及し、宗教への警戒感を示したり、無宗教を自認したりする人々のなかにも脈々と培われている宗教性を描きだすことができはじめて、日本の宗教文化の現在がバランスよく記述されると述べている。

加えて、戦後の社会調査、世論調査を確立させた林知己夫を中心とする研究グループが実施した日本人の基底意識構造調査（林，1979）についても触れておきたい。「お化け調査」というニックネームで呼ばれるこの一連の調査は、論理的に明確な回答を得るための質問法を採用している従来社会調査ではすくいきれない、日本人の奥深いところにある素朴な「気持」をとらえるための方法開発として開始された。ここで言う「お化け」は、素朴な宗教感情、習慣行事、霊に関する見方、占い、お化け（超自然）、迷信などを指し、合理的でないもののひとつの代名詞として扱われている。これらを素朴な「気持」をとらえるための主題として選んだ理由について、人間の弱さに関係あるものが多く、素朴な心の動きが出やすいためだと林（1979）は述べている。お化けの各項目について、存在の次元（いる／いない）、期待の次元（いてほしい／いてほしくない）、情緒の次元（おもしろい・楽しい・つまらない／こわい・おそろしい・こわくない）という3つの次元でたずねた結果、日本人のひとつの特徴として、素朴

な宗教感情が極めて高いことが挙げられている。朴・吉野（2015）は、すでに得られている5つの国・地域（日本、アメリカ、北京、上海、台湾）のデータを用いて、お化け調査に関連のある項目との国際比較を試みている。信仰に対する意識について、日本の回答分布は他の国・地域とは異なる分布であり、特定の宗教に結びついているとは限らない「素朴な宗教的感情」の一側面が表れていることが示されている。

以上の先行研究からは、日本固有の宗教性にみられる表出されにくく、自覚されにくいという特徴や、それらを適切に汲み取る重要性が浮かび上がってくる。本研究においては、加護観念と霊魂観念（金児, 1997）、素朴な宗教的感情（林, 1979）と同様の意味で、「当人もそれを宗教であるとは意識しないが、日常の行為の指針として信じている考え方や信念」を日本固有の素朴な宗教心と呼ぶこととする。伝統的価値観についても、金児（1997）や西脇（2004）の取り出した概念を継承しつつ、現代版への更新をするとともに、隠れた素朴な宗教心を描き出すことを目指す。

3.4. 出来事の意味づけと超自然的存在

本章の最後に、超自然的存在と出来事の意味づけとの関連を述べておきたい。

出来事の意味を求める人間

人間にはすべての出来事の背後にある意図された意味を解読する特別なタイプの心の理論（実存的心の理論）が備わっている（Bering, 2002; 2003）ことが示されており、ネガティブな出来事に意味を見出すことは、有益な心理的効果を生み出す（Pargament & Hahn, 1986; Updegraff, Silver, & Holman, 2008）とされている。中でも、道徳的な出来事においては、自分または他の誰かが不当な犠牲者であると知覚すると、それが単に偶然の不幸である場合でも、責任のある行為者を自動的に探す（Gray & Wegner, 2010）ことが示されている。なぜなら、害を受けることは、生物にとって非常に重要かつ制御が不可欠な事項であるため、特に行為者を必要とする可能性がある（Gray & Wegner, 2010）からである。宗教的意味づけの観点からも、我々の身の周りには解釈できたとしても納得しかねる出来事が存在し、その多くは人間の生死に関わる問いであること、そして、それらを解決するために人は宗教を必要としてきたことが述べられている（金児, 1997）。出来事の意味や行為者、つまり「なぜそれが起きたか」を見出すことは、不安や恐怖などのネガティブ感情を緩和し、心の安寧へ繋がる可能性がある。

「過程／how」と「理由／why」

言い換えれば、人々が受け入れがたい出来事を受容するためには、解釈できるだけではなく、納得できる理由が求められるということである。以上を踏まえ、本論では、人々が受け入れ難い出来事に直面したとき、「過程／how」だけではなく、「なぜそうなったのか」という「理由／why」を求めるのではないかと捉えている。そして、それらを得ることは精神的な回復へと繋がるのではないかと捉えている。

具体的な例を挙げて考えてみよう。某クレジットカード決済のサービスで不具合が起き、一時、利用ができなくなったとする。復旧後、ニュースでは「データセンターで電源設備の不具合が起きたことが原因だということです。」と報じられた。「どのように（＝how）」に対しては「データセンターでの電源設備の不具合」によって利用ができなくなったと科学的で明確な説明がなされ、我々は一時の安心を取り戻す。

では、次のような場合はどうだろうか。ある男性が一世一代のプロポーズをするため、予約した高級レストランへ彼女を連れていった。しかしその日、彼の使っているクレジットカード決済のサービスで不具合が起き、利用できないと店員から言われてしまった。仕方なく予約はキャンセルとなり、デートは台無し、プロポーズも失敗に終わったとする。男性は、「どうして?」「なぜ今日に限ってクレジットカードが使えなかったのか!」と思うだろう。プロポーズに失敗した原因がクレジットカードのせいだけではなかったとしても、である。前述の「電源設備の不具合」という説明は、どのような過程でそれが起きたのか、を教えてくれるが、男性の「なぜ?」という問いには答えていない。どのようにして、という過程の説明は、彼の怒りや悲しみを引き取ってくれないのだ。

前述のとおり、日本には古来、身近な年長者から伝えられてきた伝統的な価値観が数多く存在し、それらには多くの超自然的なものが含まれている。たとえば、身近な水辺の事故は妖怪『かっぱ』のせいだとされていた。川で子どもが溺れて亡くなった事故が起きると、かっぱが子どもを水に引き込んだのだ、と人々は捉えた。人が自ら統制できない『かっぱ』に帰属することによって、受け入れがたい出来事を受容し、悲しみや罪悪感などのネガティブな感情の抑制に繋がっていったと考えられる。水辺の事故を現代風に過程／howの説明にしてみると、「足を滑らせて川に転落し、死因は溺死でした。前日の大雨により水かさが増しており、地盤も緩んでいたため滑りやすかったことが原因の不慮の事故だと思われます。」となる。詳細にその過程がわかった

としても、子どもを亡くしたことに対する「なぜ？」は消えない。

超自然的なものの存在を信じる人は、以前と比べ減少していることが近年の調査において指摘されている（NHK 放送文化研究所, 2019b）。一方で「神や仏」や「靈魂（たましい）」に肯定的な回答を示した人が7割を越える（朴・吉野, 2015）ことや、死の恐れ、自然の神秘への尊敬、人の力の及ばない何かに対する畏敬の念などが現代社会においてもなくなっていない（林, 2010）ことが報告されている。

金児（1997）は、科学的知による運命の説明は、たとえそれが合理的で妥当性のあるものだとしても、普遍的な解釈にすぎず、個別的な解釈が保証されるものではないため、自己の運命の善し悪しとその好転を超自然や非合理にゆだねようとしても不思議ではないと言及している。科学的に説明しきれないものに対する関心は表面の論理では片付かない素朴な感情であり、現代もかなりの人が持っている特性である（朴・吉野, 2015）との指摘もある。林（1979）は日本人の特性として、心の遊びというか、ゆとり、余裕というか、何か「抜けた」ところ、論理でつめられぬ気持というようなものに心を惹かれていることが多いと述べている。

近代以前に比べて減少したとはいえ、科学の進歩した現代においても自然災害や未知の感染症など人が自ら統制できない出来事は存在する。そこには、受け入れがたい出来事を受容するために、納得できる理由（why）＝超自然的なものを求めるという構図が浮かび上がってくる。実際に、厄払いやお守り、神や仏といった超自然的なものはいまだに私たちの身近にあり、不安を緩和する機能を果たしているように見受けられ、我々の生活が依然、それらと共にあることがうかがえる。

坂本（1985, pp.3-4）はコスモロジー（宇宙論）の再興について次のように述べている。「たしかに科学において宇宙の構造や宇宙の形状はよくわかってきている。しかし、科学はその中で人間がどのように位置しているのか、その宇宙の中で人間はどのような役割を果たすべく運命づけられているのか、人間は何をめざすべきなのか、という問いに答えてくれないのである。（…）しかし、科学の進歩があらゆる問題を解決するであろうと信じられている状況の中では、科学はこのような問いを立てることもそれに答えることもきっぱり拒否するのだということを強調しておくことが大切だと思う。」

私たちは科学の進歩によって、「ものごとがどのように起きたのか」という明瞭で確実な過程についての説明を手に入れた。それは、世界共通の科学的根拠の上に成り立つものである。これは同時に、科学が代わりになりえたのは「過程／how」の部分

だけだったということを表している。それゆえ私たちは、超自然的なものに「理由／why」を求め、身をゆだねるのではないだろうか。ただし、本論においては「理由／why」の欠如に焦点をあてることとし、科学と超自然との比較については言及しないこととする。林（1979）が、日本人は全般的に非合理的なものに心のかかわり合いがありそうだと指摘すると同時に、それらが科学文明などの合理性を否定するものとは言えず、フェーズの異なった問題であると主張しているように、科学と超自然的なものとは次元が異なると考えられるためである。

以上の議論から、「過程／how」と同時に、「理由／why」をも担っていたのが、かつての妖怪や超自然的なものだと考えられる。そして、超自然的なものが担っているであろう「理由／why」が、現代日本人の心のゆとりに影響を与える要因のひとつではないかと本論では捉えている。そこで本研究では、日本人の宗教観に基づく伝統的な価値観を整理し、それらに含有される超自然的なものが心のゆとりに与える効果について検討することとする。

4. 心のゆとりについて

本章では、心のゆとりについての概念を整理し、先行研究を概観した上で、本論で扱う心のゆとりについて述べる。

4.1. 「心のゆとり」とはなにか

まず、ゆとりとは何かということを考えてみたい。広辞苑（新村, 2018）では、「余裕のあること、窮屈でないこと」とされており、他の国語辞典においても同様に「ゆったりしていることや落ち着きなどを表す語」とされている。ユニークな語釈で知られる新明解国語辞典（山田他, 2020）においては多少踏み込んだ解釈がなされ、「当面の必要を満たしたあとに、自由に使うことが出来る空間・時間や体力、他のことを考えるだけの気力があること」と説明されている。経済や時間など様々な対象に対して用いられる「ゆとり」の中で、精神的な余裕や落ち着きなどは「心のゆとり」と表現され、一般的に広く認識されている。

4.2. ゆとり研究の概観

1980年代後半から1990年代前半にかけて生活のゆとりが政策的な目標に掲げられて以降、ゆとりは主に経済学の領域で扱われ、ゆとりの中心となるのは時間的余裕と経済的余裕であると考えられてきた。そのような中、ゆとりは極めて主観的なものであり、心理学的アプローチが必須であるという考えのもと、古川・山下・八木（1993）はゆとりの構造について実証的な研究をおこない、各要因にどのような関連があるのか、それらと収入や労働時間といった外的基準とがどのように相関しているのかを検討した。その結果、ゆとりは「遊楽性」、「環境快適性」、「挑戦性」、「時間自由性」、「有能性」、「富裕性」、「満足安定性」、「自由奔放性」の8つの要因からなることが見い出されている。精神的なゆとりは「時間自由性」、「富裕性」以外の要因と高い相関がみとめられ、必ずしも時間的、または経済的要因に還元できるものではないことが示されている。さらに、「甘え」を例に挙げ、「ゆとり」についても日本語を起源とする心理学的概念として主観的幸福感を測定する尺度となりうる可能性が述べられている。

ゆとりを測定する尺度は現在までに2種類作成されており、いずれも、普段どの程度ゆとりを感じているかを問う項目で構成されている。まず、北爪・菅野（2006）による大学生を対象とした大学生版ゆとり感尺度がある。「精神的安定感」、「目標志向性」、

「エネルギーの充実感」、「对人的余裕」、「時間的余裕」、「経済的余裕」の6つの下位因子で構成され、社会人を対象とした他の調査結果とは異なる構造であることが示されている。時間的なゆとりについては、古川他（1993）の解釈と同様に、ゆとりを構成する一部でありながらも、その本質とは異なる次元で捉えられている可能性が指摘され、時間的余裕と心のゆとりを分化して考えていくことが有用であると述べられている。

次に、精神的なゆとりに焦点を当てた富田（2008）による心のゆとり感尺度が挙げられる。こちらは、経済的ゆとりや時間的ゆとりといった物理的社会条件を除外し、心のゆとりのある状態とない状態という両側面に焦点をあてて主観的なゆとり感を測定する尺度であり、「心の充足・開放性」、「切迫・疲労感のなさ」、「対他的ゆとり」の3因子で構成されている。心のゆとり感そのものには性差がないこと、切迫・疲労感には状況、対他的ゆとりには発達の影響がそれぞれ関連している可能性が示唆されている。さらに心のゆとりという状態について、「窮屈で心にゆとりのない状態」、「心が落ち着いている状態」、「生活の中で充実感や楽しみを感じる状態」を区別して、段階的に理解することの必要性も述べられている。

その他には、小林・宮谷・中尾（2016; 2017; 2018）による抑うつや不安感、楽観性等との関連についての一連の研究が挙げられる。小林他（2018）は、前述の2種の尺度間の関連性を探索的に検討している。心のゆとり感尺度の「心の充足・開放性」、「切迫・疲労感のなさ」因子と、大学生版ゆとり感尺度の「精神的安定感」因子には強い相関が認められ、これらの因子は穏やかで落ち着いているときに感じられるゆとりを測定していることが述べられている。また、心のゆとり感尺度の「対他的ゆとり」因子と大学生版ゆとり感尺度の「对人的余裕」因子にも強い関連があり、これらはゆとりがあることで可能となる他者への配慮のような機能を反映していることが述べられている。大学生版ゆとり感尺度の時間的余裕因子、経済的余裕因子については、心のゆとり感尺度の下位尺度との間に強い関連は認められず、心のゆとりと経済的、時間的ゆとりとは質の異なるものであることが述べられている。さらに両尺度と抑うつ傾向、特性不安との間には中程度以上の負の相関が認められ、心のゆとりが精神的健康に寄与しているという結果が示されている。さらに、臨床場面で活用できるゆとり感の変化に着目した研究（六車・重橋, 2018）もおこなわれている。ゆとり感が変化するという点に着目し、認知的方略では心のゆとりを生み出しにくかった群にも、体験的

な方略が有用であることが示され、認知的方略と体験的な取り組みの両方を活用することの必要性が述べられている。

以上の先行研究に共通しているのは、精神的健康と心のゆとりが強く関連していること、心のゆとりを維持することの重要性、そして時間的余裕、経済的余裕は「ゆとり」の一部ではあるが、心のゆとりとは本質的な次元が異なる可能性が述べられていることである。

4.3. 心のゆとりの定義

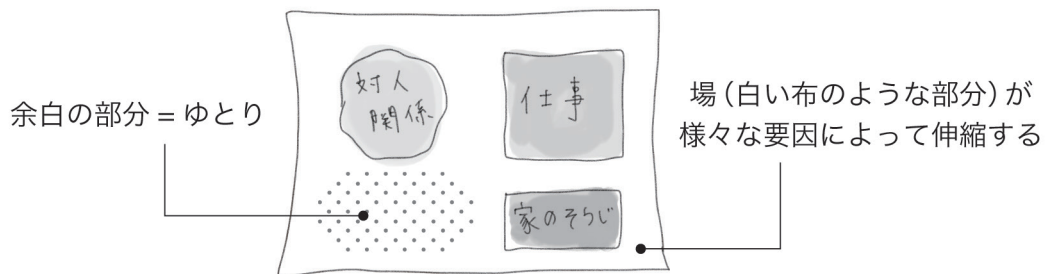
以上を踏まえ、本論で扱う心のゆとりについて整理したい。先行研究では、概して「心が安定していて穏やかであること＝心のゆとりがある」と扱われているものの、定義について確たるものはなく、特性と状況のどちらを表すのか、幸福感や安堵など類似する概念との違いは何か、等は曖昧である。また、認知的側面との関わりについても明確には示されていない。

人間は、外界から入力された情報を言語的反応や行動的反応といった出力に変換する存在であり、そのような情報処理過程には、多くの社会心理過程が介在する(古畑・岡, 2002)。ゆとりについても、失敗したり、困難やピンチに遭遇したり、いやなことにぶつかっても、それを処理する能力である葛藤処理能力があること(山田, 1989)、何らかのストレスイベントにぶつかっても、困難な状況にいる自分を一步引いて見ること、それに巻き込まれることなく対処できること(佐川, 2005)というように、処理能力を主軸に説明されているものもある。本論でも、情報処理過程において適切な対処方略を用いて問題を解決する能力を処理能力と捉え、心のゆとりと関連を持つものと推測している。しかし、先に述べたとおり、ゆとりが主観的幸福感の一指標となりうること(古川・山下・八木, 1993)や、認知的方略と体験的方略、両面からのアプローチが有用であること(六車・重橋, 2018)が示されている。既存の尺度が精神的な充足や対人関係における余裕などを含む主観的なゆとりの測定に重きを置いていることから、認知的な処理能力だけではなく、非認知的な側面を含む総合的なものとしてゆとりを捉えることが有用であろう。

そこで本論では、認知的処理だけでなく、主観的な充足や、対人関係における他者への配慮などの非認知的側面を含む「総合的な処理」をおこなう空間を「場」と捉えることとした。場とは、個人的、物理的、社会的な複合的要因が存在し、心理学的な

出来事が生じる場のことであり、人間の活動や知識がおこなわれる領域や区域を表す (G. R. ファンデンボス, 2013)。「場」の使用率 (負荷量) が、個人の持つ本来の処理能力を發揮できる状態、つまり使用率 (負荷量) の余地を「ゆとり」と考えている。

場の面積は資源のようにその容量の上限が規定されるものではなく、伸縮可能であると本論では捉えている。伸縮する1枚の布というイメージである (Figure 4-1)。白い布のようなものが基盤となる「場」であり、頭の中を支配していることがらその上に乗っている。その余白である処理スペースの余地がゆとりである。もちろん、ことがら自体の大きさは状況によって変化する。たとえば、仕事で担当する業務が増えたり、対人関係でトラブルがあったりすれば負担が増える、つまり場の使用率が上がる。それに伴い、必然的に余白 (使用可能な余地) は減少する。しかし、余白の増減はことがらによるものとは限らない。たとえば、楽しみにしている予定がある日は、突発的な出来事によって多少仕事が増えても難なくこなせてしまうが、家族や友達とけんかした日はいつもと同じ作業量がこなせない、というような経験は多くの人に覚



ことがら自体の変動だけでなく

場の伸縮によっても余白の大きさは変わる

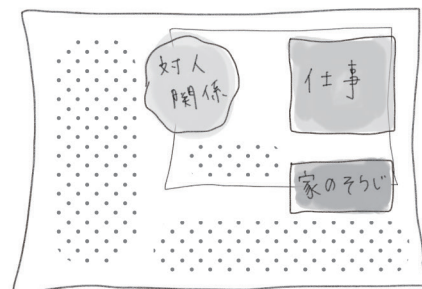
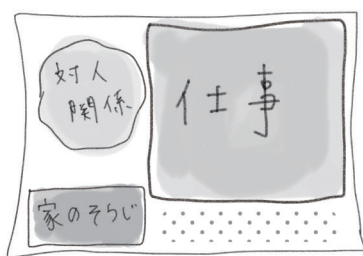


Figure 4-1. 本論における心のゆとり (イメージ)。

えがあるのではないだろうか。このような事態は、基盤となる場自体が伸縮することによるものであると本論では捉えている。すなわち、ことがら自体に加え、場の伸縮によって、その余白であるゆとりの面積も変化する、ということである。

以上の議論をもとに、本論では心のゆとりを「認知的処理のみならず、精神的充足の獲得や対人関係における振る舞いなどを含む総合的な心の働きとしての処理がおこなわれる「場」の使用率の余地」と捉える。心のゆとりを失っていると気づいたきっかけを尋ねた調査によると、自分の気持ちや行動をふだんのようにコントロールすることができない、という共通点が示されている（富田・高橋, 2005）。つまり、心のゆとりがある＝正常（適切）な処理ができている状態とも言える。心のゆとりが「ない」場合と比較して、心のゆとりが「ある」ことが知覚がされづらいのは、本来の処理能力が発揮され、平常どおりの処理がおこなわれていることによるものとだと考えられる。ゆえに、心のゆとりがある状態を「個人が本来の総合的な処理能力を発揮するのに十分な「場」を確保していると主観的に認識している状態」と定義する。

本研究における心のゆとりの指標には、精神的な充足や切迫感、他者への配慮などを含む生活全般に対する主観的な感覚を用いる。認知的な情報処理の能力（キャパシティ）については、ワーキングメモリの測定や、処理に必要な資源がどの程度その個人に備えられているか、あるいは残っているか等の実証的な検討が可能であろう。しかし、前述のとおり、本論は総合的な処理能力という観点で心のゆとりを捉えている。そして、ゆとりのない状態を引き起こさない（＝場の余白を減じない）ためにはどうすればよいかという問いに対し、日本における伝統的価値観を取り上げ、それらに含有される超自然的なものが心のゆとりに与える効果について検討するものである。したがって、実際の生活の中で人々がどのようにゆとりのあり、なしという認識を導くのか、主観的な感覚を通して検討することとする。

5. 本論文の目的と構成

5.1. 本論文の目的

本研究の目的は、超自然的存在に対する信念が心のゆとりに与える効果を検討することである。科学の進歩によって大変便利で豊かな生活を手に入れた私たちが求めてやまない精神的な充足やゆとりとは一体どのようなものであり、どうしたら手に入れることができるのだろうか。本研究はこの問いに対して、超自然的存在に対する信念と心のゆとりとの関連に着目し、現代日本人の心のあり様を考察する。

日本には古来、身近な年長者から伝えられてきた伝統的な価値観が数多く存在する。文化資源として取捨選択されながらも保持されてきたこのような価値観は、いまだ日本人の精神的基盤として機能していると考えられる。それらには多くの超自然的なものが含まれるが、科学の進歩に伴い、人が自ら統制できない出来事は減少し、次第に存在意義が失われていったように感じられている。一方、近年の調査結果は私たち日本人の基底に超自然的なものを求める意識がいまだ維持されていることを示している。その心理的背景として、人々が受け入れ難い出来事に直面したとき、ものごとがどのように起きたか、という「過程／how」だけではなく、なぜそうなったのか、という「理由／why」を求めるということ、そして「過程／how」だけでなく「理由／why」をも担っていたのが、かつての妖怪や超自然的存在であることが推測される。すなわち、現代では主に科学が担っている「過程／how」の説明では補うことのできない「理由／why」を得ることが出来事を受容や精神的な回復へと回復へと繋がるのではないか。それゆえ私たちは「理由／why」をも引き受ける超自然的なものに身をゆだねるのではないだろうか。

そこで本研究では、現代日本人の心のゆとりに影響を与える要因のひとつとして、超自然的なものが担っているであろう「理由／why」に着目し、心のゆとりとの関連を検討する。

5.2. 本論文における仮説モデル

本研究では、第1章から4章の議論に基づき、「日本における素朴な宗教心に基づく伝統的な価値観およびそれが含有する超自然的なものに対する信念が、日本人特有の出来事に対する捉え方（＝受容性）を導き、その結果、心のゆとりに影響を与える」



Figure 5-1. 本論における仮説モデル1
 注) 伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定するモデル

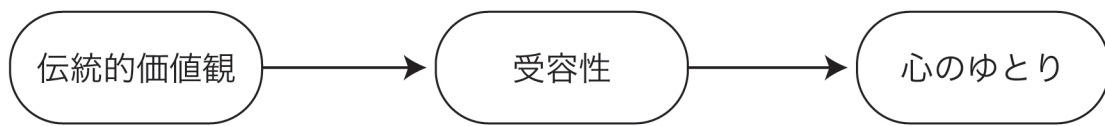


Figure 5-2. 本論における仮説モデル2
 注) 伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定しないモデル

という仮説モデルを立てた。伝統的価値観から心のゆとりへ直接の効果があるのかどうかについては現段階での理論的な予測が困難であるため、伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定する仮説モデル1 (Figure 5-1) と、伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定しない仮説モデル2 (Figure 5-2) という2種類の仮説モデルについて、その妥当性を比較検討することとする。

ここでの受容性とは、「出来事を多角的に捉え、適切な対処方略を導き出し適応する心理的能力」を表す概念として用いる。先行研究では、日本人が非合理的なもののかかわり合いが多いこと、日本の宗教性が表出されにくく自覚されにくいことは多く論じられているが、それらが実際に何に影響を与えるのかは明らかになっておらず、現段階で受容性がどのような下位概念で構成されるのかを理論的に予測することは困難である。したがって、受容性の下位概念については、仮説検証に向けた予備的研究として、研究4において探索的な検討を重ねることとする。

なお、本研究においては、心のゆとりから受容性へのパスは除外して検討する。先に述べたように、本論においては心のゆとりがある＝正常（適切）な処理ができている状態として捉えている。そしてゆとりのない状態を引き起こさない（＝場の余白を

減じない) ためにはどうすればよいかという部分を主題としている。つまり、心のゆとりを保つための前提条件である心理的能力として、伝統的価値観によって導かれるであろう受容性を取り上げているため、心のゆとりから受容性へのパスは想定しない。ただし、心のゆとり感が高いほどストレス対処に認知的方略を用いること(富田, 2012)や、心のゆとりを有する人はネガティブ感情状態からの回復が早いこと(小林・宮谷・中尾, 2018)などが明らかにされており、心のゆとりが心理的能力を高める効果を持つことはおおいに予測できる。それらを検討する場合には、心のゆとりが保持されているという前提のもと、本研究とは異なる位相、すなわち心のゆとりから先へ伸びるパスがあらたに設定される構図になるであろうことを書き加えておく。

5.3. 本論文の構成

本論は第1章から第5章を「理論的検討」、第6章から第11章を「実証的検討」とする2部・11章構成をとる。

第1章から第5章の理論的検討では、本研究のリサーチクエスションと超自然的存在に対する信念が心のゆとりに与える効果という主題を選ぶに至った背景・問題について述べ、関連する主題である妖怪、超自然的なもの、心のゆとりについての先行研究を概観するとともに、本研究で扱う概念や仮説の整理をおこなう。

実証的検討では、まず第6章から第10章において、次の4つの研究について述べる。

研究1では、新型コロナウイルス禍で急速な認知の高まりをみせた妖怪『アマビエ』に対する人々の態度を通し、現代において妖怪がどのような社会的機能を持ち得るのかを探る。

研究2では、現代の人々において、日本の「伝統的価値観」と「認識」されているものの考え方、感じ方を整理し、それらを測定する尺度を構成する。加えて、具体的な日常的宗教行為(おみくじをひくなど)を測定する日常的宗教行為尺度の作成を試み、両尺度間の関連性から伝統的価値観といかに関わるかを探索する。

研究3では、研究2で作成した尺度について、質問文の表現と概念の偏りという2点について改善を試み、改訂版を作成する。

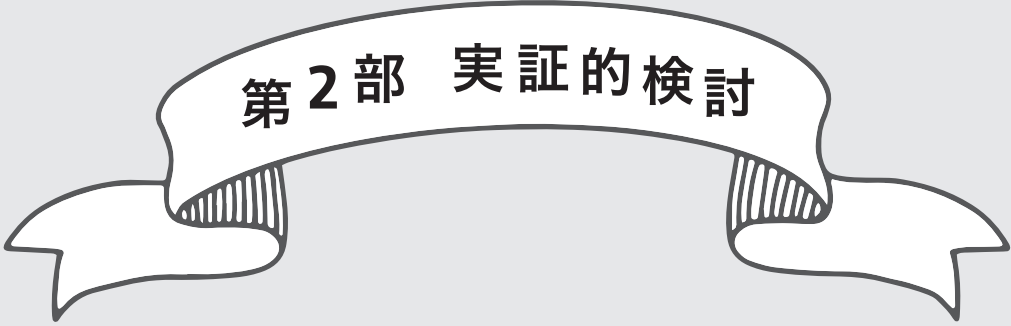
研究4では本論における仮説検証の予備的研究として、伝統的価値観が心のゆとりに与える効果を媒介すると考えられる受容性の下位概念を探索的に検討する。

研究5では、研究1から4の結果を踏まえ、我が国で古来伝えられてきた伝統的価

値観に含まれる超自然的存在に対する信念が，出来事に対する日本固有の受容性を媒介して心のゆとりに影響を与えるという仮説モデルの検証を試みる。

最後に，第 11 章において上記の研究を通した総合的な議論をおこない，本研究の意義と今後の展望について述べる。

第2部 実証的検討



6. 研究 1 新型コロナウイルス禍における

アマビエにみる妖怪の社会的機能

6.1. 目的

新型コロナウイルスという未知の感染症によって、我々の日常生活は一変し、現代的な価値観は大きく揺らぐこととなった。このような状況にあつて、我が国においては「アマビエ」が注目された。アマビエとは、「新聞文庫・絵」（京都大学附属図書館所蔵）収録の瓦版により伝えられている妖怪である。瓦版には、肥後（熊本県）の海にアマビエと名乗る生き物が出現し、6年間は豊作が続くが、病も流行するので私の姿を写して人々に見せよと言って海中に消え去ったと記されている（長野, 2009）。アマビエという妖怪に対する急速な認知の高まりは、新型コロナウイルス禍において SNS を中心に広まり、厚生労働省の外出自粛啓発キャラクターへの起用や、ユーキャン新語・流行語大賞の入賞へと繋がった。では、新型コロナウイルス禍でアマビエが流行し、多くの人々がそれに参与したのはなぜだろうか。その背景にはどのような意図が存在しているのだろうか。本研究ではこの問いに対し、妖怪のもつ社会的機能に着目しながら解明を試みる。

妖怪研究について

本研究では、新型コロナウイルス禍における妖怪アマビエに対する人々の態度を研究対象とする。現在に至るまで、妖怪は主に文化人類学や民俗学などで研究対象とされてきた。現代妖怪研究の第一人者である小松（2011）は、怪異や神秘的現象を好ましいものと好ましくないものに分け、前者は宗教的信仰および祭祀の対象になり、後者が妖怪になると定義している。そのため祀られる神と、祀られない妖怪の差異は常に曖昧である。ただし妖怪にはとりわけ、文学や絵画などの娯楽として楽しまれてきたという側面がある。香川（2005）が提示する「2度の転機」説によると、江戸時代と1960年代の水木しげるの登場によって、妖怪は完全に娯楽と化したという。すなわち、江戸時代の絵師や水木しげるの漫画によって妖怪がキャラクター化され、その実在や及ぼす力が信じられなくなったということである。しかし新型コロナウイルス禍におけるアマビエの流行はこの定説に疑問を投げかけ、妖怪の娯楽の側面とともに、何らかの超自然的な力をもつものとしての信仰の側面がいまだに存在していることを示しているものである。

妖怪の社会的機能

小松（2015）は、妖怪研究は人間の心の研究であり人間の社会の研究と位置付けている。こうした見方に従い、本研究では妖怪の存在・非存在を論じるのではなく、妖怪に際した人の心の解明を試みる。その際に着目するのが、妖怪の有する社会的機能である。日本古来の伝統的な価値観には多くの超自然的なものが含有されており、中でも統制不可能でネガティブな出来事の行為者は、その多くが妖怪とされ、不安の緩和、共同体の共通認識などの機能を果たしていた。高橋・桐生（2018）は代表的な妖怪の類型化を試み、恐怖喚起や注意喚起など本来妖怪が備えていた社会的機能について言及している。

とりわけ不安の緩和という機能は、過去の疫病流行時の妖怪の広まりからも明らかである。アマビエのように疫病の流行等を予言し、除災の方法を告げて消え去るという特徴を有する妖怪は予言獣と呼ばれ、他にも「件」、「人魚」、「神社姫」などがある（長野, 2009; 常光, 2016）。我が国において、疫病の流行時に除災法を伝える予言獣の絵が広まるというのは、江戸期以降たびたび起こっており、安政5（1858）年や明治15（1882）年のコレラ流行などの際も予言獣の絵を売り歩く人が報告されている（湯本, 2016）。長野（2009）や常光（2016）は、社会不安と予言獣の出現を安易に結び付けるべきではないとしながらも、人々が疫病流行などへの不安や危機意識に対抗するために予言獣を生み出し、不安を緩和する機能を担わせたことは認めうると述べている。

また人類学者の Malinowski（1948 宮武・高橋訳 1997）は、人は自ら統制することが不可能な危機に接すると、呪術的思考や迷信的行動を行うと述べている。これを受け、心理学的研究においても統制ができない状態や不安のある状況下では、迷信的行動が増加することが報告されている（Case, Fitness, Cairns & Stevenson, 2004）。

こうした先行研究を踏まえれば、科学文明が発達した現代においても、新型コロナウイルス禍というストレスや不安のある状況下では、妖怪が不安の緩和という社会的機能を果たす余地が生まれると推測できる。そこで本研究では、研究1-1において、アマビエブームの実態を把握し、人々がアマビエを用いた意図を探るために、新聞記事におけるアマビエへの言及をテキストマイニングの手法で分析する。研究1-2では、日本の伝統的な価値観と日常的に営まれる宗教行為を取り上げる。これらは「日々の安穏を願い、将来への不安や予測できない厄災を避けるため」（金児, 1997）に用いられるとされ、妖怪の有する信仰対象としての機能もこの範疇に属するものだと考えら

れる。そのため、それらとアマビエへの態度との関連を検討することは、妖怪の複層的な機能を解明する一助となりうる。以上2つの研究を通して、新型コロナウイルス禍における妖怪アマビエに対する人々の態度を探索的に検討し、現代における妖怪の社会的機能について考察する。

6.2. 研究 1-1 アマビエ流行についての実態把握

6.2.1. 目的

研究 1-1 では、アマビエの流行の状況を包括的に把握するために、実社会における多様な情報を取り扱っている新聞記事のデータを分析する。その際、(a) 平時と新型コロナウイルス禍における妖怪についての記事との差異から妖怪への態度の変化を明らかにする、(b) アマビエに言及した記事から、アマビエを用いた意図を明らかにするという 2 つの目的を設定し、分析を行う。これに加え、人々の関心をあらわす指標として行動予測等の研究にも広く用いられているインターネット上の検索値を補助データとして用いる。

6.2.2. 方法

記事の収集には、国内の新聞と雑誌から宗教および宗教に関連する事象を扱った記事を収集している「宗教記事データベース」（国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター）を用い、分析は次の手順に従っておこなった。

妖怪に関連する記事の抽出

2018 年から 2020 年の「妖怪」の語が本文内に含まれる新聞・雑誌記事から、関連性の高い記事を抽出するため文字数が 3000 文字以下の記事に絞り込んだ上で、1 年につき 100 件をサンプリングして抽出した。

アマビエに関連する記事の抽出

2020 年 3 月から 9 月の期間で「アマビエ」の語が本文内に含まれる新聞・雑誌記事を抽出し、アマビエに関する商品や作品の制作・販売など人々の活動について言及しているものを選出した。

インターネットにおける検索値の抽出

2018 年から 2020 年の期間で「アマビエ」の語が検索エンジン Google で検索された値および同時に検索された語を抽出した。

統計分析

統計ソフトウェア KH Coder Version3. Beta. 01 および R version 4.1.2 を用い、検索値の抽出とテキストマイニングを実施した。

6.2.3. 結果

妖怪に関連する記事

「妖怪」の語が含まれる記事は、2018年は78041件中352件、2019年は66842件中307件、2020年は56452件中1093件であった。各年100件をサンプリングした記事の抽出語について、上位15語をTable 6-1に示す。2020年のみ「アマビエ」の語が72件、「新型コロナウイルス」が63件言及されている。次に、「妖怪」記事に用いられる語同士の関連性を探るため、2020年の「妖怪」記事を対象に共起ネットワーク分析を行い、抽出語の共起関係を検討した（Figure 6-1）。その結果、「アマビエ」「絵」「描く」等アマビエの伝承に関するものと、「新型コロナウイルス」「終息」「願う」等新型コロナウイルスの流行に関する語の関連が見出された。

Table 6-1
「妖怪」の語を含む記事における年別の頻出語

順位	2018年		2019年		2020年	
	語	頻度	語	頻度	語	頻度
1	妖怪	100	妖怪	100	妖怪	100
2	年	59	月	55	アマビエ	72
3	月	50	年	53	新型コロナウイルス	63
4	日本	49	人	45	疫病	56
5	人	45	日本	40	話す	51
6	描く	39	描く	38	月	45
7	思う	36	見る	37	願う	39
8	見る	35	話す	35	年	39
9	作品	33	作品	33	人	38
10	登場	32	知る	33	姿	36
11	研究	31	思う	30	描く	36
12	出る	30	時代	30	疫病退散	32
13	知る	29	世界	29	コロナ	28
14	話	29	登場	29	作品	28
15	今	27	人間	28	販売	27

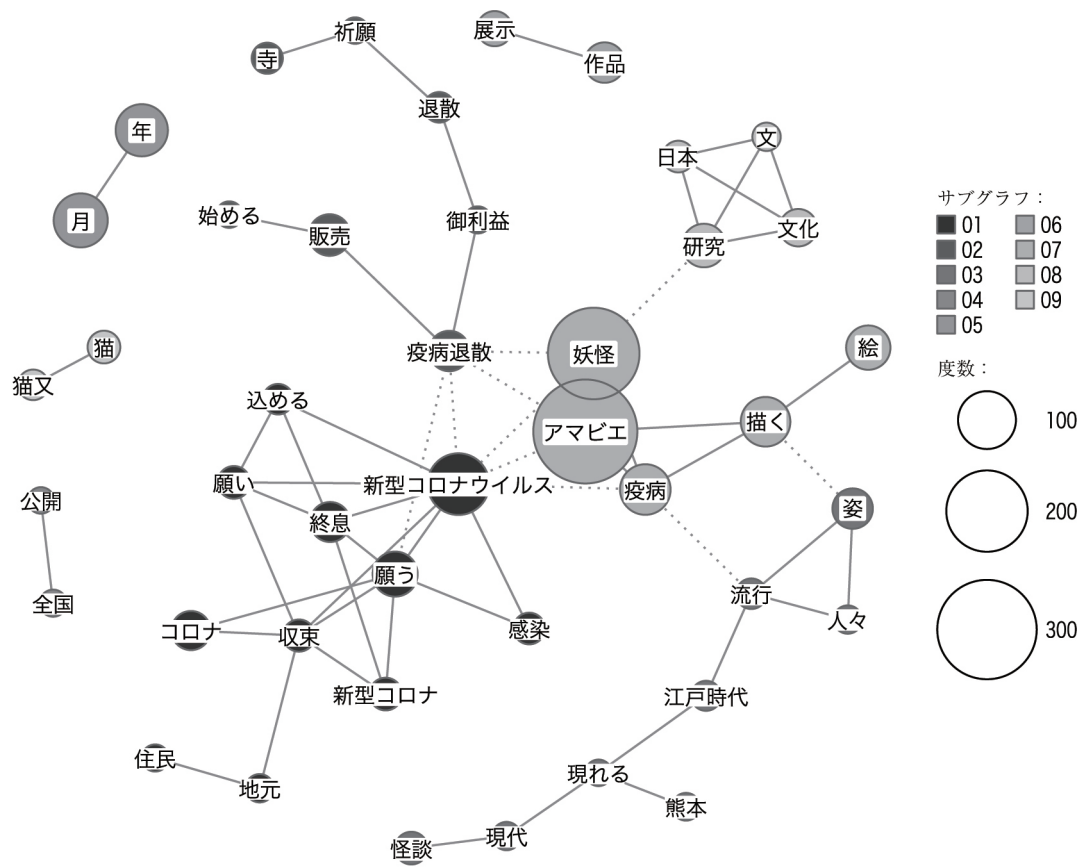


Figure 6-1. 2020年の「妖怪」に関する共起ネットワーク。

アマビエに関連する記事

データベース内の2020年3月から9月に発行された記事において「アマビエ」の語が本文内に含まれるものは798件であった。そのうち、商品や作品について言及している596件を分析に用いた。各記事を商品・作品等を作成した目的で分類したところ、芸術活動を主とする「アート目的群」(274件)、販売を目的とする「ビジネス目的群」(218件)、主体が寺院及び神社である「宗教目的群」(104件)に大別された。主体(主催者、団体または企業)の内訳をみると、アート目的群は、「アーティスト」、公民館や役所等を含む「公的機関」、小中学校等の「教育機関」が上位を占めていた。ビジネス目的群では「菓子店」が最多で、文房具や日用品などの「雑貨」、「伝統工芸」がそれに続いた。記事における頻出語の抽出を行ったところ、アマビエの伝承や解説に含まれる単語に加え、新型コロナウイルス関連のものが多く含まれていた(Table 6-2)。

Table 6-2
「アマビエ」の語を含む記事における目的群ごとの頻出語

順位	アート目的群		ビジネス目的群		宗教目的群	
	語	頻度	語	頻度	語	頻度
1	アマビエ	274	アマビエ	218	アマビエ	104
2	妖怪	255	妖怪	212	新型コロナウイルス	94
3	新型コロナウイルス	234	新型コロナウイルス	204	妖怪	90
4	疫病	181	販売	178	話す	73
5	願う	164	円	159	疫病	71
6	話す	160	疫病	155	神社	60
7	コロナ	145	話す	140	描く	60
8	描く	134	願う	137	コロナ	57
9	疫病退散	129	疫病退散	117	疫病退散	55
10	作る	121	描く	117	願う	55
11	月	119	コロナ	107	月	54
12	収束	101	作る	105	終息	49
13	人	101	終息	95	宮司	48
14	込める	94	込める	92	参拝	41
15	制作	94	月	90	祈願	39

インターネットにおける検索値

Google における「アマビエ」の 2018 年から 2020 年の検索値の推移を Figure 6-2 に示す。「アマビエ」と同時に検索された語については、2020 年以前の検索値が少なく抽出されなかったため、抽出可能である 2020 年の上位 15 語を Table 6-3 に示す。

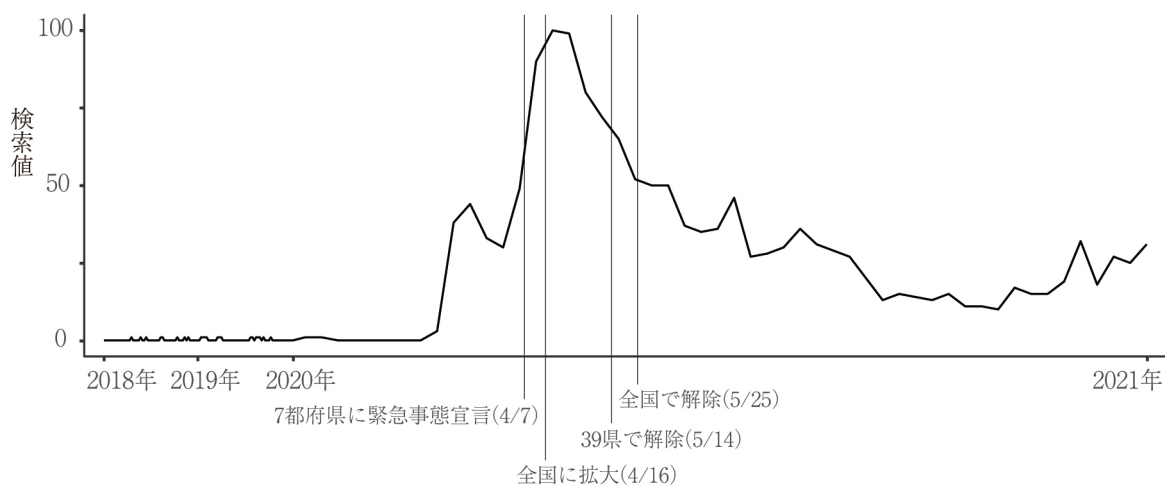


Figure 6-2. 2018 年から 2020 年における Google での「アマビエ」検索の推移（検索値はピークを 100 としたときの相対指数）。

Table 6-3
Googleで2020年にアマビエと同時に検索された語

順位	語	Value	順位	語	Value
1	イラスト	100	9	あまびえ	29
2	コロナ	75	10	鬼太郎	29
3	画像	67	11	マスク	24
4	妖怪	54	12	チャレンジ	23
5	ちゃん	52	13	疫病	22
6	水木しげる	37	14	御朱印	21
7	神社	31	15	和菓子	19
8	茨城	30			

注) Valueは件数ではなく、トップを100としたときの相対指数を表す。

6.2.4. 考察

2020年とそれ以前の妖怪に関する記事の頻出語の比較および2020年の妖怪に関する記事の共起ネットワーク分析からは、新型コロナウイルス禍において妖怪への言及の仕方が大きく変化し、とりわけ疫病退散の側面が注目されたこと、妖怪の中でも特にアマビエに関心が集まったことが見出せる。

アマビエの語を含む記事では、主体ごとの分類から、アマビエの絵を描く、アマビエを用いた商品を販売するなどの活動が個人のみならず、商業の領域や公的機関、教育機関や宗教施設にまで幅広く及んでいたことが示されている。3つの目的のうち、アートおよびビジネス目的群は娯楽の機能を、宗教目的群は神社と寺院における活動の元来の目的である信仰の機能を表しているとみなすことができる。そのように仮定してそれぞれの頻出語を比較すると、宗教目的群の上位20語の半数以上がアートおよびビジネス目的群と共通する上に、宗教目的群に見出される「疫病退散」「願う」の語はアートおよびビジネス目的群においても上位に含まれており、宗教目的群においてこれらの語が信仰の機能を表しているのなら、アートおよびビジネス目的群にも同様の機能が含まれていると捉えられるのではないだろうか。

Googleの検索値も、新型コロナウイルス流行に伴い、アマビエという語が急激に検索されたことを示している。時期は、およそ半数が感染拡大に対する何らかの不安を感じていたと報告されている感染拡大初期の約半年間（厚生労働省, 2020）と重なりをみせており、不安の広がりとともに認知度が高まっていったことがわかる。同時に検索された語の上位に「コロナ」「疫病」等が含まれていることから、アマビエに対する人々の関心が新型コロナウイルスや疫病と関連をもって急速に認知されたことが見て取れる。

総じてこれらの結果は、新型コロナウイルス禍における妖怪の社会的機能は、娯楽の機能と信仰の機能が渾然一体となっており、1つの活動の中に双方の側面が見出せることを示しているといえる。

6.3. 研究 1-2 アマビエへの態度と伝統的価値観・

日常的宗教行為との関連

6.3.1. 目的

研究 1-2 では、新型コロナウイルス禍におけるアマビエへの態度と、伝統的な価値観、日常的な宗教行為との関連を検討する。

6.3.2. 方法

調査参加者

都内の私立大学生にオンラインアンケートシステム Qualtrics で作成した Web 調査への回答を依頼した。不適切な回答と欠損値のあった 26 名を除外し、最終的な分析対象者は 319 名 ($M = 19.93, SD = 1.09$), 性別は男 94 名, 女 221 名, その他 4 名であった。

質問紙の構成

アマビエに対する態度、伝統的価値観、日常的宗教行為を尋ねる項目で構成された。(b) と (c) については宗教に関する意識調査 (NHK 放送文化研究所, 2019b) を元に作成した。質問項目の一覧を Table 6-4 に示す。

- アマビエに対する態度

アマビエを知っているか、何か行動を起こしたか、初めて知った時の印象など、アマビエに対する態度を 6 項目で尋ねた。

- 伝統的価値観

神仏加護や自然崇拝等の伝統的価値観 (6 項目) を評定した。

- 日常的宗教行為

神社やお寺にお参りをするなど日常生活における宗教行為 (7 項目) を評定した。

統計分析

統計ソフトウェア R version 4.1.2 を用い、テキストマイニングおよび分散分析を実施した。

Table 6-4
研究2で用いた質問項目一覧

質問項目	回答種別
基本情報	
1) 性別をお答えください。	男性/女性/その他
2) 年齢をお答えください。	
(a) アマビエに対する態度	
1) アマビエという妖怪を知っていますか。	はい/いいえ
2) どのようにしてアマビエを知りましたか。	自由記述
3) アマビエを知ったとき、どのような印象を持ちましたか。	自由記述
4) アマビエについて、あなたが起こした行動はありますか。 その他を選じた方は、その内容を具体的に教えてください。 (複数回答可)	〈選択肢〉 ・何もしなかった ・アマビエの絵を貼った ・アマビエの絵を描いた ・アマビエの絵を描いてSNSなどに投稿した ・アマビエに関する商品を購入した ・その他 ()
5) アマビエについて、なぜそのような行動を起こそうと思いましたか。	自由記述
6) アマビエ以外のものに新型コロナウイルスの終息を祈ったり願ったりしたことがありますか。 「ある」と答えた方は、その内容を具体的に教えてください。	自由記述
(b) 伝統的価値観	
・神や仏に願いごとをすると、何となくかなえてくれそうな気がする	「7:非常にそう思う」から
・神でも仏でも、心のよりどころになるものが欲しい	「1:まったくそう思わない」の7点尺度で評定
・人には知られなくても、悪いことをすれば、いつか必ず自分に返ってくる	
・人間には、自分の力ではどうすることもできない運命というものがある	
・祖先の人達とは、深い心のつながりを感じる	
・山や川など、自然界のものには神が宿っている	
(c) 日常的宗教行為	
・神社にお参りする	「6:非常によくする」から
・お寺にお参りする	「1:まったくしない」の6点尺度で評定
・墓参りをする	
・困難な問題にぶつかったとき、神や仏に祈る	
・お守りを持ち歩く	
・おみくじをひく	
・占いをする(読む)	

6.3.3. 結果

アマビエの知/不知

アマビエを知っていると答えたのは110人(男27名,女79名,その他4名)であり、全体の34.5%であった。知っていると答えた110人のうち、何かしら行動をした人は8名(7.3%)であり、「アマビエを描いた(飾った)」が大半であった。また、アマビエ以外に新型コロナウイルスの終息を願ったのは2名であった。

アマビエに対する印象

アマビエを知っていると答えた110人に、知ったときの印象を自由記述で尋ねた回答について、ワードクラウドを作成した（Figure 6-3）。

伝統的価値観と日常的宗教行為

伝統的価値観、日常的宗教行為の各得点についてアマビエの知／不知を要因とする1要因分散分析を実施したところ、伝統的価値観にのみ有意差（ $p < .05$ ）が認められた（Table 6-5）。

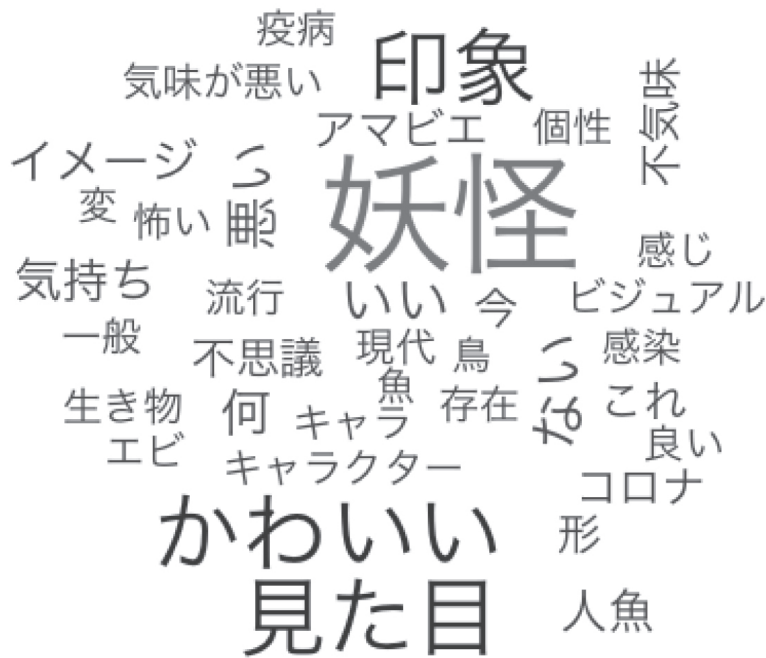


Figure 6-3. アマビエの印象についてのワードクラウド。

Table 6-5

アマビエ知/不知を独立変数、各項目の尺度得点を従属変数とする分散分析の結果

項目	各条件の平均値		F value	η^2
	知っている (Y)	知らない (N)		
伝統的価値観	26.97	28.41	4.10 *	.04
日常的宗教行為	24.17	24.46	0.18	—

注) * $p < .05$

6.3.4. 考察

アマビエの認知度 34.5% は、全国キャラクター調査「ご当地キャラクター編」（日本リサーチセンター, 2019）において第 5 位の「ぐんまちゃん（36%）」とほぼ同程度であり、ご当地キャラクター並みの認知度を有していた。

アマビエを知ったときの印象は、ポジティブ・ネガティブの両面で構成されていた。現代人がキャラクターを求める主な動機に「癒し」が挙げられている（石井, 2009）ことから、ポジティブな印象はアマビエの娯楽としての側面を反映したものだ と解釈できるだろう。「怖い」「気持ち悪い」等のネガティブな側面を併せ持つキャラクターの存在も多数認知されているため、二面性を持つことが娯楽以外の側面であるとは言い切れないが、前述のとおり、妖怪は神にもなり得る可変性に富んだ存在（小松, 2015）であり、両義性があることが述べられてきた。また、妖怪の社会的機能はポジティブな側面だけでは補完しきれない可能性も示されており（高橋, 2019）、本結果とも矛盾しない。

アマビエを知らない群の方が伝統的価値観の得点が高かったことについては、効果量の程度も低く、アマビエの知／不知にはメディアや SNS への接触回数等、その他の要因が介在していることも考えられるため本結果から明確な要因を読み取ることはできなかった。アマビエに対する行動を起こした人とそうでない人との比較に至らなかった点は今後の課題とし、将来的なデータの充実をもって検討したい。

6.4. 考察

本研究の目的は、新型コロナウイルス禍におけるアマビエへの態度を通して、現代における妖怪の社会的機能を探ることであった。アマビエが用いられた意図と普及の状況について新聞記事を用いた検討をおこなった研究1では、新型コロナウイルス感染症が流行した2020年に入って妖怪への関心がとりわけアマビエとその疫病退散の伝承に集中したこと、アマビエを用いた活動は社会の様々な主体が行っていたことが示された。加えてアマビエに関する記事の各目的群の比較からは、アマビエが現代の妖怪が有するとされている娯楽機能のみならず、疫病の退散を祈願する信仰的な機能や、感染症終息への願いを周囲に伝播し共有する機能を備えている可能性が示された。ただし、アマビエに見出される信仰的な機能が、先行研究が指摘する「不安の緩和」を含むかどうかは、研究1の結果からは明らかではない。この点を解明するためには、アマビエに祈願することと不安の緩和との関係についてのさらなる調査が必要である。

一方、アマビエへの態度と伝統的価値観、日常的宗教行為との関連を調査した研究2では、参加者が大学生であるという限定的なデータながらも、アマビエの認知度の高さと、アマビエが妖怪として認知され、ポジティブ・ネガティブ両面の印象を喚起することが確認された。本結果をもって、アマビエが既存の流行キャラクターと一線を画すとは言い切れないが、妖怪の可変的な性質や両義性のある機能に加え、新型コロナウイルスや疫病との関連をもって短期間で急速に認知されたことを考慮すると、一般的な癒しキャラクターとは多少なりとも異なる機能を持ち得ると捉えても不自然ではないだろう。

超自然的なものの存在を信じる人は、以前と比べ減少していることが近年の調査において指摘されているが、「自然に宿る神」や「人知を超えた力の存在」を信じている人は半数以上であり（NHK放送文化研究所, 2019b）、我々の生活は依然、それらと共にあることが見て取れる。アマビエが多くの人に認知された背景には、このような超自然的なものと共存している風土に、未知の感染症という平時とは異なる状況要因が加わったためと考えられる。そこには、新型コロナウイルス禍のように、自らが統制できない状況において社会や人々が不安やストレスにさらされた際に持ち上がる妖怪の複層的な機能、すなわち娯楽と信仰の対象としての機能が、人々に束の間の安心を取り戻すという構図が浮かび上がってくる。娯楽の側面が強調されてきた現代の妖怪だが、超自然的な力を持つものとして尊崇と畏れの対象である面が潜在的に保持され

てきた可能性が示されたのではないだろうか。これは、超自然的なものに対する行動が個人の特性より置かれた状況によって大きく影響される（Norenzayan, 2013 藤井・松島・荒川訳 2022）という近年の研究における指摘とも整合する。

本研究は速報性を重視したため収集したデータに限りがあり、研究上のすべての問いに答えられたわけではない。しかしながら本研究は、統制不可能な出来事との遭遇という状況において、不安を緩和するために超自然的なものに説明を求めるという心的過程の端緒を示す結果とも言え、今後の研究を進める上で新たな手がかりとなるだろう。今後は妖怪の社会的機能について、個人特性だけでなく、状況要因も踏まえたさらなる研究が期待される。

7. 研究 2 伝統的価値観および

日常的宗教行為尺度の構成

7.1. 目的

本研究では、現代の人々において、日本の「伝統的価値観」と「認識」されているものの考え方、感じ方を整理し、それらを測定する尺度を構成する。「伝統的価値観」はいつの時代からのものを指し示すか、本当にそれは古来の日本の伝統なのかということの問題にすると、歴史的にも民俗学的にも論争のつきない問題となり得る。そこで、本研究では予備調査において取り出すことのできた考えのうち、宗教的観念を基盤とした自分自身の行動指針、行動規範となり得るものについて焦点をあてることとした。

日本人の宗教心を扱った代表的な業績として、前述の金児（1997）、西脇（2004）が挙げられる。金児（1997）は、向宗教性、加護観念、靈魂観念という3つの宗教的志向性を提唱し、常識的に認識される意味での宗教を表す「向宗教性」に対して、必ずしも教団に属し、宗教儀式を行うという宗教的態度ではなく、広く習俗的にお参りに行くなどの日常的行為の中に入り込んでいる宗教的要素に着目した。そしてそれらを加護観念 = オカゲ、靈魂観念 = タタリという二面性で表現している。西脇（2004）は、人々の持つ自然観に着目し、そこから日本人の隠された宗教性を見出すことを試みた。従来のような神仏観念や宗教への態度を問う意識調査では宗教意識の低さが浮き彫りになるだけであることを踏まえ、それらとは別に人々の持つ自然観を宗教性の一指標として用いることを実践した。その結果、宗教意識尺度を構成するうちの1因子が宗教的自然観であることが確認され、それが現代日本の宗教文化において重要な宗教性の一指標であると結論づけている。本研究では、両者の視点を継承しつつ、近年、感情研究などにおいても強調される新たな捉え方にも射程を広げ、宗教的観念に基づいた伝統的価値観について、現代社会向けに更新する試みに取り組む。具体的には、オカゲやタタリ、死生観、宗教的施設（寺社）の尊重などの他、自然に対する畏敬の念も加え、総合的な宗教心を補足する尺度を作成することにする。

また、これら伝統的価値観が具体的な日常的宗教行為（おみくじをひくなど）といかに関わるかも探索する。伝統的価値であれば、伝統的な宗教とも関わりが深い可能性も推察される。ただ、日本の宗教は複雑であるため、どれくらいの部分が神道や仏

教や儒教に影響されているのか不分明であり、なおかつそれが個人にどれだけ意識されているかも問うのが難しい。そこで、合わせて日常的宗教行為尺度の作成を試み、両尺度間の関連性を検証する。

宗教心という捉え方は自分自身が宗教心を持ち合わせているという特段の意識もなく、また特定の教団に加入して明示的な宗教活動を行うわけではない人々の心に焦点をあてるものである。たとえば金児(1997)では、神社に参詣している人にインタビューすると「宗教とか信仰とかに関係していると思われることは何も行っていない」との回答が42%であったという。自身は参詣していてもそれを宗教行為とは捉えず、日常的慣習の一環と見ている。福島(2011)においても大学生へのインタビュー調査によって、宗教と自覚されない状態で神仏に祈願していることが指摘されている。

本論文では、自身は伝統的習慣に沿っているだけと考える行為や季節の行事への関わりも含み、そうした習慣を重んじる態度そのものに素朴な宗教心が含まれていると捉える。ここでの素朴な宗教心とは、「当人もそれを宗教であるとは意識しないが、日常の行為の指針として信じている考え方や信念」と定義する。

宗教的意識調査(NHK放送文化研究所, 2019b)の結果では、「人間には、自分の力ではどうすることもできない運命というものがある」について52.6%の同意があることなどが示されている。こうしたいわば「意味をもつ大きな力」についての信念は、社会行動を説明する変数として見られており、Bastian, Vaclair, Loughnan, Bain, Ashokkumar, Becker et al. (2019)は、科学的理解を越えた超常的な力が現実社会に災害を引き起こしたり、人に罰を与えたりする考えを「生氣論」と概念化した。そして「善であれ悪であれ、自然界の事象を左右する何らかの力の存在」を信じることを「道徳的生氣論(moral vitalism)」と名付け、28か国の調査から感染症が深刻に拡大した歴史を有する地域の方がこうした道徳的生氣論を信じる傾向が強いことを示した。

これまで宗教心理学の研究では、宗教を信じることのウェルビーイングや自己実現、利他行動、援助行動などとの関連が扱われることが多く(金児, 2011)、超常的な力が災害などのネガティブな事象を引き起こす側面や、それを回避する力については、とりあげられることが少なかった。しかし、信仰することの原因や効果として2つの事象があると考えられる。ひとつには、ポジティブな結果を得ることで、天国に行ける、浄土に行ける、御利益があるといったことである。第2に、ネガティブなことが起こらないようにする側面が指摘できるであろう。家内安全、交通安全などのお守りは「悪

いことが起こらないようにする」お守りである。厄払いといった直接的なものも見られるが、願い、祈ることで身近に悪いことが起こらないように守ってもらうという効果があるのだろう。ネガティブな事象の到来を回避することは安心につながる。これらの二側面を金児（1997）は「オカゲ」と「タタリ」として概念化している。

そこで、こうした超常的な力への信念が含まれることから、伝統的価値観尺度の妥当性の検証には、日本における自然観に焦点をあてたアニミズム尺度（池内, 2010）と、人智を超えた超常的現象への態度に焦点をあてた不思議現象に対する態度（小城・川上・坂田, 2008）との関連を検討することにする。超常現象への関心や嗜好性、およびその力への畏怖や怖れなどと宗教心は関連を有すると予測される。

本研究の目的は、日本に見られる宗教心を含む伝統的な価値観を整理して伝統的価値観尺度を構成し、妥当性の検証をすることである。研究 2-1 では、伝統的価値観尺度および日常的宗教行為尺度を作成する。妥当性の検証には、日本における日常的宗教心および超常現象（不思議現象）の研究として尺度が確立しているアニミズム尺度（池内, 2010）および不思議現象態度尺度 短縮版（坂田・川上・小城, 2012）を用いる。研究 2-2 では再テスト信頼性を確認することとする。

7.2. 研究 2-1 伝統的価値観尺度および

日常的宗教行為尺度の作成と妥当性の検証

7.2.1. 目的

研究 2-1 では、伝統的価値観尺度と日常的宗教行為尺度を構成し、因子構造の検討と、妥当性の検証を行う。西脇（2004）が取り上げた自然観の他に、さらに伝統行事や習俗に対する態度を含めた。これらの項目群に対する探索的因子分析によって、価値観相互の関係やまとまりについて検討を行う。同時に伝統的価値観と関連する日常的宗教行為についても、どういった要素が人々のなかで心的なまとまりになっているか調べるために探索的因子分析を行う。

妥当性の検証としては、自然観や精神的要素が含まれる池内（2010）のアニミズム尺度、および超常現象への態度を含む不思議現象態度尺度 短縮版（坂田・川上・小城，2012）を用いる。科学的には不合理な面のある信念として宗教心を捉えるため、それらは霊やあの世（死後の世界）についての態度測定を含む不思議現象態度と関連があるものと予測される。とりわけそうした非科学的なことがらに関心や嗜好を向ける傾向と伝統的価値観は正の関連をもつものと予測する。

7.2.2. 方法

調査参加者

クラウドソーシングサービスを用いて会員登録している 749 名から Qualtrics で作成した Web 調査によって回答を得ると共に、授業を用いて大学生 149 名から Web 調査で回答を得た。以上を合わせて、項目をよく読んできちんとした回答をしているかチェックする項目を 3 問用意し、2 問の警告の上、3 問目に正しく反応しなかった 92 名および、回答がすべて 1 や 7 であったストレートアンサーの 9 名を除き、648 名（女性 430 名、男性 218 名）を分析に用いた。平均年齢は 33.94 歳（ $SD = 12.37$ ）であった。

質問紙の構成

- 伝統的価値観（26 項目）

伝統的価値観尺度の項目の作成にあたっては、予備調査を行った。ふだん大切にしている行動や考えで、昔から伝統的に見られたと思うものをいくつか挙げる自由記述の調査を宗教という語は前面に出さずに行い、146 名から得た。心理学を専門とする研

究者（大学教員）と心理学系の大学院生と5名で協議して、このなかから宗教心に関わる項目数を30項目程度に抑えるようにピックアップして作成し、さらに宗教的意識調査（NHK放送文化研究所, 2019b）も参照しつつ、精選した26項目を原案の尺度項目とした。各項目について「1：まったくそう思わない」－「7：非常にそう思う」の7点尺度によって回答を得た。

- 日常的宗教行為（20項目）

日本人の宗教的意識や日常生活における宗教的行動を尋ねる調査（第一生命経済研究所, 2006; NHK放送文化研究所, 2019a; 2019b）より、心理学を専門とする研究者（大学教員）と心理学系の大学院生と5名で協議して、全国的に行われていると考えられる20項目を抜粋した。「1：まったくしない」－「6：非常によくする」の6点尺度によって回答を得た。

- アニミズム（11項目）

池内（2010）による尺度を用い、「1：まったくあてはまらない」－「7：非常にあてはまる」の7点尺度によって回答を得た。

- 不思議現象に対する態度（15項目）

坂田・川上・小城（2012）による不思議現象に対する態度尺度（APPIe）短縮版から負荷量.70以上の15項目を用いて「1：まったくあてはまらない」－「7：非常にあてはまる」の7点尺度によって回答を得た。

手続き

調査はQualtricsを用い、各尺度内における項目の回答順序はランダム化した。Satisficeとしての回答を抑制するために（三浦・小林, 2015）、教示、項目文を読んで回答しているか、3度のチェック項目を設けた。1, 2度目の指示に従わない回答に対しては警告教示を表示し、3度目の回答に正しく反応しなかった者はデータから削除した。

統計分析

統計ソフトウェアR version 4.1.2を用い、因子分析および相関分析を実施した。

7.2.3. 結果

伝統的価値観尺度の因子的検討

最尤法・独立クラスタ回転による探索的因子分析を行った。固有値と因子の解釈可能性に基づき、因子負荷量 .40 以下であった 6 項目を除外し、4 因子解を採用した (Table 7-1)。Table 7-1 には各項目の平均値と *SD* も併せて示す。

第 1 因子は、自然への尊崇、環境への畏れとしての配慮を含むものであることから、「自然崇拜」($\omega = .81$) とした。第 2 因子は、死後の世界や地獄、極楽の承認や輪廻転生など死生観にまつわる項目群が見られ、「死生観」($\omega = .85$) と命名した。第 3 因子には、「死者の供養をしないとたたりがあると思う」「神や仏をそまつにするとばちがあたる」「お墓参りをしないとよくないことが起こる」など生気論的な考え方のうち、否定的な力の効果といえる祟りやばちを怖れる項目の負荷量が高かったため、「祟りとばち」($\omega = .81$) と命名した。なお、質問項目の記述では読みもわかりやすいように「たたり」とひらがなにしたが、史学や文化人類学において一般に「祟り」の字を用いていることから因子名としては「祟り」を採用することとした。第 4 因子は、しきたり、年中行事、宗教的行事に対する親和性と関係しており、宗教的信念が固くあるというより習俗化した伝統行事に対して違和感を抱くかどうかの態度を表しているものと考え、「習俗」($\omega = .66$) と命名した。下位尺度の内的一貫性に関わる信頼性は、 $\omega = .66-.85$ であり、利用に耐えると判断した。

日常的宗教行為尺度の因子的検討

最尤法・独立クラスタ回転による探索的因子分析を行った。固有値と因子の解釈可能性に基づき、因子負荷量 .40 以下であった 6 項目を除外し、4 因子解を採用した (Table 7-2)。Table 7-2 には各項目の平均値と *SD* も併せて示す。

第 1 因子は、寺社への参拝やお参り、お祈りなどの宗教行為に関わり、お守りをもつなど加護、おかげに関わるものと考えられたため、「神仏加護」($\omega = .89$) と命名した。第 2 因子は、占いに関する項目群であり、「占い嗜好」($\omega = .80$) と命名した。第 3 因子は、二十四節気や五節句に絡む季節の行事に関わる項目群の負荷量が高く、「季節の行事」($\omega = .74$) と命名した。第 4 因子は、縁起のよい物や魔除けを身の回りに置くという点で、「縁起・魔よけ」($\omega = .81$) とした。下位尺度の信頼性は $\omega = .74-.89$ であり、一定の信頼性が示されたと考える (Table 7-2)。

Table 7-1
伝統的価値観尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	M	SD
F1：自然崇拜 $\omega = .81$						
5.自然の偉大さに尊崇の念をもっている	.783	-.101	-.235	-.157	5.33	1.34
6.環境破壊を続けているといつか大自然の怒りをかうのではないかと思う	.647	-.050	.086	.064	5.18	1.56
4.山川草木などに自然の霊が宿っているような気がする	.641	.185	-.059	-.112	4.73	1.63
7.食べ物をそまつにするとすまないことをしたような気持ちになる	.491	-.194	.047	-.037	6.03	1.09
26.虫の知らせ というのはあると思う	.478	.175	.002	-.035	5.17	1.35
18.言葉には発せられた内容どおりの状態を実現する力がある	.477	.107	.060	.118	4.88	1.30
8.ものをそまつにするとばちがあたる	.459	-.038	.295	-.079	5.23	1.31
2.物事はあまり人が力を加えないで自然になるように任せておいた方がうまくいくと思う	.442	-.043	.068	.191	4.36	1.25
17.きれいな言葉遣いを心がけていると心が澄んでよい人になると思う	.423	-.040	.188	.172	5.03	1.45
F2：死生観 $\omega = .85$						
12.死後の世界はあると思う	-.031	.916	-.005	.075	4.45	1.76
13.地獄、極楽というのは迷信である [R]	.110	-.722	.011	.201	4.19	1.48
10.生前の行為の良し悪しによって死後の世界での扱いが決まる	-.007	.694	.218	.116	4.06	1.73
9.人は死んでも繰り返し生まれ変わるものだ	.148	.646	-.015	.061	4.04	1.73
F3：崇りとばち $\omega = .81$						
11.死者の供養をしないとたたりがあると思う	.005	.061	.812	-.033	4.40	1.63
22.先祖のお墓参りを全くしないとその家によくないことが起こるように思う	.073	.000	.688	-.051	3.99	1.65
24.北まくらは何となく気になる	.014	.034	.481	-.052	3.69	1.97
16.神や仏をそまつにするとばちがあたる	.243	.093	.414	-.180	5.13	1.42
F4：習俗 $\omega = .66$						
21.昔からのしきたりや年中行事には抵抗を感じる [R]	.250	.036	-.175	.750	3.50	1.45
20.針供養などの昔からの宗教的行事は無意味な風俗である [R]	-.049	-.112	.158	.606	3.55	1.41
19.お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感じる	.102	-.131	.319	-.507	4.42	1.59
1.人の成功や失敗、幸福と不幸はすべて天が決めたものである						
3.人間には自分の力ではどうすることもできない運命というものがある						
14.水子供養はするべきである						
15.神や仏に願いをすると何となくかなえてくれそうな気がする						
23.家を新築することがあったら方角の吉兆にも気をつけたいと思う						
25.一心に念じれば願いが通じることはあると思う						
	因子間相関	F1	F2	F3	F4	
	F1	—	.636	.567	-.473	
	F2	—	—	.649	-.383	
	F3	—	—	—	-.312	

注) 最尤法・独立クラスター回転, [R]は逆転項目

Table 7-2
 日常的宗教行為尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	M	SD
F1：神仏の加護						
8.身の安全や商売繁盛・入試合格などを祈願しに行く	.857	.052	-.080	-.052	3.79	1.50
15.初詣をする	.810	-.099	.008	-.164	4.41	1.61
1.神社にお参りする	.786	-.076	-.032	.086	3.78	1.31
10.おみくじをひく	.684	.237	-.039	-.252	3.96	1.46
2.お寺にお参りする	.621	.011	.049	.054	3.39	1.38
6.お守りを身につける	.586	-.004	-.080	.218	3.62	1.62
14.お正月飾りをする	.519	-.119	.271	.020	3.82	1.74
9.仏壇や神棚に花を供えたり手を合わせたりする	.479	-.075	.119	.117	3.71	1.45
3.墓参りをする	.462	-.034	.126	.030	3.77	1.30
7.困難な問題にぶつかったとき神や仏に祈る	.423	.094	-.103	.274	3.32	1.42
18.七夕に願いごとをする	.400	.163	.174	-.010	2.86	1.48
F2：占い嗜好						
12.占いをする	-.038	.902	.042	-.031	2.55	1.42
11.占いをしてもらう	.026	.643	.007	.128	2.02	1.22
13.雑誌などの占いを読む	.137	.616	-.041	-.013	3.12	1.58
F3：季節の行事						
19.冬至には柚子湯に入る	-.001	.030	.776	-.043	2.79	1.78
17.端午の節句には菖蒲湯に入る	-.049	.040	.723	.085	1.91	1.43
16.節分に豆まきをする	.416	-.063	.420	-.040	3.41	1.76
F4：縁起・魔よけ						
4.魔よけになるものを自分の身のまわりにおく	.016	.080	.013	.787	2.47	1.37
5.縁起のよい物を自分の身のまわりにおく	.218	-.007	-.011	.694	3.00	1.35
20.おおみそかに年越しそばを食べる						
因子間相関						
	F1	F2	F3	F4		
	F1	—	.472	.430	.542	
	F2	—	—	.139	.501	
	F3	—	—	—	.323	

注) 最尤法・独立クラスター回転

妥当性の検討

妥当性の検証のため、伝統的価値観および日常的宗教行為と、アニミズム尺度と不思議現象態度尺度との積率相関係数を算出した (Table 7-3)。アニミズム尺度と不思議現象態度尺度については原典に従って確認的因子分析をおこない、アニミズム尺度 (GFI = .949, RMSEA = .074, SRMR = .044)、不思議現象態度尺度 (GFI = .948, RMSEA = .062, SRMR = .030) とともに、適合度は良好であったため、それらを採用した。各下位尺度の基本統計量を Table 7-4 に示す。想定通り、伝統的価値観および日常的宗教行為の各下位尺度とアニミズム尺度の自然の神格化とには有意な関連を見出すことができた。所有物の擬人化などといった科学的観点から見ると非合理的な信念も伝統的価値観として見出した因子群と有意な関連性を確認することができ、所有物の分身的捉え方についても伝統的価値観とおおむね正相関のあることが判明した。

さらに、不思議現象態度尺度との相関を見ると、すべての因子がスピリチュアリティ信奉を中心とする不思議現象に対して関心を向ける好意的態度と有意な正相関を示していた。伝統的価値観の高い者は、祈り、願うことを意味のある行為であるとの考えに親和的であることが示された。これらの相関関係から、伝統的価値観の下位尺度についての妥当性は一定程度確認できたと考える。下位尺度間のより詳細な区別や弁別性についてはさらに検証を重ねて、より明らかにしていく必要があるだろう。

日常的宗教行為との関連

本論文での「伝統的価値観」は回答者自身も自覚していない宗教心とつながっているものと考えていた。そうした宗教心は日常的な行動の中においても、宗教的行為と関連をもつものと考えられる。伝統的価値観と日常的宗教行為との間の相関係数から (Table 7-3)、その関連は確認できるか、どういった行為との関連が深いかは探索的な課題であった。結果として、伝統的価値観はおおむね「神仏加護」と「縁起・魔よけ」とはより関連を持つ傾向にあり、「占い嗜好」や「季節の行事」、特に「季節の行事」における関連性は相対的に弱い結果が得られた。季節の行事はその家庭での習慣的な行事や子どもを楽ませる娯楽的行事となっている側面があり、お墓参りなどのより宗教的性質が明瞭にある行為と伝統的価値観 (特に祟りとばち、死生観、習俗) とは関連が大きいことが示された。このことから祟りとばち、死生観、習俗は比較的宗教心と関わる伝統的価値観であることが明らかになった。

Table 7-3
下位尺度間の相関

	神仏の加護	占い	季節の行事	縁起魔よけ	擬人化	神格化	分身化	S信奉	娯乐的享受	懐疑	霊体験	占い呪術	恐怖
自然崇拜	.411 ***	.283 ***	.165 **	.420 ***	.531 ***	.731 ***	.618 ***	.637 ***	.166 **	-.282 ***	.239 ***	.369 ***	.260 ***
死生観	.459 ***	.352 ***	.157 **	.384 ***	.380 ***	.575 ***	.559 ***	.840 ***	.254 ***	-.477 ***	.224 ***	.492 ***	.245 ***
祟りとばち	.577 ***	.338 ***	.229 ***	.409 ***	.408 ***	.586 ***	.553 ***	.647 ***	.182 ***	-.353 ***	.185 ***	.463 ***	.351 ***
習俗	.487 ***	.217 ***	.215 ***	.320 ***	.348 ***	.429 ***	.394 ***	.412 ***	.181 ***	-.206 ***	.076	.204 ***	.112
神仏の加護		.467 ***	.512 ***	.579 ***	.426 ***	.441 ***	.423 ***	.522 ***	.227 ***	-.261 ***	.152 **	.431 ***	.259 ***
占い嗜好			.192 ***	.489 ***	.301 ***	.327 ***	.310 ***	.432 ***	.286 ***	-.256 ***	.198 ***	.620 ***	.248 ***
季節の行事				.345 ***	.186 ***	.178 ***	.187 ***	.190 ***	.083	-.128	.141 *	.150 *	.160 **
縁起魔よけ					.421 ***	.470 ***	.426 ***	.499 ***	.176 **	-.282 ***	.283 ***	.434 ***	.287 ***
所有物の擬人化						.534 ***	.612 ***	.457 ***	.182 ***	-.174 **	.181 ***	.351 ***	.195 ***
自然物の神格化							.689 ***	.685 ***	.212 ***	-.371 ***	.253 ***	.417 ***	.250 ***
所有者の分身化								.626 ***	.189 ***	-.315 ***	.227 ***	.437 ***	.291 ***
スピリチュアリティ信奉									.291 ***	-.503 ***	.348 ***	.539 ***	.275 ***
娯乐的享受										-.128	.078	.291 ***	.118
懐疑											-.181 ***	-.325 ***	-.148 *
霊体験												.197 ***	.113
占い呪術嗜好性													.351 ***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 7-4
下位尺度の基本統計量

		<i>M</i>	<i>SD</i>	ω
伝統的価値観	自然崇拜	5.10	0.86	.81
	死生観	4.09	1.39	.85
	祟りとばち	4.30	1.32	.81
	習俗	4.46	1.14	.66
日常的宗教行為	神仏の加護	3.67	1.01	.89
	占い嗜好	2.56	1.18	.80
	季節の行事	2.70	1.33	.74
	縁起魔よけ	2.74	1.25	.81
アニミズム	自然物の神格化	4.39	1.53	.89
	所有者の分身化	4.53	1.35	.81
	所有物の擬人化	4.11	1.27	.82
不思議現象	スピリチュアリティ信奉	4.28	1.48	.90
	占い・呪術嗜好性	3.34	1.42	.76
	懐疑	4.63	1.36	.82
	娯楽的享受	4.50	1.64	.90
	恐怖	3.13	1.32	.59
	霊体験	2.16	1.52	.80

7.2.4. 考察

伝統的価値観尺度は「自然崇拜」, 「死生観」, 「祟りとばち」, 「習俗」の4因子, 日常的宗教行為尺度は「神仏加護」, 「占い嗜好」, 「季節の行事」, 「縁起・魔よけ」の4因子で構成されていた。内的信頼性は各尺度ともに $\omega = .66-.89$ であり, 妥当性についてはアニミズム尺度と不思議現象態度尺度との相関関係から, それぞれ一定程度確認できたと考えられる。基本統計量を観察すると, 中点の4点近辺に平均値が置かれ, 標準偏差が1程度で分布し, 現代日本において有効な個人差変数として検討を進めていくことができる可能性が示されたと考える。

一見多様な伝統的価値観も, 整理すれば, いくつかの要素にまとめられ, 具体的に測定可能な形で示すことはできたと考えられる。

7.3. 研究 2-2 再テスト信頼性の検証

7.3.1. 目的

本研究では、研究 2-1 で構成した伝統的価値観尺度と日常的宗教行為尺度について、再テスト信頼性を検討する。研究 2-1 で用いたデータのうち、授業を利用して大学生から取得したものについて、4 週間後に 2 回目の調査を行った。

7.3.2. 方法

調査参加者

都内の私立大学生に調査を依頼し、すべての項目の回答を完遂した者は 152 名であった。問題文をきちんと読んでいるかの確認項目に正しく回答しなかった 5 名と、1 回目の調査に不参加であった 5 名を除外し、分析には 142 名（女性 93 名、男性 49 名）、平均年齢 18.55 歳（ $SD = 0.87$ ）のデータを用いた。

手続き

1 回目調査と同じ授業において 4 週間後に、伝統的価値観（26 項目）および日常的宗教行為（20 項目）の項目のみを尋ねる Web 調査を実施した。調査は Qualtrics を用い、各尺度内における項目の回答順序はランダム化した。Satisfice としての回答を抑制するために（三浦・小林, 2015）、教示、項目文を読んで回答しているか、3 度のチェック項目を設けた。1, 2 度目の指示に従わない回答に対しては警告教示を表示し、3 度目の回答に正しく反応しなかった者はデータから削除した。

統計分析

統計ソフトウェア R version 4.1.2 を用い、相関分析を実施した。

7.3.3. 結果と考察

1 回目と 2 回目の調査における下位尺度間の積率相関係数を算出した結果を以下に報告する。伝統的価値観では、自然崇拜 $r = .761$ 、死生観 $r = .796$ 、祟りとばち $r = .863$ 、習俗 $r = .743$ 、日常的宗教行為では、神仏 $r = .898$ 、占い施行 $r = .771$ 、季節の行事 $r = .919$ 、縁起・魔よけ $r = .747$ であった ($p < .001$)。いずれも .70 以上の相関係数が得られ、測定にはある程度の時間的安定性があるものと評価できた。

7.4. 考察

本研究では、日本における伝統的価値観について整理を行い、尺度化した。オカゲとタタリ（金児, 1997）、宗教的自然観（西脇, 2004）などの視点を継承しつつ、近年、感情研究などにおいても強調される新たな捉え方にも射程を広げ、宗教的観念に基づいた伝統的価値観について、現代社会向けに更新する試みに取り組んだ。また、伝統的価値観であれば、伝統的な宗教とも関わりが深いと推測されることから、日本における複雑な宗教性を反映しているであろう日常生活に埋没している宗教的行為との関連についても検討することとし、日常的宗教行為尺度の作成と両尺度間の関連性を検証した。

こうした見えない力や関係を信じる信念など一見非合理的な信念は、対象が非科学的だというだけで、研究自体も非科学的であるという誤った印象を与えがちである。しかし、主観的信念を科学的に研究するには、信念内容がどういったものであろうと、それらを整理することは可能であり、測定項目を作成して実際に調査を行うと、意外に多くの人々がそれらの言説を承認している実態が見える。そして、これらの信念は日常的宗教行為との関連も強かった。近年の宗教意識調査（NHK 放送文化研究所, 2019b）によると、信仰心があるかどうかを尋ねた結果、あるは 26%、ないは 52%であったと報告されている。先行研究で指摘されてきたように、日本固有の宗教性は表出されにくく、自覚されにくいという特徴を持つ。宗教意識調査における「信仰心」が金児（1997）のいう「向宗教性（＝常識的に認識される意味での宗教）」を表すとするならば、本研究ではそれ以外の隠れた宗教性や素朴な宗教心といったものをある程度汲み取ることができたのではないだろうか。

この尺度によって日本の伝統的価値観がもれなく扱えているものとはいえないが、表出されにくく、自覚されにくいという日本固有の宗教性の特徴や、それらを適切に汲み取る重要性を考慮した上で、隠れた素朴な宗教心を描き出すべく、具体的に測定可能な形で示すことはできた。今後は内容を精錬させつつ、こうした価値観とその相互関連、社会的行動への結びつきなども含め、さらなる検討が求められる。

8. 研究3 伝統的価値観および

日常的宗教行為尺度の構成（改訂版）

8.1. 目的

本研究では、研究2で作成した尺度の改訂版を作成することを目的とする。研究2の尺度は次の2点において、改善すべき点があると考えられるからである。まず、質問文の表現についての問題が挙げられる。先行研究で指摘されているとおり、日本人の宗教性は表出されにくく、自覚されにくいという特徴を持ち、それらを適切に汲み取る工夫が必要である（e.g., 林, 1979; 金児, 1995; 西脇, 2004）。研究2では先行研究の視点を継承しつつ、近年の感情研究などにおいても強調される生気論といった新たな捉え方にも射程を広げ、宗教的観念に基づいた伝統的価値観について、現代社会向けに更新することを試みた。研究2で取り扱った各項目の平均値は、おおむね3点後半～5点前半（7件法）であり、「神や仏」や「靈魂（たましい）」に肯定的な回答を示した人が7割を越えている（朴・吉野, 2015）といった近年の調査結果を勘案すると若干低いように感じられる。その要因として、一部の古風な表現、たとえば「尊崇の念」や「極楽」等について質問の意図が正しく伝わらなかった可能性がある。また、「ばちがあたる」「たたりがある」等の断定的表現が多かったことも、「素朴な気持」（林, 1979）へのアプローチという点では疑問が残る。そこで、古風な表現を現代日常用語に置き換え、断定的表現だった箇所は「のような気がする」や「と思う」という表現にするなどの工夫を加え、参加者がより直感的に回答しやすく、表出しにくい部分をすくい取れるような質問文の提示を目指すこととする。

もうひとつの問題点として、概念の偏りが挙げられる。研究2で作成した尺度は、「自然崇拜」、「死生観」、「祟りとばち」、「習俗」の4因子で構成されていた。項目をみると、「食べ物をそまつにするばちがあたる」「死者を供養しないとたたりがある」といった、願い、祈ることで身に悪いことが起こらないように守ってもらうというネガティブな事象の到来を回避する効果に関する項目が大多数を占めていた。しかしながら、日本人の宗教心の特徴として、オカゲとタタリの両義性や、人々の「富と健康と平和」への希求に基づく現世利益信仰が挙げられている（金児, 1997）ことから、願い、祈ることでポジティブな結果を得るといった肯定的な側面を扱う必要性が感じられる。そこで、肯定的な側面を反映するものとして、良いことの兆しやご利益に関す

る項目をいくつか追加し、検討することとした。

加えて、伝統的価値観尺度の改訂に伴い、日常的宗教行為尺度についても不足していると思われる項目を加えた改訂版を作成することとする。

8.2. 研究3-1 伝統的価値観尺度および

日常的宗教行為尺度の再構成と妥当性の検証

8.2.1. 目的

本研究では、伝統的価値観尺度と日常的宗教行為尺度を再構成し、因子構造の検討と、妥当性の検証を行う。妥当性の検証には、研究2と同様にアニミズム尺度（池内, 2010）、および不思議現象に対する態度尺度短縮版（坂田・川上・小城, 2012）を用いる。

8.2.2. 方法

調査参加者

クラウドソーシングサービスを用いて会員登録している625名からQualtricsで作成したWeb調査によって回答を得た。項目をよく読んできちんとした回答をしているかチェックする項目を3問用意し、2問の警告の上、3問目に正しく反応しなかった113名および、回答時間が5分以下の13名と団体での回答2名、回答がすべて1や7であったストレートアンサーの11名を除き、486名（女性322名、男性162名、その他2名）を分析に用いた。平均年齢は39.56歳（ $SD = 10.73$ ）であった。

質問紙の構成

- 伝統的価値観（53項目）

伝統的価値観尺度の項目の作成にあたっては研究2の結果をもとに、心理学を専門とする研究者（大学教員）と心理学系の大学院生と5名で協議して、表現の改訂と項目の精査をおこなった。精選した53項目について「1:まったくそう思わない」－「7:非常にそう思う」の7点尺度によって回答を得た。

- 日常的宗教行為（30項目）

研究2で用いた項目には「季節の行事」、「縁起・魔よけ」の項目が少なかったため、日本人の宗教的意識や日常生活における宗教的行動を尋ねる調査（第一生命経済研究所, 2006; NHK放送文化研究所, 2019a; 2019b）より、全国的に行われていると考えられる項目について、伝統的価値観と同様に協議した。新しく10項目を追加し、精選した30項目について「1:まったくしない」－「6:非常によくする」の6点尺度によって回答を得た。

- アニミズム (11 項目)

池内 (2010) による尺度を用い、「1:まったくあてはまらない」－「7:非常にあてはまる」の 7 点尺度によって回答を得た。

- 不思議現象に対する態度 (15 項目)

坂田・川上・小城 (2012) による不思議現象に対する態度尺度 (APPlE) 短縮版から負荷量 .70 以上の 15 項目を用いて「1:まったくあてはまらない」－「7:非常にあてはまる」の 7 点尺度によって回答を得た。

手続き

調査は Qualtrics を用い、各尺度内における項目の回答順序はランダムイズした。Satisfice としての回答を抑制するために (三浦・小林, 2015), 教示, 項目文を読んで回答しているか, 3 度のチェック項目を設けた。1, 2 度目の指示に従わない回答に対しては警告教示を表示し, 3 度目の回答に正しく反応しなかった者はデータから削除した。

統計分析

統計ソフトウェア R version 4.1.2 を用い、因子分析および相関分析を実施した。

8.2.3. 結果

伝統的価値観尺度の因子的検討

最尤法・独立クラスタ回転による探索的因子分析を行った。固有値と因子の解釈可能性に基づき, 因子負荷量 .40 以下であった 6 項目を除外し, 5 因子解を採用した (Table 8-1)。Table 8-1 には各項目の平均値と *SD* も併せて示す。項目 9, 43, 53, 48 については, 因子負荷量が .40 を下回っており, 除外を視野に入れた検討が必要であるが, サンプル数が 500 未満であることや下位尺度を構成する概念への寄与などから, 本研究ではこれらの項目を含めたまま使用し, 今後のデータの充実をもって改めて検討することとした。

第 1 因子は, 「自然は人間が統制できないものだと思う」, 「良いことも悪いことも自分のしたことはすべて自分に返ってくるような気がする」など自然への畏れや人智の及ばない力の存在を含むものであることから, 「大いなる力」($\omega = .88$) とした。第 2 因子には, 「死者の供養をしないとたたりがあると思う」, 「神や仏をそまつにするとば

ちがあたると思う」など生氣論的な考え方のうち、否定的な力の効果といえる祟りやばちを怖れる項目の負荷量が高かったため、旧尺度と同様に「祟りとばち」($\omega = .89$)と命名した。第3因子には、「四つ葉のクローバーが見つかるの良いことがありそうな気がする」、「流れ星に願いごとをすると叶うと思う」など第2因子と反対に生氣論的な考え方の肯定的な側面を表している項目を含んでおり、「吉兆」($\omega = .88$)と命名した。第4因子、第5因子は、旧尺度とほぼ同様の項目で構成されていたため、因子名も引き続き「習俗」($\omega = .89$)、「死生観」($\omega = .80$)とした。下位尺度の内的一貫性に関わる信頼性は、 $\omega = .80-89$ であり、旧尺度と比較して多少向上した。因子間相関では、「吉兆」、「大いなる力」と「祟りとばち」との間に高い相関がみられた。オカゲとタタリ(金児, 1997)のオカゲにあたる「吉兆」、「大いなる力」と、タタリにあたる「祟りとばち」が強く関連していることは、日本人の宗教性にみられる両義性があらためて示された結果とも言える。

日常的宗教行為尺度の因子的検討

最尤法・独立クラスタ回転による探索的因子分析を行った。固有値と因子の解釈可能性に基づき、因子負荷量 .40 以下であった9項目を除外し、4因子解を採用した (Table 8-2)。Table 8-2には各項目の平均値とSDも併せて示す。

多少の因子間移動はあったものの、旧尺度とおおむね同様の因子構造であったため、因子名も旧尺度と同様のものを用いることとした。第1因子は、二十四節気や五節句に絡む季節の行事に関わる項目で構成されており、「季節の行事」($\omega = .83$)と命名した。第2因子は、寺社への参拝やお参り、お祈りなどの宗教行為に関わる加護に関わるものと考えられたため、「神仏加護」($\omega = .84$)と命名した。第3因子は、占いに関する項目群であり、「占い嗜好」($\omega = .80$)と命名した。第4因子は、縁起のよい物や魔除けを身の回りに置くという点で、「縁起・魔よけ」($\omega = .84$)とした。下位尺度の信頼性は $\omega = .83-.85$ であり、一定の信頼性が示されたと考えられる。

Table 8-1
伝統的価値観尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5	M	SD
F1: 大いなる力 $\omega = .88$							
11.自然には人間が手を加えない方がよいと思う	.657	-.025	-.211	-.063	.017	5.04	1.22
28.良いことも悪いことも自分のしたことはすべて自分に返ってくるような気がする	.656	.108	.035	-.160	-.093	5.48	1.17
2.環境破壊を続けていると 何か大自然の怒りをかうのではないかと思う	.656	.061	-.056	-.001	-.028	5.54	1.41
1.自然の偉大さには神聖なものを感じる	.627	-.104	-.074	.173	.059	5.72	1.25
10.自然は人間が統制できないものだと思う	.621	-.240	-.145	-.016	.036	6.05	1.04
51.世の中には人間が立ち入ってはならない領域があるような気がする	.567	.014	-.191	-.070	.141	5.64	1.15
4.食べ物をそまつにするとすまないことをしたような気持ちになる	.556	-.155	.067	.038	-.153	5.97	1.13
6.言葉には発せられた内容どおりの状態を実現する力があるような気がする	.509	-.095	.285	.081	-.041	4.98	1.30
13.生き物だけでなく自然やものにも魂は宿っているような気がする	.499	.116	-.053	.101	.250	5.26	1.33
7.ものをそまつにするとばちがあたると思う	.489	.281	.101	-.049	-.250	5.38	1.21
5.虫の知らせ というのはあるような気がする	.479	-.058	.094	-.031	.251	5.21	1.34
8.物事はあまり人が力を加えないで自然になるように 任せておいた方がうまくいくと思う	.477	.006	-.057	-.119	.122	4.68	1.22
52.掃除をすると心も浄化されるような気がする	.456	.046	.206	.014	-.132	5.39	1.32
3.山や川などには自然の霊が宿っているような気がする	.452	.025	-.091	.218	.270	5.06	1.51
50.世の中には科学で解明できないことがあると思う	.451	-.011	-.212	.011	.250	5.87	1.11
49.ものごとがスムーズに進まないときは方向性が間違っていると教えられているような気がする	.437	.070	.054	-.194	-.140	4.75	1.30
46.日頃の行いが良いといいことがあるような気がする	.437	.162	.256	-.046	-.149	5.46	1.18
9.きれいな言葉遣いを心がけていると心が澄んでよい人になると思う	.387	.099	.143	.193	-.170	5.30	1.28
48.病気やケガは休息を取る合図だと感じる	.350	-.086	.178	.027	-.099	5.21	1.39
F2: 祟りとばち $\omega = .89$							
23.先祖のお墓参りをしないと悪いことが起きそうな気がする	-.093	.909	-.156	.071	-.103	4.31	1.47
22.死者の供養をしないとたたりがあると思う	-.006	.884	-.071	-.020	-.037	4.63	1.48
25.神や仏をそまつにするとばちがあたると思う	.155	.620	-.045	.090	.031	5.39	1.33
19.この世で悪いことをした人は 死んだら地獄へ落とされると思う	-.076	.602	.181	-.168	.297	4.31	1.57
29.この世に強い思いを残して亡くなった人は成仏できないと思う	-.108	.592	-.024	-.119	.277	4.18	1.52
26.死者の供養など死に関連する行事は きちんと行なっておくと安心だと思う	.140	.592	-.093	.222	-.102	5.54	1.14
27.人の恨みをかうと たたられそうだと思う	.251	.498	-.047	-.091	.007	4.75	1.43
30.事件や事故で人が亡くなった家にはなるべく住みたくないと思う	.057	.491	-.030	-.036	-.004	5.75	1.44
34.厄年には厄払いをしておきたいと思う	-.120	.487	.079	.188	.088	4.61	1.79
24.北まくらは何となく気になる	-.049	.421	.090	-.119	.044	3.67	1.92
43.魔除けになるものを身の周りにおいておくとほっとする	.004	.325	.182	.061	.247	3.94	1.62
53.塩にはお清めの効果があると思う	.018	.312	.260	.118	.216	4.78	1.56
F3: 吉兆 $\omega = .88$							
41.四つ葉のクローバーが見つかるとういことがありそうな気がする	.091	-.034	.766	.015	.015	4.84	1.61
40.虹を見ると良いことがありそうな気がする	.164	-.103	.760	-.058	.017	4.74	1.69
45.流れ星に願いごとをすると叶うと思う	-.031	.025	.735	.022	.111	3.65	1.68
39.茶柱がたつと良いことがありそうな気がする	.015	.045	.677	.018	.072	4.42	1.64
44.時計を見たときゾロ目だと良いことがありそうな気がする	-.070	.042	.586	.008	.135	3.81	1.82
42.縁起の良いものを身の周りにおいておくと良いことがありそうな気がする	.043	.290	.427	.028	.187	4.95	1.37
F4: 習俗 $\omega = .89$							
31.昔からあるしきたりや年中行事は大切にしたいと思う	-.026	.046	.046	.878	-.006	5.00	1.29
35.昔からあるしきたりや年中行事はこれからも伝承していったほうが良いと思う	.033	-.019	.035	.871	-.033	5.08	1.25
32.古くから行われているしきたりや年中行事には必要性を感じない [R]	.011	.039	.045	-.822	-.003	3.30	1.38
33.お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感ずる	.067	.158	-.007	.571	-.089	4.51	1.51
F5: 死生観 $\omega = .80$							
17.死後の世界はあると思う	.044	.233	.135	-.044	.613	4.43	1.70
20.人は死んでも繰り返し生まれ変わるような気がする	.095	.095	.241	-.081	.567	4.26	1.68
18.地獄や天国は想像上のものだと思う [R]	.067	-.288	-.049	-.017	-.472	4.34	1.55
12.苦しいときには神や仏を頼るのも良いと思う							
14.生き物だけでなくすべてのものに神が宿っているような気がする							
15.人の成功や失敗などには自分ではどうすることもできない力が働くことがあると思う							
16.人生には自分ではどうすることもできない運命というものがあると思う							
21.生前 繋がりが深かった人は亡くなってからも見守ってくれている気がする							
47.大事にしていたものがなくなったり壊れたりしたときは自分の身代わりになってくれたのだと感じる							
	因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5	
	F1	-	.610	.515	.510	.376	
	F2	-	-	.614	.537	.386	
	F3	-	-	-	.445	.228	
	F4	-	-	-	-	.177	

注) 最尤法・独立クラスター回転, [R]は逆転項目

Table 8-2
 日常的宗教行為尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	M	SD
F1：季節の行事 $\omega = .83$						
17.冬至に柚子湯に入る	.809	-.132	.051	-.015	2.71	1.73
23.1月7日に七草がゆを食べる	.722	-.131	.047	.038	2.76	1.77
18.端午の節句に菖蒲湯に入る	.666	-.162	-.059	.137	1.84	1.29
25.お彼岸におはぎ、ぼたもちを食べる	.628	-.164	.016	.163	2.76	1.61
21.お正月におせち料理を食べる	.547	.220	.011	-.215	4.55	1.55
22.お正月に雑煮を食べる	.500	.236	.012	-.286	4.99	1.32
7.お正月飾りをする	.471	.239	-.025	.038	3.80	1.71
19.節分に豆まきをする	.463	.275	-.039	.017	3.44	1.72
F2：神仏加護 $\omega = .84$						
2.初詣をする	.114	.769	-.162	.007	4.34	1.53
3.神社にお参りする	.035	.632	-.033	.250	3.89	1.28
4.おみくじをひく	.003	.600	.251	-.118	3.81	1.42
1.身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しに行く	-.019	.560	.017	.339	3.71	1.44
5.お寺にお参りする	.180	.492	-.094	.153	3.52	1.35
F3：占い嗜好 $\omega = .85$						
12.占いをする	.047	-.025	.972	-.075	2.65	1.46
13.占いをしてもらう	-.047	.055	.739	.013	2.15	1.27
14.雑誌などの占いを読む	-.022	-.005	.614	.128	3.12	1.57
15.予定をたてるとき占いのバイオリズムを参考にする	.033	-.045	.547	.271	2.11	1.36
F4：縁起魔よけ $\omega = .84$						
26.魔よけになるものを自分の身のまわりにおく	-.054	.012	.077	.832	2.70	1.41
27.縁起のよい物を自分の身のまわりにおく	-.068	.116	.000	.817	3.21	1.39
10.困難な問題にぶつかったとき神や仏に祈る	.047	.100	.143	.452	3.57	1.43
6.お守りを身につける	-.014	.325	.088	.444	3.48	1.60
8.仏壇や神棚に花を供えたり手を合わせたりする						
9.墓参りをする						
11.七夕に願いごとをする						
16.大切な日取りを決めるとき仏滅を避ける						
20.大晦日に年越しそばを食べる						
24.節分に恵方巻きを食べる						
28.葬儀に参列したあとは塩で清めてから家に入る						
29.数字を選ぶとき4を避ける						
30.入院のお見舞いには鉢植えの花を避ける						
	因子間相関	F1	F2	F3	F4	
	F1	—	.470	.219	.521	
	F2	—	—	.367	.511	
	F3	—	—	—	.464	

注) 最尤法・独立クラスター回転

妥当性の検討

妥当性の検証のため、伝統的価値観および日常的宗教行為と、アニミズム尺度と不思議現象態度尺度との積率相関係数を算出した (Table 8-3)。アニミズム尺度と不思議現象態度尺度については原典に従って確認的因子分析をおこない、アニミズム尺度 (GFI = .944, RMSEA = .076, SRMR = .054)、不思議現象態度尺度 (GFI = .950, RMSEA = .054, SRMR = .033) とともに、適合度は良好であったため、それらを採用した。各下位尺度の基本統計量を Table 8-4 に示す。

研究 2 と同様、伝統的価値観のすべての因子がアニミズム尺度、不思議現象態度尺度の下位尺度と有意な相関を示していた。中でも、「大いなる力」とアニミズム尺度の「自然の神格化」、「死生観」・「祟りとばち」と不思議現象態度尺度の「スピリチュアリティ信奉」とには高い正の相関が見られ、それぞれ類似する概念間の関連が示された。以上の結果から、伝統的価値観の下位尺度についての妥当性は一定程度確認できたと考えられる。ただし、下位尺度間のより詳細な弁別性については、今後も検証を重ねていく必要がある。

日常的宗教行為との関連

伝統的価値観と日常的宗教行為との間の相関係数から (Table 8-3)、伝統的価値観はおおむね「神仏加護」、「縁起・魔よけ」と関連を持つ傾向がみられた。以上の結果は研究 2 と同様であったが、「季節の行事」、「占い嗜好」は旧尺度と比べ、関連が高まっていた。その要因として、「季節の行事」に「お正月におせち料理を食べる」、「お彼岸におはぎ、ぼたもちを食べる」などの年末年始やお彼岸の項目が加わったことが考えられる。旧尺度においては弱い相関にとどまっていた「季節の行事」が、本研究では「習俗」だけではなく、「祟りとばち」との関連にも中程度の相関がみられたことから、伝統的価値観との関連をあらためて拾い上げることができた結果と言えるだろう 19。

Table 8-3
下位尺度間の相関

	季節の行事	神仏加護	占い	縁起魔よけ	神格化	分身化	擬人化	S信奉	占い呪術	懐疑	娯乐的享受	恐怖	霊体験
大いなる力	.265 ***	.367 ***	.261 ***	.504 ***	.676 ***	.580 ***	.480 ***	.600 ***	.310 ***	-.231 ***	.258 ***	.157 **	.222 ***
祟りとばち	.383 ***	.552 ***	.392 ***	.634 ***	.635 ***	.563 ***	.389 ***	.695 ***	.521 ***	-.427 ***	.223 ***	.317 ***	.278 ***
吉兆	.316 ***	.470 ***	.384 ***	.560 ***	.530 ***	.502 ***	.436 ***	.581 ***	.464 ***	-.298 ***	.266 ***	.268 ***	.241 ***
習俗	.423 ***	.444 ***	.206 ***	.472 ***	.522 ***	.406 ***	.336 ***	.424 ***	.226 ***	-.137 *	.176 **	.121 *	.137 *
死生観	.190 ***	.394 ***	.378 ***	.480 ***	.514 ***	.444 ***	.332 ***	.827 ***	.447 ***	-.441 ***	.261 ***	.222 ***	.356 ***
季節の行事	.515 ***	.240 ***	.240 ***	.466 ***	.306 ***	.239 ***	.245 ***	.309 ***	.203 ***	-.160 **	.086	.175 **	.201 ***
神仏加護	.379 ***	.632 ***	.414 ***	.632 ***	.414 ***	.333 ***	.346 ***	.465 ***	.355 ***	-.209 ***	.222 ***	.150 **	.189 ***
占い	.528 ***	.528 ***	.308 ***	.528 ***	.308 ***	.294 ***	.257 ***	.434 ***	.657 ***	-.329 ***	.237 ***	.206 ***	.263 ***
縁起・魔よけ	.578 ***	.467 ***	.578 ***	.467 ***	.578 ***	.467 ***	.427 ***	.618 ***	.464 ***	-.291 ***	.253 ***	.193 ***	.369 ***
自然物の神格化	.618 ***	.502 ***	.618 ***	.502 ***	.618 ***	.618 ***	.502 ***	.674 ***	.345 ***	-.314 ***	.253 ***	.208 ***	.246 ***
所有者の分身化	.624 ***	.624 ***	.624 ***	.624 ***	.624 ***	.624 ***	.624 ***	.529 ***	.344 ***	-.239 ***	.215 ***	.262 ***	.266 ***
所有物の擬人化	.415 ***	.415 ***	.415 ***	.415 ***	.415 ***	.415 ***	.415 ***	.415 ***	.295 ***	-.139 *	.185 **	.230 ***	.221 ***
スピリチュアリティ信奉	.493 ***	.493 ***	.493 ***	.493 ***	.493 ***	.493 ***	.493 ***	.493 ***	.493 ***	-.463 ***	.322 ***	.256 ***	.424 ***
占い・呪術嗜好性	.274 ***	.274 ***	.274 ***	.274 ***	.274 ***	.274 ***	.274 ***	.274 ***	.274 ***	-.356 ***	.274 ***	.339 ***	.238 ***
懐疑	-.149 **	-.149 **	-.149 **	-.149 **	-.149 **	-.149 **	-.149 **	-.149 **	-.149 **	-.149 **	-.149 **	-.208 ***	-.215 ***
娯乐的享受	.031	.031	.031	.031	.031	.031	.031	.031	.031	.031	.031	.031	.195 ***
恐怖	.144 *	.144 *	.144 *	.144 *	.144 *	.144 *	.144 *	.144 *	.144 *	.144 *	.144 *	.144 *	.144 *

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 8-4
下位尺度の基本統計量

		<i>M</i>	<i>SD</i>	ω
伝統的価値観	大いなる力	5.37	0.72	.88
	崇りとぼち	4.66	1.01	.89
	吉兆	4.40	1.29	.88
	習俗	4.82	1.16	.89
	死生観	4.11	1.38	.80
日常的宗教行為	季節の行事	3.36	1.08	.83
	神仏加護	3.85	1.09	.84
	占い	2.51	1.17	.85
	縁起魔よけ	3.24	1.19	.84
アニミズム	自然物の神格化	4.84	1.37	.88
	所有者の分身化	4.64	1.25	.80
	所有物の擬人化	4.18	1.22	.82
不思議現象	スピリチュアリティ信奉	4.48	1.43	.90
	占い・呪術嗜好性	3.46	1.39	.77
	懐疑	4.55	1.29	.81
	娯楽的享受	4.46	1.54	.92
	恐怖	3.14	1.31	.66
	霊体験	2.24	1.50	.79

8.2.4. 考察

伝統的価値観尺度は「大いなる力」、「崇りとぼち」、「吉兆」、「習俗」、「死生観」の5因子、日常的宗教行為尺度は「季節の行事」、「神仏加護」、「占い嗜好」、「縁起・魔よけ」の4因子で構成されていた。内的信頼性は各下位尺度ともに $\omega = .80$ 以上であり、妥当性についてはアニミズム尺度と不思議現象態度尺度との相関から、それぞれ一定程度確認できたと考えられる。基本統計量を観察すると、旧尺度と比較し、おおむね平均値は上昇していた。自然への畏れを含む「大いなる力」は、やや高い傾向にあるものの ($M = 5.37$)、その他の下位尺度は中点の4点近辺に平均値が置かれ、標準偏差は1程度で分布しており、現代日本において有効な個人差変数として検討を進めていくことができる可能性が示された。日常的宗教行為との相関についても、旧尺度においては弱い相関にとどまっていた「季節の行事」が、本研究では「習俗」だけではなく、「崇りとぼち」との関連にも中程度の相関がみられたことから、伝統的価値観との関連をあらためて拾い上げることができた結果とも言える。

8.3. 研究 3-2 再テスト信頼性の検証

8.3.1. 目的

本研究では、研究 3-1 で構成した伝統的価値観尺度と日常的宗教行為尺度について、再テスト信頼性を検討する。研究 3-1 で用いたデータのうち、2 週間後に実施した調査にも回答した参加者のデータを用いて、各下位尺度得点との相関分析をおこなった。

8.3.2. 方法

調査参加者

クラウドソーシングサービスの会員から Qualtrics で作成した Web 調査によって回答を得た。分析には 147 名 (女性 91 名, 男性 56 名), 平均年齢 42.36 歳 ($SD = 10.8$) のデータを用いた。

手続き

2 週間後におこなった研究 4-2 の調査参加者から、研究 3-1 と重複している参加者を抽出した。調査は Qualtrics を用い、各尺度内における項目の回答順序はランダムイズした。Satisfice としての回答を抑制するために (三浦・小林, 2015), 教示, 項目文を読んで回答しているか, 3 度のチェック項目を設けた。1, 2 度目の指示に従わない回答に対しては警告教示を表示し, 3 度目の回答に正しく反応しなかった者はデータから削除した。

統計分析

統計ソフトウェア R version 4.1.2 を用い、相関分析を実施した。

8.3.3. 結果と考察

各下位尺度間の積率相関係数を算出した結果を以下に報告する。伝統的価値観では、大いなる力 $r = .840$, 崇りとばち $r = .909$, 吉兆 $r = .879$, 習俗 $r = .772$, 死生観 $r = .827$, 日常的宗教行為では、神仏加護 $r = .866$, 季節の行事 $r = .893$, 占い嗜好 $r = .838$, 縁起・魔よけ $r = .838$ であった ($p < .001$)。

いずれも .75 以上の相関係数が得られ、測定にはある程度の時間的安定性があるものと評価できた。

8.4. 考察

本研究では、日本における伝統的価値観について整理を行った研究2の尺度について、改訂版を作成することを目的とするものであった。研究2の尺度について、質問文の表現と概念の偏りという2点について改善を試みた。

質問文の表現については、古風な表現を現代日常用語に置き換え、断定的表現だった箇所は「のような気がする」や「と思う」という表現にするなどの工夫を加えたことにより、旧尺度と比較し、おおむね平均値は上昇した。自然への畏れを含む「大いなる力」は、やや高い傾向にあるものの、その他の下位尺度は midpoint の4点近辺に平均値が置かれ、標準偏差は1程度で分布しており、内的信頼性の数値も一定程度確認できた。「大いなる力」の平均値が高いことは、「神仏」や「人知を超えた力の存在」に対する肯定的態度や畏敬の念をいまだ多くの人が持ち得るという先行研究の結果とも整合する (e.g., 林, 2010; 朴・吉野, 2015; NHK 放送文化研究所, 2019b) ものであり、表出しにくい日本固有の宗教性の一部をすくい取れた結果とも言える。

概念の偏りについては、超自然的なものの否定的、または中立的な側面が大多数を占めていた旧尺度に、「四つ葉のクローバーが見つかる」と良いことがありそうな気がする、「日頃の行いが良い」といいことがあるような気がする」などの良いことの兆しやご利益に関する項目を追加した。さらに、既存の項目についても「死者の供養をしないとたたりがあると思う」を「死者の供養など死に関連する行事はきちんと行なっておくと安心だと思う」というように、いくつかを肯定的な表現に変更し、否定的なだけでなく、肯定的な側面も測定ができるように改善した。

加えて、伝統的価値観尺度の改訂に伴い、日常的宗教行為尺度についても不足していると思われる項目を加えた改訂版を作成した。伝統的価値観と日常的宗教行為との相関は、「縁起・魔よけ」、「神仏加護」については中程度以上の関連があり、旧尺度と同様の結果であったが、「季節の行事」、「占い嗜好」は旧尺度と比較して関連が高まっていた。旧尺度において弱い相関にとどまっていた「季節の行事」が、本研究では「習俗」だけではなく、「祟りとばち」との間にも中程度の相関がみられたことは、両尺度の改善によって、伝統的価値観と日常的宗教行為との関連をあらためて拾い上げることができた結果とも言えるだろう。

尺度の改訂によって、表出されにくく自覚されにくい日本独自の素朴な宗教心をあらためて具体的に測定可能な形にできたことの意義は大きいと考えられるが、研究2

と同様，この尺度によって日本の伝統的価値観がもれなく扱えているものとはいえない。今後はさらに内容を精錬させつつ，文化的視座からも検討していかなければならない。

9. 研究 4 伝統的価値観が心のゆとりを与える効果

— 受容性の探索的検討 —

9.1. 目的

本研究の目的は、伝統的価値観が心のゆとりを与える効果を媒介すると考えられる受容性の下位概念を探索的に検討することである。

本論においては、個人が出来事を受容する過程で、科学による「過程／how」の説明では保証されない「理由／why」を求めため、その両方を担う超自然的なものに身をゆだねるのではないかと捉えている。その上で、非合理であるがゆえに超自然的なものが敬遠されつつある現代において、「理由／why」の欠如が心のゆとりを減じるひとつの要因ではないかと考えている。

日本人の基底意識調査では、日本人が全般的に非合理的なものとの心のかかわり合いが深いことともに、合理的な人の属性について、男性にやや多いものの、そのほかの特色は見出せないことが報告されている（林, 1979）。林（1979）の調査項目と関連する項目を比較した調査（朴・吉野, 2015）においても、科学的に説明しきれないものに対する関心は、表面の論理では片付かない素朴な感情であり、現代もかなりの人が持っている特性であることが述べられている。

以上の議論からは、多くの日本人が持っているであろう素朴な宗教心を基盤とした伝統的価値観が主観的な心のゆとりへ直接影響を与えるだけでなく、出来事を受容するための何らかの心理的能力を介して影響している可能性が浮かび上がってくる。すなわち、日本固有の宗教性に基づく伝統的価値観が、出来事を受容するための日本人特有の心理的能力＝受容性を導き、その結果、心のゆとりに効果を与えるのではないかとということである。

原田（1997）は、「科学的根拠が欠落しているにもかかわらず、あたかも実在しているかのうように見なされやすいさまざまな現象を肯定的に受け入れようとする態度」を非合理志向と定義し、個人が非合理性を持つようになる要因のひとつとして認知特性に注目した。認知的に未成熟であることが非合理志向を生み出すことにつながるという仮説のもと、非合理志向との間に何らかの関連性を示すと予測されるいくつかの認知特性を取り上げて、その関連性を検討した結果、非合理性志向と認知特性との間に体系的な関連性は示されなかった。その要因として、科学的根拠がないという場合

に指し示すものが、単に現在の科学技術の到達点では証明不可能であるといわざるを得ない現象と、広範に受け入れられている科学的常識とは絶対的に矛盾した現象とに大別できること、そして前者を受け入れることは科学的探究心と比較的結びつきやすいのに対し、後者は必ずしもそれを必要とはしないという点で異なることに言及している。つまり、受け入れようとする心理的背景がそれぞれに異なるであろう信念を同時に測定したため、認知特性との関連性も示されなかったのではないかということである。この差異への言及は非常に重要な指摘であり、認知特性との関わりに限ったことではないと考えられる。しかしながら多くの先行研究においては、これらを特段区別することなく、たとえば不思議現象、超常的現象というようにひとつの概念として扱い、各特性との関連を検討している。本論では超自然的なものとして後者のグループに属する信念に限定して取り扱う。それによって作用機序がより明確になる可能性があるため、先行研究で関連がない、または逆の結果であると報告されたいくつかの概念についても、理論的背景を考慮した上であらためて検討することとする。

以上の議論をもとに、本研究では、出来事を受容する過程において、日本固有の宗教性に基づく伝統的価値観が、出来事を受容するための日本人特有の心理的能力＝受容性を導き、その結果、心のゆとりに影響を与えると考え、受容性の下位概念について検討する。ここでの受容性とは、「出来事を多角的に捉え、適切な対処方略を導き出し適応する心理的能力」を表す概念として用いる。先行研究では、日本人が非合理的なものとの心のかかわり合いが多いことや、日本の宗教性が表出されにくく、自覚されにくいことは多く論じられているが、それらが実際にどのような影響を与えるのかは明らかになっておらず、受容性の下位概念にどのようなものが含まれるのかを現段階で理論的に予測することは困難である。したがって本論における仮説検証の予備的研究として、受容性の下位概念を探るべく、探索的な検討を重ねることとする。

9.2. 研究 4-1 受容性の探索的検討 1

9.2.1. 目的

本研究では、受容性の下位概念を検討すべく、出来事を多角的に捉える能力として、認知的柔軟性と曖昧さへの態度を、適切な対処方略を導き出し適応する能力としてレジリエンスを取り上げる。

原田（1997）は、個人が非合理性を持つようになる要因のひとつとして認知特性の持つ役割に注目し、非合理志向との間に何らかの関連性を示すと予測される認知特性として、あいまいさに対する不寛容、分析・抽象性、認知的複雑性・柔軟性を取り上げて検討した。その結果、非合理性志向との間には体系的な関連性は示されなかったことが報告されているが、その要因として、同じ非合理志向の中に含まれる現象であっても、それを受け入れたり信奉したりするのに影響を与える心理的背景が異なることに言及している。本研究で扱う超自然的なものは、原田（1997）の示す「広範に受け入れられている科学的常識とは絶対的に矛盾した現象」に属するものに限定しており、それらを受容する心理的背景は共通していると考えられるため、出来事を多角的に捉える能力として、認知的柔軟性と曖昧さへの態度を取り上げることとする。

先に述べたとおり、認知の柔軟性と非合理志向との間に意味ある相関は示されなかったことが報告されている（原田, 1997）。ここでの認知の柔軟性は、「1つの対象を同時に多面的に定義できる能力」として扱われており、刺激対象を自由に分類させる対象分類課題を用いて測定されたものである。一方、本研究における認知的柔軟性は、Dennis & Vander Wal（2010）の「個人が不適応な思考をよりバランスの取れた適応的思考に置き換えるために必要な能力」という定義に倣い、適応を導く思考の柔軟性と捉えている。そこで Dennis & Vander Wal（2010）による尺度 Cognitive Flexibility Inventory（CFI）の日本語版（徳吉・岩崎, 2012）を用い、あらためて検討する。

曖昧さとの関連については、多数の先行研究において検討されている。菊池・長谷川（2009）は、曖昧さへの不寛容性が高い（＝耐性が低い）ほど超常信奉が高まる直線関係を想定した「権威主義的パーソナリティ仮説」に加え、超常現象を信奉する、または完全否定するという両極の立場の人は不寛容性が高いとする「イデオログ仮説」、両極にある人は同調圧力やストレスに耐えうる柔軟性を備え、不寛容性が低いとする「文脈仮説」という曲線的関係性を予測し、検討した。「占い・迷信」信念は権威主義的パーソナリティ仮説を支持したが、超能力や心霊現象への肯定的信念を表す「超

常現象」信念とは関連がなく、「超常現象」信念が高かった群は曖昧さへの不寛容性が低いという結果が報告されている。坂田・川上・小城（2014）は、参加者を曖昧さへの耐性の高さで低群，中低群，中高群，高群の4つに群分けをし，不思議現象に対する態度との比較によって，関連性を検討した。その結果，不思議現象に対する態度と曖昧さに対する耐性との間には曲線的関係があり，曖昧さに対する中程度の耐性は不思議現象への接近や恐怖につながることを示されている。

以上の研究は曖昧さの耐性（不寛容性）を取り上げたものであるが，科学的常識とは矛盾したものを受容する心理的背景には，曖昧であることを楽しんだり積極的に受け入れたりするという側面についても議論の余地があるだろう。西村（2007）は，曖昧さへの肯定的な態度は不適応を緩和したり，適応を促進する要因にもなり得るとし，曖昧さの受容や享受などを含む多次元の態度を測定する尺度を作成した。本研究においても西村（2007）の尺度を使用し，肯定的な側面を含む曖昧さへの態度について検討することとする。

さらに本研究における受容性は，適切な対処方略を導き出し適応する能力として，個人が受け入れ難い出来事に直面したとき精神的に回復する能力を含むものであると考えている。本論では人々が受け入れ難い出来事に直面したとき，「過程／how」だけではなく，「なぜそうなったのか」という「理由／why」を求め，それらを得ることが精神的な回復へと繋がるのではないかと捉えているからである。そこで，精神的な回復力であるレジリエンスを取り上げる。レジリエンス（resilience）とは，「困難な状況や脅迫的な状況にもかかわらず，適応を成功させる過程，能力，または結果」を指す概念である（Masten, Best, & Garmezy, 1990）。そして，レジリエンスのある状態にある者は「困難で脅威的な状態にさらされることで一時的に心理的不健康の状態に陥っても，それを乗り越え，精神的病理を示さず，よく適応している者」とされるとされる（小塩・中谷・金子・長峰，2002）。本研究においては，多様なレジリエンス要因の中でどのような下位概念が伝統的価値観と関連するかを含め検討するため，資質的・獲得的な要因を分けて捉えた平野（2010）の二次元レジリエンス要因尺度（BRS）を使用する。

以上の議論をもとに，本研究では，受容性の下位概念として，認知的柔軟性，曖昧さへの態度，レジリエンスを取り上げ，伝統的価値観と心のゆとりとの関連を検討する。

9.2.2. 方法

調査参加者

クラウドソーシングサービスを用いて会員登録している 268 名から Qualtrics で作成した Web 調査によって回答を得た。項目をよく読んできちんとした回答をしているかチェックする項目を 3 問用意し、2 問の警告の上、3 問目に正しく反応しなかった者 72 名を除いた 196 名（女性 125 名、男性 68 名、その他 3 名）を分析に用いた。平均年齢は 38.15 歳 ($SD = 12.09$) であった。

質問紙の構成

質問紙は以下の尺度で構成されていた。認知の柔軟性尺度、曖昧さへの態度尺度、二次元レジリエンス要因尺度、心のゆとり感尺度については、調査参加者の負担軽減のため、予備調査によって項目を精査した。予備調査の詳細については、後述の結果に示す。

- 伝統的価値観（20 項目）

研究 2 で作成した日本人の伝統的価値観を評定する尺度を使用し、「1：まったくそう思わない」－「7：非常にそう思う」の 7 点尺度によって回答を得た。

- 認知の柔軟性（10 項目）

Cognitive Flexibility Inventory (CFI) (Dennis & Vander Wal, 2010) の日本語版（徳吉・岩崎, 2012）を使用した。「代替」と「統制不能」の 2 因子構造、16 項目で構成される原典の尺度より、因子負荷量の高い各 5 項目、計 10 項目を用い、「1：まったくあてはまらない」－「7：非常にあてはまる」の 7 点尺度によって回答を得た。

- 曖昧さへの態度（14 項目）

西村 (2007) の曖昧さへの態度尺度 (26 項目) より、予備調査の結果をもとに「曖昧さの排除」「曖昧さの受容」因子と負荷量の低かった項目を除外し、「曖昧さの不安」「曖昧さの統制」「曖昧さの享受」因子の 14 項目を使用した。「1：まったくそう思わない」－「7：非常にそう思う」の 7 点尺度によって回答を得た。

- レジリエンス（10 項目）

平野 (2010) の二次元レジリエンス要因尺度 (21 項目) より、予備調査の結果をもとに「統制・問題解決」因子を除外し、「社交性」「楽観性」「自己・他者理解」因子か

ら 10 項目を使用した。「1：まったくあてはまらない」－「7：非常にあてはまる」の 7 点尺度によって回答を得た。

- 心のゆとり (21 項目)

富田 (2008) の心のゆとり感尺度 (35 項目) より、予備調査の結果をもとに負荷量の低い項目、内容の重複している項目を除外し、21 項目を使用した。「1：まったくそう感じない」－「6：いつもそう感じている」の 6 点尺度によって回答を得た。

手続き

調査は Qualtrics を用い、各尺度内における項目の回答順序はランダム化した。Satisfice としての回答を抑制するために (三浦・小林, 2015)、教示、項目文を読んで回答しているか、3 度のチェック項目を設けた。1, 2 度目の指示に従わない回答に対しては警告教示を表示し、3 度目の回答に正しく反応しなかった者はデータから削除した。

統計分析

統計ソフトウェア R version 4.1.2 を用い、因子分析および相関検定、共分散構造分析を実施した。

9.2.3. 結果

予備調査 項目の選定

クラウドソーシングサービスを用いて会員登録している 238 名から Qualtrics で作成した Web 調査によって回答を得た。チェック項目の 3 問目に正しく反応しなかった者 40 名を除外し、198 名 (女性 126 名, 男性 72 名) を分析に用いた。平均年齢は 40.42 歳 ($SD = 11.39$) であった。

原典にならない確認的因子分析を実施した結果、認知的柔軟性尺度 ($GFI = .922$, $RMSEA = .088$, $SRMR = .081$) 以外の曖昧さへの態度尺度、二次元レジリエンス要因尺度、心のゆとり感尺度はいずれも十分な適合を示さなかったため、探索的因子分析を実施した (Table 9-1, 9-2, 9-3)。

曖昧さへの態度は、多少因子間の移動があるものの、先行研究と同様の 5 因子解を採用した。因子を示す概念についてもほぼ同義であると判断できたため、因子名も先行研究どおりとした。原典の二次元レジリエンス要因尺度は 2 因子構造であったが、

固有値と因子の解釈可能性に基づき、4 因子解を採用した。因子名は先行研究から概念が合致すると思われるものを使用した。

心のゆとり感尺度についても、先行研究とほぼ同様の因子構造である 3 因子解を採用し、因子名も同じものを使用した。ただし、原典では因子内の項目がすべて逆転項目として扱われている「切迫・疲労感のなさ」については、逆転項目とせず「切迫・疲労感」として扱うこととした。

いずれの尺度についても因子負荷量が .40 を下回るものは除外した。以上の結果を用いて、伝統的価値観との概念上の関連や下位尺度間の相関係数などから総合的に判断し、本調査で用いる項目を精査した。本調査での使用項目については、Table 9-1, 9-2, 9-3 に併記する。

Table 9-1
曖昧さへの態度尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5	M	SD
F1：曖昧さの排除 $\omega = .82$							
26.はっきりしないことはできるだけ白黒つけたい	.888	.005	-.042	.101	-.009	4.92	1.34
24.どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ	.726	-.145	-.017	-.016	-.068	4.44	1.38
25.どっちつかずであることはよくないと思う	.606	.005	-.015	.053	-.121	4.46	1.28
21.確実でないところは確認して明らかにしたい	.483	.045	.315	.122	-.079	5.44	1.11
F2：曖昧さへの不安 $\omega = .78$							
8.はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる*	-.137	.819	.119	-.063	-.054	4.90	1.38
12.いろんな可能性があると思ふのに時間がかかって迷う*	-.225	.813	-.076	.132	-.047	5.15	1.37
13.情報が多すぎるとかえって頭が混乱してしまう*	-.047	.568	-.329	.245	.106	4.98	1.40
11.はっきりしない状況におかれると不安になる*	.238	.547	.127	.002	-.126	5.26	1.25
9.見たことがないものに出会うと怖くなる*	.054	.514	.196	-.156	.045	4.52	1.31
F3：曖昧さの統制 $\omega = .77$							
2.いくつかの解釈ができるといういろんな角度からものごとを見れる点では自由な感じがする*	-.279	-.044	.695	.090	-.078	5.40	1.13
7.いくつかの解釈ができると視野や可能性が広がっていくのでおもしろい*	-.184	-.028	.656	.241	-.075	5.44	1.11
20.情報がたりないと正確な判断はできない*	.238	.092	.574	-.174	.120	5.53	1.12
19.情報がたりないと動きづらいためできるだけ情報を集めたい*	.374	.152	.549	-.107	.121	5.67	0.96
22.いろんな可能性がある時にはさまざまなことを考慮して対処法を考えておきたい*	.108	.047	.546	-.006	-.008	5.62	0.95
4.いろんな可能性があると思ふるのでうれしい	.076	-.181	.433	.168	.079	5.02	1.22
F4：曖昧さの享受 $\omega = .75$							
5.見たことがないものは見ておくにこしたことはないのでぜひ見てみたい*	.107	.103	-.046	.726	-.154	4.88	1.26
3.見たことがないものには想像力をかきたてられる*	.185	.125	.007	.619	.132	4.96	1.24
1.いろんな可能性があると思ふすべてを試してみたくなる*	.277	.087	-.070	.585	.092	4.27	1.49
16.不完全なことがあるからおもしろい*	-.179	-.116	.103	.535	.166	4.65	1.35
6.不完全なことは完全にしていってプロセスがあつておもしろい	-.038	-.032	.215	.464	-.077	4.62	1.22
F5：曖昧さの受容 $\omega = .80$							
15.不完全なままにしておいた方がよい時もある	.025	.029	.097	.054	.851	4.78	1.26
14.はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある	-.130	.100	.040	-.050	.699	4.79	1.35
18.はっきりしていないことがあつてもそのままにしておくのがいい	-.227	.032	-.071	-.073	.544	3.69	1.23
17.不完全なところもある程度受け入れられる	-.023	-.236	.081	.221	.502	4.82	1.20
23.一貫していないことには信頼がおけない							
10.見たことがないものにすぐに近寄るのは抵抗がある							
因子間相関							
	F1	F2	F3	F4	F5		
F1	-	.347	.248	.060	-.507		
F2	-	-	.140	-.150	-.068		
F3	-	-	-	.411	-.012		
F4	-	-	-	-	.212		

注) 最尤法・独立クラスター回転, *は本調査で使用した項目

Table 9-2
2次元レジリエンス尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	M	SD
F1：統制・問題解決 $\omega = .83$						
10.自分は粘り強い人間だと思う	.781	-.090	-.045	-.011	4.53	1.43
11.決めたことを最後までやりとおすことができる	.772	.030	-.084	.001	4.53	1.37
12.努力することを大事にする方だ	.718	.081	-.019	-.210	4.94	1.15
15.嫌な出来事があったとき今の経験から得られるものを 探す	.511	-.004	.092	.174	4.79	1.36
13.人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする	.440	.324	-.034	.017	4.23	1.53
4.つらいことでも我慢できる方だ	.421	.003	.272	.053	4.33	1.53
5.嫌なことがあっても自分の感情をコントロールできる	.388	-.134	.265	.146	4.15	1.48
14.嫌な出来事があったときその問題を解決するために 情報を集める	.360	-.116	.016	.249	5.07	1.17
F2：社交性 $\omega = .88$						
7.交友関係が広く、社交的である*	-.010	.987	.016	-.129	2.79	1.57
8.自分から人と親しくなることが得意だ*	.029	.756	.065	.052	3.33	1.60
9.昔から人との関係をとるのが上手だ*	.047	.713	-.046	.137	3.49	1.56
F3：楽観性 $\omega = .86$						
2.どんなことでもたいてい何とかかなりそうな気がする*	.027	.020	.884	-.062	4.75	1.47
3.たとえ自信がないことでも結果的に何とかなると思う*	-.016	.006	.824	-.002	4.64	1.35
1.困難な出来事が起きてもどうにか切り抜けることが できると思う*	.336	.010	.575	.017	4.71	1.37
F4：自己・他者理解 $\omega = .71$						
19.人の気持ちや微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ*	-.078	.098	-.055	.723	4.75	1.62
20.他人の考え方を理解するのが比較的得意だ*	-.014	.189	-.002	.688	4.41	1.42
17.嫌な出来事がどんな風に自分の気持ちに影響するか 理解している*	.258	-.094	-.159	.443	4.93	1.12
16.自分の性格についてよく理解している*	.126	-.176	-.028	.439	4.93	1.15
21.思いやりを持って人と接している	.233	.052	.045	.328	5.10	1.21
18.自分の考えや気持ちがよくわからないことが多い	.071	-.023	-.131	-.323	4.05	1.52
6.自分は体力がある方だ						
	因子間相関	F1	F2	F3	F4	
	F1	-	.462	.473	.464	
	F2	-	-	.435	.537	
	F3	-	-	-	.483	

注) 一般最小化二乗法・独立クラスタ回転, *は本調査で使用した項目

Table 9-3
心のゆとり感尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	M	SD
F1: 心の充足・開放性 $\omega = .96$					
4.自分の生活に満足していると感じる*	.993	.007	-.207	3.34	1.40
2.毎日が楽しいと感じる	.951	.036	-.063	3.34	1.25
1.充実感を感じる	.937	.033	-.013	3.26	1.28
6.自分の好きなことができていると感じる*	.892	.010	-.136	3.61	1.28
7.心身ともに満たされている感じがする	.845	-.037	-.109	3.15	1.25
14.周りにあるものを見て楽しめていると感じる*	.830	.219	.115	3.76	1.15
5.自分はこのびのびと生きていると感じる*	.793	-.143	-.127	3.42	1.25
3.生きがいがあると感じる*	.779	.217	.191	3.43	1.32
13.安心感があると感じる*	.766	-.121	.022	3.43	1.19
10.心から笑えると感じる*	.662	-.023	.185	3.54	1.30
12.感情を素直に表現していると感じる	.646	.050	.004	3.53	1.33
11.こころと身体が一体となって動いていると感じる	.624	-.006	.118	3.49	1.22
29.無理していない感じがする*	.621	-.249	-.099	3.55	1.28
15.感謝したくなることがあると感じる	.567	.357	.293	4.30	1.09
35.気持ちの余裕があると感じる	.549	-.258	.118	3.25	1.27
9.自分の気持ちを素直に受け入れていると感じる	.500	-.180	.114	3.77	1.17
8.前向きにものごとを考えられていると感じる	.464	-.212	.228	3.48	1.32
F2: 切迫・疲労感 $\omega = .93$					
20.おしつぶされそうな感じがする*	.118	.999	.009	3.42	1.45
19.不安を感じる*	-.076	.777	.036	4.17	1.31
25.なんだかつらいと感じる*	-.147	.751	-.012	3.80	1.37
26.いろいろなことが気になってしょうがないと感じる*	.042	.723	.113	3.84	1.31
22.きつい、つかれたと感じる*	-.074	.718	.103	4.02	1.30
27.ちょっとしたことを不満に感じる*	.112	.699	-.226	3.78	1.23
23.息苦しい感じがする	-.006	.694	-.097	3.23	1.39
18.焦りを感じる*	-.178	.647	.131	3.85	1.32
28.何もかもわずらわしいと感じる*	-.146	.589	-.132	3.55	1.28
24.いらいらしていると感じる*	-.009	.585	-.197	3.43	1.30
33.自分のことで精一杯だと感じる	-.015	.569	-.280	4.12	1.19
21.時間に追われていると感じる	.079	.548	.114	3.68	1.29
F3: 対他的ゆとり $\omega = .87$					
31.自分のことだけでなく人のことも考えられると感じる*	.054	.060	.812	3.71	1.06
32.他人に寛容になれると感じる*	-.080	-.142	.767	3.66	1.16
30.他人のことも思いやれる余裕があると感じる*	.229	-.106	.569	3.51	1.16
16.人と笑顔で接していると感じる*	.332	.108	.546	3.78	1.25
34.柔軟な考えや姿勢を持っていると感じる	.050	-.322	.441	3.60	1.14
17.心が落ち着いていると感じる					
因子間相関					
	F1	F2	F3		
	F1	—	-.777	.650	
	F2	—	—	-.504	

注) 最尤法・独立クラスター回転, *は本調査で使用した項目, 原典のF2は「切迫・疲労感のなさ」としてすべて逆転項目

各尺度の因子分析

各尺度について、予備調査で得た因子構造での確認的因子分析をおこなった結果、適合度は許容範囲内であったため (GFI = .831–.923)、それらを採用した。一部の尺度ではRMSEAが.100を上回っていたが、サンプル数が200名に満たないこと、本研究が予備的検討であるということを考慮し、予備調査で用いた因子構造を採用した。各下位尺度の基本統計量を Table 9-4 に示す。

Table 9-4
下位尺度の基本統計量

		<i>M</i>	<i>SD</i>	ω
伝統的価値観	自然崇拜	5.34	0.75	.76
	死生観	4.24	1.42	.86
	崇りとばち	4.44	1.17	.75
	習俗	4.43	1.14	.64
認知的柔軟性	認知的代替	5.22	1.01	.88
	認知的統制不能	4.34	1.22	.84
曖昧さへの態度	曖昧さへの不安	6.28	1.41	.80
	曖昧さの統制	5.58	0.75	.62
	曖昧さの享受	4.95	0.97	.66
レジリエンス	社交性	3.26	1.53	.86
	楽観性	4.77	1.35	.88
	自己・他者理解	4.97	0.90	.62
心のゆとり	心の充足・開放性	3.57	1.07	.92
	切迫・疲労感	3.83	1.10	.92
	対他的ゆとり	3.78	0.97	.82

下位尺度間の相関

伝統的価値観と各尺度との関連を探るため、各下位尺度の積率相関係数を算出した (Table 9-5)。伝統的価値観と受容性の各下位概念との間には、「自然崇拜」とレジリエンスの「楽観性」との間に弱い相関 ($r = .275, p < .05$) が認められたのみで、それ以外の有意な関連を見出すことはできなかった。また、心のゆとりの下位尺度との間にも有意な関連はみられなかった。心のゆとりと受容性とは多数の有意な関連があり、中でも「切迫・疲労感」と「認知的統制不能」($r = .500, p < .001$)、「対他的ゆとり」とレジリエンスの「社交性」($r = .619, p < .001$)、「楽観性」($r = .514, p < .001$) とには高い相関がみとめられた。

Table 9-5

下位尺度間の相関

	認知代替	認知統制不能	曖昧不安	曖昧統制	曖昧享受	社交性	楽観性	自己理解	充足・開放	切迫・疲労	対他のゆとり
自然崇拜	.192	.066	.146	.207	.197	.103	.276 *	.227	.135	-.001	.166
死生観	-.005	.196	.133	-.027	-.110	.095	.021	.114	.084	-.016	.089
崇りとばち	.115	.209	.075	.042	.047	.145	.129	.154	.090	.019	.130
習俗	.229	.051	-.016	-.011	.047	.081	.095	.039	.172	-.119	.131
認知的代替		-.204	-.165	.493 ***	.303 **	.211	.277 *	.437 ***	.162	-.098	.370 ***
認知的統制不能			.672 ***	.037	-.133	-.223	-.446 ***	-.264 *	-.220	.501 ***	-.279 *
曖昧さへの不安				.164	-.121	-.296 **	-.367 ***	-.177	-.282 *	.494 ***	-.341 ***
曖昧さの統制					.452 ***	.054	.227	.371 ***	.027	.060	.208
曖昧さの享受						.173	.507 ***	.248	.225	-.121	.324 **
社交性							.403 ***	.398 ***	.449 ***	-.346 ***	.620 ***
楽観性								.436 ***	.459 ***	-.419 ***	.515 ***
自己・他者理解									.221	-.226	.491 ***
心の充足・開放性										-.690 ***	.637 ***
切迫・疲労感											-.495 ***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

共分散構造分析

仮説モデルの妥当性を検証するため、共分散構造分析を実施した。伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定した仮説モデル1については、受容性から心のゆとりへの係数は0.754 ($p < .001$, 95% CI [0.656, 0.852]) であり実質的な影響が認められたが、伝統的価値観から受容性、心のゆとりへの係数はいずれも有意ではなかった (Figure 9-1)。モデルの適合度指標も GFI = .732, CFI = .649, RMSEA = .152, SRMR = .119, AIC = 17162.011 であり、十分な適合は示されなかった。伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定しない仮説モデル2においても、受容性から心のゆとりへの係数は0.761 ($p < .001$, 95% CI [0.666, 0.857]) であったが、伝統的価値観から受容性への係数は有意ではなかった (Figure 9-2)。適合度指標は、GFI = .732, CFI = .649, RMSEA = .151, SRMR = .120, AIC = 17160.608 とこちらも十分な適合は示されず、両モデルに明確な差異は認められなかった。

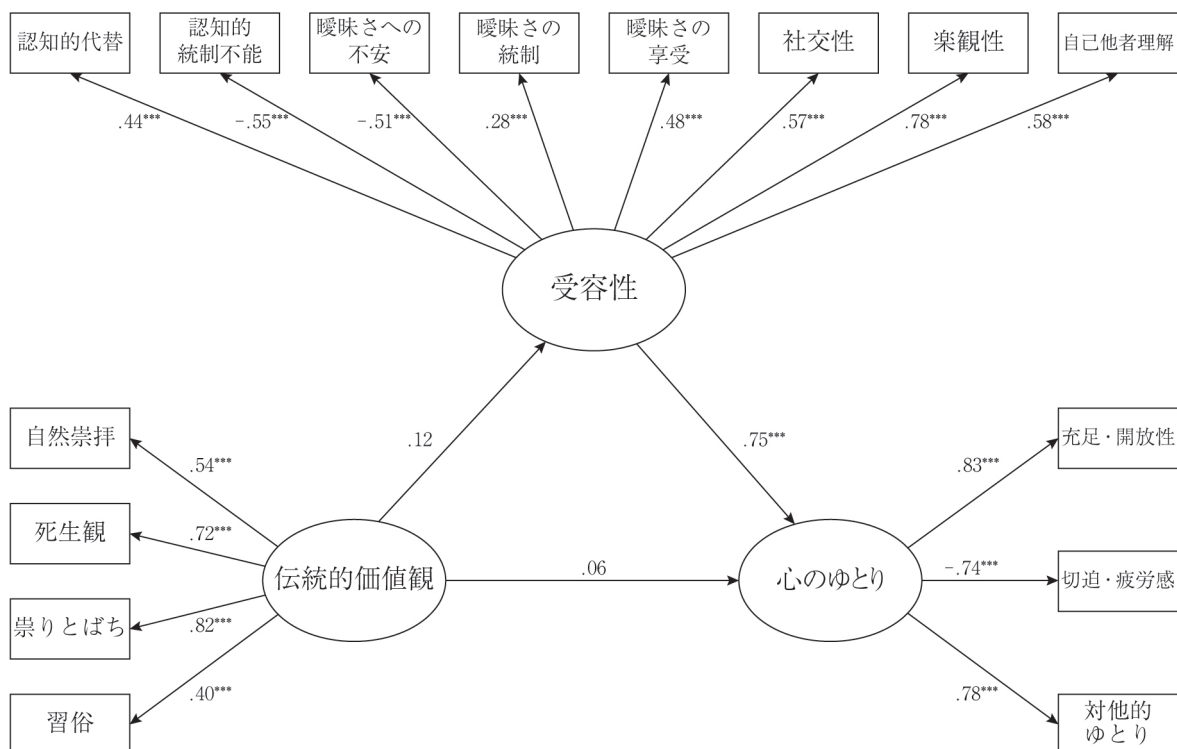


Figure 9-1. 伝統的価値観と受容性、心のゆとりとの関連 (仮説モデル1)。GFI = .732, CFI = .649, RMSEA = .152, SRMR = .119, AIC = 17162.011。

注) 誤差項の表記は省略した。

*** $p < .001$

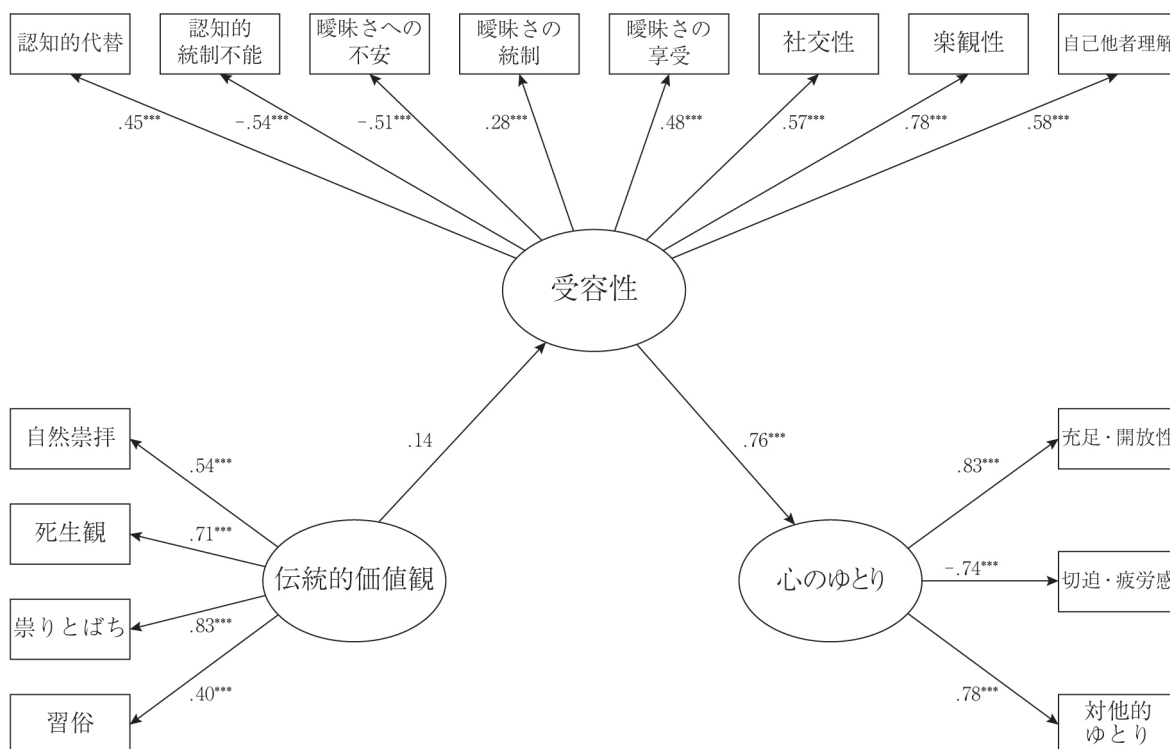


Figure 9-2. 伝統的価値観と受容性、心のゆとりとの関連（仮説モデル2）。GFI = .732, CFI = .649, RMSEA = .151, SRMR = .120, AIC = 17160.608。

注) 誤差項の表記は省略した。

*** $p < .001$

9.2.4. 考察

本研究では、受容性の下位概念として、認知的柔軟性、曖昧さへの態度、レジリエンスの3指標を用い、伝統的価値観と心のゆとりとの関連を検討した。受容性から心のゆとりへの係数と信頼区間をみると、モデル1、2ともに心のゆとりには受容性が実質的に影響していることが示された。しかしながら伝統的価値観から受容性、心のゆとりへの係数はいずれも有意ではなく、両モデルとも適合度指標からも十分な適合は示されなかった。すなわち、本研究で測定した認知的柔軟性、曖昧さへの態度、レジリエンスの指標は、伝統的価値観との関連性がほとんど認められず、本研究における受容性の下位概念としての妥当性は確認されなかった。

その要因としてまず、精神的回復力として扱ったレジリエンスが挙げられる。下位尺度の相関をみると、レジリエンスの下位尺度「社交性」と「楽観性」は、ゆとりの下位尺度すべてと中程度以上の相関がみとめられており、受容性の他の下位概念とも

多数関連がみられる。レジリエンスが一定程度、心のゆとりに寄与することが示された一方で、伝統的価値観との関連はほとんどみられなかった。レジリエンスは前述のとおり「困難な状況や脅迫的な状況にもかかわらず、適応を成功させる過程、能力、または結果」を指す概念である (Masten et al., 1990)。つまり、受け入れるというより「適応を成功させるべく (= 折れずに), がんばる」という概念である。本論での受容性が、日本固有の宗教性に基づく伝統的価値観によって導かれる日本人特有の出来事を受容するための心理的能力を表すものとして捉えていることと照らし合わせると、多少符号しない部分があったのかもしれない。

次に、測定方法の問題である。曖昧さへの態度は先行研究ではおおむね超自然的なものとの関連性が示されていた (e.g., 菊池・長谷川, 2009; 坂田他, 2014)。ところが、本研究では伝統的価値観との有意な相関はみられなかった。本研究における超自然的なものが科学的常識とは絶対的に矛盾した現象 (原田, 1997) に属するものに限定していることや、曖昧さへの耐性だけでなく多次元での態度を測定していることを勘案しても、多少の関連性がみとめられることが推測でき、測定項目に問題があった可能性がある。本研究では質問項目が多いことによる参加者の負担を考慮し、予備調査をもとに項目を選定したが、それが妥当性の低下につながった可能性は否定できない。また、伝統的価値観尺度についても、研究3において指摘しているとおりの質問文の表現と概念の偏りという2点について改善の余地があるものであった。

以上を踏まえ、次回の調査では受容性の下位概念を再構築するとともに測定に用いる尺度項目を再考し、伝統的価値観の尺度については改訂版を用いて検討することとする。

9.3. 研究 4-2 受容性の探索的検討 2

9.3.1. 目的

本研究では研究 4-1 の結果をもとに、受容性の下位概念を再検討する。

前述のとおり、レジリエンスは受け入れるというより折れずにがんばるという概念であり、本論で扱う日本固有のものごとを受け入れる姿勢とは多少符号しない部分があったのかもしれない。そこで、本研究ではレジリエンスに代わり、ありのままを受け入れるという概念であるセルフ・コンパッションを採用することとした。

セルフ・コンパッションは、Neff (2003a) によって提唱された慈悲喜捨、中道、マインドフルネスなどの仏教思想や東洋哲学をもとに構成された概念であり、自己への思いやり、優しさ、慈悲などと訳される。苦痛や失敗を経験したときに、自らの苦しみを避けたり切り離したりするのではなく、自分自身に対して思いやりを持ち、そのような経験を人間として共通のものであると認識できることであると定義され、「自分への優しさ」、「共通の人間性」、「マインドフルネス」からなる肯定的側面と、「自己批判」、「孤独感」、「過剰同一化」からなる否定的側面で構成される (Neff, 2003a)。

セルフ・コンパッションのある人は、人生の満足度、社会的つながり、感情的知性、幸福が大きく、不安、抑うつ、恥、失敗への恐れ、燃え尽き症候群が少ない傾向があることが示されている (Barnard & Curry, 2011)。レジリエンスが「乗り越えて適応する」ことを表すのに対し、セルフ・コンパッションは「ありのままを受容することで適応する」というものであり、本論における受容性の概念に、より一層即したものであると考えられる。さらに仏教思想や東洋哲学をもとに構成されているという点においても、本論の伝統的価値観との間になんらかの関連が見い出せるのではないかと推測される。

そこで本研究では、受容性の下位概念として、認知的柔軟性、曖昧さへの態度、セルフ・コンパッションを取り上げ、伝統的価値観と心のゆとりとの関連を検討する。セルフ・コンパッションの測定には、日本語 12 項目短縮版 (SCS-J-Short Form: SCS-J-SF) (有光・青木・古北・多田・富樫, 2016) を用いる。Neff (2003b) のセルフ・コンパッション尺度 (Self-Compassion Scale: SCS) には 6 つの下位尺度から各 2 項目を抽出した 12 項目短縮版 (Self-Compassion Scale-Short Form: SCS-SF) が作成されており (Raes, Pommier, Neff, & Van Gucht, 2011)、SCS-J-SF は SCS-SF と同様の 12 項目を邦訳したものである。認知の柔軟性は研究 4-1 と同様の項目を用い、曖昧さへの

態度については研究 4-1 で述べた測定方法の問題点を踏まえ、原典どおり 26 項目で測定する。また、伝統的価値観尺度については、日本固有の宗教性をより適切に汲み取るべく、研究 3 で作成した改訂版を使用する。

9.3.2. 方法

調査参加者

クラウドソーシングサービスを用いて会員登録している 792 名から Qualtrics で作成した Web 調査によって回答を得た。項目をよく読んできちんとした回答をしているかチェックする項目を 3 問用意し、2 問の警告の上、3 問目に正しく反応しなかった者 194 名および、回答時間が 7 分以下の 12 名と団体での回答 6 名、二度回答した 2 名を除いた 578 名（女性 390 名、男性 186 名、その他 2 名）を分析に用いた。平均年齢は 39.86 歳 ($SD = 11.77$) であった。

質問紙の構成

質問紙は以下の尺度で構成されていた。

- 伝統的価値観（44 項目）

研究 3 で作成した改訂版伝統的価値観尺度を使用し、「1：まったくそう思わない」－「7：非常にそう思う」の 7 点尺度によって回答を得た。

- 認知の柔軟性（10 項目）

Cognitive Flexibility Inventory (CFI) (Dennis & Vander Wal, 2010) の日本語版(徳吉・岩崎, 2012)を使用した。研究 4-1 と同様に、因子負荷量の高い各 5 項目、計 10 項目を用い、「1：まったくあてはまらない」－「7：非常にあてはまる」の 7 点尺度によって回答を得た。

- 曖昧さへの態度（26 項目）

曖昧さへの態度尺度（西村, 2007）を使用した。研究 4-1 における測定方法の問題点を踏まえ、本研究では原典どおり 26 項目を用い、「1：まったくそう思わない」－「7：非常にそう思う」の 7 点尺度によって回答を得た。

- セルフ・コンパッション（12 項目）

有光他（2016）の日本語 12 項目短縮版（SCS-J-Short Form：SCS-J-SF）について、「1：まったくそうしない」－「7：いつもそうする」の 7 点尺度によって回答を得た。

- 心のゆとり (21 項目)

富田 (2008) による主観的な心のゆとり感を測定する尺度 (35 項目) より、研究 4-1 と同様に 21 項目を使用した。「1: まったくそう感じない」 - 「6: いつもそう感じている」の 6 点尺度によって回答を得た。

手続き

調査は Qualtrics を使い、各尺度内における項目の回答順序はランダム化した。Satisfice としての回答を抑制するために (三浦・小林, 2015)、教示、項目文を読んで回答しているか、3 度のチェック項目を設けた。1, 2 度目の指示に従わない回答に対しては警告教示を表示し、3 度目の回答に正しく反応しなかった者はデータから削除した。

統計分析

統計ソフトウェア R version 4.1.2 を使い、因子分析および相関検定、共分散構造分析を実施した。

9.3.3. 結果

各尺度の因子分析

伝統的価値観尺度について確認的因子分析をおこなった結果、十分な適合を示さず、不適解となった。研究 3 におけるサンプルは 500 名に満たなかったため、本研究でのデータとの差異が出たものであると考えられる。探索的因子分析を実施した結果、多少の因子間の移動はあるものの、研究 3 とほぼ同様の構造であることが確認された (Table 9-6)。

認知的柔軟性、心のゆとり尺度については、研究 4-1 で確認された因子構造で確認的因子分析をおこない、認知的柔軟性 (GFI = .945, RMSEA = .085, SRMR = .068)、心のゆとり (GFI = .865, RMSEA = .080, SRMR = .052) とともに、適合度は許容範囲内であったため、それらを採用した。

曖昧さへの態度についても、原典にならない確認的因子分析をおこなった結果、GFI = .832, RMSEA = .081, SRMR = .092 と許容範囲内であったため、それらを採用した。

セルフ・コンパッションは原典どおり 6 因子構造で確認的因子分析をおこなった結果、不適合であった。探索的因子分析を実施し、自分への優しさ、共通の人間性、マインドフルネスの項目で構成される肯定的因子と、自己批判、孤独感、過剰同一化で

構成される否定的因子による2因子構造を採用した(Table 9-7)。2因子構造については、最終的に採択はされなかったものの日本語短縮版作成時にも検討されており(有光他, 2016), 肯定的因子と否定的因子という両側面を備えるという構造はNeff (2003b)のセルフ・コンパッション尺度における構成概念とも相違ないと考えられるため, 採用することとした。因子名は肯定, 否定の意味を含め, 「自己へのやさしさ」, 「自己への冷たさ」とした。各下位尺度の基本統計量を Table 9-8 に示す。

Table 9-6
伝統的価値観尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5	M	SD
F1: 大いなる力 $\omega = .91$							
51.世の中には人間が立ち入ってはならない領域があるような気がする	.749	-.043	-.009	-.153	.033	5.67	1.20
10.自然は人間が統制できないものだと思う	.663	-.100	-.077	-.111	-.088	6.10	0.98
1.自然の偉大さには神聖なものを感じる	.638	.032	-.034	.046	-.046	5.76	1.24
2.環境破壊が続いているといつか大自然の怒りをかうのではないかと思う	.637	.161	-.135	-.035	-.032	5.47	1.46
6.言葉には発せられた内容どおりの状態を実現する力があるような気がする	.600	-.036	.034	.122	-.008	5.13	1.28
50.世の中には科学で解明できないことがあると思う	.587	-.044	-.042	-.214	.208	5.94	1.07
28.良いことも悪いことも自分のしたことはすべて自分に返ってくるような気がする	.580	.056	.021	-.020	-.009	5.61	1.16
13.生き物だけでなく自然やものにも魂は宿っているような気がする	.571	-.002	.088	.082	.157	5.24	1.47
9.きれいな言葉遣いを心がけていると心が澄んでよい人になると思う	.534	-.134	.140	.078	-.012	5.24	1.38
5.虫の知らせというものはあるような気がする	.529	.098	.011	.064	.013	5.29	1.33
46.日頃の行いが良いと良いことがあるような気がする	.528	-.017	.138	.097	.009	5.44	1.26
3.山や川などには自然の霊が宿っているような気がする	.518	.114	.023	.125	.101	5.14	1.54
4.食べ物をそまつにするとすまないことをしたような気持ちになる	.498	-.067	.123	-.201	-.061	6.09	0.96
48.病気やケガは休息を取る合図だと感じる	.484	-.186	-.137	.176	.044	5.29	1.41
52.掃除をすると心も浄化されるような気がする	.474	.060	.098	.111	-.104	5.33	1.42
49.ものごとがスムーズに進まないときは方向性が間違っていると教えられているような気がする	.471	.038	-.126	.102	-.037	4.73	1.37
7.ものをそまつにするとばちがあたると思う	.445	.227	.153	.036	-.062	5.39	1.29
8.物事はあまり人が力を加えないで自然になるように任せておいた方がうまくいくと思う	.434	.042	-.118	.035	-.059	4.80	1.17
11.自然には人間が手を加えない方がよいと思う	.431	.058	-.165	.047	-.028	5.12	1.23
F2: 崇りとばち $\omega = .91$							
22.死者の供養をしないとたたりがあると思う	.037	.977	-.136	-.095	-.077	4.65	1.55
23.先祖のお墓参りをしないと悪いことが起きそうな気がする	-.029	.889	.067	-.106	-.110	4.35	1.53
26.死者の供養など死に関連する行事は、きちんと行なっておくと安心だと思ふ	.097	.722	.165	-.147	-.087	5.48	1.26
34.厄年には厄払いをしておきたいと思う	-.202	.663	.170	.083	-.005	4.61	1.81
29.この世に強い思いを残して亡くなった人は成仏できないと思う	-.059	.607	-.097	.022	.222	4.25	1.55
19.この世で悪いことをした人は、死んだら地獄へ落とされると思う	-.016	.589	-.065	-.042	.318	4.34	1.59
24.北まぐらは何となく気になる	-.186	.554	-.002	.166	-.091	3.65	1.93
30.事件や事故で人が亡くなった家にはなるべく住みたくないと思う	.059	.543	-.122	.006	-.172	5.79	1.38
25.神や仏をそまつにするとばちがあたると思う	.290	.535	.146	-.170	.041	5.41	1.37
53.塩にはお清めの効果があると思う	.045	.484	.067	.144	.094	4.73	1.57
43.魔除けになるものを身の周りにおいておくとほっとする	-.061	.480	.045	.216	.099	4.05	1.61
27.人の恨みをかうとたたられそうだと思う	.184	.450	-.038	.047	-.019	4.79	1.41
42.縁起の良いものを身の周りにおいておくと良いことがありそうな気がする	.055	.416	.106	.262	.033	4.87	1.44
F3: 習俗 $\omega = .88$							
35.昔からあるしきたりや年中行事はこれからも伝承していったほうが良いと思う	.029	-.120	.920	.030	-.020	5.08	1.31
31.昔からあるしきたりや年中行事は大切にしたいと思う	-.048	.068	.895	.007	-.013	5.04	1.31
32.古くから行われているしきたりや年中行事には必要性を感じない [R]	-.018	.023	-.796	.062	-.026	3.24	1.47
33.お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感じる	-.007	.308	.477	-.044	.016	4.52	1.56
F4: 吉兆 $\omega = .85$							
39.茶柱がたつと良いことがありそうな気がする	-.066	.209	-.034	.685	-.011	4.47	1.62
44.時計を見たときゾロ目だと良いことがありそうな気がする	.036	-.104	-.009	.684	.005	3.86	1.87
41.四つ葉のクローバーが見つかると良いことがありそうな気がする	.071	.200	-.054	.656	-.042	4.87	1.67
40.虹を見ると良いことがありそうな気がする	.265	-.034	-.035	.647	-.089	4.79	1.61
45.流れ星に願いごとをすると叶うと思う	-.024	.064	.054	.604	.109	3.70	1.68
F5: 死生観 $\omega = .83$							
17.死後の世界はあると思う	.012	.071	-.001	-.044	.900	4.46	1.71
20.人は死んでも繰り返し生まれ変わるような気がする	.069	-.055	.060	.088	.688	4.30	1.72
18.地獄や天国は想像上のものだと思う [R]	.069	-.170	.050	.069	-.640	4.39	1.52
因子間相関							
	F1	F2	F3	F4	F5		
F1	—	.661	.566	.545	.486		
F2	—	—	.643	.655	.636		
F3	—	—	—	.479	.417		
F4	—	—	—	—	.522		

注) 最尤法・独立クラスタ回転, [R]は逆転項目

Table 9-7
セルフ・コンパッション尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	M	SD
F1：自己への冷たさ $\omega = .89$				
8.自分にとって大切な何かに失敗したとき自分の失敗の中で ひとりぼっちでいるように感じる傾向がある	.837	.106	4.74	1.66
12.自分にとって重要なことを失敗したとき無力感で頭がいっぱいになる	.795	.043	5.25	1.50
11.気分が落ち込んだときには間違っただことすべてについて くよくよと心配しこだわる傾向にある	.762	-.075	4.99	1.64
3.自分自身の欠点や不十分なところについて不満に思っているし 批判的である	.753	-.061	4.98	1.48
7.気分が落ち込んだとき多くの人がおそらく自分より幸せである という気持ちになりがちである	.705	.111	4.47	1.71
4.自分のパーソナリティの好きでないところについては やさしくなれないしいらだちを感じる	.685	-.141	4.60	1.51
F2：自己へのやさしさ $\omega = .79$				
10.何か苦痛を感じる事が起こったときその状況について バランスのとれた見方をするようにする	-.029	.651	4.42	1.28
6.自分の失敗は人間のありようの1つであると考えようようにしている	-.035	.641	4.42	1.41
9.何かで苦しい思いをしたときには感情を適度なバランスに 保つようにする	-.029	.622	4.63	1.30
2.自分のパーソナリティの好きでないところについては理解し やさしい目で見ようようにしている	-.176	.620	4.19	1.34
5.自分自身にどこか不十分なところがあると感じると多くの人も 不十分であるという気持ちを共有していることを思い出すようにする	.247	.619	3.90	1.49
1.苦労を経験しているとき必要とする程度に自分自身をいたわり やさしくする	.001	.579	4.55	1.32
因子間相関				
	F1	F2		
	F1	-	-.412	

注) 最尤法・独立クラスター回転

Table 9-8
下位尺度の基本統計量

		<i>M</i>	<i>SD</i>	ω
伝統的価値観	大いなる力	5.41	0.77	.91
	崇りとばち	4.69	1.07	.91
	習俗	4.85	1.20	.88
	吉兆	4.34	1.33	.85
	死生観	4.12	1.41	.83
認知的柔軟性	認知的代替	5.24	0.92	.87
	認知的統制不能	4.47	1.27	.87
曖昧さへの態度	曖昧さの享受	5.01	0.84	.80
	曖昧さへの不安	4.95	1.05	.83
	曖昧さの受容	4.63	0.92	.78
	曖昧さの統制	5.50	0.76	.75
	曖昧さの排除	4.52	1.14	.80
セルフ・コンパッション	自己への冷たさ	4.84	1.27	.89
	自己へのやさしさ	4.35	0.95	.79
心のゆとり	心の充足・開放性	3.59	1.02	.91
	切迫・疲労感	3.80	1.11	.93
	対他的ゆとり	3.83	0.92	.82

下位尺度間の相関

伝統的価値観と各尺度との関連を探るため、各下位尺度の積率相関係数を算出した (Table 9-9)。伝統的価値観と受容性の各下位概念との間には一部に低～中程度の有意な関連を見出すことができた。先行研究で関連が示されていた曖昧さへの態度についても、「大いなる力」、「崇りとばち」を中心に多数の有意な関連が認められた。「大いなる力」と、曖昧さを魅力的なものと評価し、関与していくことに楽しみを見出す傾向 (西村, 2007) である「曖昧さへの享受」に中程度の相関がみられたことは、曖昧さへの耐性とは異なる側面においても超自然的なものとの関わりが示された結果ともいえよう。

伝統的価値観と心のゆとりについては、研究 4-1 とは異なり、弱いながらも多くの下位尺度間に相関がみとめられたが、「心の充足・開放性」、「対他的ゆとり」との間には「崇りとばち」以外のすべての下位尺度との関連があった一方、「切迫・疲労感」との関連はまったくみられなかった。受容性の各下位概念と心のゆとりとの関連は研究 4-1 と同様に多数みとめられ、セルフ・コンパッションの「自己への冷たさ」と「切迫・疲労感」との間には強い相関がみられた ($r = .722, p < .001$)。

Table 9-9
下位尺度間の相関

	認知代替	認知統制不能	暖味享受	暖味不安	暖味受容	暖味統制	暖味排除	自己冷たさ	自己やさしさ	充足・開放	切迫・疲労	対他的ゆとり
大いなる力	.191 ***	-.046	.308 ***	.129	.153 *	.223 ***	.144	.045	.235 ***	.304 ***	-.027	.291 ***
祟りとばち	-.001	.119	.086	.237 ***	-.013	.146 *	.194 ***	.202 ***	.061	.120	.129	.114
習俗	.036	-.030	.134	.119	.087	.098	.069	.096	.108	.184 **	-.001	.173 **
吉兆	.014	.027	.163 **	.119	.081	.023	.098	.063	.188 **	.217 ***	.027	.224 ***
死生観	-.056	.091	.050	.158 *	-.043	.073	.137	.110	.055	.175 **	.017	.169 **
認知的代替		-.216 ***	.440 ***	-.054	.134	.445 ***	.049	-.029	.303 ***	.183 **	-.064	.284 ***
認知的統制不能			-.254 ***	.714 ***	-.017	.085	.035	.591 ***	-.296 ***	-.357 ***	.544 ***	-.386 ***
暖味さの享受				-.196 ***	.278 ***	.414 ***	.163 **	-.101	.375 ***	.297 ***	-.105	.336 ***
暖味さへの不安					-.057	.282 ***	.121	.594 ***	-.153 *	-.237 ***	.522 ***	-.271 ***
暖味さの受容						-.114	-.477 ***	-.096	.271 ***	.142	-.115	.156 *
暖味さの統制							.418 ***	.239 ***	.097	.021	.189 **	.076
暖味さの排除								.114	.018	.047	.142	.071
自己への冷たさ									-.345 ***	-.453 ***	.722 ***	-.339 ***
自己へのやさしさ										.479 ***	-.304 ***	.481 ***
心の充足・開放性											-.662 ***	.640 ***
切迫・疲労感												-.441 ***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

共分散構造分析

仮説モデルの妥当性を検証するため、共分散構造分析を実施した。伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定した仮説モデル1、伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定しない仮説モデル2ともにすべての係数は1%水準で有意であった (Figure 9-3, 9-4)。

受容性から心のゆとりへの係数は、仮説モデル1では0.796 ($p < .001$, 95% CI [0.742, 0.851]), 仮説モデル2では0.799 ($p < .001$, 95% CI [0.751, 0.848]) であり、研究4-1と同様に実質的な影響があることが示された。伝統的価値観から受容性への係数は、仮説モデル1では-0.165 ($p < .001$, 95% CI [-0.257, -0.073]), 仮説モデル2では-0.130 ($p < .001$, 95% CI [-0.221, -0.039]) であった。また、仮説モデル1における伝統的価値観から心のゆとりへの係数は0.262 ($p < .001$, 95% CI [0.188, 0.336]) であり、小さいながらも関連があることは示された。しかし、モデルの適合度指標については、仮説モデル1 (GFI = .696, CFI = .644, RMSEA = .157, SRMR = .138, AIC = 60528.481), 仮説モデル2 (GFI = .684, CFI = .636, RMSEA = .158, SRMR = .147, AIC = 60562.681) ともに十分な適合は示されず、研究4-1と同様、両モデルに明確な差異は認められなかった。

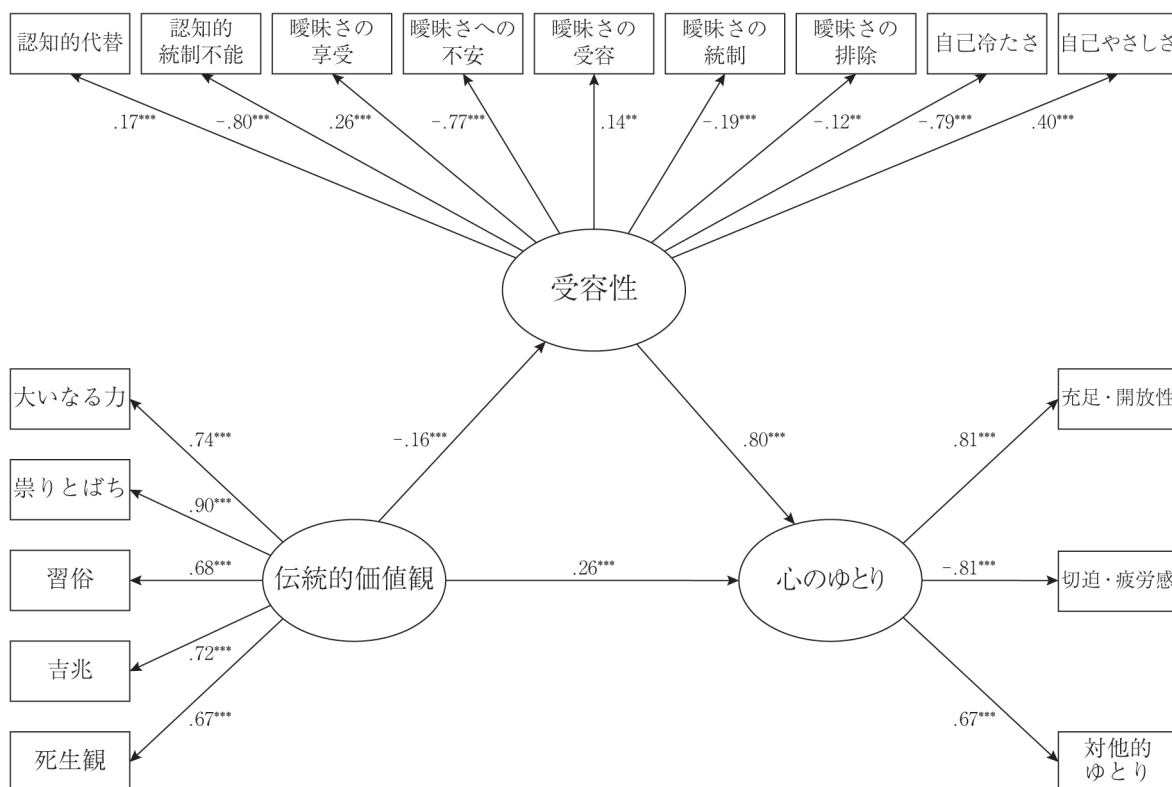


Figure 9-3. 伝統的価値観と受容性、心のゆとりとの関連（仮説モデル1）。GFI = .696, CFI = .644, RMSEA = .157, SRMR = .138, AIC = 60528.481。
 注) 誤差項の表記は省略した。
 *** $p < .001$, ** $p < .01$

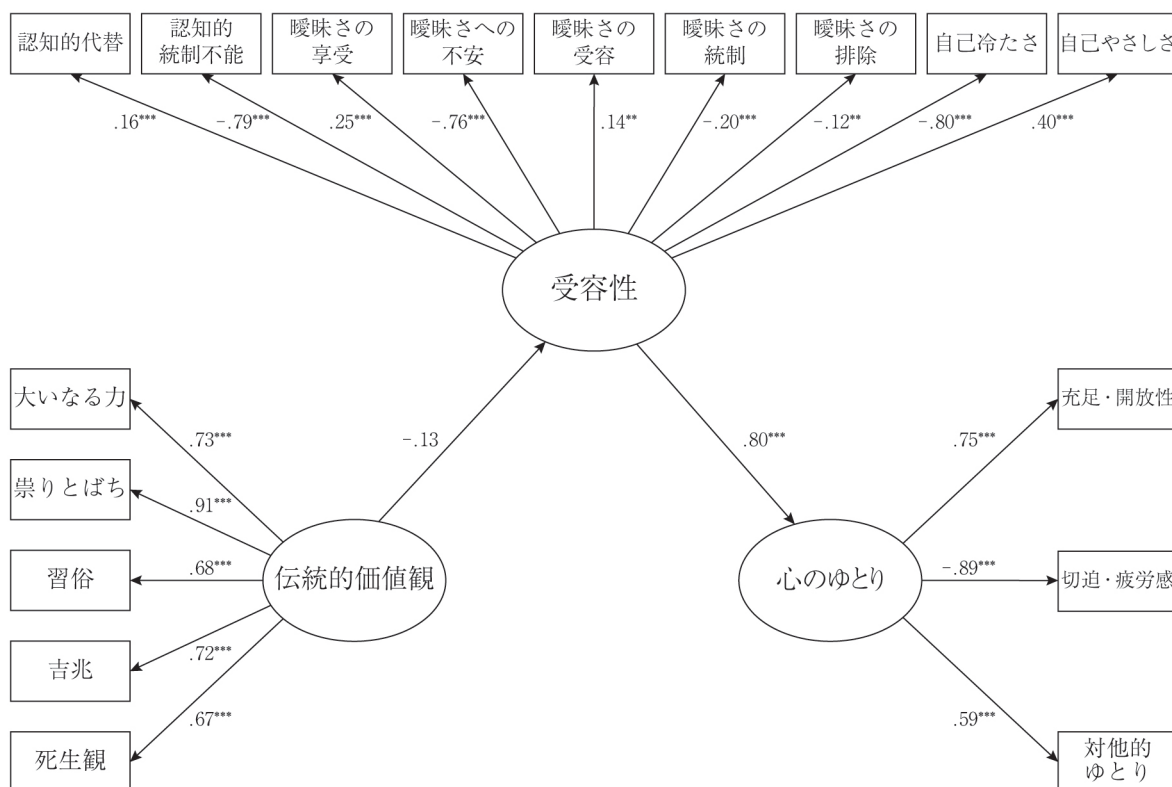


Figure 9-4. 伝統的価値観と受容性、心のゆとりとの関連（仮説モデル2）。GFI = .684, CFI = .636, RMSEA = .158, SRMR = .147, AIC = 60562.681。
 注) 誤差項の表記は省略した。
 *** $p < .001$, ** $p < .01$

9.3.4. 考察

本研究では、受容性の下位概念として、認知的柔軟性、曖昧さへの態度、セルフ・コンパッションの3指標を用い、伝統的価値観と心のゆとりとの関連を検討した。受容性から心のゆとりへの係数については、仮説モデル1, 2ともに実質的な影響が示され、研究4-1に続き心のゆとりの向上に対する受容性の効果が示された。伝統的価値観から受容性、心のゆとりへの効果も、係数の値は小さいながら関連があることは示された。この点に関しては、研究4-1で指摘した曖昧さへの態度と伝統的価値観の測定方法の問題が改善されたことによるものであると考えられる。下位尺度間の相関において、伝統的価値観と曖昧さへの態度との間に一定の関連がみとめられたことは、先行研究の結果とも整合している。さらに、「大いなる力」と、曖昧さを魅力的なものと評価し、関与していくことに楽しみを見出す傾向（西村, 2007）である「曖昧さへの享受」に中程度の相関がみられたことは、曖昧さへの耐性とは異なる側面においても超自然的なものとの関わりが示された結果とも言えよう。

しかし、モデルの適合度指標からは仮説モデル1, 2ともに十分な適合は示されず、受容性の下位概念を選定する上での課題は残ることとなった。受容性にセルフ・コンパッションを加え、伝統的価値観と曖昧さへの態度の測定項目の見直しをすることにより、係数に有意差がみられる等、多少改善はされたものの、日本固有の宗教性に基づく伝統的価値観が、日本人特有の出来事を受容するための心理的能力 = 受容性を導き、その結果、心のゆとりに効果を与えるという仮説を支持するに足る結果とはならなかった。

その要因として、伝統的価値観が日本固有の宗教性に基づくものであることに対し、受容性を構成する下位概念が日本人特有の心理的能力をとらえきれていないことが推測される。セルフ・コンパッションについても、仏教思想や東洋哲学をもとに構成されているとはいえ、西洋からみた東洋を示したものであり、仏教思想や東洋哲学の本質を捉えきれていない可能性は排除できない。これらは西洋の思想に基づいた概念で測定をすることの難しさや問題点が発現したものとも考えられ、特に宗教性のように文化差が顕著であることが自明の概念を取り扱う際には、より慎重な検討が求められることを改めて示した結果と言えるであろう。以上を踏まえ、次回の調査では日本人特有の特性について掘り下げ、それらをもとに受容性の下位概念を構築する必要があると考えられる。

9.4. 研究 4-3 受容性の探索的検討 3

9.4.1. 目的

本研究では研究 4-1, 4-2 の結果をもとに, 受容性の下位概念を再検討する。

前述のとおり, 研究 4-1, 4-2 で用いた概念は, 受容性という心理的能力について日本人の持つ特性や本来性を反映できていたか, ものごとを受け入れるという概念に対する妥当性が担保されていたか, という点で疑問が残るものであった。そこで日本人の持つ特性や生き方への態度といった日本人特有の心理的能力を再考し, 感謝, 適応的諦観, 実存的生き方態度を受容性の下位概念として取り上げることとした。

人間の長所に焦点をあてた分類として, Values in Action Inventory of Strength (以降, VIA-IS とする) がある。Peterson & Seligman (2004) は, 米国精神医学会 (APA) の精神障害の診断および統計マニュアル (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders : DSM) や, 世界保健機関 (WHO) による国際疾病分類 (International Classification of Diseases : ICD) について, 人々の何が悪いのかを説明して測定できるようになったものの, それらが人間の半分しか表現していないことを指摘し, 人々がより良い生活を送るために性格の強みに焦点を当てることの必要性を主張した。そうして開発されたのが人間の強みを測定する尺度, VIA-IS である。VIA-IS は哲学や宗教等の思想をもとに整理した 6 つの領域 (Wisdom and Knowledge, Courage, Humanity, Justice, Temperance, Transcendence) に 24 の長所を含み, 24 の長所ごとに 10 項目を有する全 240 項目の尺度である。その後, 大竹他 (2005) によって日本語版が作成され, 生き方の原則調査票と名付けられた。この日本版生き方の原則調査票において, 男女問わずもっとも平均点が高かったのは超越性領域に含まれる「感謝」であった (大竹他, 2005)。

感謝について「自分が何らかの恩恵を与えられている」という感覚は共通している (池田, 2020) もの, その対象は人間に限らず, 自然や神, 生活全般の状況など (McCullough, Emmons, & Tsang, 2002; Adler & Fagley, 2005) 多岐に渡ることが示されている。Wood, Froh, & Geraghty (2010) は感謝を, 個人差である特性感謝と, 援助を受けた後に人々が経験し, それに対する返報を動機付ける状況感謝とに分け, それらが相互に作用し合うことを明らかにした。また感謝は, 人にだけでなく自分の人生にも向けられるとし, 他者の援助に生じる感謝だけでなく, 人生の前向きな側面に焦点を当てて感謝する習慣があることを指摘している。そして, 特性感謝を「世界の肯定的

な物事に気づき、その価値を認識するという人生の志向性の一部」と定義している。特性感謝得点が高い人は、ポジティブな感情や人生の満足度が高く、低い人と比べて向社会的志向であり、宗教性や精神性も高いことが報告されている (McCullough et al., 2002)。ここでの宗教性とは、西洋文化圏における伝統的な宗教性 (Religiousness) を表し、精神性 (spirituality) は、精神的な経験や感情を表す。

日本においては感謝の対象の範囲を対人関係に限定した研究が多い傾向にあり (e.g., 相川・矢田・吉野, 2013; 藤原・村上・西村・濱口・櫻井, 2014), 人間以外への感謝については、ほとんど研究が進められていないが、先に述べたように、日本の宗教心の中核をなす加護観念 (オカゲ) は、人間だけでなく自然や神仏の加護などすべてのものに対する報恩を表している。人間以外のものへの感謝という意識が日本人の基底に組み込まれていること、そして生き方の原則調査票でもっとも平均点が高かった (大竹他, 2005) ことを踏まえれば、「感謝」が日本人にとって本来性の高い特性と捉えるのは妥当だろう。

本研究では受容性を「出来事を多角的に捉え、適切な対処方略を導き出し適応する能力」を表す概念としている。個人が受け入れ難い出来事に直面したとき、適応していくためには、その出来事に執着しすぎないこと、すなわち、ある程度の諦めが必要であろうことは容易に察することができる。心理学において「諦め」は、コーピングスキルのひとつとして研究が進められてきた。Feifel & Strack (1989) は、葛藤状況における主な3つのコーピングスタイルとして Problem-solving (問題解決), Avoidance (回避) とともに Resignation (諦め) を挙げ、「ストレスの多い状況を変えようとせず、従い、受け入れること」としている。Carver, Scheier & Weintraub (1989) によるコーピング測定尺度では、active coping (積極的対処), planning (計画性) 等の11の有効な方略とともに、あまり役立たない3つの方略として、Behavioral disengagement (行動的諦め), mental disengagement (精神的諦め), Alcohol-drug disengagement (アルコールやドラッグへの逃避) が挙げられている。そして行動的諦め、精神的諦めは、ともに楽観性や自尊感情とは有意な負相関、不安とは有意な正相関を持つことが報告されている。

主にその非適応的側面が論じられてきた「諦め」の適応的な側面に焦点をあてたのが菅沼による一連の研究 (菅沼, 2013; 2014; 2015; 2017; 菅沼・中野・下山, 2018) である。「放置」, 「回避」など研究者によって異なる形で捉えられてきた「諦め」の概念を整理することによって、それらの多様なバリエーションを明らかにし、諦めが必ずしも精

神的健康に悪影響を与えるとは限らず、精神的健康への作用にも違いが生じることを報告している（菅沼, 2013; 2015）。そして、ものごとをあるがままに受け入れ、楽観的な諦観をもって思い悩まない認知的態度を「適応的諦観」と名付け、「自己や状況のネガティブな側面をそのまま受け入れつつも、そこにこだわらない前向きな態度」と定義している（菅沼他, 2018）。そして適応的諦観が社会的規範意識の強い日本人に特徴的なレジリエンスとして機能している可能性についても言及している。本研究においても、単に諦めるだけでは前述のように精神的健康に悪影響を与える可能性もあることを念頭に置いた上で、諦めの適応的な側面に着目した適応的諦観を取り扱うこととする。

最後に、適応して生きていく能力として生き方に対する態度を取り上げる。高井（1999）は、Frankl の実存分析理論に基づき、人が生きていく上で自分の人生に自分なりに意味や目標を見出していることや、自己の存在そのものに価値を見出すことができることは、人生を前向きに積極的に生き、日々の生活を充実して生きることにつながるとし、実存的生き方態度インベントリー（Extentional Attitude toward Life Inventory, 以降 EAL とする）を開発した。EAL は「主体性的側面（決断性・責任性・独自性）」、「自己の存在価値」、「自己課題性」、「意味志向性」で構成される尺度である。これらの下位尺度はいずれも自己受容、自尊感情と中程度以上の正の相関があり、個人の精神的健康に寄与していることが報告されている。

加えて、実存的生き方態度は存在受容感尺度（高井, 2001）との関連が深いことが示されている。他者による受容に焦点をあてた存在受容感尺度は、「他者からの受容感」、「孤独感・疎外感」、「超越力を意識」、「感謝・安らぎ感」で構成されている。他者からの受容という概念に「超越力を意識」、「感謝・安らぎ感」加えた理由について高井（2001）は、日本語の「お陰様で」という表現には人間だけでなく、大自然や宇宙、神仏など、人間を超越したものに対しての意味合いが含まれていることに触れ、宗教的次元も考慮したと述べており、日本人の宗教的背景や特性を考慮した構成であることがうかがえる。

EAL と存在受容感尺度にはすべての下位尺度間で有意な相関がみとめられ、中でも EAL の「自己の存在価値」は存在受容感の下位尺度すべてと中程度以上の相関がみられている。自然や宇宙、神仏など人智を越えたものや、感謝を含む存在受容感の本論において取り扱う概念に近接しており、それらと関連が高い実存的生き方態度は本論

での伝統的価値観や心のゆとりとも関連があることが予想される。ただし、実存的生き方態度におけるどのような側面と関わりが深いのかについて現段階で予測することは困難であるため、EALを用いて探索的な検討を試みることにする。

以上を踏まえ、本研究では受容性の下位概念として、特性感謝、適応的諦観、実存的生き方態度を取り上げ、伝統的価値観と心のゆとりとの関連を検討する。

9.4.2. 方法

調査参加者

クラウドソーシングサービスを用いて会員登録している268名からQualtricsで作成したWeb調査によって回答を得た。項目をよく読んできちんとした回答をしているかチェックする項目を3問用意し、2問の警告の上、3問目に正しく反応しなかった者22名を除いた246名（女性160名、男性82名、その他4名）を分析に用いた。平均年齢は42.45歳（ $SD = 12.05$ ）であった。

質問紙の構成

質問紙は以下の尺度で構成されていた。

- 伝統的価値観（44項目）

研究3で作成した改訂版伝統的価値観尺度について、「1：まったくそう思わない」－「7：非常にそう思う」の7点尺度によって回答を得た。

- 特性感謝（6項目）

特性感謝の測定尺度であるThe Gratitude Questionnaire Six Item Form：GQ-6（McCullough et al., 2002）の相川・矢田・吉野（2013）による邦訳版を使用し、6項目について「1：まったくあてはまらない」－「7：非常にあてはまる」の7点尺度によって回答を得た。

- 適応的諦観（10項目）

菅沼・中野・下山（2018）による適応的諦観尺度の10項目について、「1：まったくそう思わない」－「6：非常にそう思う」の6点尺度によって回答を得た。原典では因子負荷量の上位5項目が最終的に採用されているが、残りの5項目についても因子負荷量は.50以上であり、解釈の観点から必要と思われる項目が含まれているため、下位5項目も含めた計10項目を使用することとした。

- 実存的生き方態度 (35 項目)

実存的生き方態度インベントリ：EAL (高井, 1999) の全 35 項目について、「1:まったくあてはまらない」－「7:非常にあてはまる」の 7 点尺度によって回答を得た。

- 心のゆとり (21 項目)

富田 (2008) による主観的な心のゆとり感を測定する尺度 (35 項目) より、研究 4-1, 4-2 と同様の 21 項目を使用し、「1:まったくそう感じない」－「6:いつもそう感じている」の 6 点尺度によって回答を得た。

手続き

調査は Qualtrics を用い、各尺度内における項目の回答順序はランダム化した。Satisfice としての回答を抑制するために (三浦・小林, 2015)、教示、項目文を読んで回答しているか、3 度のチェック項目を設けた。1, 2 度目の指示に従わない回答に対しては警告教示を表示し、3 度目の回答に正しく反応しなかった者はデータから削除した。

統計分析

統計ソフトウェア R version 4.1.2 を用い、因子分析および相関検定、共分散構造分析を実施した。

9.4.3. 結果

各尺度の因子分析

各尺度について確認的因子分析をおこなった。心のゆとり (GFI = .827, RMSEA = .082, SRMR = .056) は許容範囲内の適合度であったため、研究 4-1, 4-2 で確認されたものと同様の因子構造を採用した。特性感謝 (GFI = .938, RMSEA = .130, SRMR = .061) と適応的諦観 (GFI = .889, RMSEA = .110, SRMR = .066) についても使用に耐えうる範囲であると判断し、原典どおり 1 因子構造を採用した (Table 9-10, 9-11)。

伝統的価値観と実存的生き方態度は十分な適合を示さず不適解となったため、探索的因子分析を実施した。伝統的価値観については、因子負荷量が .40 以下であった 1 項目 (「日頃の行いが良いといいことがあるような気がする」と、研究 3, 研究 4-2, 4-3 の 3 回に渡り、一貫して天井効果が出ていた 1 項目 (「事件や事故で人が亡くなった家にはなるべく住みたくないと思う」) を削除した。「言葉には発せられた内容どお

りの状態を実現する力があるような気がする」は上記2項目を除外後、因子負荷量が.40を下回ったが、解釈可能性を考慮し、現段階では残すこととした。その他の項目は研究4-2と同様の構造であることが確認された (Table 9-12)。実存的生き方態度は、因子負荷量が.40以下であった2項目を除外し、5因子構造を採用した (Table 9-13)。意味志向性因子に含まれていた「私はなにか役立つことをしたいと思う」、「私は社会や他の人のために役立つことをすることに喜びや生きがいを感じる」の2項目が独立した因子として抽出されたため、因子名は「献身」とした。その他の4因子は、多少の因子間移動はあるものの原典とほぼ同様の構造であったため、原典通りのものを使用した。各下位尺度の基本統計量を Table 9-14 に示す。

Table 9-10
特性感謝尺度の項目と基本統計量

項目	M	SD
1.私の人生には感謝することがたくさんある	5.47	1.38
2.もしも私が感じた感謝を全て挙げなければならぬとするならばそれはとても長いリストになる	4.93	1.64
3.私は世の中の人々がなぜそんなにたくさん感謝をするのかが分からない [R]	2.63	1.32
4.私は様々な人々に感謝をしている	5.33	1.31
5.歳を取るにつれて私は自分の人生に関わった人々や出来事 状況に以前よりも感謝できる	5.24	1.44
6.私がある事柄や誰かに感謝を感じるのにとっても長い時間がかかる [R]	3.69	1.50

注) [R]は逆転項目

Table 9-11
適応的諦観尺度の項目と基本統計量

項目	M	SD
1.失敗しても なんとかやっつけていける気がする	4.01	1.18
2.嫌なことがあってもなんとかなる気がする	3.93	1.24
3.うまくいかななくても何かしら意味があると思う	4.16	1.05
4.うまくいかないことがあっても仕方がないと思える	4.12	1.09
5.自分に弱点があっても まあいいかと思える	4.09	1.22
6.自分にとって何が大切か気づいている	4.07	1.23
7.周りに頼ることがあっても良い	4.78	0.96
8.自分には自信を持つべきだ	4.49	1.01
9.自分の強みを意識するようにしている	3.80	1.18
10.嫌なことでも ましな面を探すようにしている	4.07	1.10

Table 9-12
伝統的価値観尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5	M	SD
F1: 大いなる力 $\omega=.91$							
3.環境破壊を続けていると どうか大自然の怒りをかうのではないかと思う	.826	-.132	.077	-.010	-.154	5.59	1.17
2.自然は人間が統制できないものだと思う	.773	-.116	-.197	-.226	.098	5.98	0.98
19.自然には人間が手を加えない方がよいと思う	.748	-.021	-.095	-.222	-.044	5.41	1.34
18.物事はあまり人が力を加えないで 自然になるように任せておいた方が うまくいくと思う	.693	.166	-.006	-.361	.019	5.59	1.23
1.世の中には人間が立ち入ってはならない領域があるような気がする	.610	.041	-.019	.078	.046	4.95	1.32
6.世の中には科学で解明できないことがあると思う	.603	.061	-.073	.099	-.023	5.74	1.25
13.食べ物をそまつにするとすまないことをしたような気持ちになる	.564	-.256	-.083	.093	.069	5.38	1.28
4.自然の偉大さには神聖なものを感じる	.550	-.048	.140	.112	.069	5.16	1.37
15.ものごとがスムーズに進まないときは方向性が間違っていると 教えられているような気がする	.547	.179	.012	-.219	-.140	5.15	1.35
7.良いことも悪いことも自分のしたことはすべて自分に返ってくるような気がする	.533	-.153	.159	.095	-.055	5.11	1.29
17.ものをそまつにするとばちがあたると思う	.521	-.187	.147	.241	-.004	5.02	1.44
8.生き物だけでなく自然やものにも魂は宿っているような気がする	.519	-.044	-.061	.370	.157	6.03	0.87
9.虫の知らせ というのはあるような気がする	.512	.099	.118	-.005	-.083	5.08	1.46
12.山や川などには自然の霊が宿っているような気がする	.511	.179	-.027	.227	.031	4.87	1.29
10.きれいな言葉遣いを心がけていると心が澄んでよい人になると思う	.415	.077	.052	-.023	.133	5.20	1.39
16.掃除をすると心も浄化されるような気がする	.407	.139	.111	.057	-.058	5.34	1.18
5.言葉には発せられた内容どおりの状態を実現する力があるような気がする	.398	.256	.095	-.065	.040	4.76	1.17
14.病気やケガは休息を取る合図だと感じる	.355	.075	.083	-.013	-.077	5.10	1.13
F2: 吉兆 $\omega=.90$							
40.時計を見たときゾロ目だと良いことがありそうな気がする	-.042	.767	-.168	.059	.059	3.85	1.67
38.茶柱がたつと良いことがありそうな気がする	.112	.749	-.025	.006	-.002	4.56	1.54
39.虹を見ると良いことがありそうな気がする	.090	.663	-.014	.058	.015	4.48	1.48
37.四つ葉のクローバーが見つかる と良いことがありそうな気がする	-.043	.648	-.083	.292	.044	4.31	1.70
41.流れ星に願いごとをすると叶うと思う	-.021	.631	.038	.203	-.109	4.01	1.66
29.魔除けになるものを身の周りにおいておく とほっとする	-.008	.562	.164	-.081	.158	4.41	1.75
32.縁起の良いものを身の周りにおいておく と良いことがありそうな気がする	-.021	.516	.342	-.040	.055	3.56	1.72
30.塩にはお清めの効果があると思う	.180	.479	.139	.063	.043	3.33	1.68
F3: 祟りとばち $\omega=.87$							
20.死者の供養をしないとたたりがあると 思う	-.020	-.139	.912	.137	-.071	4.36	1.53
22.死者の供養など死に関連する行事はきちんと 行なっておくと安心だと思う	.058	-.157	.758	-.005	.117	4.18	1.52
21.先祖のお墓参りをしないと悪いことが 起きそうな気がする	-.058	.065	.697	.007	.095	5.29	1.33
23.厄年には厄払いをしておきたいと思う	-.069	.261	.607	-.147	.058	4.44	1.73
26.北まくらは何となく気になる	-.017	.186	.428	-.130	-.021	3.59	1.87
28.神や仏をそまつにするとばちがあたると 思う	.238	-.039	.405	.137	.232	5.17	1.39
31.人の恨みをかうと たたられそうだと 思う	.203	.212	.380	.113	-.189	4.67	1.36
F4: 死生観 $\omega=.87$							
42.死後の世界はあると思う	.091	.033	-.058	.821	-.050	3.99	1.51
25.この世で悪いことをした人は、死んだら地獄へ 落とされると思う	.072	.016	.040	.752	-.041	4.15	1.59
44.地獄や天国は想像上のものだと思う	.066	-.105	.012	-. 702	.045	4.18	1.67
43.人は死んでも繰り返し生まれ変わるような 気がする	.018	.229	-.145	.653	.061	3.90	1.57
24.この世に強い思いを残して亡くなった人は 成仏できないと思う	.032	.075	.268	.468	-.140	4.59	1.52
F5: 習俗 $\omega=.90$							
33.昔からあるしきたりや年中行事はこれからも 伝承していったほうが良いと思う	-.043	.016	-.001	.033	.889	4.92	1.32
35.古くから行われているしきたりや年中行事 には必要性を感じない	-.031	-.005	.078	.036	-. 882	4.94	1.30
34.昔からあるしきたりや年中行事は大切に した方がよいと思う	.035	-.010	.083	-.036	.876	3.27	1.42
36.お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを 感じる	-.008	.209	.184	-.180	.543	4.38	1.60
11.日頃の行いが良いと良いことがあるような 気がする							
27.事件や事故で人が亡くなった家にはなるべく 住みたくないと思う							
	因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5	
	F1	-	.462	.580	.573	.467	
	F2	-	-	.622	.567	.478	
	F3	-	-	-	.654	.499	
	F4	-	-	-	-	.373	

注) 最尤法・独立クラスター回転

Table 9-13
実存的生き方態度尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5	M	SD
F1：自己の存在価値 $\omega = .94$							
12.私は周囲の人たちにとって必要な存在であると思う	.920	-.084	-.096	.165	.001	4.28	1.57
14.私は生きている価値のある人間であると思う	.881	.047	-.145	.158	-.060	4.44	1.56
11.私は周囲の人にとって何らかの役に立っていると感じている	.769	.040	-.020	.091	.083	4.44	1.50
15.私には自分が大切に思う人 または自分を大切に思ってくれる人がいる	.750	.236	-.244	-.245	.126	5.52	1.40
17.私は、あるもののために またはある人のために生きていると言える対象がある	.692	-.054	.101	-.198	.136	4.80	1.74
27.私は自分の人生に対して自分なりに意味を見出している	.653	.080	.000	.358	-.175	4.46	1.49
13.私は毎日の生活の中で自分の役割を自分なりによく果たしていると思う	.581	.114	.166	.000	-.038	4.48	1.50
26.私は自分の仕事に対してやりがいを感じている	.513	-.071	.306	-.014	.107	4.41	1.59
22.私は自分の能力や可能性を生かした生き方をしていると思う	.463	.102	.223	.116	-.095	4.02	1.56
35.私は人生において自分なりの使命感を感じている	.461	-.034	.067	.396	.095	4.06	1.59
F2：主体的側面（決断性・責任性・独自性） $\omega = .91$							
8.私は孤独を覚悟してでも自分の信念に従って生きたいと思う	-.312	.853	-.024	.136	-.014	4.53	1.57
5.私は必要ならば権威に対してでも抵抗することができる	-.260	.791	-.065	.054	.149	4.23	1.40
3.私はたとえ人から非難されても自分が正しいと思うことは主張する	-.294	.788	.037	.116	.072	4.49	1.38
7.私は自分の行為の結果がたとえ悪くても その責任を自分でとることができる	.139	.743	-.087	-.037	.018	4.83	1.26
2.私は人からどう思われようと自分の感じ方や考え方を大切にしたい生き方をしている	.067	.688	-.022	.104	-.120	4.88	1.45
6.私は自分の生き方は自分で決めることができる	.198	.665	.174	-.225	-.020	5.04	1.39
1.私は直面する様々な問題に対してどのように対処するかを自分で決めることができる	.261	.646	.035	-.115	-.053	4.98	1.27
9.私は人生を自分の意志と決断によって生きていると感じている	.368	.616	.002	-.107	-.046	4.72	1.38
4.私は自分なりの価値観や良心に従って物事を考え 行動を決定している	.262	.556	.060	-.116	-.044	5.12	1.15
F3：自己課題性 $\omega = .92$							
19.私には目指す目標がある	.007	-.060	.972	-.116	-.042	4.63	1.56
18.私はいつもなにかの課題に取り組んでいる	-.143	.077	.834	-.016	.039	4.55	1.45
20.私はある目標を達成したなら すぐ次の新たな目標に向かっていく	-.135	.090	.730	.102	.048	4.22	1.52
21.私は自分のなすべき課題や目標を自分から進んで見つけようとする	-.067	.129	.685	.131	-.019	4.65	1.43
24.私は自分の人生を充実したものにする努力をしている	.276	-.120	.671	.100	-.026	4.66	1.43
23.私は仕事や家庭や社会的活動や趣味など自分が打ち込んでいるものがある	.184	-.041	.661	-.192	.054	4.90	1.58
25.私はいつもものごとくに意欲的に取り組んでいる	.252	.066	.487	.100	.023	4.39	1.40
F4：意味志向性 $\omega = .91$							
30.私は自分の苦しみや悩みの中にも意味を見出そうとしている	.173	-.003	.006	.679	.053	4.65	1.44
32.私はたとえ苦しくても自分にとって意味がある生き方をしたい	-.033	.153	-.012	.677	.056	4.85	1.38
31.私はいかなる運命や境遇におかれても そこに生きる意味を見出すことに努めたいと思う	.310	-.022	-.053	.656	.082	4.76	1.41
10.私はたとえつらくても自分が直面すべき自分自身の問題から逃げることはしたくない	.015	.292	.048	.519	.005	4.44	1.50
33.私は生きていく上で味わうつらい経験をも自分の成長の糧にしている	.241	.105	.145	.500	-.048	4.66	1.37
F5：献身 $\omega = .86$							
29.私はなにか役立つことをしたいと思う	.046	-.001	-.012	.055	.892	5.19	1.30
28.私は社会や他の人のために役立つことをすることに喜びや生きがいを感じる	.123	-.041	.080	.105	.673	4.72	1.33
16.私は自分のなすべき仕事や役割は責任をもってやりとげる							
34.私は人との関わりによって、自分自身というものを深く知ることができると思う							
	因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5	
	F1	-	.610	.726	.531	.465	
	F2	-	-	.725	.715	.352	
	F3	-	-	-	.736	.432	
	F4	-	-	-	-	.456	

注) 最尤法・独立クラスター回転

Table 9-14
下位尺度の基本統計量

		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>ω</i>
伝統的価値観	大いなる力	5.30	0.78	.91
	崇りとぼち	4.53	1.12	.90
	習俗	4.74	1.23	.87
	吉兆	4.06	1.28	.87
	死生観	3.93	1.27	.90
特性感謝	特性感謝	5.11	1.08	.87
適応的諦観	適応的諦観	4.15	0.78	.88
実存的生き方態度	自己の存在価値	4.49	1.24	.94
	主体性的側面	4.76	1.03	.91
	自己課題性	4.57	1.22	.92
	意味志向性	4.67	1.21	.91
	献身	4.96	1.23	.86
心のゆとり	心の充足・開放性	3.69	1.02	.92
	切迫・疲労感	3.74	1.13	.94
	対他的ゆとり	3.79	0.95	.87

下位尺度間の相関

伝統的価値観と各尺度との関連を探るため、各下位尺度の積率相関係数を算出した (Table 9-15)。伝統的価値観と受容性の各下位概念との間には一部に低～中程度の有意な関連がみられ、中でも「大いなる力」と特性感謝 ($r = .400, p < .001$)、適応的諦観 ($r = .340, p < .001$) とには中程度の相関がみとめられた。

実存的生き方態度については、どの下位尺度が伝統的価値観と関連が深いかを探索的に検討するものであった。その結果、もっとも関連が高かったのは「自己の存在価値」と「献身」であった。本研究の類似概念である存在受容感尺度 (高井, 2001) の「超越力を意識」「感謝・安らぎ感」などとの関連が高いとされていた「自己の存在価値」が、本研究においても関連が高いという結果であった。なお、「献身」については、構成する項目が2項目のみであったため構成概念妥当性の観点から採用を見送り、共分散構造分析には「自己の存在価値」を用いることとした。

伝統的価値観と心のゆとりについては、研究4-2とは異なり、ほとんどの下位尺度で相関がみとめられず、「大いなる力」と「対他的ゆとり」との間に弱い相関 ($r = .227, p < .05$) がみられたに留まった。また、伝統的価値観と「切迫・疲労感」との間にはほとんど関連がみとめられず、研究4-1, 4-2, 4-3を通して一貫した結果であった。

一方、受容性の各下位概念と心のゆとりとの間には特性感謝と「切迫・疲労感」を除くすべての下位尺度において中程度以上の相関がみとめられた。中でも「心の充足・開放性」は、「適応的諦観」 ($r = .691, p < .001$)、「自己の存在価値」 ($r = .765, p < .001$) との間に強い相関がみられた。

Table 9-15
下位尺度間の相関

	特性感謝	適応的諦観	存在価値	主体性的側面	自己課題性	意味志向性	献身	充足・開放性	切迫・疲労感	対他的ゆとり
大いなる力	.400 ***	.340 ***	.324 ***	.284 **	.277 **	.334 ***	.419 ***	.205	-.089	.227 *
崇りとばち	.152	.106	.244 *	.073	.171	.216	.266 **	.158	-.004	.176
習俗	.213	.133	.193	.075	.169	.205	.246 *	.081	-.010	.124
吉兆	.182	.158	.264 **	.040	.108	.172	.257 **	.171	-.037	.171
死生観	.203	.132	.249 **	.050	.139	.141	.211	.142	-.010	.203
特性感謝		.450 ***	.437 ***	.307 ***	.348 ***	.395 ***	.372 ***	.433 ***	-.169	.445 ***
適応的諦観			.717 ***	.686 ***	.635 ***	.676 ***	.486 ***	.691 ***	-.538 ***	.647 ***
自己の存在価値				.662 ***	.771 ***	.723 ***	.563 ***	.765 ***	-.541 ***	.672 ***
主体性的側面					.701 ***	.739 ***	.403 ***	.584 ***	-.456 ***	.579 ***
自己課題性						.766 ***	.516 ***	.614 ***	-.415 ***	.552 ***
意味志向性							.558 ***	.562 ***	-.421 ***	.597 ***
献身								.418 ***	-.266 **	.464 ***
心の充足・開放性									-.738 ***	.735 ***
切迫・疲労感										-.601 ***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

共分散構造分析

仮説モデルの妥当性を検証するため、共分散構造分析を実施した結果、伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定した仮説モデル1、伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定しない仮説モデル2ともに、すべての係数は1%水準で有意であった。

受容性から心のゆとりへの係数は、仮説モデル1では0.951 ($p < .001$, 95% CI [0.894, 1.009]), 仮説モデル2では0.902 ($p < .001$, 95% CI [0.857, 0.947])であり、研究4-1, 4-2と同様に実質的な影響があることが示された。伝統的価値観から受容性への係数についても、仮説モデル1は0.350 ($p < .001$, 95% CI [0.221, 0.479]), 仮説モデル2は0.309 ($p < .001$, 95% CI [0.181, 0.438])と、ともに一定程度の関連が認められた。仮説モデル1における伝統的価値観から心のゆとりへの係数は-0.123 ($p < .05$, 95% CI [-0.216, -0.030])であった。モデルの適合度指標は仮説モデル1 (GFI = .916, CFI = .942, RMSEA = .095, SRMR = .060, AIC = 17378.313), 仮説モデル2 (GFI = .912, CFI = .939, RMSEA = .097, SRMR = .066, AIC = 17383.039)ともに研究4-1, 4-2と比較すると改善はされたが、十分な適合とは言えない結果であった。

したがって、モデルの修正をおこない、研究4-1から4-3において一貫して伝統的価値観との関連がみとめられなかった心のゆとりの「切迫・疲労感」をモデルから除外することとした。共分散構造分析を実施した結果、仮説モデル1, 仮説モデル2ともにすべての係数は5%水準で有意であった (Figure 9-5, 9-6)。受容性から心のゆとりへの係数は、仮説モデル1では0.991 ($p < .001$, 95% CI [0.934, 1.048]), 仮説モデル2では0.953 ($p < .001$, 95% CI [0.910, 0.996])と、ともに実質的な影響があることが示された。伝統的価値観から受容性への係数についても、仮説モデル1が0.350 ($p < .001$, 95% CI [0.221, 0.479]), 仮説モデル2が0.315 ($p < .001$, 95% CI [0.187, 0.443])と一定程度の関連が認められ、仮説モデル1の伝統的価値観から心のゆとりへの係数は-0.098 ($p < .01$, 95% CI [-0.192, -0.005])であった。

モデルの適合度指標については、仮説モデル1 (GFI = .931, CFI = .953, RMSEA = .090, SRMR = .053, AIC = 15716.930), 仮説モデル2 (GFI = .929, CFI = .950, RMSEA = .091, SRMR = .056, AIC = 15719.153)とともに許容範囲内であり、一定程度の適合が確認できたと考える。ただし研究4-1, 4-2と同様に、両モデルに明確な差異は認められなかった。

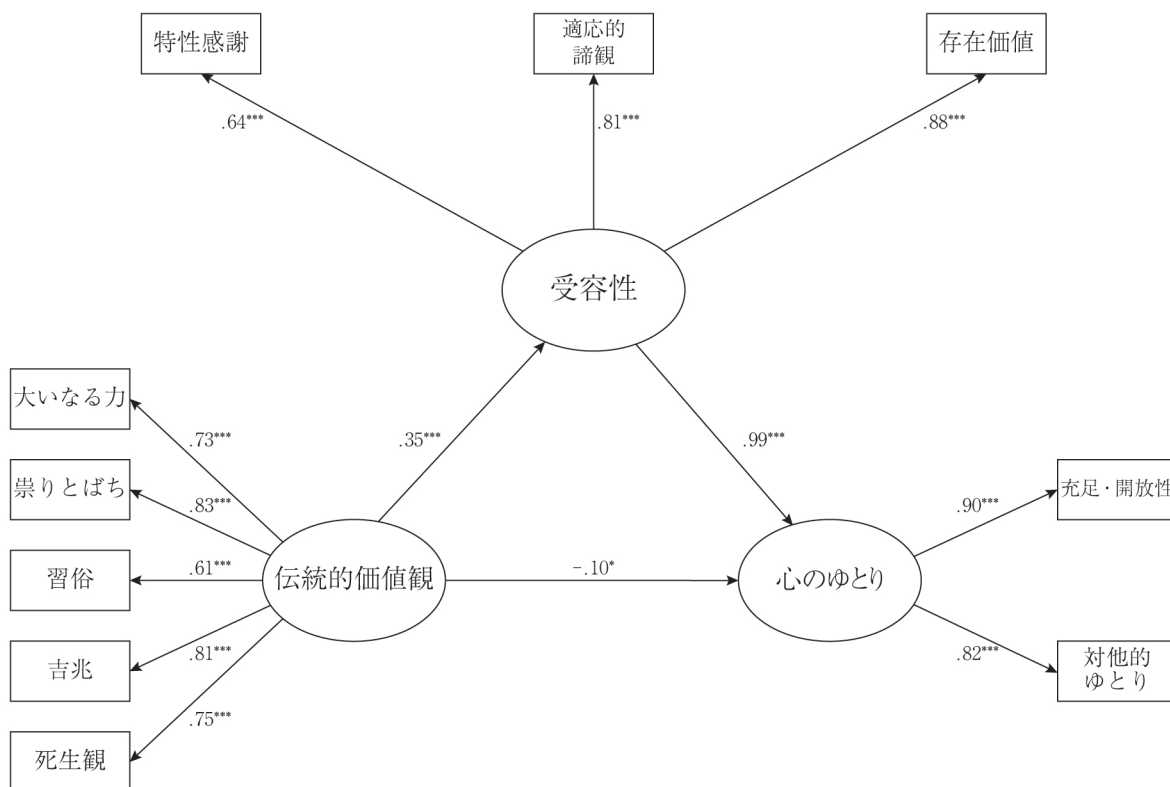


Figure 9-5. 伝統的価値観と受容性、心のゆとりとの関連（仮説モデル1）。GFI = .931, CFI = .953, RMSEA = .090, SRMR = .053, AIC = 15716.930。
 注) 誤差項の表記は省略した。
 *** $p < .001$, * $p < .05$

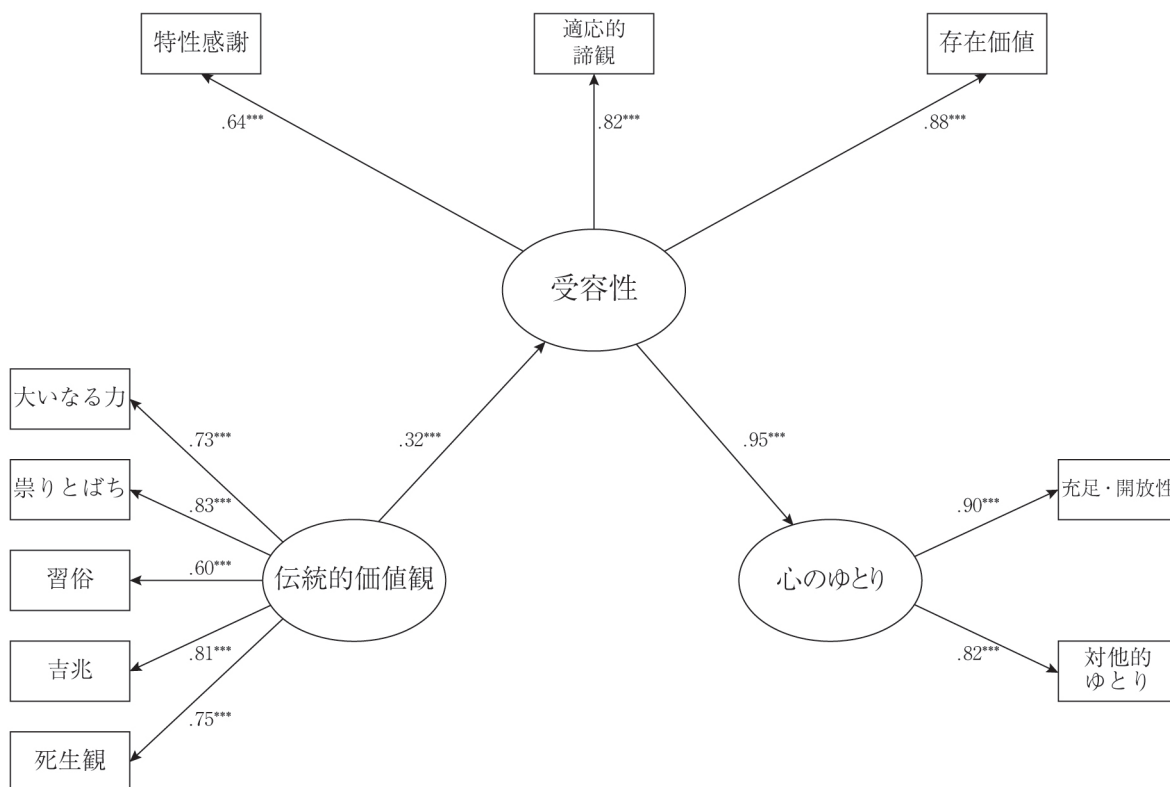


Figure 9-6. 伝統的価値観と受容性、心のゆとりとの関連（仮説モデル2）。GFI = .929, CFI = .950, RMSEA = .091, SRMR = .056, AIC = 15719.153。
 注) 誤差項の表記は省略した。
 *** $p < .001$

9.4.4. 考察

本研究では日本人の持つ特性や生き方への態度といった日本人特有の心理的能力を再考し、受容性の下位概念を捉え直すことを試みた。そして、そこから導かれた特性感謝、適応的諦観、実存的生き方態度という3つの指標を用い、受容性の下位概念としての妥当性を検討した。

まず、実存的生き方態度におけるどのような側面と関わりが深いのかについてEALを用いて探索的な検討を試みたところ、下位尺度間の相関から伝統的価値観ともっとも関連が高かったのは、先行研究の結果と同様の「自己の存在価値」であった。そこで、特性感謝、適応的諦観に加え、自己の存在価値を本研究における受容性の下位概念として扱うこととした。

以上を用いて共分散構造分析をおこなった結果、モデルの適合度は研究4-1, 4-2に比べ改善はされたものの、十分な適合は示されなかった。したがってモデルの修正をおこなうこととし、研究4-1, 4-2を含め一貫して伝統的価値観との関連がほとんどみとめられなかった心のゆとりの「切迫・疲労感」を除外することとした。

多くの先行研究において、時間的余裕、経済的余裕は「ゆとり」の一部でありながら、心のゆとりとは本質的な次元が異なると言及されている。心のゆとり感尺度は経済的ゆとりや時間的ゆとりといった物理的社会条件を除外し、心のゆとりのある状態とない状態という両側面に焦点をあてて作成された尺度であるが、「切迫・疲労感」には状況が関連している可能性が指摘されている(富田, 2008)。本研究の結果は、「切迫・疲労感」には特性や認知などの内的要因に比べ、状況や時間といった外的要因が深く関わっている可能性をあらためて示したものであるともいえる。

第1部における議論のとおり、本研究での心のゆとりは資源のように保持する容量の上限が規定されるものではなく、伸縮可能な1枚の布のようなものというイメージである。基盤となる「場」の上に、頭の中を支配していることがらがのっており、その余白である処理スペースの余地をゆとりと捉えている。そして、ことがら自体だけでなく、場の伸縮によってもその余白であるゆとりの面積は変化すると考えている。「切迫・疲労感」がどちらかという外的要因=ことがらに左右されるものであるとすると、伝統的価値観はことがらではなく、基盤である場の部分に影響を与え、ゆとりを減じにくくする効果を持つのかもしれない。

心のゆとりの「切迫・疲労感」を除外した修正モデルを用いて共分散構造分析を実

施した結果，仮説モデル 1，2 ともすべての係数は 5%水準で有意となり，それぞれの潜在変数間には一定程度の関連があることが示された。また，適合度についても両モデルとも許容範囲内であった。両モデルの差異については，研究 4-1，4-2 と同様に明確には認められなかった。

9.5. 考察

本研究の目的は、伝統的価値観が心のゆとりに与える効果を媒介すると考えられる受容性の下位概念を探索的に検討することであった。

本論では、出来事を受容する過程において、日本固有の宗教性に基づく伝統的価値観が、日本人特有の出来事を受容するための心理的能力 = 受容性を導き、その結果、心のゆとりに影響を与えると捉えている。ここでの受容性とは、「出来事を多角的に捉え、適切な対処方略を導き出し適応する能力」を表している。先行研究では、日本人が非合理的なものとの心のかかわり合いが多いことや、日本の宗教性が表出されにくく、自覚されにくいことは多く論じられているが、それらが実際に何に影響を与えるのかは明らかになっておらず、受容性の下位概念にどのようなものが含まれるのかを理論的に予測することは困難であったため、本論における仮説検証の予備的研究として受容性の下位概念を探るべく、探索的な検討を重ねることとした。

研究 4-1 では、受容性の下位概念として、認知的柔軟性、曖昧さへの態度、レジリエンスの3指標を用い、伝統的価値観と心のゆとりとの関連を検討した。受容性から心のゆとりへの係数をみると、信頼区間からも実質的に心のゆとりの向上に受容性が影響していることが示された。しかしながら伝統的価値観から受容性、心のゆとりへの係数はいずれも有意ではなく、適合度指標からも十分な適合は示されなかった。その要因としてまず、精神的回復力として扱ったレジリエンスが挙げられる。レジリエンスは前述のとおり「困難で脅威的な状態にさらされることで一時的に心理的不健康の状態に陥っても、それを乗り越え、精神的病理を示さず、よく適応している状態」（小塩他, 2002）を表すとされている。つまり、受け入れるというより「乗り越え、適応する = 折れずにがんばる」という概念であり、本論での受容性が、日本固有の宗教性に基づく伝統的価値観によって導かれる日本人特有の出来事を受容するための心理的能力として捉えていることと照らし合わせると、多少符号しない部分があったのかもしれない。

次に、測定方法の問題である。曖昧さへの態度は先行研究ではおおむね超自然的なものとの関連性が示されていた (e.g., 菊池・長谷川, 2009; 坂田他, 2014)。ところが、研究 4-1 では伝統的価値観との有意な相関はみられなかった。本研究における超自然的なものが科学的常識とは絶対的に矛盾した現象 (原田, 1997) に属するものに限定していることや、曖昧さへの耐性だけでなく多次元での態度を測定していることを勘案

しても、多少の関連性がみとめられることが推測でき、測定項目に問題があった可能性がある。研究 4-1 では質問項目が多いことによる参加者の負担を考慮し、予備調査をもとに項目を選定したが、それが妥当性の低下につながった可能性は否定できない。また、伝統的価値観尺度についても、研究 3 において指摘しているとおり質問文の表現と概念の偏りという 2 点について改善の余地があるものであった。

研究 4-2 では、受容性の下位概念として、認知的柔軟性、曖昧さへの態度、セルフ・コンパッションの 3 指標を用いた。受容性から心のゆとりへの係数については、信頼区間からも実質的な影響が示され、研究 4-1 に続き心のゆとりの向上に対する受容性の効果が示された。伝統的価値観から受容性、心のゆとりへの係数も、小さいながら関連があることが示された。この点に関しては、研究 4-1 で指摘した曖昧さへの態度と伝統的価値観の測定方法の問題が改善されたことによるものであると考えられる。下位尺度間の相関において、伝統的価値観と曖昧さへの態度との間に一定の関連がみとめられたことは、先行研究の結果とも整合している。

しかし、適合度指標からは仮説モデル 1, 2 ともに十分な適合は示されず、受容性の下位概念を選定する上での課題は残ることとなった。受容性にセルフ・コンパッションを加え、伝統的価値観と曖昧さへの態度の測定項目の見直しをすることにより、係数に有意差がみられる等、多少改善はされたものの、仮説を支持するに足る結果とはならなかった。

その要因として、受容性を構成する下位概念が日本人特有の心理的能力を捉えきれていないことが推測される。セルフ・コンパッションについても、仏教思想や東洋哲学をもとに構成されているとはいえ、西洋からみた東洋を示したものであり、仏教思想や東洋哲学の本質を捉えきれていない可能性は排除できない。これらは西洋の思想に基づいた概念で測定をすることの難しさや問題点が発現したものとも考えられ、特に宗教性のように文化差が顕著であることが自明の概念を取り扱う際には、より慎重な検討が求められることを改めて示した結果と言えるであろう。以上を踏まえ、今回の調査では日本人特有の特性について掘り下げ、それらをもとに受容性の下位概念を構築することとした。

研究 4-3 は、日本人の持つ特性や生き方への態度をもとに日本人特有の心理的能力について掘り下げ、それらをもとに受容性の下位概念を捉え直す試みであった。前述のとおり、研究 4-1, 4-2 で用いた概念は、受容性という心理的能力について日本人

の持つ特性や本来性を反映できていたか、ものごとを受け入れるという概念に対する妥当性が担保されていたか、という点で疑問が残るものであった。そこで、日本人の持つ特性や本来性を反映していると考えられる概念を再度丁寧に選定することとした。

まず、日本の宗教心の中核をなす加護観念（オカゲ）が、人間だけでなく、自然や神仏の加護などすべてのものに対する報恩を表しており、日本人の基底にはそのような意識が組み込まれていると考えられること、そして生き方の原則調査票でもっとも平均点が高かったのが「感謝」であった（大竹他, 2005）ことから、日本人にとって本来性の高い特性だと考えられる特性感謝を取り上げた。次に、個人が受け入れ難い出来事に直面したとき、執着せずに適応していくために必要であると考えられる「諦め」に着目し、適応的諦観を取り上げた。非適応的な側面に目を向けられがちな諦めの適応的な側面に焦点をあてた適応的諦観は、ものごとをあるがままに受け入れ、楽観的な諦観をもって思い悩まない認知的態度（菅沼他, 2018）とされ、社会的規範意識の強い日本人に特徴的なレジリエンスとして機能している可能性が述べられている。最後に、人が生きていく上で自分の人生に自分なりに意味や目標を見出していることや、自己の存在そのものに価値を見出すことができること（高井, 1999）などの精神的健康の側面に焦点を当てた実存的生き方態度を取り上げた。このような生き方態度は、人生を前向きに積極的に生き、日々の生活を充実して生きることにつながる（高井, 1999）とされる。さらに、実存的生き方態度は存在受容感尺度（高井, 2001）との関連が深いことが示されている。存在受容感尺度の下位尺度には「超越力を意識」、「感謝・安らぎ感」といった本研究と類似するものが含まれおり、本論で扱う概念との関連が推測できる。

以上の議論をもとに、特性感謝、適応的諦観、実存的生き方態度という3つの指標を用い、受容性の下位概念としての妥当性を検討することとした。実存的生き方態度については、下位尺度間の相関から伝統的価値観ともっとも関連が高かった「自己の存在価値」を採択した。

以上を用いて共分散構造分析をおこなった結果、研究4-1, 4-2と比較するとモデルの適合度はある程度改善はされたものの、十分な適合は示されなかった。したがって、モデルの修正をおこない、研究4-1, 4-2を含め一貫して伝統的価値観との関連がほとんどみとめられなかった心のゆとりの「切迫・疲労感」を除外することとした。多くの先行研究において、時間的余裕、経済的余裕は「ゆとり」の一部でありながら、

心のゆとりとは本質的な次元が異なると言及されている。心のゆとり感尺度は経済的ゆとりや時間的ゆとりといった物理的社会条件を除外し、心のゆとりのある状態とない状態という両側面に焦点をあてて作成された尺度であるが、「切迫・疲労感」には状況が関連している可能性が指摘されている（富田, 2008）。本研究の結果は、「切迫・疲労感」には特性や認知などの内的要因に比べ、状況や時間といった外的要因が深く関わっている可能性をあらためて示したものであるともいえる。

修正したモデルを用いて共分散構造分析を実施した結果、すべての係数は5%水準で有意となり、それぞれの潜在変数間には一定程度の関連があることが示された。モデルの適合度は両モデルとも許容範囲内となり改善されたが、両モデルの差異については研究4-1, 4-2と同様、明確には認められなかった。

以上の結果をもって、本論における受容性の下位概念として、特性感謝、適応的諦観、自己の存在価値を用いることとした。

10. 研究 5 伝統的価値観が心のゆとりに与える効果

10.1. 目的

本研究は、研究 1 から 4 の結果を踏まえ、「日本における素朴な宗教心に基づく伝統的な価値観およびそれが含有する超自然的なものに対する信念が、日本人特有の出来事に対する捉え方（＝受容性）を導き、その結果、心のゆとりに影響を与える」という本論における仮説モデル（Figure 5-1, 5-2 再掲）の検証を試みるものである。



Figure 5-1. 本論における仮説モデル 1
注) 伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定するモデル

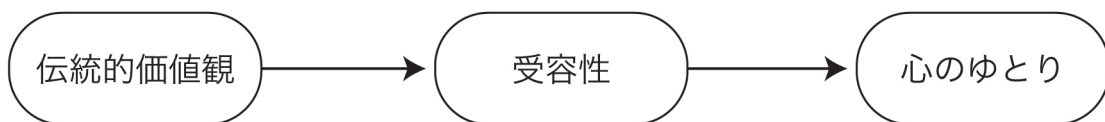


Figure 5-2. 本論における仮説モデル 2
注) 伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定しないモデル

ここでの受容性とは、「出来事を多角的に捉え、適切な対処方略を導き出し適応する心理的能力」を表す概念として用いる。先行研究では、日本人が非合理的なものとかかわり合いが多いこと、日本の宗教性が表出されにくく自覚されにくいことは多く論じられているが、それらが実際に何に影響を与えるのかは明らかになっておらず、受容性がどのような下位概念で構成されるのかを理論的に予測することは困難であった。したがって、受容性の下位概念については、仮説検証に向けた予備的研究として、研究 4 において探索的な検討を重ねることとした。本研究では、研究 4 で導き出された特性感謝、適応的諦観、自己の存在価値を受容性の下位概念として用いることとする。

10.2. 方法

調査参加者

クラウドソーシングサービスを用いて会員登録している 1576 名から Qualtrics で作成した Web 調査によって回答を得た。項目をよく読んできちんとした回答をしているかチェックする項目を 3 問用意し、2 問の警告の上、3 問目に正しく反応しなかった者 273 名と回答時間が 5 分以下の 34 名、二度回答した 4 名を除いた 1265 名（女性 862 名、男性 395 名、その他 8 名）を分析に用いた。平均年齢は 39.77 歳 ($SD = 10.98$) であった。

質問紙の構成

質問紙は以下の尺度で構成されていた。

- 伝統的価値観（42 項目）

研究 3 で作成した改訂版伝統的価値観尺度について、「1：まったくそう思わない」－「7：非常にそう思う」の 7 点尺度によって回答を得た。

- 特性感謝（6 項目）

特性感謝の測定尺度である The Gratitude Questionnaire Six Item Form：GQ-6 (McCullough et al., 2002) の相川他 (2013) による邦訳版を使用し、6 項目について「1：まったくあてはまらない」－「7：非常にあてはまる」の 7 点尺度によって回答を得た。

- 適応的諦観（10 項目）

菅沼他 (2018) による適応的諦観尺度の 10 項目について、「1：まったくそう思わない」－「6：非常にそう思う」の 6 点尺度によって回答を得た。研究 4-3 と同様に 10 項目を使用することとした。

- 実存的生き方態度（10 項目）

実存的生き方態度インベントリー：EAL (高井, 1999) 全 35 項目より、研究 4-3 の結果に基づき、「自己の存在価値」の 10 項目について、「1：まったくあてはまらない」－「7：非常にあてはまる」の 7 点尺度によって回答を得た。

- 心のゆとり（21 項目）

富田 (2008) の心のゆとり感尺度 (35 項目) より、研究 4 と同様の 21 項目を使用し、「1：まったくそう感じない」－「6：いつもそう感じている」の 6 点尺度によって回答を得た。

手続き

調査は Qualtrics を用い、各尺度内における項目の回答順序はランダム化した。Satisfice としての回答を抑制するために（三浦・小林, 2015）、教示、項目文を読んで回答しているか、3度のチェック項目を設けた。1, 2度目の指示に従わない回答に対しては警告教示を表示し、3度目の回答に正しく反応しなかった者はデータから削除した。

統計分析

統計ソフトウェア R version 4.1.2 を用い、因子分析および相関検定、共分散構造分析を実施した。

10.3. 結果

各尺度の因子分析

伝統的価値観尺度と心のゆとり尺度について確認的因子分析をおこなった結果、伝統的価値観（GFI = .834, RMSEA = .058, SRMR = .057）、心のゆとり（GFI = .870, RMSEA = .080, SRMR = .054）ともに適合度はおおむね許容範囲内であったため、研究 4-3 で確認された因子構造を採用した。1因子構造である特性感謝（GFI = .957, RMSEA = .123, SRMR = .056）と適応的諦観（GFI = .925, RMSEA = .099, SRMR = .053）についても使用に耐えうると判断した。各下位尺度の基本統計量を Table 10-1 に示す。

Table 10-1
下位尺度の基本統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>	ω
大いなる力	5.40	0.73	.88
崇りとばち	4.68	1.10	.85
習俗	4.19	1.27	.84
吉兆	4.35	1.21	.88
死生観	4.87	1.15	.87
特性感謝	5.28	1.01	.85
適応的諦観	4.34	0.78	.87
自己の存在価値	4.61	1.24	.93
心の充足・開放性	3.71	1.03	.92
切迫・疲労感	3.80	1.08	.93
対他的ゆとり	3.88	0.97	.86

下位尺度間の相関

伝統的価値観と各尺度との関連を探るため、各下位尺度の積率相関係数を算出した (Table 10-2)。伝統的価値観と受容性の全下位概念との間には低～中程度の有意な関連がみとめられた。「大いなる力」が特性感謝 ($r = .421, p < .001$)、適応的諦観 ($r = .371, p < .001$)、自己の存在価値 ($r = .298, p < .001$) と、受容性の下位概念すべてと関連がみとめられたことは研究4と同様での結果であった。そのほかに、特性感謝は「祟りとばち」 ($r = .269, p < .001$)、「吉兆」 ($r = .299, p < .001$)、「習俗」 ($r = .310, p < .001$) と中程度の相関が示され、「吉兆」は自己の存在価値との間にも弱い相関 ($r = .250, p < .001$) がみとめられた。

伝統的価値観と心のゆとりについては、研究4と同様に本研究においても「切迫・疲労感」との間にはほとんど関連はみとめられなかった。そのため、研究4における議論をもとに、「切迫・疲労感」は本研究においてもモデルから除外することとした。そのほかの「心の充足・開放性」、「対他的ゆとり」との間には弱いながらも、すべての下位概念同士に相関がみとめられた。

受容性と心のゆとりには、すべての下位概念間において中程度以上の相関がみとめられた。中でも自己の存在価値と「心の充足・開放性」 ($r = .681, p < .001$)、「対他的ゆとり」 ($r = .612, p < .001$)、適応的諦観と「心の充足・開放性」 ($r = .592, p < .001$) とには強い相関がみられた。

Table 10-2
下位尺度間の相関

	特性感謝	適応的諦観	存在価値	充足・開放性	切迫・疲労感	対他的ゆとり
大いなる力	.421 ***	.371 ***	.298 ***	.229 ***	-.009	.286 ***
祟りとばち	.269 ***	.113 **	.167 ***	.085 *	.088 *	.156 ***
死生観	.201 ***	.125 ***	.169 ***	.082 *	.037	.123 ***
吉兆	.299 ***	.218 ***	.250 ***	.190 ***	-.001	.215 ***
習俗	.310 ***	.150 ***	.167 ***	.132 ***	.000	.168 ***
特性感謝		.437 ***	.429 ***	.365 ***	-.120 ***	.409 ***
適応的諦観			.651 ***	.592 ***	-.392 ***	.564 ***
自己の存在価値				.681 ***	-.455 ***	.612 ***
心の充足・開放性					-.670 ***	.683 ***
切迫・疲労感						-.481 ***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

年代別の検討

伝統的価値観に対する認識に年代による差異があるのかを検討するため、年代を独立変数、伝統的価値観の各下位尺度得点を従属変数とする一元配置分散分析を実施した。参加者の年齢を10歳ごとに区分したところ、10代16名、20代222名、30代413名、40代358名、50代202名、60代49名、70代5名であった。10代、60代、70代はそれぞれ50名に満たなかったため、20代から50代の1195名を分析に用いることとした。

分散分析の結果、「大いなる力」($F(3, 1191) = 3.59, p < .05, \eta^2 = .008$)と「習俗」($F(3, 1191) = 4.70, p < .01, \eta^2 = .012$)に有意差がみとめられた。Tukeyの多重比較をおこなったところ、「大いなる力」は20代<40代 ($p < .05$)、「習俗」は20代<40代 ($p < .05$)、20代<50代 ($p < .05$)に差異がみとめられた。しかしながら、いずれも効果量は低く、実質的な年代の差異はみられなかったと言える。

共分散構造分析

仮説モデルの妥当性を検証するため、共分散構造分析を実施した結果、伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定した仮説モデル1、伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定しない仮説モデル2ともに、すべての係数は0.1%水準で有意であった(Figure 10-1, 10-2)。

受容性から心のゆとりへの係数は、仮説モデル1では0.968 ($p < .001, 95\% \text{ CI } [0.934, 1.002]$)、仮説モデル2では0.922 ($p < .001, 95\% \text{ CI } [0.896, 0.948]$)であり、実質的な影響が高いことが示された。伝統的価値観から受容性への係数についても、仮説モデル1は0.370 ($p < .001, 95\% \text{ CI } [0.312, 0.428]$)、仮説モデル2は0.336 ($p < .001, 95\% \text{ CI } [0.279, 0.393]$)と、ともに一定程度の関連が示された。仮説モデル1の伝統的価値観から心のゆとりへの係数は-0.102 ($p < .001, 95\% \text{ CI } [-0.152, -0.052]$)であった。

モデルの適合度指標は仮説モデル1 (GFI = .938, CFI = .938, RMSEA = .097, SRMR = .065, AIC = 80924.118)、仮説モデル2 (GFI = .937, CFI = .936, RMSEA = .097, SRMR = .068, AIC = 80937.652)ともに許容範囲内であり、一定程度の適合が確認できた。

仮説モデル1と2との比較については、情報量規準において仮説モデル1 (AIC = 80924.118, BIC = 81042.403)が仮説モデル2 (AIC = 80937.652, BIC = 81050.794)より当てはまりが良いという結果であった。その他の主要な適合度に明確な差は認められなかったが、仮説モデル1の方がわずかに当てはまりが良いというものであった。以上を踏まえて検討した結果、本論においては、伝統的価値観から心のゆとりへのパ

スを仮定する仮説モデル1を採択した。

伝統的価値観から心のゆとりへの効果については、媒介変数を仮定しない伝統的価値観と心のゆとりの2変数のみのモデルでは、0.257 ($p < .001$, 95% CI [0.194, 0.319])と実質的な影響が示されていた。一方で、仮説モデル1においては-0.102 ($p < .001$, 95% CI [-0.152, -0.052])とほぼ0に近い結果であった。これは、受容性という媒介変数が伝統的価値観から心のゆとりへの直接効果を打ち消すほどの効果を持つとも解釈できる結果であり、本論における仮説は支持されたといえよう。

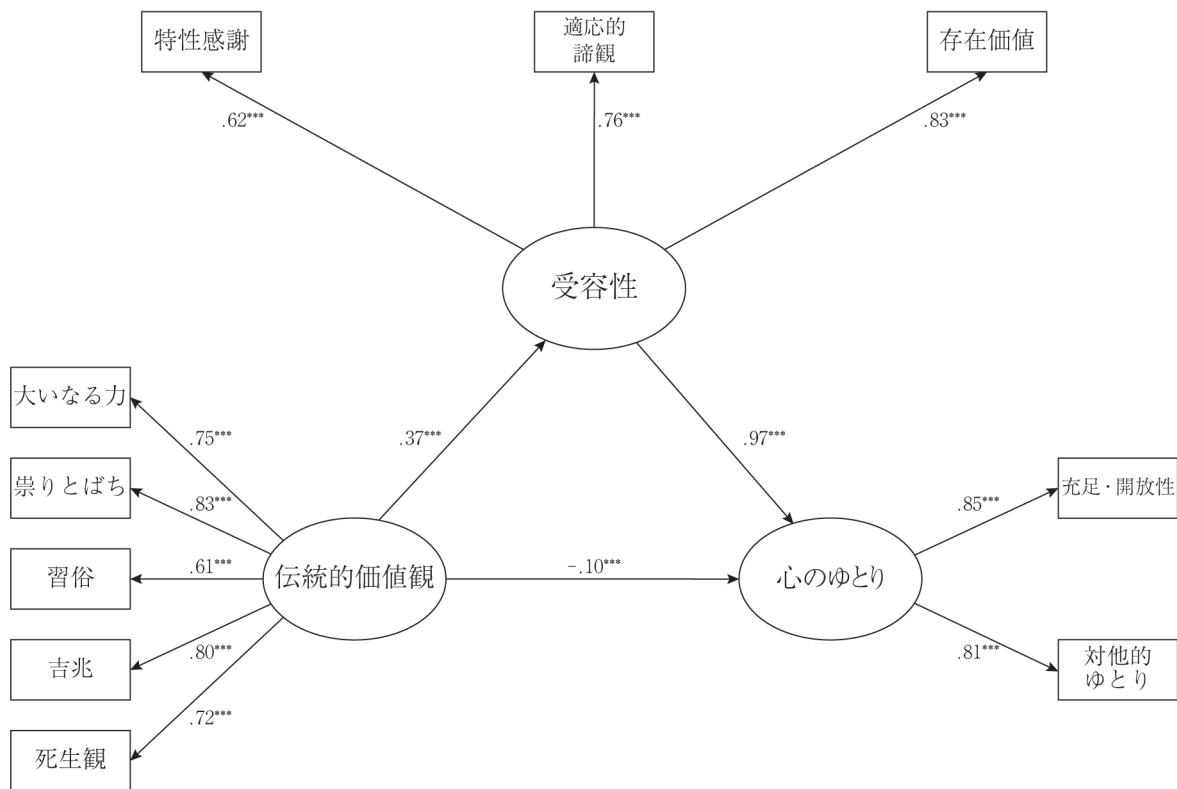


Figure 10-1. 伝統的価値観と受容性、心のゆとりとの関連（仮説モデル1）。GFI = .938, CFI = .938, RMSEA = .097, SRMR = .065, AIC = 80924.118。

注) 誤差項の表記は省略した。

*** $p < .001$

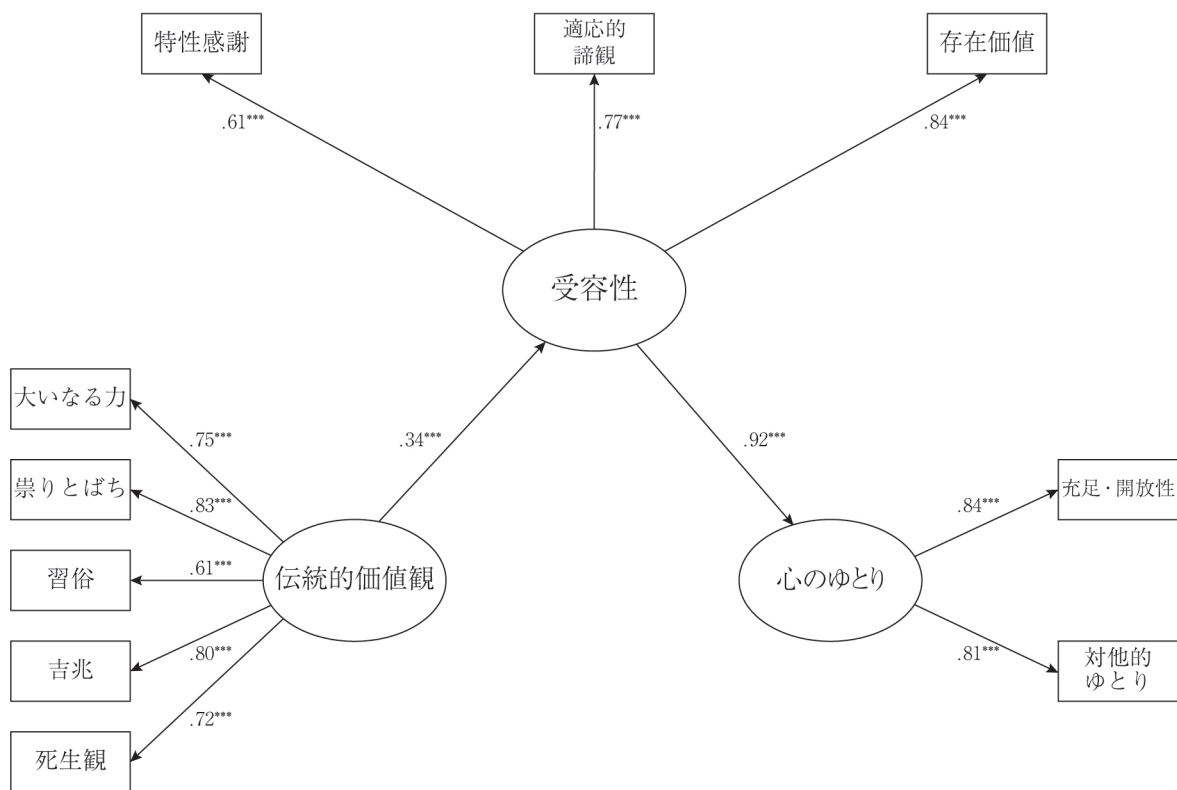


Figure 10-2. 伝統的価値観と受容性、心のゆとりとの関連（仮説モデル2）。GFI = .937, CFI = .936, RMSEA = .097, SRMR = .068, AIC = 80937.652。
 注）誤差項の表記は省略した。
 *** $p < .001$

10.4. 考察

本研究は、我が国で古来伝えられてきた伝統的価値観が、出来事に対する日本固有の受容性を媒介して心のゆとりに影響を与えるという本論における仮説モデルの検証を試みるものであった。

下位尺度間の相関では、伝統的価値観の「大いなる力」が、受容性、心のゆとりの各下位尺度との関連がもっとも高いことが示された。研究 4-2, 4-3 においても同様の傾向があり、「大いなる力」が一貫して受容性、心のゆとりとの関連を持つことがわかる。

受容性の下位概念は、自己の存在価値と適応的諦観が心のゆとりと高い相関がみられたのに対し、特性感謝は中程度の相関に留まった。しかしながら、伝統的価値観との関連は特性感謝がもっとも高く、「大いなる力」とだけではなく、「習俗」や「吉兆」とも中程度以上の相関があった。人知を超えた力の存在を感じたり、昔ながらの習俗を大切にしたり、日常の偶然とも思われるものに幸運の兆しを見出したりすることと、個人差変数である特性感謝との関連が高いことは、日本の宗教心の中核をなす加護観念＝オカゲ（金児, 1997）が、人間だけでなく、自然や神仏の加護などすべてのものに対する報恩を表していることとも整合する。さらに特性感謝は、その平均値が「大いなる力」について 2 番めに高く、「感謝」項目が生き方の原則調査票でもっとも平均点が高かったこと（大竹他, 2005）とも矛盾せず、我々日本人にとって本来性の高い特性であることを改めて示したものと見える。

伝統的価値観と心のゆとりについては研究 4 と同様、本研究においても「切迫・疲労感」との間にほとんど関連はみとめられなかったため、モデルから除外することとした。研究 4 での議論にあるように、「切迫・疲労感」が外的要因＝ことがらに左右されやすいものであるとすると、主に基盤の部分に影響を与えると考えられる伝統的価値観との関連性が弱いのは順当といえるのかもしれない。

伝統的価値観に対する認識への年代による差異はほとんどみとめられなかった。分散分析の結果、「大いなる力」と「習俗」には有意差があったが、効果量はほぼ 0 に近く、実質的な年代の差異はほとんどみとめられなかった。10 代、60 代、70 代のサンプル数が少なく、分析に至らなかったため、20 代から 50 代を対象とした限定的なデータではあるものの、現代日本人の少なくとも若年から中年層にかけては、伝統的価値観に対する認識に年齢はほぼ影響しないことが示された。

以上を踏まえ、仮説モデルの妥当性を検証するため共分散構造分析を実施した結果、仮説モデル 1, 2 ともにすべての係数は 0.1%水準で有意であり、伝統的価値観から受容性、受容性から心のゆとりへは実質的な関連があることが示された。モデルの適合度についても、仮説モデル 1 (GFI = .938, CFI = .938, RMSEA = .097, SRMR = .065, AIC = 80924.118), 仮説モデル 2 (GFI = .937, CFI = .936, RMSEA = .097, SRMR = .068, AIC = 80937.652) ともに許容範囲内であり、一定程度の適合が確認できた。

仮説モデル 1 と 2 との比較については、情報量規準において仮説モデル 1 が仮説モデル 2 より当てはまりが良いという結果であった。その他の主要な適合度に明確な差は認められなかったが、仮説モデル 1 の方がわずかに当てはまりが良いというものであった。以上を踏まえて検討した結果、本論においては、伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定する仮説モデル 1 を採択した。伝統的価値観から心のゆとりへの効果については、媒介変数を仮定しない伝統的価値観と心のゆとりの 2 変数のみのモデルでは実質的な影響が示されていた一方で、仮説モデル 1 においてはほぼ 0 に近い結果であった。これは、受容性という媒介変数が伝統的価値観から心のゆとりへの直接効果を打ち消すほどの効果を持つとも解釈できる結果であり、本論における仮説は支持されたといえよう。

本結果をもって、素朴な宗教心に基づく伝統的価値観、ひいては、それらに含まれる超自然的なものへの信念が、日本独自のしかたで出来事への適切な対処方略を導き出し適応する心理的能力を媒介し、心のゆとりに影響を与える効果の端緒を示すことはできた。現代の科学的立場から見れば、非科学的な信念は実生活に悪影響を及ぼすものと考えられがちであるが、このように心のゆとりに貢献する要素も見られ、こうした機序による精神的健康への影響が適応的かどうかについてはより慎重な議論が求められる。非科学的信念を否定しすぎたり、過信して振り回されたりするのではなく、人々がより良く生きるための適応的方略として、超自然的なものと半信半疑で付き合いながら日常的効果を得ていくという新たな共存の可能性を示すことのできた本研究の意義は大きいと考えられる。今後さらに伝統的価値観内の個別のテーマにも焦点をあてて、理解を進めていくことが有効であろうと考えられる。具体的には、伝統的価値観や受容性の下位概念と、心のゆとりの下位概念との個別の関連性や、受容性以外の心理的能力が与える効果についての検討が期待される。

Ⅱ Ⅱ. 総合考察

11.1. 本研究の総括

本研究の目的は、超自然的存在に対する信念が心のゆとりに与える効果を検討することである。科学の進歩によって大変便利で豊かな生活を手に入れ、快適に過ごせているはずの私たちが求めてやまない精神的な充足やゆとりとは一体どのようなものであり、どうしたら手に入れることができるのだろうか。本研究は、この問いに対して、超自然的存在に対する信念と心のゆとりとの関連に着目し、現代日本人の心のあり様を考察するものである。本節では、本研究で明らかになったことを総括したのち、本論で扱った各概念について総合的な議論をおこなう。

11.1.1. 本研究で明らかになったこと

まずはじめに、本研究で示されたことをごく簡潔に述べる。

超自然的存在に対する信念が心のゆとりに与える効果を検討した結果、日本人の宗教観に基づく伝統的価値観は日本固有の出来事に対する受容性を通して、心のゆとりに効果を与えていることが示された。

研究1では新型コロナウイルス禍で急速な認知の高まりをみせた妖怪『アマビエ』に対する人々の態度を通して、現代において妖怪がどのような社会的機能を持ち得るのかを検討した。ここでは、娯楽の側面が強調されてきた現代の妖怪に、超自然的な力を持つものとして尊崇と畏れの対象である面が潜在的に保持されてきた可能性が示された。

研究2と3では、現代の人々において、日本の「伝統的価値観」と「認識」されているものの考え方、感じ方を整理し、それらを測定する尺度を構成した。加えて、具体的な日常的宗教行為（おみくじをひくなど）を測定する日常的宗教行為尺度の作成を試み、両尺度間の関連性から伝統的価値観といかに関わるかを探索した。測定項目を作成して実際に調査を行うと、意外に多くの人々がそれらの言説を承認している実態が見え、それらの信念が日常的宗教行為と強い関連をもつことが確認できた。この尺度によって日本の伝統的価値観がもれなく扱えているものとはいえないが、日本固有の宗教性を適切に汲み取るべく、表出されにくく自覚されにくい素朴な宗教心を具体的に測定可能な形で示すことはできた。

研究4では本論における仮説検証の予備的研究として、伝統的価値観が心のゆとりに与える効果を媒介すると考えられる受容性の下位概念を検討した。研究4-1, 4-2, 4-3と探索的な検討を重ねた結果、本論における受容性の下位概念として、特性感謝、適応的諦観、自己の存在価値を用いることとした。

研究5では、研究1から4の結果を踏まえ、我が国で古来伝えられてきた伝統的価値観に含まれる超自然的存在に対する信念が、出来事に対する日本固有の受容性を媒介して心のゆとりに影響を与えるという仮説モデルの検証を試みた。モデルの係数、適合度からは一定程度の効果が確認でき、本論における仮説は支持された。

以上の結果をもって、素朴な宗教心に基づく伝統的価値観、ひいては、それらに含まれる超自然的なものへの信念が、日本独自のしかたで出来事への適切な対処方略を導き出し、適応する心理的能力を媒介し、心のゆとりに影響を与える効果の端緒を示すことはできたと考える。

11.1.2. 現代における妖怪の社会的機能

研究1は、新型コロナウイルス禍におけるアマビエへの態度を通して、現代における妖怪の社会的機能を探るものであった。アマビエが用いられた意図と普及の状況について新聞記事を用いた検討をおこなった研究1-1では、アマビエが現代の妖怪が有するとされている娯楽機能のみならず、疫病の退散を祈願する信仰的な機能や、感染症終息への願いを周囲に伝播し共有する機能を備えている可能性が示され、アマビエへの態度と伝統的価値観、日常的宗教行為との関連を調査した研究1-2では、参加者が大学生であるという限定的なデータながらも、アマビエの認知度の高さと、アマビエが妖怪として認知され、ポジティブ・ネガティブ両面の印象を喚起することが確認された。本結果をもって、アマビエが既存の流行キャラクターと一線を画すとは言い切れないが、妖怪の可変的な性質や両義性のある機能に加え、新型コロナウイルスや疫病との関連をもって短期間で急速に認知されたことを考慮すると、一般的な癒しキャラクターとは多少なりとも異なる機能を持ち得ると捉えても不自然ではないだろう。

前述のとおり、超自然的なものの存在を信じる人は、以前と比べ減少していることが近年の調査において指摘される(NHK放送文化研究所, 2019b)一方で、「神や仏」や「霊魂(たましい)」に肯定的な回答を示した人が7割を越えている(朴・吉野, 2015)ことや、死の恐れ、自然の神秘への尊敬、人の力の及ばない何かに対する畏敬の念などは現代社会においてもなくなっていない(林, 2010)ことなどが報告されており、我々の生

活は依然、それらと共にあることが見て取れる。アマビエが多くの人に認知された背景には、このような超自然的なものと共存している日本固有の風土に、未知の感染症という平時とは異なる状況要因が加わったためと考えられる。そこには、新型コロナウイルス禍のように、自らが統制できない状況において社会や人々が不安やストレスにさらされた際に持ち上がる妖怪の複層的な機能、すなわち娯楽と信仰の対象としての機能が、人々に束の間の安心を取り戻すという構図が浮かび上がってくる。第1部の理論的検討での議論のとおり、本論では、人々が受け入れ難い出来事に直面したとき、「過程／how」だけではなく、「なぜそうなったのか」という「理由／why」を求め、それらを得ることは精神的な回復へと繋がるのではないかと捉えている。そして「過程／how」と同時に、「理由／why」をも担っていたのが、かつての妖怪や超自然的なものだと考えている。新型コロナウイルス禍におけるアマビエに対する人々の態度からは、娯楽の側面が強調されてきた現代の妖怪にも、超自然的な力を持つものとして尊崇と畏れの対象である面が潜在的に保持されてきた可能性が示されたといえるのではないだろうか。これは、超自然的なものに対する行動が個人の特性より置かれた状況によって大きく影響される（Norenzayan, 2013 藤井・松島・荒川訳 2022）という近年の研究における指摘とも整合し、統制不可能な出来事との遭遇という状況において、不安を緩和するために超自然的なものに説明を求めるといった心的過程の端緒を示す結果とも言える。

11.1.3. 素朴な宗教心に基づく伝統的価値観

科学的に説明しきれないものに対する関心は、表面の論理では片付かない素朴な感情であり、現代もかなりの人が持っている特性（朴・吉野, 2015）と指摘されているように、私たち日本人には超自然的なものを求める意識が組み込まれていると考えられる。厄払いやお守り、神や仏といった超自然的なものはいまだに私たちの身近にあることや、前述の新型コロナウイルス禍におけるアマビエに対する人々の態度からは、超自然的な力を持つものが尊崇と畏れの対象として不安を緩和する機能を果たしている可能性が示された。

ところが超自然的なものは、私たちの基底意識に組み込まれ、いまだ身近にありながらも、科学で証明できない非合理的なものとされ排除されつつあるという矛盾を抱えている。その矛盾、つまり、超自然的なものが担っているであろう「理由／why」の欠如に着目し、それらが現代日本人の心のゆとりに影響を与える要因のひとつではな

いかと考えたのが本研究である。そこでまず、日本人の宗教観に基づく伝統的な価値観を整理することとした。

研究2, 3では、現代の人々において、宗教的観念を基盤とした自分自身の行動指針、行動規範となり得るものについて焦点をあて、日本の「伝統的価値観」と「認識」されているものの考え方、感じ方を整理し、それらを測定する尺度を構成した。また、伝統的価値観であれば、伝統的な宗教とも関わりが深いと推測されることから、日本における複雑な宗教性を反映しているであろう日常生活に埋没している宗教的行為との関連についても検討することとし、日常的宗教行為尺度の作成と両尺度間の関連性を検証した。

これまで宗教心理学の研究では、宗教を信じることのウェルビーイングや自己実現、利他行動、援助行動などとの関連が扱われることが多く（金児, 2011）、超常的な力が災害などのネガティブな事象を引き起こす側面や、それを回避する力については、とりあげられることが少なかった。しかし、信仰することの原因や効果としては、天国に行ける、御利益があるといったポジティブな結果を得ることと、ネガティブなことを回避するという2つの側面が指摘できる。そこで、それらの両側面を反映したオカゲとタタリ（金児, 1997）、人々の持つ自然観に着目した宗教的自然観（西脇, 2004）などの視点を継承しつつ、近年、感情研究などにおいても強調される新たな捉え方にも射程を広げ、総合的な宗教心を補足する尺度を現代社会向けに更新することを試みた。

こうした見えない力や関係を信じる信念など一見非合理的な信念は、対象が非科学的だというだけで、研究自体も非科学的であるという誤った印象を与えがちである。しかし、主観的信念を科学的に研究するには、信念内容がどういったものであろうと、それらを整理することは可能であり、測定項目を作成して実際に調査を行うと、意外に多くの人々がそれらの言説を承認している実態が見える。そして、これらの信念は日常的宗教行為との関連も強かった。

先行研究で指摘されてきたように、日本固有の宗教性は表出されにくく、自覚されにくいという特徴を持つ。本論では、素朴な宗教心を「当人もそれを宗教であるとは意識しないが、日常の行為の指針として信じている考え方や信念」と定義し、自身は伝統的習慣に沿っているだけと考える行為や季節の行事への関わりも含み、そうした習慣を重んじる態度そのものに素朴な宗教心が含まれていると捉えている。近年の

宗教意識調査（NHK 放送文化研究所, 2019b）によると、信仰心があると答えたのは26%, ないは52%であったと報告されている。ここでの「信仰心」が金児（1997）のいう「向宗教性（＝常識的に認識される意味での宗教）」を表すとするならば、本研究ではそれ以外の隠れた宗教性や素朴な宗教心といったものをある程度汲み取ることができたのではないだろうか。

この尺度によって日本の伝統的価値観がもれなく扱えているものとはいえないが、日本固有の宗教性を適切に汲み取るべく、表出されにくく自覚されにくい素朴な宗教心を具体的に測定可能な形で示すことはできた。

11.1.4. 受容性の下位概念

科学の進歩に伴い、人が自ら統制できない出来事は減少し、超自然的なものは次第に存在意義が失われていったように感じられている。一方で、近年の調査結果は私たち日本人の基底には超自然的なものを求める意識がいまだ維持されていることを示している（e.g., 林, 2010; 朴・吉野, 2015; NHK 放送文化研究所, 2019b）。その心理的背景を本論では次のように捉えている。まず、人々が受け入れ難い出来事に直面したとき、ものごとがどのように起きたか、という「過程／how」だけではなく、「なぜそうなったのか」という「理由／why」を求めるということ、そして「過程／how」だけでなく「理由／why」をも担っていたのが、かつての妖怪や超自然的なものであるということだ。

以上を勘案すると、多くの日本人が持っているであろう素朴な宗教心を基盤とした伝統的価値観は主観的な心のゆとりへ直接影響を与えるだけでなく、出来事を受容するための何らかの心理的能力を介して影響を与えるという構図が浮かび上がってくる。すなわち、日本固有の宗教性に基づく伝統的価値観が、出来事を受容するための日本人特有の心理的能力＝受容性を導き、その結果、心のゆとりに効果を与えるのではないかとということである。なお、本論では受容性を「出来事を多角的に捉え、適切な対処方略を導き出し適応する心理的能力」を表す概念として用いることとする。

先行研究では、日本人が非合理的なものとの心のかかわり合いが多いことや、日本の宗教性が表出されにくく、自覚されにくいことは多く論じられているものの、それらが実際にどのような影響を与えるのかは明らかになっておらず、受容性の下位概念にどのようなものが含まれるのかを理論的に予測することは困難であった。したがって研究4において、本論における仮説検証の予備的研究として受容性の下位概念を探るべく、探索的な検討を重ねることとした。

研究 4-1 では認知的柔軟性、曖昧さへの態度、レジリエンス、4-2 では認知的柔軟性、曖昧さへの態度、セルフ・コンパッションを受容性の下位概念として用いた。受容性から心のゆとりへの係数については実質的な影響が示されたが、伝統的価値観から受容性への影響は小さく、モデルの適合度指標からも仮説を支持するに足る結果とはならなかった。その要因として、伝統的価値観が日本固有の宗教性に基づくものであることに対し、受容性を構成する下位概念が日本人特有の心理的能力をとらえきれていないことが推測される。これらは西洋の思想に基づいた概念で測定をすることの難しさや問題点が発現したものとも考えられ、特に宗教性のように文化差が顕著であることが自明の概念を取り扱う際には、より慎重な検討が求められることを改めて示した結果と言えるであろう。

受容性という心理的能力について、日本人の持つ特性や本来性を反映できていたか、ものごとを受け入れるという概念に対する妥当性が担保されていたか、という点で課題が残るものであった研究 4-1、4-2 を踏まえ、研究 4-3 では、日本人の持つ特性や生き方への態度といった日本人特有の心理的能力について掘り下げ、それらをもとに受容性の下位概念を捉え直すことを試みた。

まず、日本の宗教心の中核をなす加護観念（オカゲ）が、人間だけでなく、自然や神仏の加護などすべてのものに対する報恩を表しており、日本人の基底にはそのような意識が組み込まれていると考えられること、そして生き方の原則調査票でもっとも平均点が高かったのが「感謝」であった（大竹他, 2005）ことから、日本人にとって本来性の高い特性だと考えられる特性感謝を取り上げた。

次に、個人が受け入れ難い出来事に直面したとき、執着せずに適応していくために必要であると考えられる「諦め」に着目し、ものごとをあるがままに受け入れ、楽観的な諦観をもって思い悩まない認知的態度（菅沼他, 2018）である「適応的諦観」を扱うこととした。

最後に、本論で扱う概念との間に多くの共通点が推測できると考えられる実存的生き方態度を加えた。人が生きていく上で自分の人生に自分なりに意味や目標を見出していることや、自己の存在そのものに価値を見出すことができることを表す実存的生き方態度は、人生を前向きに積極的に生き、日々の生活を充実して生きることにつながる（高井, 1999）とされ、それらは心のゆとりとも関連が深いと考えられる。

実存的生き方態度におけるどのような側面と関わりが深いのかについて探索的な検

討を試みた結果、下位尺度間の相関から伝統的価値観ともっとも関連が高かったのは先行研究の結果と同様に「自己の存在価値」であった。そこで、特性感謝、適応的諦観に加え、自己の存在価値を本研究における受容性の下位概念として扱うこととした。以上を用いて共分散構造分析をおこなった結果、すべての係数は5%水準で有意となり、それぞれの信頼区間からも実質的な関連があることが示された。モデルの適合度も許容範囲内であり、一定程度の適合を確認することができたため、本論における受容性の下位概念として、特性感謝、適応的諦観、自己の存在価値を用いることとした。

研究4での探索的研究を経てたどり着いた受容性の下位概念をみると、特性感謝、適応的諦観、自己の存在価値という「達観」や「悟り」と近似した概念で構成されていることに気づく。日本固有の宗教心に根ざした伝統的価値観が導く受容性にも、素朴な宗教心とのつながりが見て取れたことは非常に興味深い結果であった。

11.1.5. 伝統的価値観と心のゆとりとの関連

研究1から4の結果を踏まえ、「日本における素朴な宗教心に基づく伝統的な価値観およびそれが含有する超自然的なものに対する信念が、日本人特有の出来事に対する捉え方（＝受容性）を導き、その結果、心のゆとりに影響を与える」という仮説モデルの検証を試みた。モデルの係数、適合度からは一定程度の効果が確認でき、本論における仮説は支持された。ただし、研究5においても「切迫・疲労感」との間には、ほとんど関連はみとめられず、研究4と同様にモデルからは除外することとした。心のゆとり感尺度は経済的ゆとりや時間的ゆとりといった物理的社会条件を除外して作成された尺度ではあるが、「切迫・疲労感」には状況が関連している可能性が指摘されている（富田, 2008）。多くの先行研究において、時間的余裕、経済的余裕は「ゆとり」の一部でありながら、心のゆとりとは本質的な次元が異なると言及されていることから、「心の充足・開放性」、「対他的ゆとり」と比較すると、「切迫・疲労感」は外的要因＝ことがらに左右されやすいものであるのかもしれない。心にゆとりがあるという状態には、充実や安心といったポジティブな感情が「ある」状態と捉える場合と、切迫や焦燥といったネガティブな感情が「ない」状態として捉える場合があり、それらには質的な差異があることも指摘されている（富田・高橋, 2005）。本研究の結果は、「切迫・疲労感」には特性や認知などの内的要因に比べ、状況や時間といった外的要因が深く関わっている可能性をあらためて示したものであるともいえる。

仮説モデル1と2との比較については、情報量規準、その他の主要な適合度を踏ま

えて検討し、本論においては伝統的価値観から心のゆとりへのパスを仮定する仮説モデル1を採択した。伝統的価値観から心のゆとりへの効果については、媒介変数を仮定しない伝統的価値観と心のゆとりの2変数のみのモデルでは実質的な影響が示されていた一方で、仮説モデル1においてはほぼ0に近い結果であった。これは、受容性という媒介変数が伝統的価値観から心のゆとりへの直接効果を打ち消すほどの効果を持つとも解釈できる結果であり、本論における仮説は支持されたといえよう。

伝統的価値観に対する認識については、分散分析の結果、「大いなる力」と「習俗」には有意差があったが、効果量はほぼ0に近く、実質的な年代の差異はほとんどみとめられなかった。20代から50代を対象とした限定的なデータではあるものの、現代日本人の少なくとも若年から中年層にかけては伝統的価値観に対する認識に年齢はほぼ影響しないという結果であり、個人内要因として作用していることが示された。加えて、伝統的価値観の各項目、下位尺度の平均値はおおむね4.5点から5点付近であり、中点の3.5点より1点以上高いことから、先行研究での指摘どおり現代においても比較的多くの日本人の基底意識としてそれらが機能している可能性が示唆されたといえる。

日本では宗教が幸福感や生活満足度などの精神的健康にはさほど貢献していないと示されることが多い。たとえば金児（2004）は、大規模な国際比較調査のデータを用いて二次分析を実施し、日本とアメリカとの差異を検討した。アメリカでは、信仰する宗教を持っている人は、そうでない人と比較して主観的幸福感が高いのに対し、日本では宗教的態度の効果はないという結果であった。日本を含めたアジア社会で広く見られる民間信仰や祖先崇拝は必ずしも個人のメンタルヘルスやソーシャル・キャピタルを良好に保つことには貢献せず、そのような宗教多元主義的な宗教意識は、西欧とは異なり、幸福感とストレートな関連を示さないことが指摘されている（櫻井、2017）。また、向宗教性、加護観念（オカゲ）、霊魂（応報）観念（タタリ）の3つの宗教心と死への態度との関連を検討した調査では、向宗教性は「苦痛」を増大させることが示されている（金児・渡部、2003）。

その一方で、先に述べた宗教心と死への態度との関連において、霊魂（応報）観念（タタリ）は死の不安は高めると同時に「浄福な来世」観をもたらしていたことが示されている。さらに、加護観念（オカゲ）は「恐怖」や「苦痛」を和らげ、死の問題から「逃避」させず、死を「消滅」と考えさせない働きを有しており、3つの宗教観の中でもっとも死を肯定的に積極的に受けとめさせ、死の不安・恐怖の低減効果をもっていた（金

児・渡部, 2003)。都市化が人々の心に与えた変容について宗教観（向宗教性, 加護観念, 靈魂観念）や死への態度から検討した調査においても, 宗教行動や宗教観が生活満足度に貢献していない一方で, どのような死への態度を持っているかは生活満足度に影響を及ぼしていた（渡部・金児, 2004）。

理論的検討での議論にもあるとおり, 日本における宗教意識調査については, 宗教への警戒感を示したり, 無宗教を自認したりする人々のなかにも脈々と培われている宗教性を描き出すことができはじめて, 日本の宗教文化の現在がバランスよく記述される（西脇, 2004）ものであり, 日本固有の表出されにくく, 自覚されにくい宗教性を適切に汲み取ることが重要である。本研究では, 加護観念と靈魂観念（金児, 1997), 素朴な宗教的感情（林, 1979）と同様の意味で, 「当人もそれを宗教であるとは意識しないが, 日常の行為の指針として信じている考え方や信念」を日本固有の素朴な宗教心とし, それらに基づく古来伝えられてきた価値観を伝統的価値観として取り扱った。本研究において, それら伝統的価値観と心のゆとりとの関連が示されたことは, 日本では幸福感や生活満足度に関連を示さないとされる一般的な意味での宗教, つまり金児（1997）の指し示す「向宗教性」とは異なる側面として, 日本固有の素朴な宗教心の一端を捉えることができた結果ともいえよう。

本論では, 人々が受け入れ難い出来事に直面したとき, 「過程／how」だけでなく, 「なぜそうなったのか」という「理由／why」を求め, それらを得ることが精神的な回復へと繋がるのではないかと捉えている。そして, 「過程／how」と同時に, 「理由／why」をも担っていたのが, かつての妖怪や超自然的なものだと考えている。伝統的価値観の中でも妖怪のような超自然的存在を承認する傾向である「大いなる力」と受容性, 心のゆとりとの間に関連がみられたことは, 人々が出来事に対する適切な対処方略を導き出し, 適応する過程や, 個人の持つ本来の総合的な処理能力を發揮できる状態を維持する過程において, 超自然的なものがなんらかの機能を果たしていることを示している。これは, 新型コロナウイルス禍におけるアマビエのように, 娯楽の側面が強調されてきた現代の妖怪にも, 超自然的な力を持つものとして尊崇と畏れの対象である面が潜在的に保持されてきた可能性が示されたという研究1の結果とも矛盾しない。

以上の結果をもって, 素朴な宗教心に基づく伝統的価値観, ひいては, それらに含まれる超自然的なものへの信念が, 日本独自のしかたで出来事への適切な対処方略を導き出し適応する受容性という心理的能力を媒介し, 心のゆとりに影響を与える効果

の一端を示すことができたと考える。精神的健康と心のゆとりが強く関連していることや、心のゆとりを維持することの重要性は先行研究でも共通して述べられており(e.g., 小林他, 2016; 2017; 2018; 富田, 2008), 伝統的価値観が心のゆとりの一側面に寄与していることは、現代日本人の求める精神的な充足や豊かさへとつながる手がかりとなるかもしれない。

現代の科学的立場から見れば、非科学的な信念は実生活に悪影響を及ぼすものと考えられがちであるが、本論での試みは、従来の心理学的研究では扱われてこなかった非科学的信念の肯定的な側面、とりわけ超自然的存在の有用性を明らかにできる可能性を秘めている。こうした機序による精神的健康への影響が適応的かどうかはさらに検討を進めていかなければならないが、非科学的なものを否定しすぎたり、過信して振り回されたりするのではなく、人々がより良く生きるための適応的方略として、半信半疑で付き合いながら日常的効果を得ていくという新たな共存の枠組みを示すことのできた意義は大きいと考えられる。本研究が日本固有の素朴な宗教心に根ざした伝統的価値観と、それに基づく生き方態度や精神的健康のあり方への議論の一助となることを期待する。

11.2. 今後の課題

最後に、本研究における課題と今後の展望について述べる。

研究1では新型コロナウイルス禍で急速な認知の高まりをみせた妖怪『アマビエ』に対する人々の態度を通して、現代において妖怪がどのような社会的機能を持ち得るのかを検討し、娯楽の側面が強調されてきた現代の妖怪に、超自然的な力を持つものとして尊崇と畏れの対象である面が潜在的に保持されてきた可能性が示された。ただし、アマビエに見出される信仰的機能が、先行研究が指摘する「不安の緩和」を含むかどうかは、研究1の結果からは明らかにできていない。この点を解明するためには、アマビエに祈願することと不安の緩和との関係についてのさらなる調査が必要である。加えて、超自然的なものに対する行動が個人の特性より置かれた状況によって大きく影響される（Norenzayan, 2013 藤井・松島・荒川 2022）という近年の研究における指摘を踏まえ、今後は妖怪の社会的機能について、個人特性だけでなく、状況要因も踏まえたさらなる研究が期待される。

研究2と3では伝統的価値観尺度を作成した。この尺度によって日本の伝統的価値観がもれなく扱えているものとはいえないが、日本固有の宗教性を適切に汲み取るべく、表出されにくく自覚されにくい素朴な宗教心を具体的に測定可能な形で示すことはできた。しかし、確認的因子分析の結果が不安定であり、構成妥当性に改善の余地があるという課題が残った。今後はさらに内容を精錬させつつ、文化的視座からも検討していかなければならない。

加えて、本論で扱った日本における素朴な宗教心と類似する概念との関連についても検討する必要があるだろう。たとえば、欧米で広がりを見せているSBNR（The spiritual but not religious）は、宗教的ではないがスピリチュアルな人を指し示す概念である。無宗教型スピリチュアル層などとも訳され、組織化された宗教教団に所属することが唯一あるいは最も大切な方法であるとは考えない生き方を自己表現する用語（岡部, 2020）とされる。従来型の宗教信者とも、非宗教者とも異なるタイプである可能性が指摘されており（Willard & Norenzayan, 2017）、常識的に認識される意味での宗教とは異なる日本固有の宗教心との共通点が多数浮かび上がってくる。これらに焦点を当て、詳細な考証を重ねることは、未分化で渾然とした我が国の宗教性を読み解く上で有用であろう。ただし、研究4でのセルフ・コンパッションのように、東洋の思想や哲学をもとに構成された概念であっても、西洋からみた東洋を表現したものであるが

ゆえに、その本質を捉えきれていない可能性もある。類似性の背景にある文化差を考慮した上で、より慎重な検討が求められる。

本論では、ゆとりのない状態を引き起こさない（＝場の余白を減じない）ためにはどうすればよいか、という主題のもと、心のゆとりの測定に精神的な充足や切迫感、他者への配慮などを含む生活全般に対する主観的な心のゆとり感を測定する尺度（富田, 2008）を用いた。研究 4, 研究 5 を通して、先行研究とほぼ同様の因子構造が得られ、心のゆとりの主観的な感覚を構成する要素を確認することができた。「心の充足・開放性」、「切迫・疲労感」、「対他的ゆとり」という下位概念を観察すると、心のゆとりがあるという感覚は、精神的な充足や他者への振る舞いなどを含む総合的な能力の現状を指し示し、ゆとりのあり、なしという感覚は、その個人にとって本来の処理能力を発揮できているかどうかという主観的な認識によって導かれるものであることがわかる。これは心のゆとりがある状態を「個人が本来の総合的な処理能力を発揮するのに十分な「場」を確保していると主観的に認識している状態」とする本論における定義とも矛盾せず、心のゆとりが何らかの総合的な能力の現状とその余地を示す概念である可能性を示すものと言えるだろう。しかし、本論においては、それらと主観的幸福感や生活に対する満足度などの類似する概念との差異や、主観的な感覚以外の捉え方があるのかどうかについては検討できていない。

加えて、伝統的価値観と心のゆとりの関わりにおいては、「心の充足・開放性」と「対他的ゆとり」には関連が認められた一方、「切迫・疲労感」はほとんど関連がみられなかった。「切迫・疲労感」には状況が関連している可能性が指摘されている（富田, 2008）こと、多くの先行研究において時間的余裕、経済的余裕は「ゆとり」の一部でありながら、心のゆとりとは本質的な次元が異なると言及されていること等を踏まえると、それらがどちらかという外的要因に左右されるものであり、「心の充足・開放性」や「対他的ゆとり」とは次元が異なる可能性がある。ただし、この点についての実証的な研究はなされておらず、推測の域を出ていない。

今後は、伝統的価値観や受容性の下位概念と心のゆとりの下位概念との個別の関連性や、受容性以外の心理的能力が与える効果についての検討が期待される。そして、ポジティブな感情が「ある」状態とネガティブな感情が「ない」状態という二重性（富田・高橋, 2005）や、認知的な情報処理能力との関わりとともに、心のゆとりをどのように捉えるかについてのさらなる議論が求められる。

引用文献

- Adler, M.G.; Fagley, N.S. (2005) . Appreciation: Individual differences in finding value and meaning as a unique predictor of subjective wellbeing. *Journal of Personality*, *73*, 79-114.
- 相川 充・矢田 さゆり・吉野 優香 (2013) . 感謝を数えることが主観的ウェルビーイングに及ぼす効果についての介入実験 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, *64*, 125-138.
- 有光 興記・青木 康彦・古北 みゆき・多田 綾乃・富樫 莉子 (2016) . セルフ・コンパッション尺度日本語版の 12 項目短縮版作成の試み 駒澤大学心理学論集, *18*, 1-9.
- Barnard, L. K., & Curry, J. F. (2011) . The Relationship of Clergy Burnout to Self-Compassion and Other Personality Dimensions. *Pastoral Psychology*, *61*, 149 – 163.
- Bastian, B., Vauclair, M., Loughnan, S., Bain, P., Ashokkumar, A., Becker, M., Bilewicz, M., Collier-Baker, E., Crespo, C., Eastwick, P., Fischer, R., Friese, M., Gómez, Á., Guerra, V., Castellanos Guevara, J. L., Hanke, K., Hooper, N., Huang, L.-l., Junqi, S., Karasawa, M., Kuppens, P., Leknes, S., Peker, M., Pelay, C., Pina, A., Sachkova, M., Saguy, T., Silfver-Kuhlampi, M., Sorthaix, F., Tong, J., Yeung, V. W.-l.; Duffy, J., & Swann, W. (2019) . Explaining illness with evil: Pathogen prevalence fosters moral vitalism. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences*. <https://doi.org/10.1098/rspb.2019.157>
- Bering, J. M. (2002) . The Existential Theory of Mind *Review of General Psychology*, *6*, 3-24.
- Bering, J. M. (2003) . Towards a cognitive theory of existential meaning. *New Ideas in Psychology*, *21*, 101-120.
- Boyer, P (2001) . Religion Explained. Vintage
(パスカル・ボイヤール著, 鈴木 光太郎・中村 潔 (訳) (2008) . 神はなぜいるのか? NTT 出版)
- Carver, C. S., Scheier, M. F., & Weintraub, J. K. (1989) . Assessing coping strategies: A theoretically based approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, *56*, 267-283.

- Case, T. I., Fitness, J., Cairns, D. R., & Stevenson, R. J. (2004) . Coping with uncertainty: Superstitious strategies and secondary control. *Journal of Applied Social Psychology*, 34, 848-871.
- 第一生命経済研究所 (2006) . 日常生活における宗教的行動と意識 Retrieved January 7, 2023 from <https://www.dlri.co.jp/pdf/ld/01-14/rp0705a.pdf>
- Dennis, J. P., & Vander Wal, J. S. (2010) . The Cognitive Flexibility Inventory: Instrument Development and Estimates of Reliability and Validity. *Cognitive Therapy Research*, 34, 241-253.
- Feifel, H., & Strack, S. (1989) . Coping with conflict situations: Middle-aged and elderly men. *Psychology and Aging*, 4, 26-33.
- Foster, M. D. (2009) . Pandemonium and Parade: Japanese Monsters and the Culture of Yōkai. University of California Press
(マイケル・デュラン・フォスター 廣田 龍平 (訳) (2017) . 日本妖怪考——百鬼夜行から水木しげるまで 森話社)
- 藤原 健志・村上 達也・西村 多久磨・濱口 佳和・櫻井 茂男 (2014) . 小学生における対人的感謝尺度の作成 教育心理学研究, 62, 187-196.
- 福島 和俊 (2011) . 日常生活に埋没した宗教・信仰の心理学的理論構築への試み —— 日本人大学生を対象とした面接調査から —— 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要, 32, 25-42.
- 古畑 和孝・岡 隆 (編) (2002) , 社会心理学小辞典 増補版 有斐閣
- 古川 秀夫・山下 京・八木 隆一郎 (1993) . ゆとりの構造 社会心理学研究, 9, 171-180.
- Gall, T. L. (2004) . Relationship with God and the quality of life of prostate cancer survivors . *Quality of Life Research* 13, 1357-1368.
- Gray, H. M., Gray, K., & Wegner, D.M. (2007) . Dimensions of Mind Perception. *Science*, 315, 619.
- Gray, K., & Wegner, D. M. (2010) . Blaming God for Our Pain: Human Suffering and the Divine Mind. *Personality and Social Psychology Review* 14, 7-16.

- G. R. ファンデンボス (監修) 繁榎 算男・四本 裕子 (監訳) (2013) . APA 心理学大辞典 培風館原田 唯司 (1997) . 非合理志向と認知特性との関連 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇) 47, 223-239.
- 原田 唯司 (1997) . 非合理志向と認知特性との関連 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇) 47, 223-239.
- 林 知己夫 (1979) . 多次元尺度解析による態度数量化 ——日本人の心の基底構造を探る—— 統計数理研究所研究レポート 44, 85-200.
- 林 文 (2010) . 現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心 ——日本人の国民性調査と国際比較調査から—— 統計数理, 58, 39-59.
- Helliwell, J.F., Layard,R., Sachs, J.D., De Neve, J., Aknin, L.B & Wang, S. (2022) . Happiness, benevolence, and trust during COVID-19 and beyond. World Happiness Report 2022. Retrieved January 7, 2023 from <https://worldhappiness.report/ed/2022/happiness-benevolence-and-trust-during-covid-19-and-beyond/>
- 樋口 耕一 (2004) . テキスト型データの計量的分析 ——2つのアプローチの峻別と統合—— 理論と方法, 19, 101-115.
- 日野 巖 (2006) . 動物妖怪譚 (上下巻) 中公文庫 中央公論社
- 平野 真理 (2010) . レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み——二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成—— パーソナリティ研究, 19, 94-106.
- 池田 幸恭 (2020) . 感謝に関する心理学的研究の動向からみた親に対する感謝の特徴 和洋女子大学紀要, 61, 1-11.
- 池内 裕美 (2010) . 成人のアニミズム的思考：自発的喪失としてのモノ供養の心理 社会心理学研究, 25, 167-177.
- 井上 円了 (著) 竹村 牧男 (監修) (2011) . 妖怪玄談 大東出版社
- 石井 健一 (2009) . キャラクター消費とその意識構造 (Department of Social Systems and Management Discussion Paper Series No.1232) 筑波大学
- 岩本 一夫 (1990) . 超自然ということ, 東京工芸大学紀要, 13 (2) , 9-15.
- 香川 雅信 (2005) . 江戸の妖怪革命 河出書房新社

- 金児 恵 (2004) . 日本人の宗教的態度とその精神的健康への影響 : ISSP 調査の日米データの二次分析から 死生学研究 , 3, 348-367.
- 金児 暁嗣 (1997) . 日本人の宗教性 —— オカゲとタタリの社会心理学 —— 新曜社
- 金児 暁嗣 (2011) . 宗教とメンタルヘルス 金児 暁嗣 (監修) 松島 公望・河野 由美・杉山 幸子・西脇 良 (編) 宗教心理学概論 (pp.141-163) ナカニシヤ出版
- 金児 暁嗣・渡部 美穂子 (2003) . 宗教観と死への態度 人文研究 大阪市立大学大学院研究科紀要 , 54 (3) , 85-109.
- 菊池 聡 (1995) . 不思議現象が開く心理学への扉 菊池 聡・谷口高士・宮元博章 (編) 不思議現象 なぜ信じるのか——こころの科学入門—— (pp.1-18) 北大路書房
- 菊池 聡・長谷川 孝治 (2009) . 超常現象と「あいまいさへの不寛容」 日本心理学会第 73 回大会発表論文集
- 桐生 正幸・水谷 充良・平 伸二 (2015) . 妖怪心理学 第一話 混沌 日本心理学会第 79 回大会発表論文集
- 北爪 直美・菅野 純 (2006) . 大学生版ゆとり感尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 早稲田大学臨床心理学研究 , 6, 79-88.
- 小林 亮太・宮谷 真人・中尾 敬 (2016) . 心のゆとりの基礎研究——不安, 抑うつ, 楽観性, 悲観性との関連—— 広島大学心理学研究 , 16, 35-40.
- 小林 亮太・宮谷 真人・中尾 敬 (2017) . 心のゆとりと共感性 : ゆとりがある人は他者に共感しやすいか? 中国四国心理学会論文集 , 50, 47.
- 小林 亮太・宮谷 真人・中尾 敬 (2018) . 心のゆとりを有する者はネガティブ感情状態からの回復が早いのか? ——心のゆとりに関する実験的研究—— 対人社会心理学研究 , 18, 21-36.
- 小松 和彦 (2011) . 妖怪学の基礎知識 角川学芸出版
- 小松 和彦 (監修) (2013) . 日本怪異妖怪大事典 東京堂出版
- 小松 和彦 (2015) . 妖怪学新考 講談社
- 小城 英子・川上 正浩・坂田 浩之 (2008) . 不思議現象に対する態度 : 態度構造の分析および類型化 社会心理学研究 , 23, 246-258.

- 厚生労働省 (2020) . 新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査
Retrieved January 7, 2023 from <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/gaiyou.pdf>
- Malinowski, B. (1948) . Magic, science and religion, and other essays. Garden City:
Doubleday.
(マリノフスキー, B. 宮武 公夫・高橋 巖根 (訳) (1997) . 呪術・科学・宗教・
神話 人文書院)
- Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. (1990) . Resilience and development:
Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development &
Psychopathology*, 2, 425-444.
- McCullough, M. E., Emmons, R. A., & Tsang, J (2002) . The grateful disposition: A
conceptual and empirical topography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82,
112-127.
- 源 了円 (1985) . 日本人の自然観 坂本 賢三 新・岩波講座 哲学5 自然とコスモス
(pp.348-374) 岩波書店
- 三浦 麻子・小林 哲郎 (2015) . オンライン調査モニタの Satisfice に関する実験的研究
社会心理学研究, 31, 1-12.
- 文部科学省 (2001) . 科学研究費補助金「分科細目表」の改正について Retrieved
January 7, 2023 from [https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/
attach/1337808.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1337808.htm)
- 六車 玲那・重橋 のぞみ (2018) . 心のゆとり感の変化に関する研究：主動型リラクセ
ーション療法を用いて 福岡女学院大学大学院紀要, 15, 23-31.
- 長野 栄俊 (2009) . 予言獣アマビコ・再考 小松 和彦 (編) 妖怪文化研究の最前線
(pp.131-162) せりか書房
- 内閣府 (2019) . 令和元年度 国民生活に関する世論調査 Retrieved January 7, 2023
from <https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-life/index.html>
- Neff, K. D. (2003a) . Self-compassion: An alternative conceptualization of a healthy attitude
toward oneself. *Self and Identity*, 2, 85-101.
- Neff, K. D. (2003b) . The Development and validation of a scale to measure self-compassion.
Self and Identity, 2, 223 – 250.

- NHK 放送文化研究所 (2016) . 「不寛容社会」に関する世論調査 Retrieved January 7, 2023 from https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20160616_1.pdf
- NHK 放送文化研究所 (2019a) . 第 10 回「日本人の意識」調査 結果の概要 Retrieved January 7, 2023 from https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190107_1.pdf
- NHK 放送文化研究所 (2019b) . 日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか ～ ISSP 国際比較調査「宗教」 日本の結果から～ Retrieved January 7, 2023 from https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190401_7.pdf
- 日本リサーチセンター(2019). 第6回NRC全国キャラクター調査——Part1 ご当地キャラクター編—— Retrieved January 7, 2023 from <https://www.nrc.co.jp/report/pdf/7e07225694fdb01767cdba562e92184cc70b7e25.pdf>
- 日本社会心理学会 (編) (2009) . 社会心理学事典 丸善
- 西村 佐彩子 (2007) . 曖昧さへの態度の多次元構造の検討 ——曖昧性耐性との比較を通して—— パーソナリティ研究, 15, 183-194.
- 西脇 良 (2004) . 日本人の宗教的自然観 ——意識調査による実証的研究——ミネルヴァ書房
- Norenzayan, A. (2013) . Big gods: How religion trans-formed cooperation and conflict. Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- (アラ・ノレンザヤン 藤井 修平・松島 公望・荒川 歩 (監訳) (2022) . ビッグ・ゴッド ——変容する宗教と協力・対立の心理学—— 誠信書房)
- 岡部 光明 (2020) . 「宗教的ではないがスピリチュアル(SBNR)」という思想について(研究ノート) 明治学院大学・学術論文公開ウェブサイト
- 小塩 真司・中谷 素之・金子 一史・長峰 伸治 (2002) . ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 ——精神的回復力尺度の作成—— カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 大竹 恵子・島井 哲志・池見 陽・宇津木 成介・ピーターソン, C.・セリグマン, M. E. P. (2005) . 日本版生き方の原則調査票 (VIA-IS: Values in Action Inventory of Strengths) 作成の試み 心理学研究, 76, 461-467.

- 朴 堯星・吉野 諒三 (2015) . 「お化け調査」が浮き彫りにする人々の意識の基底構造
——アジア・太平洋国際価値観調査 (APVS) の関連データの概説—— 統計数理,
63, 163-195.
- Pargament, K. I., & Hahn, J. (1986) . God and the just world: Causal and coping attributions
to God in health situations. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 25, 193-207.
- Peterson, C., & Seligman, M. E. P. (2004) . Character strengths and virtues: A handbook and
classification. Washington, DC: APA Press and Oxford University Press.
- Raes, F., Pommier, E., Neff, K.D., & Van Gucht, D. (2011) . Construction and factorial
validation of a short form of the Self-Compassion Scale. *Clinical Psychology &
Psychotherapy*, 18, 250-255.
- R Core Team (2021) . R: A language and environment for statistical computing. R Foundation
for Statistical Computing, Vienna, Austria.
- 佐川由紀 (2005) . プライベート空間の確保と心理的ゆとり 学習院大学人文科学論集,
14, 229-248.
- 坂本 賢三 (1985) . コスモロジー再興 坂本 賢三 新・岩波講座 哲学 5 自然とコ
スモス (pp.1-33) 岩波書店
- 坂田 浩之・川上 正浩・小城 英子 (2012) . 不思議現象に対する態度尺度 (APPIe) 短
縮版の作成 (1) 不思議現象に対する態度 (29) 日本心理学会第 76 回大会発表
論文集
- 坂田 浩之・川上 正浩・小城 英子 (2014) . 不思議現象に対する態度と曖昧さに対す
る耐性との関連 (2) 不思議現象に対する態度 (43) 日本心理学会第 78 回大会
発表論文集
- 櫻井 義秀 (2017) . 人は宗教で幸せになれるのか ——ウェル・ビーイングと宗教の分
析—— 理論と方法, 32, 80-95.
- 新村 出 (編) (2018) . 広辞苑 第 7 版 岩波書店
- 菅沼 慎一郎 (2013) . 青年期における「諦める」ことの定義と構造に関する研究 教
育心理学研究, 61, 265-276.

- 菅沼 慎一郎 (2014) . 諦めることに対する認知尺度の作成と検討 臨床心理学, 14, 81-89.
- 菅沼 慎一郎 (2015) . 青年期において諦めることはどのように体験されるか——プロセスに着目して—— 発達心理学研究, 26, 23-34.
- 菅沼 慎一郎 (2017) . 諦めること一般に関する認知と時間的展望, 自己肯定感, 人生満足度との関連 東京大学大学院教育学研究科紀要, 57, 197-206.
- 菅沼 慎一郎・中野 美奈・下山 晴彦 (2018) . 精神的健康における適応的諦観の意義と機能 心理学研究, 89, 229-239.
- 高橋 綾子 (2019) . 妖怪に対する社会心理学的手法を用いた探索的研究 東洋大学大学院紀要, 55, 21-30.
- 高橋 綾子・桐生 正幸 (2018) . 日本における代表的な妖怪の類型化 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 15, 97-100.
- 高橋 綾子・桐生 正幸 (2019) . 妖怪心理学 第四話 妖怪とその周辺 日本心理学会第 83 回大会発表論文集
- 高橋 綾子・桐生 正幸・平 伸二 (2018) . 妖怪心理学 第三話 現代と交叉する妖怪 日本心理学会第 82 回大会発表論文集
- 高橋 正美 (2011) . 宗教とスピリチュアリティ 金児 暁嗣 (監修) 松島 公望・河野 由美・杉山 幸子・西脇 良 (編) 宗教心理学概論 (pp.61-80) ナカニシヤ出版
- 高井 範子 (1999) . 実存分析的視点による生き方態度の発達的研究——実存的生き方態度インベントリー (EAL) による検討—— 大阪大学教育学年報, 4, 101-114.
- 高井 範子 (2001) . 他者からの受容感と生き方態度に関する研究: 存在受容感尺度による検討 大阪大学教育学年報, 6, 245-254.
- 徳吉 陽河・岩崎 祥一 (2012) . 認知の柔軟性尺度 (CFI) 日本語版の作成と妥当性 日本心理学会第 76 回大会発表論文集
- 富田 真弓・高橋 靖恵 (2005) . 現代青年の‘心のゆとり’に関する基礎的研究: 質的データの分析から 九州大学心理学研究, 6, 229-235.

- 富田 真弓 (2008) . 心のゆとり感尺度の作成の試み 九州大学心理学研究 , 9, 223-233.
- 富田 真弓 (2012) . 心のゆとり感のあり方：精神的健康とストレス対処方略からの検討 心理臨床学研究 , 30, 633-643.
- 常光 徹 (2016) . 予言する妖怪 歴史民俗博物館振興会
- Updegraff, J. A., Silver, R. C., & Holman, E. A. (2008) . Searching for and finding meaning in collective trauma: Results from a national longitudinal study of the 9/11 terrorist attacks. *Journal of Personality and Social Psychology*, 95, 709-722.
- 渡部 美穂子・金児 暁嗣 (2004) . 都市は人の心と社会を疲弊させるか？ 都市文化研究, 3, 97-117.
- Willard, A.K. & Norenzayan, A. (2017) . ‘Spiritual but not religious’ : Cognition, schizotypy, and conversion in alternative beliefs. *Cognition*, 165, 137-146.
- Wood, A.M., Froh, J.J., & Geraghty, A.W.A. (2010) . Gratitude and well-being: A review and theoretical integration. *Clinical Psychology Review*, 30, 890-905.
- 山田 忠雄・倉持 保男・上野 善道・山田 明雄・井島 正博・笹原 宏之 (編) (2020) . 新明解国語辞典 第8版 三省堂
- 山田 和夫 (1989) . ゆとりと心の病 森 亘 東京大学公開講座 49 ゆとり (pp.59-85) 東京大学出版会
- 山中 由里子 (2019) . 「超自然」の再考：共同研究：驚異と怪異：想像界の比較研究 民博通信 , 164, 18-19.
- 柳田 國男 (2013) . 新訂 妖怪談義 角川学芸出版
- 湯本 豪一 (2016) . 日本の幻獣図譜——大江戸不思議生物出現録—— 東京美術

本研究の発表先一覧

- 研究 1

高橋 綾子・藤井 修平 (2020) . 現代における妖怪のイメージとその社会的機能の検討 ——新型コロナウイルス禍におけるアマビエと祈り—— 日本心理学会第 84 回大会発表論文集

高橋 綾子・藤井 修平 (2022) . 新型コロナウイルス禍のアマビエにみる妖怪の社会的機能 心理学研究, 93, 58-64.

- 研究 2

高橋 綾子・北村 英哉・桐生 正幸 (2021) 日本における伝統的価値観と文化的自己観の関連 日本心理学会第 85 回大会発表論文集

- 研究 3, 4, 5

未発表

注 1) 第 1 部 理論的検討 第 2 章の一部は著者の修士論文を改稿したものである。

高橋 綾子 (2018) . 妖怪の社会心理学的研究 一生起メカニズムと社会的役割—

注 2) 第 1 部 理論的検討, 研究 4, 5 の一部は日本応用心理学会 公開シンポジウム (口頭発表) において発表された。

高橋 綾子 (2019) . 妖怪と心理学 私たちが得たもの 失ったもの 応用心理学研究, 46, 63-89.

謝辞

本学位論文執筆にあたり、大変多くのご支援、ご協力を賜りました。

まずはじめに、格別なる御指導と御高配を賜りました主指導教授の桐生正幸先生と副指導教授の北村英哉先生に心より御礼を申し上げます。

大学を卒業後、一般企業での仕事に従事する中で多くの方々にご支援いただきました。社会人生活が10年を過ぎた頃、これまでにいただいた御恩を何かの形で社会に還元できないだろうかと考え始めたことが進学のかっけとなりました。桐生先生との出会いは、大学院進学を心に決め、研究室訪問にうかがった2016年10月です。当初の研究計画について「もっと売りになるような、あなたにしかできない研究テーマを探さない」とご教示いただき、研究室内を眺めていたときに目に入ったのがゲゲゲの鬼太郎のグッズでした。幼い頃から妖怪が大好きだった私は「桐生先生も妖怪が好きなんですか？」とお聞きしました。これがその後の研究を決定づけることとなったわけですが、今思えば妖怪たちによる導きだったのかもしれない。

北村先生には、2018年度に先生が東洋大学へ再赴任されてからご指導いただきました。研究についての作法や知見に加え、研究との向き合い方をご教授いただいたこと、そして「見えないもの」についてたくさんの楽しい議論ができたDゼミは私にとってかけがえのない時間でした。

魅力的な研究アイデアを次々に生み出し、どのような場所でも瞬時に人脈を築き上げてしまう桐生先生、研究と真摯に向き合い、温厚で学生思いの北村先生、おふたりのご指導なしにはこの論文は書き上がりませんでした。また、学内副査をお引き受けくださった尾崎由香先生には、今後の研究につながる多くの知見をいただきました。深く感謝申し上げます。

本論文の外部審査につきましては、ご多忙にも関わらず慶應義塾大学の吉川肇子先生が快くお引き受けくださいました。吉川先生とは2017年の日本心理学会第81回大会からのお付き合いです。学会発表後に「ファンになりました、これから一生憑いていきます」とお声がけくださったことは、研究生活における大きな精神的支えでした。

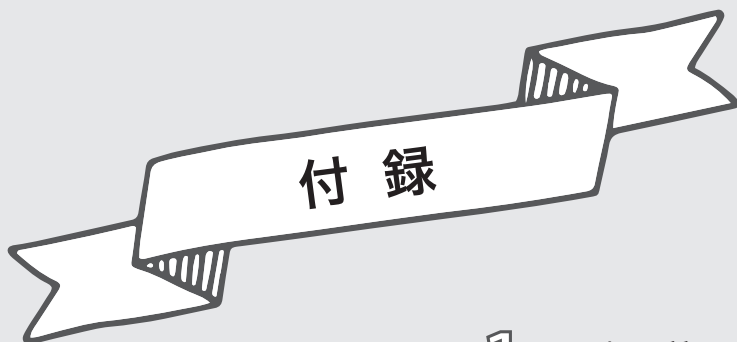
統計分析については東北大学の久保沙織先生にたくさんの知識と示唆を頂きました。学部での専門が心理学ではなく心理統計学に関してまったく初心者であった私に久保先生はいつでも大変真摯にご指導くださいました。こうしてさまざまな分析を用

いて本論文を仕上げる事ができたのは、紛れもなく久保先生のご指導によるものです。学部時代の恩師である横浜国立大学の一柳廣孝先生には、ご自身が主催される怪異怪談研究会への参加をお認めくださったことをはじめ、多大なるご支援をいただきました。第6章の共同研究者である東京家政大学の藤井修平先生にはたくさんのご協力と知見をいただきました。英文校正については前期課程入学時から現在に至るまで Matthew Birch 先生にお世話になりました。社会学研究科社会心理学専攻の諸先生方には授業内での議論を通し、多くのご指摘やアドバイスを頂戴いたしました。また、桐生研究室や北村研究室の皆様には先輩後輩問わず、日々多くのアドバイスや励ましをいただきました。中でも井上美沙樹さん、入山茂さん、海老原優さん、大川明李さん、杵沢岳さん、蘇雨青さんとは大学院時代の多くを共に過ごした楽しい思い出とともに、研究に対するたくさんの貴重なご意見をいただきました。また、大学院生活を送る上でさまざまな支援をしてくださった大学院教務課の皆さま、新型コロナウイルス禍で利用できないときも毎回丁寧に書籍を送ってくださった附属図書館の皆さまにも大変お世話になりました。

ここまでの道のりは決して順風満帆だったとは言えません。自分で決めたこととはいえ、一般企業で仕事をしながらの研究生活は試練の日々でした。幸い大学院進学後に新たに就職した職場では環境に恵まれ、中でも直属の上司であるIさんと先輩社員のTさんには、たくさん励ましとお力添えをいただきました。おふたりのご尽力なしに研究と仕事の両立は叶いませんでした。厚く御礼を申し上げます。

本論文作成に関わり、ご協力くださったすべての方に深謝の意を表します。そして最後に、いつもそばで温かく見守り、惜しみない協力してくれた家族、友人、そして愛する妖怪たちに心より感謝申し上げます。

2023年1月 高橋 綾子



付録

- 1 研究 1 質問項目一覧
- 2 研究 2 質問項目一覧
- 3 研究 3 質問項目一覧
- 4 研究 4-1 質問項目一覧
- 5 研究 4-2 質問項目一覧
- 6 研究 4-3 質問項目一覧
- 7 研究 5 質問項目一覧

1

研究 1 質問項目一覧

「大学生の方を対象としたアマビエに関する調査」へのご協力をお願い

本研究の目的は、大学生の方々を対象として、現在の新型コロナウイルス禍における妖怪アマビエについて調査することです。以下の説明を読んだ上で、皆様が同意をしてくださった場合には、研究へのご参加をお願いいたします。所要時間は約10分間です。

なお、質問内容が不必要に皆様のプライバシーに及んだり、不快に感じたりしないよう十分に配慮しておりますが、心理的な負担を感じる質問が含まれているかもしれません。もちろん、本研究に参加されるかどうかは、皆様の自由です。たとえ皆様が本研究への参加を断ったとしても、何ら不利益を受けることはありません。また、本研究の参加にいったん同意した後でも、途中で研究参加への同意を撤回し、中断することができます。（ブラウザを閉じれば、回答途中でも終了することができます。）その場合にも何ら不利益を受けることはありません。

本研究を通じて得られた情報は、貴重な研究成果として、学術団体の総会や学術雑誌などで発表されることがあります。しかし、いずれの場合も、皆様のお名前や個人が特定される情報は一切示さないようにし、プライバシーの保護には十分配慮いたします。

同意書および回答は、別々のデータとして保管されます。従って、回答データそのものには皆様のお名前など、個人を特定できる情報が記載されていない状態で保管することになりますのでご安心ください。同意書および回答のデータは、原則として研究成果を発表後、一定期間が経過した時点で個人情報漏洩しないよう慎重に破棄いたします。本研究の成果は、フィードバックを行う予定です。本研究に関して、さらに詳しい情報や研究成果の情報が必要な場合、または、本研究に関連する何らかの問題が生じた場合は、下記までご連絡ください。

<本研究の問い合わせ先>

研究実施者 東洋大学大学院 社会学研究科 社会心理学専攻 博士後期課程2年 高橋 綾子

連絡先Email : *****@toyo.jp

研究責任者 東洋大学 社会学部 桐生 正幸

上記の説明を読み、理解した上で、この研究に参加していただける方は「同意する」を選択してください。「同意しない」を選択すると、調査を終了することができます。

- 同意する
- 同意しない

〈基本情報1〉

氏名を入力してください。

※この項目は同意書の署名としてのみ使用され、回答とは別々に保存されるため、個人が特定されることはありません。

〈基本情報2〉

性別をお答えください。

- 男性
- 女性
- その他

〈基本情報3〉

年齢をお答えください。（半角で数字のみを入力してください。）

〈設問1〉

妖怪「アマビエ」についてお聞きします。正確さを求めているのではなく、あくまで個人のイメージを聞くためのアンケートです。

インターネットなどで調べたり、人に聞いたりしないでお答えください。

1) アマビエという妖怪を知っていますか。

- はい
- いいえ (→ 6. にスキップ)

2) どのようにしてアマビエを知りましたか。(自由記述)

3) アマビエを知ったとき、どのような印象を持ちましたか。(自由記述)

4) アマビエについて、あなたが起こした行動はありますか。(複数回答可)

その他を選択した方は、その内容を具体的に教えてください。

- アマビエの絵を貼った
- アマビエの絵を描いた
- アマビエの絵を描いてSNSなどに投稿した
- アマビエに関する商品を購入した
- アマビエに関する商品を購入した
- その他 _____
- 何もしなかった (→ 6. にスキップ)

5) アマビエについて、なぜそのような行動を起こそうと思いましたか。

理由を教えてください。(自由記述)

6) アマビエ以外のものに新型コロナウイルスの終息を祈ったり願ったりしたことがあるありますか。「ある」と答えた方は、その内容を具体的に教えてください。

- ある _____
- ない

〈設問2〉

次の項目について、普段あなたがどのように考えているかをお答えください。あまり深く考えず、感じるまま、自由にお答えください。

1) 次の考え方について、どう思いますか。それぞれの考え方について「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの中であてはまるものを選んでください。

神や仏に願いごとをすると、何となくかなえてくれそうな気がする

- 非常にそう思う
 - わりあいそう思う
 - どちらかといえばそう思う
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばそう思わない
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない
-

以下 選択肢省略

- ・ 神でも仏でも、心のよりどころになるものが欲しい
- ・ 人には知られなくても、悪いことをすれば、いつか必ず自分に返ってくる
- ・ 人間には、自分の力ではどうすることもできない運命というものがある
- ・ 祖先の人達とは、深い心のつながりを感じる
- ・ 山や川など、自然界のものには神が宿っている

2) あなたは、次のような行為をすることがありますか。それぞれについて「よくする」から「まったくしない」までの中であてはまるものを選んでください。

神社にお参りする

- 非常によくする
 - よくする
 - たまにする
 - あまりしない
 - ほとんどしない
 - まったくしない
-

以下 選択肢省略

- ・ お寺にお参りする
 - ・ 墓参りをする
 - ・ 困難な問題にぶつかったとき、神や仏に祈る
 - ・ お守りを持ち歩く
 - ・ おみくじをひく
 - ・ 占いをする（読む）
-

アンケートはこれで終了です。ご協力いただきありがとうございました。

2

研究 2 質問項目一覧

「日常における価値観と行動に関する調査」へのご協力をお願い

本研究の目的は、日常における価値観と行動について調査することです。以下の説明を読んだ上で、皆様が同意をしてくださった場合には、研究へのご参加をお願いいたします。所要時間は約15～20分間です。

なお、質問内容が不必要に皆様のプライバシーに及んだり、不快に感じたりしないよう十分に配慮しておりますが、心理的な負担を感じる質問が含まれているかもしれません。本研究の参加にいったん同意した後でも、途中で研究参加への同意を撤回し、中断することができます。（ブラウザを閉じれば、回答途中でも終了することができます。）その場合、報酬はお支払いできません。

本研究を通じて得られた情報は、貴重な研究成果として、学術団体の総会や学術雑誌などで発表されることがあります。しかし、いずれの場合も、皆様のお名前や個人が特定される情報は一切示さないようにし、プライバシーの保護には十分配慮いたします。

同意書および回答は、別々のデータとして保管されます。従って、回答データそのものには個人を特定できる情報が記載されていない状態で保管することになりますのでご安心ください。同意書および回答のデータは、原則として研究成果を発表後、一定期間が経過した時点で個人情報漏洩しないよう慎重に破棄いたします。

上記の説明を読み、理解した上で、この研究に参加していただける方は「同意する」を選択してください。「同意しない」を選択すると、調査を終了することができます。

- 同意する
- 同意しない

〈基本情報1〉

クラウドワークスで使用している表示用の名前を正確に入力してください。

※表示用の名前は、タスクの完了確認に利用します。

データ照合後は削除し、回答とは別々に保存されるため、個人が特定されることはありません。

〈基本情報2〉

性別をお答えください。

- 男性
 - 女性
 - その他
-

〈基本情報3〉

職業をお答えください。

- 会社員
 - 自営業
 - 公務員
 - 学生
 - その他
-

〈基本情報4〉

年齢を半角数字で入力してください。

〈設問1〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

人の成功や失敗、幸福と不幸は、すべて天が決めたものである

- 非常にそう思う
- わりあいそう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらともいえない
- どちらかといえばそう思わない
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

以下 選択肢省略

- ・物事はあまり人が力を加えないで自然になるように任せておいた方がうまくいくと思う
- ・人間には、自分の力ではどうすることもできない運命というものがある
- ・山・川・草・木などに自然の霊が宿っているような気がする
- ・自然の偉大さに尊崇の念をもっている
- ・環境破壊が続いているといつか大自然の怒りをかうのではないかと思う
- ・食べ物をそまつにするとすまないことをしたような気持ちになる
- ・ものをそまつにするとばちがあたる
- ・人は死んでも繰り返して生まれ変わるものだ
- ・生前の行為の良し悪しによって、死後の世界での扱いが決まる
- ・死者の供養をしないとたたりがあると思う
- ・死後の世界はあると思う
- ・地獄・極楽というのは迷信である
- ・水子供養はするべきである
- ・神や仏に願いごとをすると、何となくかなえてくれそうな気がする
- ・神や仏をそまつにするとばちがあたる
- ・この世の中では、がんばった人には、確実に報われるときがある
- ・この世の中では、悪いことをした人には、必ずその報いがおとずれる
- ・家の伝統というものは基本的にその血筋によって継承されるべきものだ
- ・結果よりもどれだけ努力したかが重要であると思う
- ・努力は何事にも代え難い人間の美德だと思う
- ・日常ではいろいろがまんすることが大切だと思う
- ・場の空気を悪くすることは絶対に避けたい
- ・場の空気が悪くなることはなんとなくいやだ
- ・きれいな言葉遣いを心がけていると、心が澄んでよい人になると思う
- ・言葉には、発せられた内容どおりの状態を実現する力がある

- ・ 人から恨まれると、幸せになれないような気がする
 - ・ 人から恨まれたくない
 - ・ 人々は、互いに自己主張を抑え、譲り合って物事を解決していくことが重要である
 - ・ 自分を抑えても、人間関係を大切にすべきである
 - ・ お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感じる
 - ・ 針供養などの昔からの宗教的行事は、無意味な風俗である
 - ・ 昔からのしきたりや年中行事には抵抗を感じる
 - ・ 先祖のお墓参りを全くしないとその家によくないことが起こるように思う
 - ・ 家を新築することがあったら方角の吉兆にも気をつけたいと思う
 - ・ 北まくらは何となく気になる
 - ・ 一心に念じれば、願いが通じることはあると思う
 - ・ 虫の知らせ、というのはあると思う
 - ・ 人から受けた恩は返さなくてはならない
 - ・ みんなで苦しみを分かち合えば、苦境を乗り越えることができる
-

※確認項目

この世には、千年以上生きている人間が存在する

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にそう思う」を選択してください。

〈設問2〉

あなたは、次のような行為をすることがありますか。

それぞれについて、「非常によくする」から「まったくしない」の中であてはまるものを選んでください。

神社にお参りする

- 非常によくする
 - よくする
 - たまにする
 - あまりしない
 - ほとんどしない
 - まったくしない
-

以下 選択肢省略

- ・ お寺にお参りする
- ・ 墓参りをする
- ・ 魔よけになるものを自分の身のまわりにおく
- ・ 縁起のよい物を自分の身のまわりにおく
- ・ お守りを身につける
- ・ 困難な問題にぶつかったとき、神や仏に祈る
- ・ 身の安全や商売繁盛、入試合格などを、祈願しに行く
- ・ 仏壇や神棚に花を供えたり、手を合わせたりする
- ・ おみくじをひく
- ・ 占いをしてもらう
- ・ 占いをする
- ・ 雑誌などの占いを読む
- ・ お正月飾りをする
- ・ 初詣をする
- ・ 節分に豆まきをする
- ・ 端午の節句には菖蒲湯に入る
- ・ 七夕に願いごとをする
- ・ 冬至には柚子湯に入る
- ・ おおみそかに年越しそばを食べる

〈設問3〉

あなた自身のことについて、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。

それぞれについて、「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」の中で該当するものを選んでください。

他者の視線が気になる

- 非常にそう思う
 - わりあいそう思う
 - どちらかといえばそう思う
 - どちらかといえばそう思わない
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない
-

以下 選択肢省略

- ・ 他者の評価を気にする
 - ・ 他者との地位や相対関係が気になる
 - ・ 迷いやためらいを感じ、実行に移せない
 - ・ 他者が自分の考えを何と思おうと気にしない
 - ・ 自分の信じる場所を守り通す
 - ・ 自分で考えたのが最良の決断である
 - ・ 善悪は自分の考えで決まる
 - ・ 自分一人で物事の決断をする
 - ・ 考え・行動が他者と違ってても気にならない
 - ・ 自分の意見はいつもはっきり言う
 - ・ いつも自信を持って発言し、行動している
 - ・ 常に自分の意見を持つようにしている
 - ・ 常に自分が何をしたいのか分かっている
 - ・ 仲間の中で和を維持することは大切だ
 - ・ 集団内の仲間との意見の対立を避ける
 - ・ 意見が対立したとき相手の意見を受け入れる
 - ・ 人から好かれることは大切である
 - ・ 相手や状況で態度や行動を変える
 - ・ どう感じるかは他者や状況によって変わる
-

※確認項目

ひとりぼっちでいることが好きだ

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。

実際の回答と関わりなく「非常にあてはまる」を選択してください。

〈設問4〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「まったくそう思わない」から「非常にそう思う」の中であてはまるものを選んでください。

自然界に存在する巨岩や大木には、神が宿っていると思う

- 非常にそう思う
 - わりあいそう思う
 - どちらかといえばそう思う
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばそう思わない
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない
-

以下 選択肢省略

- ・ 海には海の、山には山の神が存在すると思う
- ・ 大木を人間の都合で切り倒すと、たたりが起こると思う
- ・ 手作りのモノには作り手の心が宿っているような気がする
- ・ 形見や遺品には、使っていた人の心が宿っているような気がする
- ・ 古着や古道具には以前の所有者の心が宿っているような気がする
- ・ 身の回りのモノに、人に対するような愛着を感じることもある
- ・ 身の回りのモノに名前をつけることがある
- ・ 長く愛用していたモノを捨てるときに、可哀想に思うことがある
- ・ 長く愛用しているモノを、自分の分身のように感じることもある
- ・ 身の回りのモノにも、人間のような心があると思うことがある

〈設問5〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

先祖の霊はあると思う

- 非常にそう思う
 - わりあいそう思う
 - どちらかといえばそう思う
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばそう思わない
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない
-

以下 選択肢省略

- ・ 守護霊の存在を信じている
 - ・ 神仏の存在を信じている
 - ・ 死後の世界はあると思う
 - ・ 前世の存在を信じている
 - ・ 占いは当たると思う
 - ・ 占いが当たると考えると安心する
 - ・ 心霊写真はトリックがあると思う
 - ・ 心霊写真は、単なる思い込みにすぎない
 - ・ 超能力はおもしろい
 - ・ 超能力は楽しい
 - ・ 占いは怖い
 - ・ 超能力は怖い
 - ・ 自分は靈感がある方だ
 - ・ 霊を見たことがある
-

※確認項目

なまずが暴れると地震が起こる

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にそう思う」を選択してください。

アンケートはこれで終了です。ご協力いただきありがとうございました。

3

研究 3 質問項目一覧

「日常における価値観と行動に関する調査」へのご協力をお願い

本研究の目的は、日常における価値観と行動について調査することです。以下の説明を読んだ上で、皆様が同意をしてくださった場合には、研究へのご参加をお願いいたします。所要時間は約10分間です。

なお、質問内容が不必要に皆様のプライバシーに及んだり、不快に感じたりしないよう十分に配慮しておりますが、心理的な負担を感じる質問が含まれているかもしれません。本研究の参加にいったん同意した後でも、途中で研究参加への同意を撤回し、中断することができます。（ブラウザを閉じれば、回答途中でも終了することができます。）その場合、報酬はお支払いできません。

本研究を通じて得られた情報は、貴重な研究成果として、学術団体の総会や学術雑誌などで発表されることがあります。しかし、いずれの場合も、皆様のお名前や個人が特定される情報は一切示さないようにし、プライバシーの保護には十分配慮いたします。

同意書および回答は、別々のデータとして保管されます。従って、回答データそのものには個人を特定できる情報が記載されていない状態で保管することになりますのでご安心ください。同意書および回答のデータは、原則として研究成果を発表後、一定期間が経過した時点で個人情報漏洩しないよう慎重に破棄いたします。

上記の説明を読み、理解した上で、この研究に参加していただける方は「同意する」を選択してください。「同意しない」を選択すると、調査を終了することができます。

- 同意する
- 同意しない

〈基本情報1〉

クラウドワークスで使用している表示用の名前を正確に入力してください。

※表示用の名前は、タスクの完了確認に利用します。

データ照合後は削除し、回答とは別々に保存されるため、個人が特定されることはありません。

〈基本情報2〉

性別をお答えください。

- 男性
 - 女性
 - その他
-

〈基本情報3〉

職業をお答えください。

- 公務員
 - 経営者・役員
 - 会社員（事務系）
 - 会社員（技術系）
 - 会社員（その他）
 - 自営業
 - 自由業
 - 専業主婦
 - パート・アルバイト
 - 学生
 - その他
-

〈基本情報4〉

年齢を半角数字で入力してください。

〈設問1〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

自然の偉大さには神聖なものを感じる

- 非常にそう思う
- わりあいそう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらともいえない
- どちらかといえばそう思わない
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

以下 選択肢省略

- ・ 環境破壊が続いていると、いつか大自然の怒りをかうのではないかと思う
- ・ 山や川などには自然の霊が宿っているような気がする
- ・ 食べ物をそまつにするとすまないことをしたような気持ちになる
- ・ 虫の知らせ、というのはあるような気がする
- ・ 言葉には発せられた内容どおりの状態を実現する力があるような気がする
- ・ ものをそまつにするとばちがあたると思う
- ・ 物事はあまり人が力を加えないで自然になるように任せておいた方がうまくいくと思う
- ・ きれいな言葉遣いを心がけていると心が澄んでよい人になると思う
- ・ 自然は人間が統制できないものだと思う
- ・ 自然には人間が手を加えない方がよいと思う
- ・ 苦しいときには神や仏を頼るのも良いと思う
- ・ 生き物だけでなく、自然やものにも魂は宿っているような気がする
- ・ 生き物だけでなく、すべてのものに神が宿っているような気がする
- ・ 人の成功や失敗などには、自分ではどうすることもできない力が働くことがあると思う
- ・ 人生には自分ではどうすることもできない運命というものがあると思う
- ・ 死後の世界はあると思う
- ・ 地獄や天国は想像上のものだと思う[R]
- ・ この世で悪いことをした人は、死んだら地獄へ落とされると思う
- ・ 人は死んでも繰り返し生まれ変わるような気がする
- ・ 生前、繋がりが深かった人は亡くなくても見守ってくれている気がする
- ・ 死者の供養をしないとたたりがあると思う
- ・ 先祖のお墓参りをしないと悪いことが起きそうな気がする
- ・ 北まくらは何となく気になる
- ・ 神や仏をそまつにするとばちがあたると思う
- ・ 死者の供養など死に関連する行事は、きちんと行なっておくと安心だと思う

- ・ 人の恨みをかうと、たたられそうだと思う
- ・ 良いことも悪いことも自分のしたことはすべて自分に返ってくるような気がする
- ・ この世に強い思いを残して亡くなった人は成仏できないと思う
- ・ 事件や事故で人が亡くなった家にはなるべく住みたくないと思う
- ・ 昔からあるしきたりや年中行事は大切にされた方がよいと思う
- ・ 古くから行われているしきたりや年中行事には必要性を感じない [R]
- ・ お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感じる
- ・ 厄年には厄払いをしておきたいと思う
- ・ 昔からあるしきたりや年中行事はこれからも伝承していったほうが良いと思う
- ・ 茶柱がたつと良いことがありそうな気がする
- ・ 虹を見ると良いことがありそうな気がする
- ・ 四つ葉のクローバーが見つかるとういことがありそうな気がする
- ・ 縁起の良いものを身の周りにおいておくとういことがありそうな気がする
- ・ 魔除けになるものを身の周りにおいておくとういこと
- ・ 時計を見たときゾロ目だとういことがありそうな気がする
- ・ 流れ星に願いごとをすると叶うと思う
- ・ 日頃の行いが良いとういことがあるような気がする
- ・ 大事にしていたものがなくなったり壊れたりしたときは自分の身代わりになってくれたのだと感じる
- ・ 病気やケガは休息を取る合図だと感じる
- ・ ものごとがスムーズに進まないときは方向性が間違っていると教えられているような気がする
- ・ 世の中には科学で解明できないことがあると思う
- ・ 世の中には人間が立ち入ってはならない領域があるような気がする
- ・ 掃除をすると心も浄化されるような気がする
- ・ 塩にはお清めの効果があると思う

※確認項目

この世には、千年以上生きている人間が存在する

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
 実際の回答と関わりなく「非常にそう思う」を選択してください。

〈設問2〉

あなたは、次のような行為をすることがありますか。それぞれについて、「非常によくする」から「まったくしない」の中であてはまるものを選んでください。

身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しに行く

- 非常によくする
- よくする
- たまにする
- あまりしない
- ほとんどしない
- まったくしない

以下 選択肢省略

- ・ 初詣をする
- ・ 神社にお参りする
- ・ おみくじをひく
- ・ お寺にお参りする
- ・ お守りを身につける
- ・ お正月飾りをする
- ・ 仏壇や神棚に花を供えたり手を合わせたりする
- ・ 墓参りをする
- ・ 困難な問題にぶつかったとき神や仏に祈る
- ・ 七夕に願いごとをする
- ・ 占いをする
- ・ 占いをしてもらう
- ・ 雑誌などの占いを読む
- ・ 予定をたてるとき占いのバイオリズムを参考にする
- ・ 大切な日取りを決めるとき仏滅を避ける
- ・ 冬至に柚子湯に入る
- ・ 端午の節句に菖蒲湯に入る
- ・ 節分に豆まきをする
- ・ 大晦日に年越しそばを食べる
- ・ お正月におせち料理を食べる
- ・ お正月に雑煮を食べる
- ・ 1月7日に七草がゆを食べる
- ・ 節分に恵方巻きを食べる
- ・ お彼岸におはぎ（ぼたもち）を食べる
- ・ 魔よけになるものを自分の身のまわりにおく
- ・ 縁起のよい物を自分の身のまわりにおく

- ・ 葬儀に参列したあとは塩で清めてから家に入る
- ・ 数字を選ぶとき4を避ける
- ・ 入院のお見舞いには鉢植えの花を避ける

〈設問3〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

自然界に存在する巨岩や大木には、神が宿っていると思う

- 非常にそう思う
 - わりあいそう思う
 - どちらかといえばそう思う
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばそう思わない
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない
-

以下 選択肢省略

- ・ 海には海の、山には山の神が存在すると思う
 - ・ 大木を人間の都合で切り倒すと、たたりが起こると思う
 - ・ 手作りのモノには作り手の心が宿っているような気がする
 - ・ 形見や遺品には、使っていた人の心が宿っているような気がする
 - ・ 古着や古道具には以前の所有者の心が宿っているような気がする
 - ・ 身の回りのモノに、人に対するような愛着を感じることもある
 - ・ 身の回りのモノに名前をつけることがある
 - ・ 長く愛用していたモノを捨てる時に、可哀想に思うことがある
 - ・ 長く愛用しているモノを、自分の分身のように感じることもある
 - ・ 身の回りのモノにも、人間のような心があると思うことがある
-

※確認項目

身の回りのモノは大切にしなくてもよい

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にそう思う」を選択してください。

〈設問4〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

先祖の霊はあると思う

- 非常にそう思う
 - わりあいそう思う
 - どちらかといえばそう思う
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばそう思わない
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない
-

以下 選択肢省略

- ・ 守護霊の存在を信じている
 - ・ 神仏の存在を信じている
 - ・ 死後の世界はあると思う
 - ・ 前世の存在を信じている
 - ・ 占いは当たると思う
 - ・ 占いが当たると考えると安心する
 - ・ 心霊写真はトリックがあると思う
 - ・ 心霊写真は、単なる思い込みにすぎない
 - ・ 超能力はおもしろい
 - ・ 超能力は楽しい
 - ・ 占いは怖い
 - ・ 超能力は怖い
 - ・ 自分は靈感がある方だ
 - ・ 霊を見たことがある
-

※確認項目

なまずが暴れると地震が起こる

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にそう思う」を選択してください。

あなたの確認コードは_____です。

クラウドワークス上でこの確認コードを入力し、作業を完了させてください。

アンケートはこれで終了です。ご協力いただきありがとうございました。

4

研究 4-1 質問項目一覧

「日常における価値観と行動に関する調査」へのご協力をお願い

本研究の目的は、日常における価値観と行動について調査することです。以下の説明を読んだ上で、皆様が同意をしてくださった場合には、研究へのご参加をお願いいたします。所要時間は約15～20分間です。

なお、質問内容が不必要に皆様のプライバシーに及んだり、不快に感じたりしないよう十分に配慮しておりますが、心理的な負担を感じる質問が含まれているかもしれません。本研究の参加にいったん同意した後でも、途中で研究参加への同意を撤回し、中断することができます。（ブラウザを閉じれば、回答途中でも終了することができます。）その場合、報酬はお支払いできません。

本研究を通じて得られた情報は、貴重な研究成果として、学術団体の総会や学術雑誌などで発表されることがあります。しかし、いずれの場合も、皆様のお名前や個人が特定される情報は一切示さないようにし、プライバシーの保護には十分配慮いたします。

同意書および回答は、別々のデータとして保管されます。従って、回答データそのものには個人を特定できる情報が記載されていない状態で保管することになりますのでご安心ください。同意書および回答のデータは、原則として研究成果を発表後、一定期間が経過した時点で個人情報漏洩しないよう慎重に破棄いたします。

上記の説明を読み、理解した上で、この研究に参加していただける方は「同意する」を選択してください。「同意しない」を選択すると、調査を終了することができます。

- 同意する
- 同意しない

〈基本情報1〉

クラウドワークスで使用している表示用の名前を正確に入力してください。

※表示用の名前は、タスクの完了確認に利用します。

データ照合後は削除し、回答とは別々に保存されるため、個人が特定されることはありません。

〈基本情報2〉

性別をお答えください。

- 男性
 - 女性
 - その他
-

〈基本情報3〉

職業をお答えください。

- 公務員
 - 経営者・役員
 - 会社員（事務系）
 - 会社員（技術系）
 - 会社員（その他）
 - 自営業
 - 自由業
 - 専業主婦
 - パート・アルバイト
 - 学生
 - その他
-

〈基本情報4〉

年齢を半角数字で入力してください。

〈設問1〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

自然の偉大さに尊崇の念をもっている

- 非常にそう思う
- わりあいそう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらともいえない
- どちらかといえばそう思わない
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

以下 選択肢省略

- ・ 環境破壊が続いていると、いつか大自然の怒りをかうのではないかと思う
- ・ 山、川、草、木などに自然の霊が宿っているような気がする
- ・ 食べ物をそまつにすると、すまないことをしたような気持ちになる
- ・ 虫の知らせ、というのはあると思う
- ・ 言葉には発せられた内容どおりの状態を実現する力がある
- ・ ものをそまつにするとばちがあたる
- ・ 物事はあまり人が力を加えないで自然になるように任せておいた方がうまくいくと思う
- ・ きれいな言葉遣いを心がけていると、心が澄んでよい人になると思う
- ・ 死後の世界はあると思う
- ・ 地獄、極楽というのは迷信である
- ・ 生前の行為の良し悪しによって死後の世界での扱いが決まる
- ・ 人は死んでも繰り返し生まれ変わるものだ
- ・ 死者の供養をしないとたたりがあると思う
- ・ 先祖のお墓参りを全くしないと、その家によくないことが起こるように思う
- ・ 北まくらは何となく気になる
- ・ 神や仏をそまつにするとばちがあたる
- ・ 昔からのしきたりや年中行事には抵抗を感じる
- ・ 針供養などの昔からの宗教的行事は無意味な風俗である
- ・ お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感じる

※確認項目

この世には、300年以上生きている人間が存在する

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にそう思う」を選択してください。

〈設問2〉

あなたは、次のような行為をすることがありますか。それぞれについて、「非常によくする」から「まったくしない」の中であてはまるものを選んでください。

身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しに行く

- 非常によくする
 - よくする
 - たまにする
 - あまりしない
 - ほとんどしない
 - まったくしない
-

以下 選択肢省略

- ・ 初詣をする
- ・ 神社にお参りする
- ・ おみくじをひく
- ・ お寺にお参りする
- ・ お守りを身につける
- ・ お正月飾りをする
- ・ 仏壇や神棚に花を供えたり手を合わせたりする
- ・ 墓参りをする
- ・ 困難な問題にぶつかったとき神や仏に祈る
- ・ 七夕に願いごとをする
- ・ 占いをする
- ・ 占いをしてもらう
- ・ 雑誌などの占いを読む
- ・ 冬至に柚子湯に入る
- ・ 端午の節句に菖蒲湯に入る
- ・ 節分に豆まきをする
- ・ 魔よけになるものを自分の身のまわりにおく
- ・ 縁起のよい物を自分の身のまわりにおく

〈設問3〉

あなた自身のことについて、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」の中で該当するものを選んでください。

困難な状況について対応する前に複数の選択肢を考慮する

- 非常にあてはまる
 - わりあいあてはまる
 - どちらかといえばあてはまる
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばあてはまらない
 - あまりあてはまらない
 - まったくあてはまらない
-

以下 選択肢省略

- ・ 私が直面する困難な状況を解決するために複数の方法を考えることができる
 - ・ 困難な状況であるとき自分のふるまい方を決める前に多くの選択肢について考慮する
 - ・ 行動に原因があると考える時に利用できる全ての情報と事実について考慮する
 - ・ 意思決定をする前に多くの選択肢を考える
 - ・ 困難な状況に直面したとき私はどうするべきかわからなくなる
 - ・ 困難な状況に直面したとき私は自分を統制できないと感じる
 - ・ 困難な状況に直面したとき意思決定がなかなかできない
 - ・ 困難な状況では私には物事を変えていく力がないことに気づく
 - ・ 困難な状況に対処するために数多く異なった方法があることに面倒な感じがする
-

※確認項目

これまで困難な状況に遭遇したことはない

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にあてはまる」を選択してください。

〈設問4〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「まったくそう思わない」から「非常にそう思う」の中であてはまるものを選んでください。

はっきりしない状況では どうしたらいいかわからなくなる

- 非常にそう思う
 - わりあいそう思う
 - どちらかといえばそう思う
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばそう思わない
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない
-

以下 選択肢省略

- ・ はっきりしない状況では どうしたらいいかわからなくなる
- ・ いろんな可能性があるると選ぶのに時間がかかって迷う
- ・ 情報が多すぎると かえって頭が混乱してしまう
- ・ はっきりしない状況におかれると不安になる
- ・ 見たことがないものに出会うと怖くなる
- ・ いくつかの解釈ができると いろんな角度からものごとを見れる点では自由な感じがする
- ・ いくつかの解釈ができると 視野や可能性が広がっていくのでおもしろい
- ・ 情報がたりないと 正確な判断はできない
- ・ 情報がたりないと 動きづらいので できるだけ情報を集めたい
- ・ いろんな可能性がある時には さまざまなことを考慮して対処法を考えておきたい
- ・ 見たことがないものは 見ておくにこしたことはないので、ぜひ見てみたい
- ・ 見たことがないものには 想像力をかきたてられる
- ・ いろんな可能性があるると すべてを試してみたくなる
- ・ 不完全なことがあるからおもしろい

〈設問5〉

あなた自身のことについて、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくそう思わない」から「非常にそう思う」の中であてはまるものを選んでください。

交友関係が広く社会的である

- 非常にそう思う
 - わりあいそう思う
 - どちらかといえばそう思う
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばそう思わない
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない
-

以下 選択肢省略

- ・ 交友関係が広く社会的である
- ・ 自分から人と親しくなることが得意だ
- ・ 昔から人との関係をとるのが上手だ
- ・ どんなことでも たいてい何とかかなりそうな気がする
- ・ たとえ自信がないことでも結果的に何とかかなると思う
- ・ 困難な出来事が起きても どうか切り抜けることができると思う
- ・ 人の気持ちや微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ
- ・ 他人の考え方を理解するのが比較的得意だ
- ・ 嫌な出来事が どんな風に自分の気持ちに影響するか理解している
- ・ 自分の性格についてよく理解している

〈設問6〉

ふだんのあなた自身について、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくそう感じない」から「いつもそう感じている」の中であてはまるものを選んでください。

自分の生活に満足していると感じる

- いつもそう感じている
- わりあいそう感じている
- どちらかといえばそう感じている
- どちらかといえばそう感じない
- あまりそう感じない
- まったくそう感じない

以下 選択肢省略

- ・自分の好きなことができていると感じる
- ・周りにあるものを見て楽しめていると感じる
- ・自分のはのびのびと生きていると感じる
- ・生きがいがあると感じる
- ・安心感があると感じる
- ・心から笑えると感じる
- ・無理していない感じがする
- ・おしつぶされそうな感じがする
- ・不安を感じる
- ・なんだかつらいと感じる
- ・いろいろなことが気になってしょうがないと感じる
- ・きつい、つかれたと感じる
- ・ちょっとしたことを不満を感じる
- ・焦りを感じる
- ・何もかもわずらわしいと感じる
- ・いらいらしていると感じる
- ・自分のことだけでなく人のことも考えられると感じる
- ・他人に寛容になれると感じる
- ・他人のことも思いやれる余裕があると感じる
- ・人と笑顔で接していると感じる

※確認項目

休息はしっかり取れていると感じる

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「いつもそう感じている」を選択してください。

あなたの確認コードは_____です。
クラウドワークス上でこの確認コードを入力し、作業を完了させてください。

アンケートはこれで終了です。ご協力いただきありがとうございました。

5

研究 4-2 質問項目一覧

「日本人の価値観と行動に関する調査」へのご協力をお願い

本研究の目的は、日本人の価値観と日常の行動について調査することです。以下の説明を読んだ上で、皆様が同意をしてくださった場合には、研究へのご参加をお願いいたします。所要時間は約10～15分間です。

なお、質問内容が不必要に皆様のプライバシーに及んだり、不快に感じたりしないよう十分に配慮しておりますが、心理的な負担を感じる質問が含まれているかもしれません。本研究の参加にいったん同意した後でも、途中で研究参加への同意を撤回し、中断することができます。（ブラウザを閉じれば、回答途中でも終了することができます。）その場合、報酬はお支払いできません。

本研究を通じて得られた情報は、貴重な研究成果として、学術団体の総会や学術雑誌などで発表されることがあります。しかし、いずれの場合も、皆様のお名前や個人が特定される情報は一切示さないようにし、プライバシーの保護には十分配慮いたします。

同意書および回答は、別々のデータとして保管されます。従って、回答データそのものには個人を特定できる情報が記載されていない状態で保管することになりますのでご安心ください。同意書および回答のデータは、原則として研究成果を発表後、一定期間が経過した時点で個人情報漏洩しないよう慎重に破棄いたします。

上記の説明を読み、理解した上で、この研究に参加していただける方は「同意する」を選択してください。「同意しない」を選択すると、調査を終了することができます。

- 同意する
- 同意しない

〈基本情報1〉

クラウドワークスで使用している表示用の名前を正確に入力してください。

※表示用の名前は、タスクの完了確認に利用します。

データ照合後は削除し、回答とは別々に保存されるため、個人が特定されることはありません。

〈基本情報2〉

性別をお答えください。

- 男性
- 女性
- その他

〈基本情報3〉

職業をお答えください。

- 公務員
- 経営者・役員
- 会社員（事務系）
- 会社員（技術系）
- 会社員（その他）
- 自営業
- 自由業
- 専業主婦
- パート・アルバイト
- 学生
- その他

〈基本情報4〉

年齢を半角数字で入力してください。

〈設問1〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

自然の偉大さには神聖なものを感じる

- 非常にそう思う
- わりあいそう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらともいえない
- どちらかといえばそう思わない
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

以下 選択肢省略

- ・ 環境破壊を続けていると、いつか大自然の怒りをかうのではないかと思う
- ・ 山や川などには自然の霊が宿っているような気がする
- ・ 食べ物をそまつにするとすまないことをしたような気持ちになる
- ・ 虫の知らせ、というのはあるような気がする
- ・ 言葉には発せられた内容どおりの状態を実現する力があるような気がする
- ・ ものをそまつにするとばちがあたると思う
- ・ 物事はあまり人が力を加えないで自然になるように任せておいた方がうまくいくと思う
- ・ きれいな言葉遣いを心がけていると心が澄んでよい人になると思う
- ・ 自然は人間が統制できないものだと思う
- ・ 自然には人間が手を加えない方がよいと思う
- ・ 苦しいときには神や仏を頼るのも良いと思う
- ・ 生き物だけでなく、自然やものにも魂は宿っているような気がする
- ・ 生き物だけでなく、すべてのものに神が宿っているような気がする
- ・ 人の成功や失敗などには、自分ではどうすることもできない力が働くことがあると思う
- ・ 人生には自分ではどうすることもできない運命というものがあると思う
- ・ 死後の世界はあると思う
- ・ 地獄や天国は想像上のものだと思う
- ・ この世で悪いことをした人は、死んだら地獄へ落とされると思う
- ・ 人は死んでも繰り返し生まれ変わるような気がする
- ・ 生前、繋がりが深かった人は亡くなくても見守ってくれている気がする
- ・ 死者の供養をしないとたたりがあると思う
- ・ 先祖のお墓参りをしないと悪いことが起きそうな気がする
- ・ 北まくらは何となく気になる
- ・ 神や仏をそまつにするとばちがあたると思う
- ・ 死者の供養など死に関連する行事は、きちんと行なっておくと安心だと思う

- ・ 人の恨みをかうと、たたられそうだと思う
- ・ 良いことも悪いことも自分のしたことはすべて自分に返ってくるような気がする
- ・ この世に強い思いを残して亡くなった人は成仏できないと思う
- ・ 事件や事故で人が亡くなった家にはなるべく住みたくないと思う
- ・ 昔からあるしきたりや年中行事は大切にされた方がよいと思う
- ・ 古くから行われているしきたりや年中行事には必要性を感じない
- ・ お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感じる
- ・ 厄年には厄払いをしておきたいと思う
- ・ 昔からあるしきたりや年中行事はこれからも伝承していったほうが良いと思う
- ・ 茶柱がたつと良いことがありそうな気がする
- ・ 虹を見ると良いことがありそうな気がする
- ・ 四つ葉のクローバーが見つかるとういことがありそうな気がする
- ・ 縁起の良いものを身の周りにおいておくとういことがありそうな気がする
- ・ 魔除けになるものを身の周りにおいておくとういこと
- ・ 時計を見たときゾロ目だとういことがありそうな気がする
- ・ 流れ星に願いごとをすると叶うと思う
- ・ 日頃の行いが良いとういことがあるような気がする
- ・ 大事にしていたものがなくなったり壊れたりしたときは自分の身代わりになってくれたのだと感じる
- ・ 病気やケガは休息を取る合図だと感じる
- ・ ものごとがスムーズに進まないときは方向性が間違っていると教えられているような気がする
- ・ 世の中には科学で解明できないことがあると思う
- ・ 世の中には人間が立ち入ってはならない領域があるような気がする
- ・ 掃除をすると心も浄化されるような気がする
- ・ 塩にはお清めの効果があると思う

※確認項目

この世には、千年以上生きている人間が存在する

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にそう思う」を選択してください。

〈設問2〉

あなたは、次のような行為をすることがありますか。それぞれについて、「非常によくする」から「まったくしない」の中であてはまるものを選んでください。

身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しに行く

- 非常によくする
 - よくする
 - たまにする
 - あまりしない
 - ほとんどしない
 - まったくしない
-

以下 選択肢省略

- ・ 初詣をする
- ・ 神社にお参りする
- ・ おみくじをひく
- ・ お寺にお参りする
- ・ お守りを身につける
- ・ お正月飾りをする
- ・ 仏壇や神棚に花を供えたり手を合わせたりする
- ・ 墓参りをする
- ・ 困難な問題にぶつかったとき神や仏に祈る
- ・ 七夕に願いごとをする
- ・ 占いをする
- ・ 占いをしてもらう
- ・ 雑誌などの占いを読む
- ・ 予定をたてるとき占いのバイオリズムを参考にする
- ・ 大切な日取りを決めるとき仏滅を避ける
- ・ 冬至に柚子湯に入る
- ・ 端午の節句に菖蒲湯に入る
- ・ 節分に豆まきをする
- ・ 大晦日に年越しそばを食べる
- ・ お正月におせち料理を食べる
- ・ お正月に雑煮を食べる
- ・ 1月7日に七草がゆを食べる
- ・ 節分に恵方巻きを食べる
- ・ お彼岸におはぎ（ぼたもち）を食べる
- ・ 魔よけになるものを自分の身のまわりにおく
- ・ 縁起のよい物を自分の身のまわりにおく

- ・ 葬儀に参列したあとは塩で清めてから家に入る
- ・ 数字を選ぶとき4を避ける
- ・ 入院のお見舞いには鉢植えの花を避ける

〈設問3〉

あなた自身のことについて、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」の中で該当するものを選んでください。

困難な状況について対応する前に複数の選択肢を考慮する

- 非常にあてはまる
 - わりあいあてはまる
 - どちらかといえばあてはまる
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばあてはまらない
 - あまりあてはまらない
 - まったくあてはまらない
-

以下 選択肢省略

- ・ 私が直面する困難な状況を解決するために複数の方法を考えることができる
 - ・ 困難な状況であるとき自分のふるまい方を決める前に多くの選択肢について考慮する
 - ・ 行動に原因があると考える時に利用できる全ての情報と事実について考慮する
 - ・ 意思決定をする前に多くの選択肢を考える
 - ・ 困難な状況に直面したとき私はどうするべきかわからなくなる
 - ・ 困難な状況に直面したとき私は自分を統制できないと感じる
 - ・ 困難な状況に直面したとき意思決定がなかなかできない
 - ・ 困難な状況では私には物事を変えていく力がないことに気づく
 - ・ 困難な状況を対処するために数多く異なった方法があることに面倒な感じがする
-

※確認項目

これまで困難な状況に遭遇したことはない

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にあてはまる」を選択してください。

〈設問4〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

いろいろな可能性があるとして、すべてを試してみたいくなる

- 非常にそう思う
- わりあいそう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらともいえない
- どちらかといえばそう思わない
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

以下 選択肢省略

- ・いくつかの解釈ができると、いろいろな角度からものごとを見れる点では自由な感じがする
- ・見たことがないものには想像力をかきたてられる
- ・いろいろな可能性があるとして選べるのでうれしい
- ・見たことがないものは見ておくにこしたことはないので、ぜひ見てみたい
- ・不完全なことは完全にしていくプロセスがあっておもしろい
- ・いくつかの解釈ができると、視野や可能性が広がっていくのでおもしろい
- ・はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる
- ・見たことがないものに会おうと怖くなる
- ・見たことがないものにすぐに近寄るのは抵抗がある
- ・はっきりしない状況におかれると不安になる
- ・いろいろな可能性があるとして、選ぶのに時間がかかって迷う
- ・情報が多すぎると、かえって頭が混乱してしまう
- ・はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある
- ・不完全なままにしておいた方がよい時もある
- ・不完全なことがあるからおもしろい
- ・不完全なところも、ある程度受け入れられる
- ・はっきりしていないことがあっても、そのままにしておくのがいい
- ・情報がたりないと動きづらいので、できるだけ情報を集めたい
- ・情報がたりないと正確な判断はできない
- ・確実でないところは確認して明らかにしたい
- ・いろいろな可能性がある時には、さまざまなことを考慮して対処法を考えておきたい
- ・一貫していないことには信頼がおけない
- ・どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ
- ・どっちつかずであることはよくないと思う
- ・はっきりしないことはできるだけ白黒つけたい

〈設問5〉

あなた自身のことについて、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくそうしない」から「いつもそうする」の中であてはまるものを選んでください。

苦労を経験しているとき、必要とする程度に自分自身をいたわり、やさしくする

- いつもそうする
- ほとんどそうする
- どちらかといえばそうする
- どちらともいえない
- どちらかといえばそうしない
- ほとんどそうしない
- まったくそうしない

以下 選択肢省略

- ・自分のパーソナリティの好きでないところについては理解し、やさしい目で見ようとしている
- ・自分自身の欠点や不十分なところについて、不満に思っているし、批判的である
- ・自分のパーソナリティの好きでないところについては、やさしくなれないし、いらだちを感じる
- ・自分自身にどこか不十分なところがあると感じると、多くの人も不十分であるという気持ちを共有していることを思い出すようにする
- ・自分の失敗は、人間のありようの1つであると考えようとしている
- ・気分が落ち込んだとき、多くの人がおそらく自分より幸せであるという気持ちになりがちである
- ・自分にとって大切な何かに失敗したとき、自分の失敗の中でひとりぼっちでいるように感じる傾向がある
- ・何かで苦しい思いをしたときには、感情を適度なバランスに保つようにする
- ・何か苦痛を感じる事が起こったとき、その状況についてバランスのとれた見方をするようにする
- ・気分が落ち込んだときには、間違っただけのことすべてについて、くよくよと心配し、こだわる傾向にある
- ・自分にとって重要なことを失敗したとき、無力感で頭がいっぱいになる

〈設問6〉

ふだんのあなた自身について、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくそう感じない」から「いつもそう感じている」の中であてはまるものを選んでください。

自分の生活に満足していると感じる

- いつもそう感じている
- わりあいそう感じている
- どちらかといえばそう感じている
- どちらかといえばそう感じない
- あまりそう感じない
- まったくそう感じない

以下 選択肢省略

- ・自分の好きなことができていると感じる
- ・周りにあるものを見て楽しめていると感じる
- ・自分のはのびのびと生きていると感じる
- ・生きがいがあると感じる
- ・安心感があると感じる
- ・心から笑えると感じる
- ・無理していない感じがする
- ・おしつぶされそうな感じがする
- ・不安を感じる
- ・なんだかつらいと感じる
- ・いろいろなことが気になってしょうがないと感じる
- ・きつい、つかれたと感じる
- ・ちょっとしたことを不満を感じる
- ・焦りを感じる
- ・何もかもわずらわしいと感じる
- ・いらいらしていると感じる
- ・自分のことだけでなく人のことも考えられると感じる
- ・他人に寛容になれると感じる
- ・他人のことも思いやれる余裕があると感じる
- ・人と笑顔で接していると感じる

※確認項目

すべてがうまくいっていると感じる

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。実際の回答と関わりなく「いつもそう感じている」を選択してください。

あなたの確認コードは_____です。

クラウドワークス上でこの確認コードを入力し、作業を完了させてください。

アンケートはこれで終了です。ご協力いただきありがとうございました。

6

研究 4-3 質問項目一覧

「日本人の価値観と行動に関する調査」へのご協力をお願い

本研究の目的は、日本人の価値観と日常の行動について調査することです。以下の説明を読んだ上で、皆様が同意をしてくださった場合には、研究へのご参加をお願いいたします。所要時間は約10～15分間です。

なお、質問内容が不必要に皆様のプライバシーに及んだり、不快に感じたりしないよう十分に配慮しておりますが、心理的な負担を感じる質問が含まれているかもしれません。本研究の参加にいったん同意した後でも、途中で研究参加への同意を撤回し、中断することができます。（ブラウザを閉じれば、回答途中でも終了することができます。）その場合、報酬はお支払いできません。

本研究を通じて得られた情報は、貴重な研究成果として、学術団体の総会や学術雑誌などで発表されることがあります。しかし、いずれの場合も、皆様のお名前や個人が特定される情報は一切示さないようにし、プライバシーの保護には十分配慮いたします。

同意書および回答は、別々のデータとして保管されます。従って、回答データそのものには個人を特定できる情報が記載されていない状態で保管することになりますのでご安心ください。同意書および回答のデータは、原則として研究成果を発表後、一定期間が経過した時点で個人情報漏洩しないよう慎重に破棄いたします。

上記の説明を読み、理解した上で、この研究に参加していただける方は「同意する」を選択してください。「同意しない」を選択すると、調査を終了することができます。

- 同意する
- 同意しない

〈基本情報1〉

クラウドワークスで使用している表示用の名前を正確に入力してください。

※表示用の名前は、タスクの完了確認に利用します。

データ照合後は削除し、回答とは別々に保存されるため、個人が特定されることはありません。

〈基本情報2〉

性別をお答えください。

- 男性
 - 女性
 - その他
-

〈基本情報3〉

職業をお答えください。

- 公務員
 - 経営者・役員
 - 会社員（事務系）
 - 会社員（技術系）
 - 会社員（その他）
 - 自営業
 - 自由業
 - 専業主婦
 - パート・アルバイト
 - 学生
 - その他
-

〈基本情報4〉

年齢を半角数字で入力してください。

〈設問1〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

世の中には人間が立ち入ってはならない領域があるような気がする

- 非常にそう思う
- わりあいそう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらともいえない
- どちらかといえばそう思わない
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

以下 選択肢省略

- ・ 自然は人間が統制できないものだと思う
- ・ 環境破壊が続いていると、いつか大自然の怒りをかうのではないかと思う
- ・ 自然の偉大さには神聖なものを感じる
- ・ 言葉には発せられた内容どおりの状態を実現する力があるような気がする
- ・ 世の中には科学で解明できないことがあると思う
- ・ 良いことも悪いことも自分のしたことはすべて自分に返ってくるような気がする
- ・ 生き物だけでなく、自然やものにも魂は宿っているような気がする
- ・ 虫の知らせ、というのはあるような気がする
- ・ きれいな言葉遣いを心がけていると心が澄んでよい人になると思う
- ・ 日頃の行いが良いといいことがあるような気がする
- ・ 山や川などには自然の霊が宿っているような気がする
- ・ 食べ物をそまつにするとすまないことをしたような気持ちになる
- ・ 病気やケガは休息を取る合図だと感じる
- ・ ものごとがスムーズに進まないときは方向性が間違っていると教えられているような気がする
- ・ 掃除をすると心も浄化されるような気がする
- ・ ものをそまつにするとばちがあたると思う
- ・ 物事はあまり人が力を加えないで、自然になるように任せておいた方がうまくいくと思う
- ・ 自然には人間が手を加えない方がよいと思う
- ・ 死者の供養をしないとたたりがあると思う
- ・ 先祖のお墓参りをしないと悪いことが起きそうな気がする
- ・ 死者の供養など死に関連する行事は、きちんと行っておくと安心だと思う
- ・ 厄年には厄払いをしておきたいと思う
- ・ この世に強い思いを残して亡くなった人は成仏できないと思う
- ・ この世で悪いことをした人は、死んだら地獄へ落とされると思う

- ・北まくらは何となく気になる
- ・事件や事故で人が亡くなった家にはなるべく住みたくないと思う
- ・神や仏をそまつにするとばちがあたると思う
- ・魔除けになるものを身の周りにおいておくとおとほとする
- ・塩にはお清めの効果があると思う
- ・人の恨みをかうと、たたられそうだと思う
- ・縁起の良いものを身の周りにおいておくの良いことがありそうな気がする
- ・昔からあるしきたりや年中行事はこれからも伝承していったほうが良いと思う
- ・昔からあるしきたりや年中行事は大切にされた方がよいと思う
- ・古くから行われているしきたりや年中行事には必要性を感じない
- ・お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感ずる
- ・四つ葉のクローバーが見つかるの良いことがありそうな気がする
- ・茶柱がたつと良いことがありそうな気がする
- ・虹を見ると良いことがありそうな気がする
- ・時計を見たときゾロ目だと良いことがありそうな気がする
- ・流れ星に願いごとをすると叶うと思う
- ・死後の世界はあると思う
- ・人は死んでも繰り返し生まれ変わるような気がする
- ・地獄や天国は想像上のものだと思う

※確認項目

地震はなますが起こすものだと思う

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にそう思う」を選択してください。

〈設問2〉

あなたは、次のような行為をすることがありますか。それぞれについて、「非常によくする」から「まったくしない」の中であてはまるものを選んでください。

身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しに行く

- 非常によくする
 - よくする
 - たまにする
 - あまりしない
 - ほとんどしない
 - まったくしない
-

以下 選択肢省略

- ・ 初詣をする
- ・ 神社にお参りする
- ・ おみくじをひく
- ・ お寺にお参りする
- ・ お守りを身につける
- ・ お正月飾りをする
- ・ 仏壇や神棚に花を供えたり手を合わせたりする
- ・ 墓参りをする
- ・ 困難な問題にぶつかったとき神や仏に祈る
- ・ 七夕に願いごとをする
- ・ 占いをする
- ・ 占いをしてもらう
- ・ 雑誌などの占いを読む
- ・ 予定をたてるとき占いのバイオリズムを参考にする
- ・ 大切な日取りを決めるとき仏滅を避ける
- ・ 冬至に柚子湯に入る
- ・ 端午の節句に菖蒲湯に入る
- ・ 節分に豆まきをする
- ・ 大晦日に年越しそばを食べる
- ・ お正月におせち料理を食べる
- ・ お正月に雑煮を食べる
- ・ 1月7日に七草がゆを食べる
- ・ 節分に恵方巻きを食べる
- ・ お彼岸におはぎ（ぼたもち）を食べる
- ・ 魔よけになるものを自分の身のまわりにおく
- ・ 縁起のよい物を自分の身のまわりにおく

- ・ 葬儀に参列したあとは塩で清めてから家に入る
- ・ 数字を選ぶとき 4 を避ける
- ・ 入院のお見舞いには鉢植えの花を避ける

〈設問3〉

あなた自身のことについて、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」の中で該当するものを選んでください。

私の人生には感謝することがたくさんある

- 非常にあてはまる
 - わりあいあてはまる
 - どちらかといえばあてはまる
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばあてはまらない
 - あまりあてはまらない
 - まったくあてはまらない
-

以下 選択肢省略

- ・ もしも私が感じた感謝を全て挙げなければならないとするならば、それはとても長いリストになる
- ・ 私は、世の中の人がなぜそんなにたくさん感謝をするのかが分からない
- ・ 私は様々な人々に感謝をしている
- ・ 歳を取るにつれて 私は自分の人生に関わった人々や出来事、状況に、以前よりも感謝できる
- ・ 私がある事柄や誰かに感謝を感じるのに、とても長い時間がかかる

〈設問4〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

失敗しても なんとかやっていける気がする

- 非常にそう思う
 - わりあいそう思う
 - どちらかといえばそう思う
 - どちらかといえばそう思わない
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない
-

以下 選択肢省略

- ・嫌なことがあっても なんとかなる気がする
 - ・うまくいなくても何かしら意味があると思う
 - ・うまくいかないことがあっても仕方がないと思える
 - ・自分に弱点があっても まあいいかと思える
 - ・自分にとって何が大切か気づいている
 - ・周りに頼ることがあっても良い
 - ・自分には自信を持つべきだ
 - ・自分の強みを意識するようにしている
 - ・嫌なことでも ましな面を探すようにしている
-

※確認項目

失敗をしたことは一度もない

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にそう思う」を選択してください。

〈設問5〉

あなた自身のことについて、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」の中で該当するものを選んでください。

私は直面する様々な問題に対して、どのように対処するかを自分で決めることができる

- 非常にあてはまる
- わりあいあてはまる
- どちらかといえばあてはまる
- どちらともいえない
- どちらかといえばあてはまらない
- あまりあてはまらない
- まったくあてはまらない

以下 選択肢省略

- ・ 私は人からどう思われようと、自分の感じ方や考え方を大切にした生き方をしている
- ・ 私はたとえ人から非難されても、自分が正しいと思うことは主張する
- ・ 私は自分なりの価値観や良心に従って物事を考え、行動を決定している
- ・ 私は必要ならば、権威に対してでも抵抗することができる
- ・ 私は自分の生き方は自分で決めることができる
- ・ 私は自分の行為の結果がたとえ悪くても、その責任を自分でとることができる
- ・ 私は孤独を覚悟してでも、自分の信念に従って生きたいと思う
- ・ 私は人生を自分の意志と決断によって生きていると感じている
- ・ 私はたとえつらくても、自分が直面すべき自分自身の問題から逃げることはしたくない
- ・ 私は周囲の人にとって何らかの役に立っていると感じている
- ・ 私は周囲の人たちにとって必要な存在であると思う
- ・ 私は毎日の生活の中で、自分の役割を自分なりによく果たしていると思う
- ・ 私は生きている価値のある人間であると思う
- ・ 私には自分が大切に思う人、または、自分を大切に思ってくれる人がいる
- ・ 私は自分のなすべき仕事や役割は責任をもってやりとげる
- ・ 私は、あるものために、または、ある人のために生きていると言える対象がある
- ・ 私はいつも、なにかの課題に取り組んでいる
- ・ 私には目指す目標がある
- ・ 私はある目標を達成したなら、すぐ次の新たな目標に向かっている
- ・ 私は自分のなすべき課題や目標を、自分から進んで見つけようとする
- ・ 私は自分の能力や可能性を生かした生き方をしていると思う
- ・ 私は仕事や家庭や社会的活動や趣味など、自分が打ち込んでいるものがある
- ・ 私は自分の人生を充実したものに努力をしている
- ・ 私はいつも、ものごとに意欲的に取り組んでいる
- ・ 私は自分の仕事に対して、やりがいを感じている

- ・ 私は自分の人生に対して、自分なりに意味を見出している
- ・ 私は社会や他の人のために役立つことをすることに、喜びや生きがいを感じる
- ・ 私はなにか役立つことをしたいと思う
- ・ 私は自分の苦しみや悩みの中にも、意味を見出そうとしている
- ・ 私はいかなる運命や境遇におかれても、そこに生きる意味を見出すことに努めたいと思う
- ・ 私はたとえ苦しくても、自分にとって意味がある生き方をしたい
- ・ 私は生きていく上で味わうつらい経験をも自分の成長の糧にしている
- ・ 私は人との関わりによって、自分自身というものを深く知ることができると思う
- ・ 私は人生において、自分なりの使命感を感じている

〈設問6〉

ふだんのあなた自身について、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくそう感じない」から「いつもそう感じている」の中であてはまるものを選んでください。

自分の生活に満足していると感じる

- いつもそう感じている
- わりあいそう感じている
- どちらかといえばそう感じている
- どちらかといえばそう感じない
- あまりそう感じない
- まったくそう感じない

以下 選択肢省略

- ・自分の好きなことができていると感じる
- ・周りにあるものを見て楽しめていると感じる
- ・自分のはのびのびと生きていると感じる
- ・生きがいがあると感じる
- ・安心感があると感じる
- ・心から笑えると感じる
- ・無理していない感じがする
- ・おしつぶされそうな感じがする
- ・不安を感じる
- ・なんだかつらいと感じる
- ・いろいろなことが気になってしょうがないと感じる
- ・きつい、つかれたと感じる
- ・ちょっとしたことを不満を感じる
- ・焦りを感じる
- ・何もかもわずらわしいと感じる
- ・いらいらしていると感じる
- ・自分のことだけでなく人のことも考えられると感じる
- ・他人に寛容になれると感じる
- ・他人のことも思いやれる余裕があると感じる
- ・人と笑顔で接していると感じる

※確認項目

すべてが自分の思う通りに進んでいると感じる

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。

実際の回答と関わりなく「いつもそう感じている」を選択してください。

あなたの確認コードは_____です。

クラウドワークス上でこの確認コードを入力し、作業を完了させてください。

アンケートはこれで終了です。ご協力いただきありがとうございました。

7

研究 5 質問項目一覧

「日本人の価値観と行動に関する調査」へのご協力をお願い

本研究の目的は、日本人の価値観と日常の行動について調査することです。以下の説明を読んだ上で、皆様が同意をしてくださった場合には、研究へのご参加をお願いいたします。所要時間は約10分間です。

なお、質問内容が不必要に皆様のプライバシーに及んだり、不快に感じたりしないよう十分に配慮しておりますが、心理的な負担を感じる質問が含まれているかもしれません。本研究の参加にいったん同意した後でも、途中で研究参加への同意を撤回し、中断することができます。（ブラウザを閉じれば、回答途中でも終了することができます。）その場合、報酬はお支払いできません。

本研究を通じて得られた情報は、貴重な研究成果として、学術団体の総会や学術雑誌などで発表されることがあります。しかし、いずれの場合も、皆様のお名前や個人が特定される情報は一切示さないようにし、プライバシーの保護には十分配慮いたします。

同意書および回答は、別々のデータとして保管されます。従って、回答データそのものには個人を特定できる情報が記載されていない状態で保管することになりますのでご安心ください。同意書および回答のデータは、原則として研究成果を発表後、一定期間が経過した時点で個人情報漏洩しないよう慎重に破棄いたします。

上記の説明を読み、理解した上で、この研究に参加していただける方は「同意する」を選択してください。「同意しない」を選択すると、調査を終了することができます。

- 同意する
- 同意しない

〈基本情報1〉

クラウドワークスで使用している表示用の名前を正確に入力してください。

※表示用の名前は、タスクの完了確認に利用します。

データ照合後は削除し、回答とは別々に保存されるため、個人が特定されることはありません。

〈基本情報2〉

性別をお答えください。

- 男性
 - 女性
 - その他
-

〈基本情報3〉

職業をお答えください。

- 公務員
 - 経営者・役員
 - 会社員（事務系）
 - 会社員（技術系）
 - 会社員（その他）
 - 自営業
 - 自由業
 - 専業主婦
 - パート・アルバイト
 - 学生
 - その他
-

〈基本情報4〉

年齢を半角数字で入力してください。

〈設問1〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

環境破壊を続けていると、いつか大自然の怒りをかうのではないかと思う

- 非常にそう思う
- わりあいそう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらともいえない
- どちらかといえばそう思わない
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

以下 選択肢省略

- ・ 自然は人間が統制できないものだと思う
- ・ 自然には人間が手を加えない方がよいと思う
- ・ 物事はあまり人が力を加えないで、自然になるように任せておいた方がうまくいくと思う
- ・ 世の中には人間が立ち入ってはならない領域があるような気がする
- ・ 世の中には科学で解明できないことがあると思う
- ・ ものごとがスムーズに進まないときは方向性が間違っていると教えられているような気がする
- ・ 食べ物をそまつにするとすまないことをしたような気持ちになる
- ・ 自然の偉大さには神聖なものを感じる
- ・ 良いことも悪いことも自分のしたことはすべて自分に返ってくるような気がする
- ・ ものをそまつにするとばちがあたると思う
- ・ 虫の知らせ、というのはあるような気がする
- ・ 生き物だけでなく、自然やものにも魂は宿っているような気がする
- ・ 山や川などには自然の霊が宿っているような気がする
- ・ きれいな言葉遣いを心がけていると心が澄んでよい人になると思う
- ・ 掃除をすると心も浄化されるような気がする
- ・ 言葉には発せられた内容どおりの状態を実現する力があるような気がする
- ・ 病気やケガは休息を取る合図だと感じる
- ・ 日頃の行いが良いといいことがあるような気がする
- ・ 死者の供養をしないとたたりがあると思う
- ・ 死者の供養など死に関連する行事は、きちんと行なっておくと安心だと思う
- ・ 先祖のお墓参りをしないと悪いことが起きそうな気がする
- ・ 厄年には厄払いをしておきたいと思う
- ・ 北まくらは何となく気になる
- ・ 神や仏をそまつにするとばちがあたると思う

- ・ 人の恨みをかうと、たたられそうだと思う
- ・ 事件や事故で人が亡くなった家にはなるべく住みたくないと思う
- ・ 死後の世界はあると思う
- ・ この世で悪いことをした人は、死んだら地獄へ落とされると思う
- ・ 地獄や天国は想像上のものだと思う
- ・ 人は死んでも繰り返し生まれ変わるような気がする
- ・ この世に強い思いを残して亡くなった人は成仏できないと思う
- ・ 茶柱がたつと良いことがありそうな気がする
- ・ 時計を見たときゾロ目だと良いことがありそうな気がする
- ・ 四つ葉のクローバーが見つかるとう良いことがありそうな気がする
- ・ 虹を見ると良いことがありそうな気がする
- ・ 流れ星に願いごとをすると叶うと思う
- ・ 魔除けになるものを身の周りにおいておくとおとほとする
- ・ 塩にはお清めの効果があると思う
- ・ 縁起の良いものを身の周りにおいておくとう良いことがありそうな気がする
- ・ 昔からあるしきたりや年中行事はこれからも伝承していったほうが良いと思う
- ・ 昔からあるしきたりや年中行事は大切にされたほうがよいと思う
- ・ 古くから行われているしきたりや年中行事には必要性を感じない
- ・ お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感ずる

※確認項目

地震はなまが起すものだと思う

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にそう思う」を選択してください。

〈設問2〉

あなた自身のことについて、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」の中で該当するものを選んでください。

私の人生には感謝することがたくさんある

- 非常にあてはまる
 - わりあいあてはまる
 - どちらかといえばあてはまる
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばあてはまらない
 - あまりあてはまらない
 - まったくあてはまらない
-

以下 選択肢省略

- ・ もしも私が感じた感謝を全て挙げなければならないとするならば、それはとても長いリストになる
- ・ 私は、世の中の人がなぜそんなにたくさん感謝をするのかが分からない
- ・ 私は様々な人々に感謝をしている
- ・ 歳を取るにつれて 私は自分の人生に関わった人々や出来事、状況に、以前よりも感謝できる
- ・ 私がある事柄や誰かに感謝を感じるのに、とても長い時間がかかる

〈設問3〉

あなたは、次のような考えについてどう思いますか。それぞれについて、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の中であてはまるものを選んでください。

失敗しても なんとかやっていける気がする

- 非常にそう思う
 - わりあいそう思う
 - どちらかといえばそう思う
 - どちらかといえばそう思わない
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない
-

以下 選択肢省略

- ・嫌なことがあっても なんとかなる気がする
 - ・うまくいなくても何かしら意味があると思う
 - ・うまくいかないことがあっても仕方がないと思える
 - ・自分に弱点があっても まあいいかと思える
 - ・自分にとって何が大切か気づいている
 - ・周りに頼ることがあっても良い
 - ・自分には自信を持つべきだ
 - ・自分の強みを意識するようにしている
 - ・嫌なことでも ましな面を探すようにしている
-

※確認項目

失敗をしたことは一度もない

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「非常にそう思う」を選択してください。

〈設問4〉

あなた自身のことについて、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」の中で該当するものを選んでください。

私は周囲の人たちにとって必要な存在であると思う

- 非常にあてはまる
 - わりあいあてはまる
 - どちらかといえばあてはまる
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばあてはまらない
 - あまりあてはまらない
 - まったくあてはまらない
-

以下 選択肢省略

- ・ 私は生きている価値のある人間であると思う
- ・ 私は周囲の人にとって何らかの役に立っていると感じている
- ・ 私には自分が大切に思う人、または、自分を大切に思ってくれる人がいる
- ・ 私はあるものために、または、ある人のために生きていると言える対象がある
- ・ 私は自分の人生に対して自分なりに意味を見出している
- ・ 私は毎日の生活の中で自分の役割を自分なりによく果たしていると思う
- ・ 私は自分の仕事に対して やりがいを感じている
- ・ 私は自分の能力や可能性を生かした生き方をしていると思う
- ・ 私は人生において自分なりの使命感を感じている

〈設問5〉

ふだんのあなた自身について、以下の事柄はどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、「まったくそう感じない」から「いつもそう感じている」の中であてはまるものを選んでください。

自分の生活に満足していると感じる

- いつもそう感じている
 - わりあいそう感じている
 - どちらかといえばそう感じている
 - どちらかといえばそう感じない
 - あまりそう感じない
 - まったくそう感じない
-

以下 選択肢省略

- ・自分の好きなことができていると感じる
 - ・周りにあるものを見て楽しめていると感じる
 - ・自分のはのびのびと生きていると感じる
 - ・生きがいがあると感じる
 - ・安心感があると感じる
 - ・心から笑えると感じる
 - ・無理していない感じがする
 - ・おしつぶされそうな感じがする
 - ・不安を感じる
 - ・なんだかつらいと感じる
 - ・いろいろなことが気になってしょうがないと感じる
 - ・きつい、つかれたと感じる
 - ・ちょっとしたことを不満を感じる
 - ・焦りを感じる
 - ・何もかもわずらわしいと感じる
 - ・いらいらしていると感じる
 - ・自分のことだけでなく人のことも考えられると感じる
 - ・他人に寛容になれると感じる
 - ・他人のことも思いやれる余裕があると感じる
 - ・人と笑顔で接していると感じる
-

※確認項目

心身ともに満たされていると感じる

この項目は最後まで質問文を読んでいることを確認する項目です。
実際の回答と関わりなく「いつもそう感じている」を選択してください。

あなたの確認コードは_____です。
クラウドワークス上でこの確認コードを入力し、作業を完了させてください。

アンケートはこれで終了です。ご協力いただきありがとうございました。